

# 地方企業集団の財務破綻と投機的経営者

—大正期「播州長者」分家の暴走と金融構造の病弊—

小 川 功 著

滋賀大学経済学部研究叢書第32号

# 地方企業集団の財務破綻と投機的経営者 —大正期「播州長者」分家の暴走と金融構造の病弊—

小 川 功 著

滋賀大学経済学部

## はじめに

1999年10月29日、一米国人が起こした巨額の投機損失が、私募債のデフォルトを介して兵庫県北部の小さな信用組合等を破綻に追いやり、過疎の漁村に衝撃が走るという事件が発生した。これはアメリカの高名なる詐欺師集団が詐欺的な金融商品を違法販売して、抱え込んだ不良債権等の処理に苦悶する日本企業（破綻した幸福・なみはや両行、高島・振興の両信組等を含む）のみを狙い撃ちにしたものであった。一方、中小企業金融の世界では、いわゆる商工ローン業者等と称される冷酷無比な高利貸の跋扈が喧伝されている。世紀末を控えた我が国では巨大財閥同士の統合により、巨大恐竜の如きメガ・バンクが次々と抬頭する陰で、「リストラ」という名の強制的解雇が横溢して巷に失業者が徘徊するなか、とりわけ金融・証券界はこうした詐欺師、高利貸等の魑魅魍魎が百鬼夜行する、正視しがたい地獄絵さながらの様相を呈して来たようでもある。

こうした一連の“世紀末的”な異常現象は、巨額の不良債権発生を平成バブル崩壊の直撃波とすれば、それから派生した二次、三次の余波に相当するもので、従来の単なる景気循環の一通過局面とも思えず、市場経済の一時的過熱の反動の一現象形態として片付けるにはかなり根深いものを内包しているように感じられる。こうした資本主義経済、とりわけ金融構造上の長期にわたる深刻な病苦・“病羸”を生み出した元凶たる一連の金融破綻と構造的な大不況を経済学上でどう定義するかの根本問題をさておいても、かかる銀行や企業の集中的・群発的な連鎖破綻（人間で例えれば死に至るような伝染性の疾病の蔓延に相当）そのものを深刻な病的経済現象として把え直して、その原因・背景等を吟味・解析すること、すなわち医学の体系で例えるなら、ちょうど病理学に相当するような研究分野の必要性、とりわけ長期的な歴史的視点から過去の臨床データに相当する企業金融破綻等の事例を多数探索、収集、蓄積することの社会的意義が従来より一層重みを増してきていることは間違いあるまい。

例えば最近の日経『大機小機』欄でも「人間の判断というものは、歴史の教訓を超えた範囲までは、なかなか及ぶものではない。どうしても足下の時流に流さ

れてしまうのが凡人の常である。我々はこの世紀末の九〇年代に、バブル経済とその崩壊、大銀行や大企業の倒産、そして、阪神大震災などの自然災害の怖さ等々、従来の歴史では減多に起こらなかったことを随分と体験し、自らの判断の甘さを痛感したことが多々あった。今後は、このような経験をむしろ判断の糧にして…いきたい」(H11.7.7日経)と、この種の論者としては珍しく「歴史の教訓」なる語を盛んに強調する。もっとも当コラム筆者の強調する「歴史」なるものの範囲がせいぜい自己の直接「体験」した「九〇年代」と同義語である点、いわゆるエコノミスト達の認識可能な「歴史」範囲のあまりの狭隘さにいささか驚愕を禁じ得ないが…。

従来から長期金融機関等を中心に、基軸産業向金融の史的展開に関心を払ってきた著者も近年は主に金融恐慌と金融機関の破綻処理・不良債権流動化・証券化、不振・破綻企業の財務整理・破綻処理と機関銀行等の行動等を主な研究課題として、明治以降に幾度も発生した金融恐慌等での破綻事例を若干の論文群として報告してきたが、そのキーワードとしては機関銀行の破綻、投機的経営者、投機・破綻等を誘発・助長する高利業者等の投機促進因子の存在に集約できよう。

傘下に数多くの企業群を支配して、王国の名を擅にした破綻銀行等の経営者等に共通して見られる現象として、これら主人公達は概して企業支配意欲が並外れて強く、かつ短期の預金を資金源とするに拘らず、資金が長期に固定しがちな分野や、一攫千金を狙った投機的分野に銀行等の資金を鹵止めなく投入して、資産と負債・資本のミスマッチを起して、最終的には取付・破綻を招いていることである。もし単に一投機家(例えば冒頭に紹介した米国私募債の胴元たる一米国人の場合でも該当するが)が自己資本の範囲内でギャンブルに失敗しても、その社会的悪影響は極めて限定された範囲にとどまるが、最大の不幸なる点は彼らが冒險的な事業家・投機家であると同時に、幅広く一般大衆の零細資金等を大量に預金等金融商品として受入れていた銀行等(冒頭の例では私募債を幅広く販売した悪名高い証券会社となる)の支配者・絶対者をも兼ねていた一点に起因する。

彼らの大部分が創業者・二代目等の父からその金融的地位を家督相続した財閥家族の御曹司であるなら、単に戦前のイエ制度の問題に帰着するが、彼らは数多



くの丁稚・手代の中から抜擢されて、順次番頭・大番頭に昇進した養子である場合も少なくないことも特色である。先代の当主から「この人物なら間違いはない…」と特に見込まれた選りすぐりの生抜きエリート社員が養子となって家督相続し、実権を握ってからは一転して暴走した例が少なくない。能力的に不安の残る実子への経営権継承よりも、はるかに合理的と考えられた養子縁組による経営権委譲にもこうした意外な欠陥があり、猛烈社員の並外れた忠誠心と比類なき滅私奉公ぶりの裏に、うまく隠された不敵な野心や過剰な投機心をついに見抜けなかった先代の、部下への鑑識眼のなさを責めるしかない。

このような過去の破綻事例研究から得られる教訓は決して少なくない。昨今の破綻銀行・企業の、バベルの塔を彷彿させる広壮なる本部ビルに無残にも放置された高度情報機器等の廃棄物の山の映像を見るにつけ、金融機関にとって最も肝要にして不可欠なるものは無形の「信用」のみであり、破綻した外国証券会社ではないが、いかに巨額のコンピューター投資を行って難解なる金融技術を弄して世人を畏怖・妄信させ、虚飾・欺罔・騙取・不正蓄財を積重ねて、たとえ天にまで届く摩天楼の虚構装置で威圧しようとも、究極のところ無形の「信用」と、「信用」を支えるに足る「人材」以外には、金融業に何一つ依るべき基盤は存在しないということである。そして、ともすれば「自己資本比率」など一瞬の数値のみが絶対視される怪しげな風潮の中で、肝心の「信用」と「人材」の二つが二つとも、金融機関のバランス・シートに載らぬ貸借対照表能力なき“見えざる資産”であることが世人をして金融機関の良否判断をより困難にさせている所以でもある。その意味でかけがえのない「信用」を、身を挺しても守り抜くことが出来る「人材」、とりわけ金融機関経営者・トップ候補者の保持すべき資質の考課・選別には重大な関心が払われてしかるべきであろう。戦前の破綻した銀行等の「世継ぎ」選択の失敗と同様に、不適格者を採用し、順次昇進させ、果ては最高幹部・トップの座にまで座らせた人事政策上の重大なる錯誤・欠陥の招来した社会的コストは実に数十兆円を上回る莫大な血税浪費に匹敵するからである。

こうした観点から、著者も金融システムの、いわば“病理経済学”的な研究分野で現実の金融機関・関連企業の死体解剖すなわち、数多くの現実の破綻金融機関・企業の徹底的な死因分析と、病根たる患部の摘出・培養・解析の必要性を痛

感してきた。大都市・地方を問わず、全国レベルで各地の明治以降の金融破綻・企業破綻の関係資料の発掘、収集と事例分析を鋭意試行しようと考えてきた。しかし現実には遠い過去において破綻・廃業した場合、その関係資料類は当然ながら雲散霧消するのが世の常であり、破綻当事者はもとより、その子孫も不名誉を恥じるあまりか堅く口を閉ざす場合が多い。もともと経済学の世界では医道修得上、死体解剖を必須科目としてきた医学の世界の伝統とは全く異なっており、そもそも患者本人が純粋に学術研究のため進んで解剖を申し出る「献体」制度すらも残念ながら未だ存在しないからである。

平成の宮沢喜一蔵相が擬せられている、元祖・高橋是清自身も大正9年4月の反動恐慌の最中に思惑・投機の自粛を説く談話を発表した<sup>2)</sup>が、その結語で「幸いに最近の我が財界の動揺を以って、高価かつ貴重なる実物教訓として、いわゆる禍いを転じて福となすの結果を齎すを得ば、邦家のため慶賀すべき事である」(T9.4.15東京朝日)と述べた。しかしながら、我が国はこの「高価かつ貴重なる実物教訓」を全く生かすことなく、昭和の金融恐慌以降の暗く、不幸な時代にひたすら突入していったことはいうまでもない。

今回、著者は勤務する滋賀大学経済学部から研究叢書執筆という得がたい機会を与えられたのを契機に、高橋の言う「高価かつ貴重なる実物教訓」の一つとして、これまでの研究事例に追加すべく、新たに大正期のある破綻事例を取り上げ、破綻を誘発・促進した因子として、当時の播州方面に蔓延していた広義の金融(産業金融、証券投資、不動産投資等を含む)構造の最深部に深く潜在した病根・病弊の一端をここに摘出してみたいと考える。取り上げる主人公・「播州長者」分家(姉婿)伊藤英一は「元治元年2月、姫路市飾磨で生れた。漢学、数学を修め農業に励んだが、高砂今市の名門伊藤長次郎家の番頭となるに及んで頭角を現わし、見込まれて娘婿となった。その後、伊保村長、高砂町長、県会議員、代議士として活躍した<sup>2)</sup>」人物で、当時「関西実業界の彗星<sup>3)</sup>」とも称されたが、『明石の人物と事業』(以下本文では単に「明」と略記)は「所謂彗星的人物とは…赤手空拳より起りて忽然として煌曜し、而も亦忽然として消失して其痕を留めない者」(明P19)と解説した上で、英一の意を汲んでか、この称号に対して大いに異を唱えた。し

かし誠に皮肉なことに同書が世に出る直前の大正9年3月には、今次の平成バブルにも匹敵する、いわゆる大正バブルが崩壊して、4月には英一を最大の債務者としていた“投資銀行”増田ビルブローカー銀行が破綻、シンジケート七行からなる同行再建団の手による徹底した不良債権回収が開始されて、同書が刊行された時点では英一は同行ほかから強く返済を迫られ、既に資金的に立ち往生し、財務破綻した。そしてその後の英一は多くの栄誉ある役職を次々と追われ、多くの持ち株を担保処分等で失い、数十を数えた傘下企業群の多くも彼と運命を共にし、彼の基幹企業は「仁侠の徒」らの掌握するところとなった。かくして英一は世評の通り、失意のうちに文字通り「忽然として消失して其痕を留めない者」という、まさしく「彗星」としての軌跡を播州の虚空に描いて、何方ともなく消失して果てたのであった。現在の播州地方で英一の事績を尋ね歩いても、ほとんど人々の記憶に残っていないばかりか、歴史にもほとんどその名をとどめないほど、彼が関西財界に大いに活躍したはずの痕跡は見事なまでに抹消されているといっても過言ではなからう。

しかしより注目すべきは、近年の平成バブルの前後において、この英一の歩んだ道とほとんど区別のつきにくい「彗星的人物」が我が国産業界・金融界に多数跋扈し、極めて短期間に、ほぼ同様の軌跡を描いて消失したという事実である。いわゆるエコノミスト達がいいう「従来の歴史では滅多に起こらなかった」はずの「彗星」的現象が、実は天文学の示す彗星の循環軌道と同様にある周期をおいて繰り返り起っていたのである。

本書では200頁という紙面の制約上、新聞雑誌と特定の頻出文献からの引用は略称<sup>5)</sup>を用いて本文内にカッコ書きで示すとともに、頻出する社名も略称<sup>6)</sup>を用い、人名も伊藤家の人物は原則として姓を略して、伊藤英一は単に英一、伊藤長次郎は長次郎、伊藤長蔵は長蔵と記し、本書の主たる対象年代である大正期は原則として大正の年号を略す処置をとった点をお許し賜りたい。(前出人物の注記は章の数字と注／表の番号で、例えば(2-22)、(表4)と略した。)

著者が本書の主題である英一主導下の各種企業の破綻をテーマとして取上げ、関係諸資料を探索・収集するにあたっては各方面からの助成・支援を頂戴した。

まず破綻問題そのものに関しては平成9年度勸奨水学術助成後援会研究助成を、主要な中核企業である播州鉄道等の経営史部分に関しては科研費補助金『明治期の鉄道業に関する総合的研究』（基盤研究B、09430015、研究代表者野田正穂）による研究助成を、ならびに播州の資産家・投資家・企業家の没落部分に関しては科研費補助金『近代日本における資産家・投資家・企業家の研究』（基盤研究B1、11430016、研究代表者阿部武司）による研究助成をそれぞれ頂戴した。各研究会の野田正穂、老川慶喜、宮本又郎、阿部武司各氏ら、メンバー各位のご教導に厚く御礼申し上げたい。本書は乏しいながらもこれらの共同研究による成果の一部をなすものである。また本書の一部は次の各学会において発表した著者の報告を取捨・加筆訂正したものである。

平成4年9月26日鉄道史学会大会報告（私鉄全般の破綻・債務不履行部分）

平成10年7月27日社会経済史学会近畿部会報告（資産家企業家等の没落部分）

平成10年8月1日経営史学会関西部会大会報告（不振私鉄ファイナンス部分）

平成11年3月27日鉄道史学会例会報告（伊藤英一の鉄道系列化部分）

平成11年8月1日経営史学会関西部会大会報告（伊藤英一の破綻部分）

平成11年11月20日金融学会歴史部会報告（本家・三十八銀行との確執部分）

学会での報告の機会をお与え下さった共通論題のオルガナイザー等である宮本又郎、阿部武司、宇田正、柴孝夫、波形昭一の各氏、コメント等を頂いた小早川洋一、石川健次郎、武知京三、寺地孝之、西牟田祐二等の各氏に厚く御礼申し上げたい。また著者が研究者の道に進む契機をお与え下さった作道洋太郎、深町郁弥、丑山優、秀村選三、岡本幸雄、片山貞雄の諸氏の数々のご厚情にまず深謝申し上げますとともに、従来から鉄道史の分野では原田勝正氏をはじめとする鉄道史学会の諸氏、信託・金融全般に関して麻島昭一氏、銀行破綻に関して伊牟田敏充氏、後藤新一氏、地主等の資料に関して渋谷隆一氏をはじめ、逐一の氏名列挙は割愛させて頂くが、多数の先学各位のご指導・学恩に対して深く感謝申し上げたい。今回特に炭坑関係については荻野喜弘氏、新鞍拓生氏、山根良夫氏、車両メーカーに関しては沢井実氏、鉄道監督について和久田康雄氏等の各氏に種々ご丁寧なご教示を頂いた。また本書執筆の遠い淵源となっている過去の資料収集段階でお世話になった方々のご厚意、ご厚情にも厚く御礼申し上げたい。

なお本書の紙面制約上、収録できなかった関連事項に関しては次のように順次別稿を執筆ないし予定している。①「地方公益企業の乗取失敗と関与銀行家の苦悩―篠山軽便鉄道を事例として―」『彦根論叢』321号、H11.11、②「地方零細企業の破綻処理と“救済者”集団―播州水力電気鉄道とその競落を中心に―」『滋賀大学経済学部研究年報』6巻、H11.12、③龍野電気鉄道、播但鉄道、北大阪電気鉄道、神戸信託等その他（予定）

注1) 拙稿①「宮城電気鉄道の設立動機と設備金融―親会社高田商会の破綻と生保融資―」『鉄道史学』3号、昭和61年7月、鉄道史学会／②「大都市鉄道への経営転換と資金調達―阪神急行電鉄、大阪鉄道の対比を中心として―」『鉄道史学』8号、平成2年9月／③「企業再建の金融手法を開拓した松本重太郎」『日本の創造力』4巻、5年3月／④⑤「昭和恐慌と生保経営―生保証券(株)設立を中心として―(I)(II)」『文研論集』109、110号、6年12月、7年3月／⑥「地方債のデフォルトと土地会社方式による解決―生保共同引受による留萌町債問題と生保土地管理(株)設立を中心として―」『彦根論叢』、293号、7年2月／⑦「明治・大正期の困窮私鉄再建と生保金融―豆相鉄道の資産継承会社の性格を中心に―」、『彦根論叢』298号、7年11月／⑧「明治末期の民営社会資本の挫折と再建―高野鉄道のデフォルトと財政整理を中心に―」『滋賀大学経済学部研究年報』2巻、7年12月／⑨「明治期銀行融資のデフォルトと自己競落・証券化による不良債権回収―十五銀行の太田鉄道融資と水戸鉄道新設を中心に―」『彦根論叢』299号、8年1月／⑩「金融恐慌による休業銀行と関連社債のデフォルト―東京渡辺銀行と東京乗合の利益相反を中心に―」『証券経済研究』3号、日本証券経済研究所、8年9月／⑪「金融恐慌と機関銀行破綻―東京渡辺銀行の系列企業を中心に―」『研究年報』3巻、8年12月／⑫「土地会社方式による不良債権処理―渡辺系昭和土地案から勧銀・根津系自己競落会社への変態を中心に―」『彦根論叢』305号、9年1月／⑬「金融恐慌と証券化処理―我国における土地会社方式を中心に―」『証券経済学会年報』32号、9年5月／⑭「天津商人による鉄道発起と挫折―京都・大津間鉄道敷設計画を中心として―」『史料館研究紀

要』30号、9年3月／⑮「金融恐慌と生保破綻一末期の旭日生命を中心として」『文研論集』120号、9年9月、生命保険文化研究所／⑯「恐慌期の企業・金融複合破綻と投機的経営者一旭日生命を支配・搾取した山十製絲の破綻を中心に」『研究年報』4巻、9年12月／⑰「投機的資本家集団と銀行乗取一芸備銀行株主総会紛糾事件を中心として」『彦根論叢』312号、10年3月／⑱「明治中期における近江・若狭越前連絡鉄道敷設計画の挫折と鉄道投機一小浜商人主唱の小浜鉄道と東京資本主導の京北鉄道の競願を中心に」『史料館研究紀要』31号、10年3月／⑲「生保破綻と投機的経営者一末期の共同生命を中心として」『寄付講座「保険学講座」十周年記念誌』九州大学経済学部、10年9月／⑳「明治30年代における北浜銀行の融資基盤と西成・唐津鉄道への大口投融資」『研究年報』5巻、10年12月／㉑「明治後期の不振私鉄のファイナンス一金辺鉄道破綻と債務の株式化事例」『彦根論叢』319号、11年6月／㉒「八千代生命の経営破綻と投資政策一投融資先の分析を中心として」『保険学雑誌』566号、11年9月、日本保険学会など

注2) 『山陽電気鉄道65年史』S47、P57

注3) 関西朝報社編『明石の人物と事業』大正9年6月P18。以下本文で単に明と略記し、後記『人物論・神戸の異彩』（異と略）ともども頻繁に引用したのは、両書とも英一と親しい記者の著した評伝で、英一及び彼の周辺にも頻繁に取材を重ね、当時の英一本人の発言内容を比較的忠実に（結果として英一に極めて好意的に）記載した数少ない文献と判断したからである。英一本人の著述や直接の関係者の証言を入手し得なかった状況では、二次資料ではあるが、英一本人の考え方や、動機をほぼ推測させ得る次善の資料と見做した。

注4) たとえば地元の播州鉄道の推移に関して比較的詳しく記載している近年の『新修加東郡誌』でも「あまり手を上げすぎたため、行き詰まりを生じた」（『新修加東郡誌』S49、加東郡教育委員会、P649）播州鉄道は「大正十二年社名を播丹鉄道と変更」したと、単なる社名変更程度の現象としか捉えていない。

注5) 略称 [新聞雑誌]

A…『大阪朝日新聞』／B…『銀行通信録』／C…『中外商業新報』／D…『ダイヤモンド』／E…『電気界』／K…『神戸新聞』／M…『大阪毎日新聞』／O…『大阪銀行通信録』／R…『鉄道時報』／S…『篠山通報』・『篠山新聞』(大正9年11月1日改題)／TA…『東京朝日新聞』／T…『東洋経済新報』／Y…『神戸又新日報』

[評伝]

明…前掲『明石の人物と事業』／異…寺沢鎮(朝日新聞神戸支局記者)『人物論・神戸の異彩』(大正8年1月以降同紙の神戸付録に掲載された記事を転載)、大正9年

[会社録]

諸…『日本全国諸会社役員録』商業興信所／銀…『銀行会社要録』東京興信所／帝…『帝国銀行会社要録』帝国興信所／野…野村商店(大阪屋商店)『株式年鑑』

[史料]

文…『鉄道院文書』・『鉄道省文書』／営…『事業報告書』『営業報告書』『報告書』／登…「登記公告」／決…株主総会決議録／総…「株主総会議事要領書」

注6) 社名の略称

播州鉄道…播鉄、龍電…龍野電気鉄道、新鉄…新宮軽便鉄道、播水…播州水力電気鉄道、兵電…兵庫電気軌道、鬼怒電…鬼怒川水力電気、増田 BB…増田ビルブローカー銀行、三十八…三十八銀行、勧銀…日本勧業銀行、農銀…兵庫県農工銀行、神取…神戸取引所、取信…神戸取引信託

# 目 次

はじめに

第1章 伊藤長次郎家と伊藤英一	1
I. 伊藤長次郎家	1
II. 伊藤英一の略歴	4
III. 伊藤英一の関係企業	8
IV. 伊藤英一の京都居住	13
第2章 播州鉄道の概要	17
I. 播州鉄道、兵庫電気軌道の先行諸計画	17
1. 播磨鉄道	
2. 東播轻便鉄道	
3. 播磨電気軌道	
4. 伊藤家の関与	
II. 播州鉄道の設立	23
III. 開業後の播州鉄道	27
IV. 伊藤英一の播州鉄道買占め	29
1. 伊藤英一の買占めの動機	
2. 日本勧業銀行からの財団抵当借入	
3. 播州鉄道の金融取引状況	
4. 播州鉄道の業績建直し	
第3章 播州鉄道系列の育成	41
I. 系列会社集団の育成	41
1. 大門ヴェルベツト	
2. 播州石材（山陽砂利）	



3. 浪速信託	
4. 関西土地信託（関西土地興業）	
5. 伊藤鉄工所	
II. 播州鉄道所有株式に対する整理命令	47
<b>第4章 兵庫電気軌道等の乗取り</b>	51
I. 龍野電気鉄道、新宮軽便鉄道の乗取り	51
1. 龍野電気鉄道	
2. 新宮軽便鉄道	
3. 鉄道省監督局の判断	
4. 播州水力電気鉄道の経営多角化	
II. 播州鉄道と明姫電気鉄道の対立	59
III. 兵庫電気軌道の乗取り	60
IV. 兵電社長としての伊藤英一	62
V. 沿線の土地会社等への関与	64
1. 垂水住宅土地	
2. 舞子土地	
3. 西代土地	
4. 高砂土地倉庫、播州倉庫	
<b>第5章 伊藤英一の不動産・鉱山選好</b>	73
I. 神戸周辺の不動産投機熱	73
II. 不動産投機の具体例	74
III. 不動産投機と関与金融機関	77
1. 兵庫県農工銀行	
2. 神戸信託	
3. 大同生命	
IV. 関係会社間の不健全な資産移転	81
1. 播鉄から神戸大同土地への土地の再転売	

## 2. 新延炭坑の関係会社間転売

- (1) 新延炭坑の概要
- (2) 伊藤英一の炭坑取得の真意
- (3) 播水名義での炭坑兼営認可申請
- (4) 新延炭坑の譲渡
- (5) 海運事業関係

## 第6章 鬼怒川水電の乗取りと増田ビルブローカー銀行破綻……………97

- I. 鬼怒川水電買占め……………97
- II. 増田ビルブローカー銀行の破綻とその波及 ……………100
  1. 増田ビルブローカー銀行の株式投機
  2. 増田破綻による不良債権の回収強行

## 第7章 伊藤英一と本家との微妙な関係 ……………109

- I. 伊藤英一と本家の関係 ……………109
- II. 西伊藤銀行の育成 ……………110
- III. 伊藤本家側の変化 ……………110
  1. 絶大な信用を誇る三十八銀行の変化
  2. 伊藤長蔵系企業の異変
    - (1) 伊藤企業
    - (2) 大洋海運
    - (3) 伊藤企業にかかわる訴訟
    - (4) 神戸土地建物
  3. 三十八銀行による播鉄株取得の可能性
  4. 三十八銀行の整理と播州鉄道との関係

## 第8章 伊藤英一の関係企業の没落と混乱 ……………123

- I. 兵庫電気軌道からの撤収 ……………123
- II. 伊藤英一の破綻 ……………125

1. 播州鉄道におけるパートナー等の離反
2. 伊藤英一の債務不履行の発生
3. 末正盛治ら、支援者の動き
4. 関係会社の手形乱発、訴訟の頻発、地元銀行等への打撃
5. その後の伊藤英一

### III. 主要各社の破綻経緯 .....132

1. 伊藤商事
2. 神戸取引信託（神戸取引土地）
3. 神戸取引所
4. 加古川製紙
5. 播州水力電気鉄道

## 第9章 伊藤英一の破綻の背景 .....147

### I. 伊藤英一の破綻の背景 .....147

1. 投機的風土
2. 伊藤本家の絶大な信用力
3. 兵庫県下の金融システム
4. 播鉄再建による自信過剰
5. 各社の企画スタッフの集中化
6. 敵対的企業買収の多用

### II. 破綻抑制要因の機能不全 .....152

1. 破綻抑制要因の機能不全
  - (1) 本家
  - (2) メイン銀行等
  - (3) 播鉄大株主・パートナー等
  - (4) 監督官庁
  - (5) 実務担当役員等
  - (6) 各社のスタッフ
  - (7) その他

(8) 夫人	
III. 投機を促進させた投機家群 .....	158
1. 本岡武助（本岡武助本店）	
2. 藤井忠兵衛（藤井忠商店）	
3. 尾崎寅治、野喜治良等（株式会社尾野商店）	
4. 播州物産その他	
5. 谷向喜一郎（阪神商事）	
 第10章 播州鉄道の破綻処理（播丹鉄道新設） .....	167
I. 播州鉄道の行き詰まり .....	167
II. 旧会社から新会社への鉄軌道譲渡 .....	169
III. 播丹鉄道への譲渡手続と債権者 .....	172
IV. 大阪電気軌道による播丹鉄道系列化 .....	174
 終章 伊藤英一の評価 .....	179
I. 伊藤英一の評価 .....	179
II. 英一の特異な性格 .....	181
III. まとめ .....	184
 あとがき .....	189
 人名索引 .....	195
 企業・施設名索引 .....	200

## 第1章 伊藤長次郎家と伊藤英一

### I. 伊藤長次郎家

「播州長者たる伊藤家<sup>1)</sup>」は戦前において「播州十一郡に跨り、町村五十有余を有する大地主<sup>2)</sup>」で、兵庫「県下第一の大地主…稀れに見るの長者<sup>3)</sup>」で、「理想的大農園を経営せる事は有名なるもの<sup>4)</sup>」であったため、伊藤長次郎（四代）に関しては瀬川光行編著『商海英傑伝』（明治26年）など、多くの人物列伝等で取り上げられてきた。

「播州に此人ありと知られたる」長次郎<sup>5)</sup>（四代）は天保八年三月印南郡今市村の旧家の伊藤忠次郎の分家、「家世々農を業とし傍ら商を営む」伊藤長次郎貞信の末子に生まれた。長男の長三郎は夭死し、次男の勝次郎が家督を相続、長次郎（三代）となったが、風流に耽溺し、家産は衰退した<sup>6)</sup>。病死した兄の後を継いだ長次郎（四代）は「自家の本店を今市に置き、専ら農業を営み而して支店を各地に分置し、盛に運輸為替貸金等の業に従事<sup>7)</sup>」した。

明治8年「姫路に郷民社と言ふを組織して播磨物産の売買を営みて之れが社長となり<sup>8)</sup>」、11年「翁は自から巨額の資財を投し、其他有志者の協賛を得て<sup>9)</sup>」、姫路に第三十八国立銀行を創立して副頭取続いて頭取となり、同行は「播州長者たる伊藤家の後援あり、信用益々増進<sup>10)</sup>」したと称され、兵庫県の中核銀行たるの地位を占めた。12年県会議員、19年山陽鉄道発起人を経て「後ち其常議員となり画策する所甚多し<sup>11)</sup>」、21年「関西地方の生糸を神戸より輸出するの道を開かん<sup>12)</sup>」として神栄を創立して社長となり、「播州米の頗る醸酒の原料と為すに適するを見<sup>13)</sup>」て22年伊保村に伊保酒造を創立して社長（諸M28 P 202）となり、「大に酒造に従事す。其酒銘を宝殿と謂ふ、醴醇佳醞の名あり<sup>14)</sup>」、その他26年設立の日本熟皮取締役や、村長等の公職を兼ね、「農と商とを其身に兼ねて…商海の英傑たるに恥ぢざるのみならず、亦た以て農界の豪雄と云ふべきなり<sup>15)</sup>」と評された。明治31年3月には彼の伝記として蘭田宗恵編『第四世伊藤長次郎伝』が刊行されたが、長次郎（四代）は「商機を察するに敏」で、「自家収獲の米穀を堂島に輸送するに当りても、心算

毫も違はず、常に巨利を博せり<sup>16)</sup>」と称されたが、伊藤家は「家世々仏法を尊信<sup>17)</sup>」する家柄で、長次郎（四代）も「平素謹厳にして礼節を重んじ、能く父祖の遺訓を守りて信仏の念厚く、毎朝禱を出づるや、自から仏前に勤行<sup>18)</sup>」する熱心な信徒でもあった。

一方、明治初期の地租改正の際に、「将来耕地の最も有利なるを看取し、率先之れが買占めに着手<sup>19)</sup>」した。さらに明治27年地所部の番頭に坪田十郎<sup>20)</sup>を配して、「神戸港繁華の及ぶ区域を予想し、山手通付近の田圃六万坪を購求せしが、後果して枢要の地となり、之を借地として収入する所の利得頗る多し<sup>21)</sup>」と、のちに神戸市街宅地20万坪を所有するきっかけとなるなど、不動産投資面でも大いに先見性を発揮した。「時運は伊藤家をも〈坪田十郎〉君をも幸ひし、神戸市の繁昌と比例して〈坪田〉君が差配せる山手一帯の地価は鰻上りに昂騰し神戸市が太れば伊藤家も太り、伊藤家が太れば番頭殿たる君の懐も其体軀と共に肥え太り」(T 9 . 4 . 19 K) と不動産投資に大成功した。彼の不動産買得の秘訣は「現今下田なるも耕耘其宜きを得ば、後來上田となるべき見込あるものを買得する<sup>22)</sup>」にあり、二代以来の家憲たる「海岸の新田若しくは塩田は海嘯の虞あるを以て購入すべからず<sup>23)</sup>」等を遵奉していた。

このような拡張に伴って耕地は播州十一郡に跨り、世人から「千町長者<sup>24)</sup>」「播州長者<sup>25)</sup>」と称されるに至った。五世長次郎も「其土地の大部分が郡部にり耕地なるが為めに彼は農業の発達、産業組合の進歩等に留意し、自ら本県農会長として各方面の研究に従事し、傍ら銀行会社事業に手を染むるが故に其活動は悉く生産的なり<sup>26)</sup>」と評されている。

渋谷隆一、石山昭次郎両氏作成の「明治中期の大資産家名簿」によれば長次郎の明治35年頃の資産額は約1000万円、明治31年の所有地価180,160円の大地主として登場する。所有地価180,160円は愛知の神野金之助(204,880円)、大阪の住友吉左衛門(183,935円)等に次ぐ地位にあり、宮城の斎藤善右衛門(156,790円)等を凌ぐ、全国有数の大地主であった。また渋谷、石山両氏の「大正初期の大資産家名簿<sup>28)</sup>」によれば長次郎の大正5年資産額は約1000万円、13年土地所有は322町である。13年時点の所有耕地、田291.8町、畑30.7町、計322.5町、うち自作反別なし、加古13、飾磨2、加西5、加東2、印南10、明石4、美嚢3、赤穂2、神戸

市1、小作人1550戸であつた。<sup>29)</sup>

五世長次郎は自ら「地主と小作人とは唇齒輔輪の如し、相助け相待ちて自他始めて全し、故に余は小作人を優遇して彼等の便宜を図るに勉む、是れやがて余が利益となり、祖先より托せられたる家産を増殖して、子孫に伝ふるを得るなり<sup>30)</sup>」と述べた通り、「伊藤家小作人ヲ初メ地所管理人及伊藤家ニ出入スル商工人等ヲ以テ組合員ニ加入セシメ勤儉儲蓄ヲ奨励シ農事改良ノ資ヲ貸付ケ農民ヲ以テ独立自営ノ精神ヲ喚起<sup>31)</sup>」することを目的として、明治38年8月30日認可の保証責任伊藤小作人信用組合（組合長長次郎、所員船津吉太郎）を設立し、伊保村には面積一万五千余坪の伊藤家果樹園（園長十倉延次郎）を設置し、伊藤家農会（農会長長次郎、幹事長船津吉太郎）という「一個人にして、堂々たる農会を設け<sup>32)</sup>」ている。

長次郎は明治末年において、納税額が44,205円と全国第一位を占める資産家であつたが、森川英正氏は「播州伊藤家の研究は困難をきわめる。まとまった記録はゼロに近く、目に付くのは断片ばかりだからである。…五代になってからの伊藤家の家業の状態はわからない。長次郎家にかんする記述の中に、家業はまったく姿を見せなくなってしまうからである。同家は多種類の株式保有と大土地所有によって巨富を築いた資産家であることしか、つかめない<sup>33)</sup>」と、先行研究・資料の乏しさを強調されている。神戸財界についての研究者である赤松啓介も著書の中で長次郎を取り上げ、参考文献を挙げている。<sup>34)</sup>

森川英正氏も当初『日本経営史講座3』において、「播州の伊藤長次郎家も地方財閥であるかのように見える」とした後、『地方財閥』の中で、大正8年当時の長次郎兄弟の株式保有を分析し、伊藤（長）家を「巨大な資産にもかかわらず、伊藤長次郎家はついに家業の多角経営によって地方財閥化する道を放棄した<sup>35)</sup>」と評する。森川英正氏も上記以外の参考文献を列挙する。<sup>36)</sup>

このほか『五島慶太伝』は五島慶太への聴取内容にそつて、著者の三鬼陽之助が書いたものだが、五島の記憶力、聴取者の関連知識等の問題もあるためか、固有名詞の誤記等は不可避である。ただし、五島は英一の後始末に播丹鉄道副社長として乗り込んだ当事者の一人であり、（地元ではタブーであつたのか）破綻後に英一の評価を公に語ったものが少ないなかで、大きな流れを理解するには貴重な証言となっている。

## II. 伊藤英一の略歴

伊藤英一の略歴は〔表－1〕の通り、飾磨町の下級士族の子野田英一として生れ、「長ずると親戚関係から伊藤家へ引取られ、同家の農業部に使はれてゐた」（異 P90）が、明治19年先代伊藤長次郎「長女ときに配せし養子作次郎商業に失敗して逃亡<sup>37)</sup>」したため、「坪田〈十郎〉氏と入江〈仙次郎〉氏とは元英一氏と共に伊藤長家の三大番頭であった。そして三人で現在の英一氏の夫人を争ったものであるが、大伊藤家の主人は英一氏に見るところあり、氏は遂に恋の勝利者となった」（明 P24）が、まだ伊藤を名乗ることはなく、伊保村長時代までは野田英一のままであった。英一は「山陽沿線を我が手に統一すると云ふので各駅全部へ（運送）店を出した」（異 P91）が、28年初に創立中の山鉄組<sup>38)</sup>なる「荷為替及諸品委托販売」（M28諸、P210）の会社（資本金2万円、神戸市兵庫）の発起人には「伊藤英一外三名」の名前が見出せる。明治28年9月先代長次郎死亡、家督相続した熊蔵が長次郎を襲名し、「総て悉く自己の方寸によって判断し、自己の手腕によって経営安排し…即ち先づ山陽鉄道線十数箇所の支店が業務紊乱せるを見ては断乎として之を撤廃した<sup>38)</sup>」ので、「彼〈英一〉の運送業も亦廃めねばならぬ次第となった」（異 P91）と言われる。

明治40年7月「先代とき子の入夫となり、家督を相続す<sup>39)</sup>」とあり、野田英一を改め、伊藤英一（以下単に英一と略）を名乗ることができた。この時期は第六代高砂町長に就任し、続いて「衆議院議員候補者となり<sup>42)</sup>」、政治家として一段の飛躍をする上では伊藤の名が必要であったはずで、ここに名実ともに伊藤家の金看板を背負うことができた。伊藤を名乗る以上、本家の現当主たる長次郎の指揮に服する義務があったはずである。



## 〔表一〕 伊藤英一の略歴／関係企業年表

元治元、2	先代長次郎長女伊藤とき〈のちの伊藤英一（英一）妻〉生れる
元、2.18	飾磨町、野田菊松の兄として野田英一〈のちの英一〉生れる
年次未詳	英一、親戚関係の伊藤家の農業部の使用人となる
M11.10	第三十八国立B（後の三十八B）設立
年次未詳	ときは先代長次郎の養子作次郎と結婚
19.	「養子作次郎商業に失敗して逃亡」
20.9	ときの長男伊藤孝次生れる
年次未詳	英一、山陽鉄道各駅に運送店を出店（34年時点で10ヶ所）
28.9	先代長次郎死亡、熊蔵が襲名し、家督相続
年次未詳	京都顕道学校「卒業後家務に与か」った長次郎、「山陽鉄道線十数箇所の支店が業務紊乱せるを見て…之を撤廃」
32.12	龍野電気鉄道設立
34.3.15	鵜B設立（後に西伊藤Bに改称）
40～45.	この間英一、伊保村長、高砂町長、郡会議員、兵庫県議歴任
40.7	兵庫電気軌道（兵電）設立
42.6	英一、高砂町長に就任
44.5	播州鉄道（播鉄）設立
45.	英一、国民党の代議士当選
45.5	明石瓦斯設立（T5時点で取締役）
T2.	英一、播鉄に経営参加
2.10	加古川製紙設立
3.1	新宮軽便鉄道設立
3.3	舞子土地設立
3.	鵜B網干支店で費消事件
4.4.30	播鉄総会で多角化を決議
6.2.	英一、篠山軽便鉄道乗取開始
6.5.24	播鉄の副業として播州煉瓦設立統合
6.5.28	日本綿布設立
6.6.30	英一、兵電取就任
6.8.25	神戸造船所設立
6.9.28	播州倉庫設立
6.9	篠鉄支配確立、農工信託設立
6.11	篠鉄総会大激論となる

- 6.11.30 英一鬼怒電の筆頭株主となる
- 7.2 伊藤鉄工所設立
- 7.3 関西土地信託、取信設立
- 7.4 長谷川商会設立
- 7.5 浪速信託設立
- 7.7 時点英一が新延炭坑採掘権取得
- 7.7.14 英一兵電2代社長に選任
- 7.8 尾野商店設立
- 7.8.31 高砂土地倉庫設立
- 7.9 伊藤商事設立
- 7.10 伊藤製鉄設立
- 7.11 播州石材、北大阪電気鉄道設立
- 7.12～ 神戸造船所で相生丸他を建造
- 8.2 英一、神取理事長就任
- 8.4.29 鶴Bは西伊藤Bと改称
- 8/5期 英一鬼怒電50,939株保有
- 8.10 西代土地、垂水住宅土地設立、英一播鉄社長就任、猪木土彦専務就任
- 9.1 鮮満木材車両設立
- 9.2.29 西伊藤Bの神戸等3支店新設認可
- 9.4.7 増田 BB 破綻
- 9.5.14 兵電が明石電灯を譲受
- 9. 新宮軽便鉄道は播水と改称
- 9.7 時点新延炭坑権利が英一⇒播鉄に変更
- 9.7.2 加古川製紙手形紛失事件発生
- 9.8.7 兵電栄町出張所廃止、本社に
- 9.8.10 英一兵電社長辞職、岡崎藤吉が後任
- 9.8. 取信有志株主が重役責任追及
- 9.9.15 取信が内部整理、全重役辞任
- 9.9.30 播鉄専務猪木土彦辞任
- 9.11 増田 BB が鬼怒電筆頭株主となる
- 9.12 播水は新延炭坑の買収を申請
- 10.4.30 播水は篠山軽便鉄道買収を決議
- 10.5.29 英一「債務を弁済し得なかった」
- 10.11 藤井照千代播鉄専務就任

- 10.12 英一、舞子土地取を辞任
- 10.12.21 沿道6郡町村会が播鉄国有請願
- 11.6.6 英一、加古川製紙手形訴訟提起さる
- 11.6.7 英一、鬼怒電取辞任
- 11.6.15 播州煉瓦解散を決議
- 11.6.25 加古川製紙本店を阪神商事内に移転
- 11. 藤井、谷向、土井ら舞子住宅土地役員就任
- 11. 藤井ら播水取就任
- 11.8.1 社B、西伊藤Bを合併
- 11.9.13 神戸大同土地解散
- 11.9 新延炭坑の採掘権者が播鉄から神沢又市郎（別府）へ移転
- 11.9.30 播鉄取締役藤井忠兵衛、畑吉平、支配人稲岡猪之助辞任
- 11.10.22 播鉄総会で英一辞任（相談役）、酒井、五島ら就任
- 11.10.30 播水は「酒井栄蔵氏一派が経営を引受け」
- 11.11 日本綿布の第二会社・日本綿業設立、英一の召喚説、心労入院説流布
- 11.12.5 英一の後援会発足、金佐楼で初会合
- 11.12.7 英一、神取理事長辞任
- 11.12.30 長谷川商会解散、清算人松本増吉就任
- 12. 中国石材解散決議
- 12.1 播鉄は新会社への営業譲渡案を協議
- 12.1.17 播鉄「酒井社長の熱心を諒とし、地方銀行団は之を応援」を決定
- 12.2.20 伊藤系各社の惨状報道さる
- 12.3.21 税務署が英一の「国税滞納ニ付差押タル財産」の公売公告
- 12.10.24 酒井、藤井ら播丹取、土井ら監に就任
- 12.10.31 住山、尾崎ら播水退任、谷向が監就任
- 12.11 取信の第二会社・神戸取引土地設立
- 12.12.7 「三十八銀行が怪しい」と噂され多聞通支店取付
- 12.12.10 加古川製紙破産申立（取は藤井照千代）
- 12.12.17 龍野区裁判所より鉄道省に播水鉄道財団本登録の嘱託
- 12.12.29 酒井、土井、藤井ら播鉄清算人就任
- 13. 播磨銀行（播水取引先）休業
- 13.4.29 勧銀が播水の鉄道財団競売申立
- 13.5.29 播水鉄道財団を実質芸備銀行競落

- 13. 5 .30 播水競落決定
- 13. 6 .26 英一、明石瓦斯取退任
- 13. 9 . 8 播水競落（名義）人谷口節に鉄道継承許可
- 13. 9 .20 社B、150万円減資を決議
- 13.11. 5 播水失権株式の競売で阪神商事が12,708株を競落
- 14.時点 英一は東洋農事社長、播鉄、明石瓦斯、山東起業各取を兼任
- 14. 1 .17 谷口節から播電鉄道への鉄道譲渡許可、播水解散決議
- 14. 1 .25 三十八B整理断行
- 14. 6 . 5 播電鉄道創立総会
- 14. 末正盛治は神取総会で前理事長英一を批判
- 15. 7 . 1 東播合同B成立（東播、社、柳城、小野の4銀行合併新立）
- S 2 .10 播磨電気鉄道（播水の別線）設立
- 3 .12. 8 三十八Bは加古川Bを買収
- 18. 1 英一80歳で逝去

（略称） 取…取締役、監…監査役、B…銀行

（資料）『第四世伊藤長次郎伝』『兵庫県人物史』『兵庫県人物列伝』『明石の人物と事業』『人物論・神戸の異彩』『銀行会社要録』三十八銀行『五十年誌』『山陽電気鉄道65年史』等各社社史・営業報告書、『神戸新聞』『神戸又新日報』等を総合して著者が作成

### III. 伊藤英一の関係企業

50余社にも達する英一の関係企業の概要はP 4の〔表－2〕の通りで、その役員の兼務状況はP 5の〔表－3〕、一般企業を中心に関係者の株主構成が判明したものはP 6の〔表－4〕の通りである。英一及びその直系家族・姻族が役員・大株主の座を占め、これに末正家に代表される、英一の親密資本家・提携資本家が加わって英一の関係企業が構成されている。伊藤本家のメンバーが英一の関係企業の役員に加わっているケースはほとんど見られず、本家と分家は現代の西武の鉄道Gと流通Gのように、完全にセパレートされた状態にあったと考えられる。

唯一の例外が長次郎と英一とが仲良く取締役を勤める、本来的に乗合所帯の性格を有する兵庫県農工銀行程度であろう。しかも英一の親密資本家の所有銘柄も先代の伊藤長次郎時代からの共同投資先である神栄など一部を除き、伊藤本家の系統と、英一の系統との両方にまたがって投資している者が少なく、親密資本家もいわば本家派と英一派に分裂していた可能性もあろう。

〔表一2〕 伊藤英一系企業群の概要

社 名	設立年月	資本金万円	本社所在地	目的・規模・大株主・特記事項その他
伊藤商事	(大正) 7.9	200	神戸市栄町	石炭鋼鉄各種鉄工製品等の売買
東洋農事	7.9	200	神戸市栄町	開墾肥料農産物販売 他伊藤商事改称?
播州倉庫	6.9	150	加古川町	倉庫業荷為替取組他 播鉄66.7%出資
高砂土地倉庫	7.8	50	加古郡高砂町	播鉄30%出資
播州煉瓦	6.5	20	加東郡来住村	赤煉瓦 職工数男26女6 播鉄50%出資
播州石材	7.11	30	加古川町→神戸栄町	山陽砂利に改称 伊藤系離脱?
播州物産	7.7	20	加古川町	一般商事
中国石材×	6.9	75	神戸市元町	T12解散、住山鈴雄ら清算人選任
伊藤製鉄	7.10	200	神戸市元町	銑鉄 新見工場、職工数男25、女0
神戸造船所○	6.8	70	神戸市栄町	船舶新造修理 職工数男52、女0
伊藤鉄工所	7.2	100	大阪市西区	鉄道用品製造 職工数男39、女1
鮮満木材車両	9.1	50	神戸市栄町	朝鮮支店 新義州
日本綿布	6.5	100	加東郡来住村	天竺木綿 職工数男52、女260 播鉄5%
日本綿業	11.11	10	加東郡来住村	日本綿布の第二会社か?
長谷川商会×	7.4	50	加古川町	莫大小靴下 日本綿布40% 11.12.30解散
大門ヴェルベット	7.10	100	加東郡河合村	綿織ヴェルベット 職工数男17、女64
福島織物	6.12	50	大阪市北区	各種織物製造販売
加古川製紙#	2.10	120	加古郡別府村	洋紙板紙 職工数男48、女40大阪出張所
加古川化学工業	5.8	10	加古川町	加里沃度明礬製造 加古川興業に改称
神戸肥料	M44.5	50	神戸市元町	
播州鉄道	M44.5	570	加古川町	鉄道運輸業
龍野電気鉄道	M39.12	200	揖保郡斑鳩村	鉄道運輸業 播鉄99.5%
新宮軽便鉄道	3.1	35	揖保郡新宮村	鉄道運輸業
播州水力電気鉄道	× 2.12	500	揖保郡斑鳩村	14.1 解散
兵庫電気軌道	M40.7	500	神戸市西代	運輸電気供給其他
北大阪電気鉄道	7.11	200	大阪市北区	墓地葬儀所兼営 神戸信託13,600株
篠山軽便鉄道	2.4	30	多紀郡篠山町	土地建物他幅広く兼業 6.9 期買占め
大阪高野鉄道×	M40.9	400	南河内郡長野町	11.6 南海に合併
赤穂鉄道	4.5	37.5	赤穂町	高橋健三、黒田辛五らの共通役員あり
出石鉄道	9.12	50	出石郡出石町	
浪速信託(土地)	7.5	300	大阪市東区北浜	一般信託業
関西土地信託	7.3	200	神戸市元町	信託債務保証 使用人3 神戸信託大株主
農工信託	6.9	150	神戸市栄町	播州倉庫の改称か 支店 加古川
垂水住宅土地	8.10	500	大阪市東区	兵電垂水17.6万坪 10万中9万株発起人
舞子土地	3.3	200	明石郡垂水村	土地売買賃貸借 舞子に英一別荘

社名	設立年月	資本金万円	本社所在地	目的・規模・大株主・特記事項その他
西代土地	8.10	50	須磨町西代	兵電明石移転計画に関係?
神戸大同土地×	7.2	100	神戸市栄町	伊藤鉄工所が改称 11.9.13解散
神戸住宅	8.11	20	神戸市元町	一般信託業 11.8.12勸業信託に合併
山東起業	9.1?	50	中国青島	
鬼怒川水力電気	M43.10	4500	東京市麴町区	
鬼怒川興業×	9.10	1800	東京市	鬼怒電の財産保全会社10.6 鬼怒電に合併
明石電灯×	M37.11	100	明石町	高砂加古川舞子垂水塩屋 兵電14,978株75%
明石瓦斯	M45.5	50	須磨町西代	石炭瓦斯製造
尾野商店	7.8	50	加古川→元町	公債株式売買公社債引受募集
追原商店	10.2	50	神戸市楠町	社長追原頼太は神取・証券米穀取引員
神戸取引所	M29.9	200	神戸市水木通	米穀有価証券取引
神戸取引信託×	7.3	200	〃 楠町	動産不動産商品売買取引仲介証券引受信託／解散
西伊藤銀行	M34.3	70	加古川町	鵜銀行設立 8.4 改称 11.4 社銀行に合併
湊西銀行	M29.11	100	神戸市神明町	14.8 減資、銀行譲渡後神戸湊西不動産
播丹鉄道	12.10	300	加古川町	
播電鉄道	14.6	65	揖保郡斑鳩村	
播磨電気鉄道○	S2.10	85	山崎町鹿沢	播水新宮山崎間を譲受
阪神商事	7.9	150	北区曾根崎	金銭貸付不動産売買舞子住宅土地改称
山陽興業	7.10	20	高砂→大阪市	砂利請負→鉱石掛掘製錬倉庫運送
(参考) 本家系統の関係企業				
三十八銀行	M11.11	800	姫路市西呉服町	
兵庫農工銀行	M31.7	600	神戸市栄町	
加古川銀行	M29.3	120	加古川町	
(資) 静得社	10.1	100	伊南郡伊保村	伊藤長次郎直系家族の財産保全会社
伊藤企業	6.2	100	神戸市北長狭	一般信託業 関西土地信託が保証
伊藤土地(資)○	2.2	100	神戸市北長狭	不動産売賃貸
神戸土地	9.6	1000	神戸市多聞通	×旧神戸土地建物はT9.5.27解散登記
阪神住宅土地	9.3	1000	神戸市明石町	社長長次郎、常務前川清二、支柴田慶治
大正汽船	5.3	350	神戸市明石町	海運業株価高108低56 (T8)
太洋海運	6.7	500	神戸市京町	海運業
阪神石材工業	7.7	50	神戸市元町	

(凡例) ×印解散、#印強制和議、○印昭和10年時点で存続、大正の年号は省略

(資料) 『銀行会社要録』(東京興信所、大正6年～11年)、鉄道省「播州鉄道株式会社所有株式調」、播州鉄道「有価証券内訳表」(『鉄道省文書』播州鉄道)。持株比率は「株式調」、製品名、職工数等は農商務省編『会社通覧』大正8年末調査等により補完

[表一 3] 伊藤英一系企業の役員兼務状況

[illegible]

(凡例) ●社長・頭取、◎専務、○取締役、△監査役、支…支配人、相…相談役、清…清算人、\*株主

〔資料〕『帝国銀行会社要録』大正8～9年版、『全国株主要覧』、『銀行会社要録』大正9～昭和2年版、『日本全国諸会社役員録』、大正14年用『日本紳士録』その他

株主	〔伊 藤 英 一 持 株〕				〔本 家 持 株〕			末 正 澄 治	末 正 繁 太 郎	三 宅 利 平	大 西 喜 一 平	畑 吉 平	尾 崎 寅 治	岸 本 恒 太 郎	本 岡 武 助	藤 井 慎 二	武 田 常 三 郎	草 鹿 甲 子 太 郎	伊 藤 商 事	伊 藤 土 地 T 6	伊 藤 企 業	神 戸 造 船 所
	T 6	旧株	伊藤英一 新株	計	長次郎	長藏	新一 T 6															
銘柄																						
× 鬼怒川水電		31889	34849	66738				4340	1600		620	2090					890					
播州鉄道		6791	22351	29142				550	460	1411	121	420		540	394	80						
(英一親族名義小計)		917	1814	2731																		
兵庫電気軌道		1350	18805	20155		625		1125	700	300		650		500	300	1150	357	350				
(英一親族名義小計)		(556)	(1584)	(2140)																		
* 大阪高野鉄道		1310	4272	5582															150			
阪急		250	1160	1410															320			
南海鉄道		360	0	360																		
小倉鉄道		1180	0	1180																		
九州電気軌道		810	1215	2025			500															
九州電灯鉄道		485	0	485																		
九州水電		7450	7450	14900																		
明石電灯		200	20	220				200	200						300		200					
(英一親族名義小計)		(0)	(1500)	(1500)																		
神戸電気	1350																					
日本郵船		0	475	475			550											160				
北海道炭礦汽船		0	4000	4000																		
若松築港		150	150	300																		
東洋製鉄		1000	0	1000												50						
鐘淵紡績		0	470	470			850											300		50		
日本硝子工業		2000	0	2000																		
南洋貿易		233	233	466																		
三十四銀行		210	150	360																		
日本絹布																						
正金銀行																			200			
日本海上																			50			
兵庫農銀																			50			
三十八銀行		×160	×70	×230				7500														
								11800	1000			3998										
興銀								5000								100		300		50		
朝鮮銀行								4000														
日本銀行								100														
帝国火災								300														
日出紡績								2940														
大正汽船								4200	5250								750				3010	
樺太汽船								1000														
大洋海運								2050	3000			150									160	
久原鉱業								1000			430									1000	50	
富士製紙								2000														
樺太工業								4100				190										60
富士電気								666				66										
猪苗代水電								500														
満鉄								100														
南洋製糖								100														
富士製鋼						280																
東洋紡績							1050															
福島紡績							358															
尼崎紡績							250															
大阪商船							920															
川崎造船所							820										60		200			
関東酸曹							110				50											
宝田石油							670															
明治製鐵							750															
神戸取引所								580														316
第六十五銀行								112							405							
神戸瓦斯								102														





注1) 10) 25) 『大日本銀行会社沿革史』T 8、p110

注2) 26) 前掲『神戸権勢史』p284-5

注3) 4) 吉原樸『大阪週報記念付録・現代関西人物史』T 4、p145

注5) 藺田宗恵編『第四世伊藤長次郎伝』、M31、p 1

注6) 8) 18) 19) 40) 42) 山川茂雄『京阪神に於ける事業及人物』T 8、い p  
1-2

注7) 11) 14) 15) 瀬川光行編著『商海英傑伝』M26、p 3ノ55~6

注9) 12) 13) 16) 21) 22) 23) 24) 37) 前掲『伊藤長次郎伝』p14~17

注17) 前掲『伊藤長次郎伝』緒言p 1

注20) 坪田十郎(神戸市北長狭通4-65、所得税1172円)はM34神戸市議当選を経て40年代議士に当選した政治家であるが、そもそもは高砂で巡査をしていた時に先代の長次郎に見込まれて東京に遊学する機会を与えられ、その後M27伊藤家地所部の番頭に取立てられた人物で、「時運は伊藤家をも〈坪田十郎〉君をも幸ひし、神戸市の繁昌と比例して〈坪田〉君が差配せる山手一帯の地価は鰻上りに昂騰し神戸市が太れば伊藤家も太り、伊藤家が太れば番頭殿たる君の懐も其体軀と共に肥え太り」(T9.4.19K)と伊藤家との深い関係を揶揄されている。関係先も大正初期には神戸魚鳥青物市場社長、神戸土地建物専務(前掲『神戸権勢史』p272)9年では阪神水電興業、阪神石材工業、播磨鉄道、神戸土地、大正水力電気各取締役、益隈炭礦代表取締役、播磨造船所監査役、神戸鉄工社長(銀T9中p78)、益隈炭礦代表取締役、有馬電気軌道社長(『帝国鉄道年鑑』S3、p564)と長次郎との共通兼務先が少なくない。英一の「友人知己」(T11.12.6K)としてT11.12.5英一を支援する後援会に加わった。

注27) 渋谷隆一、石山昭次郎「明治中期の大資産家名簿」『地方金融史研究』15号、1984.3、p90

注28) 渋谷隆一、石山昭次郎「大正初期の大資産家名簿」『地方金融史研究』14号、1983.4、p87

注29) 農商務省編『五十町歩以上ノ大地主』T13、渋谷隆一編『資産家地主総覧』兵庫編1、H3、p317所収)

- 注30) 32) 岩崎高敏『創業成功発展守成・富豪名門の家憲』S 2、東洋出版協会、P 102
- 注31) 木内英雄蔵版『兵庫県管内紳士録』M39、付P 10
- 注33) 35) 森川英正『地方財閥』日本経済新聞社、S 60、P 42、45、巻末P 11
- 注34) 赤松啓介著『神戸財界開拓者伝』S 55、太陽出版、P 590所収①村田誠治『神戸開港三十年史下』M31、②田中重策『日本現今人名辞典』M33、③時事新報『大日本全国五十万円以上財産家』M34、④田住豊四郎編『兵庫県人物史』M44、⑤古林亀治郎編『実業家人名辞典』M44、東京実業通信社、⑥本郷直彦『神戸権勢史』T 2、⑦兵庫県銘鑑『紳士紳商銘鑑』T 2、⑧山内清溪『兵庫県人物列伝』T 3、⑨吉原木某『現代関西人物史』T 4、⑩浜達夫『現代実業家大観』S 3、⑪三十八銀行『五十年誌』S 3、⑫兵庫県農工銀行『三十年誌』S 4、⑬神栄生糸『六十年史』S 22
- 注36) ⑭岩崎徂堂『日本現代富豪名門の家憲』M41、博学館編集局、P 302～3、⑮『日本紳士録』T 4、交詢社、⑯『全国株主要覧』T 9、ダイヤモンド社、⑰農商務省編「五十町歩以上ノ耕地ヲ所有スル大地主ニ関スル調査」、⑱『明治大正史』12 会社編、実業之世界社、S 4～5。なお播州鉄道、播丹鉄道などに関しては⑲『播丹鉄道株式会社創立十五周年記念帖』(S 13)、『滝野町史 本文編』H 1、P 765で引用)、⑳塩出昌生『加古川線ガイド』(S 62)、㉑亀井一男「ばんでんの跡をたずねて」『鉄道ファン』60号、㉒『播州鉄道沿線百景』(T 4)
- 注38) 田住豊四郎編『兵庫県人物史』M44、P 386
- 注39) 『人事興信録』4 版、いP 27
- 注41) 『高砂町史誌』P 175
- 注43) 中村安次郎は東京府出身で一高、東大法学部へ進み、T 4 .10 高文試験合格、T 5 三井銀行を経て内務省入省、京都府属となり、石川、新潟の警察部長を経て最終官歴はS 13. 6 .24 新潟県知事を拝命したが、14. 8 .27 在職中に死亡した。(秦郁彦『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』1981年、東京大学出版会、P 345、487)
- 注44) 播水「商業登記簿謄本」T 10. 1 . 9。T 9～12はフランス勤務。

注45) もっとも伊藤本家も京都と因縁があり、長次郎が京都顕道学校に学び、長蔵が南禅寺に参禅、京都に洋書の「ぐろりあそさえて」を開業するなどの地縁があった。

## 第2章 播州鉄道の概要

### I. 播州鉄道、兵庫電気軌道の先行諸計画

英一が経営することとなる播州鉄道（播鉄）、兵庫電気軌道（兵電）には、当然ながらその前史ともいうべき播磨鉄道、播磨電気軌道等、多くの先行計画が存在する。そしてこれら未完成に終わった計画には伊藤長次郎ら、伊藤家のメンバーが沿線の大地主として関与したことが多い。このことは後に英一が播鉄・兵電等に関与するに至るある種の道筋を指し示しているようにも思われる。そこで播鉄、兵電の前史と考えられる播州地方の主な先行鉄道計画の概要を年代順に概観しておきたい。

#### 1. 播磨鉄道

播鉄の趣意書ともいうべき「播州鉄道企画説明書」では「明治三十年頃播磨鉄道（明石、谷川間）ノ企画セラルルアリ<sup>1)</sup>」とするが、正確には明治28年12月27日三宅忠蔵外12名より山陽鉄道明石駅～社村～氷上～岡本村（阪鶴鉄道谷川駅）37哩の播磨鉄道（資本金130万円）が発起された。

播磨鉄道と競願関係にあった土鶴鉄道<sup>2)</sup>、南北鉄道<sup>3)</sup>、高福鉄道<sup>4)</sup>が30年2月の鉄道会議で却下されたため、30年7月同社が仮免状を受け、31年7月9日創業総会を開き、上記の役員を選挙し、会社の位置を神戸市に定めた。伊藤長次郎は発起人総代の三宅忠蔵（三十八銀行取締役・神戸支店主任）、米沢吉次郎らとともに筆頭株主として1000株を出資し、取締役役に就任した。31年7月免許状を申請し、32年4月21日免許されたが、日清戦争後の不況の中で設立登記を経るに至らず、33年4月20日同社は任意解散した<sup>5)</sup>。

#### 2. 東播輕便鉄道

明治30年代の末、西村隆次ら東播地方の有力者加古川・高砂地区より阪鶴線谷川駅に接続する鉄道計画は、以下の『鉄道時報』記事に見るように当初の電気鉄

道から軽便鉄道・石油発動車へと根拠法令・動力を度々変更している。

「兵庫県高砂町より同県下氷上郡谷川間に電気鉄道を布設するの計画ありて過般発起者会議を開きたるの結果、創業費二千百円を支出する事となり、目下営業の諸項に関して調査中なり」(M39. 3. 24 4)「加古川電鉄敷設計画 播州加古川の有志は山陽鉄道加古川駅より阪鶴線谷川駅に至る約三十哩間に電気鉄道敷設の計画を立て、同地の西村隆二<sup>7)</sup>より大阪の鉄道工務所へ設計方法に関し問合わせ来れる由。本線路は頗る平坦の地方を経過すべく、尚ほ愈々竣成の暁には播州中部は大に利益を受くべしと云ふ」(M39. 6. 23 R)西村隆二は代議士西村真太郎<sup>6)</sup>の実弟西村隆次(小田織物社長、社銀行頭取)のことと思われる。

「播州加古川と丹波の谷川(阪鶴線の停車場)間沿道有志者は両地間に軽便鉄道敷設せんとて多年來の計画熟して今回沿道地方に一百万円の資本を集め軽便鉄道を敷設せんとてその設計を大阪の鉄道工務所に依頼したるが、線路は三十哩前後にして加古川より小野社久下を経て谷川に達するものにて重に加古川の流域に沿うて敷設する筈なりと」(M39. 7. 14 R)「東播軽便鉄道設立計画 東播地方有力者の主唱にかかる加古川町より加古川沿ふ県道を利用し阪鶴鉄道の谷川駅に至る区間に軽便鉄道を敷設し石油発動車を運転せしめんと議は愈々熟し、沿道各町村よりも応分出資して会社を組織せんとて既に創業費を支出して種々調査中なるが、資本金は約五十万円にて加古川社間の工事を急速に完成せしめ漸次谷川に達せしむる目論見にて右区間は県道を利用し得るより専用道路を開鑿する個所も少なく従て工費も嵩まずして貨客集散の状態は東播中尤も繁多なれば完成の上は産業に利する処一方ならざるべしとて沿道の有志者は予算の調整を急ぎつつありと」(M39. 8. 11 R)「播州高砂谷川間に石油発動軽便鉄道布設の計画あることは数次記載したるが、其後頗る進捗して五十万円に対する資金の引受けも殆んど確定し、国包を経て三木に至る支線の踏査も着手中なり」(M39. 10. 27 R)

この後内務省資料では明治40年2月頃にはほぼ同一ルートの加古川町～谷川間、加古川町～尾上村間31哩19鎖の東播電気鉄道(資本金50万円)計画が存在し、40年2月27日内務省受付、40年5月頃では「陸軍省へ照会中<sup>7)</sup>」となっている。これも上記計画と同一系譜に属するものとすれば電気鉄道、軽便鉄道から電気鉄道に戻ったことになり、動力等に迷いが絶えず付き纏ったことになる。このこと

は主唱者サイドの技術的理解の未熟さの反映とも考えられる。「播州鉄道企画説明書」では同社の結末を「明治四十年ノ交東播輕便鉄道（加古川、谷川間）ノ計画セラルルアリテ…其筋ノ認可ヲ得タリシモ経済界ノ變動ガ主タル因ヲ為シ遂ニ解散ノ悲運ニ遭遇セリ<sup>8)</sup>」と記述している。

これとは同名異社の東播輕便鉄道が後年計画され、大阪の才賀電機商会主の才賀藤吉<sup>9)</sup>、明石の古谷虎雄（明治36年1月明石電灯創立）、高砂の伊藤長平（高砂銀行取締役、三十八1008株主）ら、才賀電機商会・明石電灯関係者ら20余名の発起により44年2月12日「明石町より高砂町に達する十二哩間に資本金百五十万円を以て輕便鉄道敷設」（M44.2.18R）の認可を申請した。

### 3. 播磨電気軌道

兵庫電気軌道の先に当る明石姫路間の電気軌道計画は、代議士、有力者、山陽鉄道株主ら、各派が入り乱れて同名ないし類似名で敷設を申請したため、各派の分類や、その異同等、文献によっては混乱・不一致も見られる。ここでは取り敢えず細かい相違点を無視して大局的に把握すると、先願者たる太田（保太郎）派（神戸派）、鹿島（秀磨）派、長次郎らの沿道派（「山陽電鉄」計画）、山陽鉄道株主派、堀豊彦らの揖保郡派、姫路派等の諸派・諸計画があったが、結局各派に影響力を有する長次郎らの主導で調整・一元化され、播磨電気軌道として特許されたものと考えられる。

その経緯はまず明治39年10月「十五日神戸の太田保太郎氏外四名<sup>10)</sup>の発起にて資本金二百万円を以て播磨電気鉄道会社設立認可を兵庫県庁へ出願したるが、又々今回田寺〈敬信明治37年第9回〉、鹿島〈秀磨明治35年第7回〉、内藤〈利八明治36年第8回〉、山本〈繁造明治37年第9回〉、鞍谷〈清慎明治31年第6回〉、安藤〈新太郎明治36年第8回〉の各代議士及び秋山忠卿、草鹿甲子太郎〈前代議士で弁護士〉諸氏より、明石町ノ内西新町より加古郡二見、別府、高砂、印南郡曾根、飾磨郡白浜を経て飾磨に達する電気鉄道敷設を兵庫県知事に出願したり。会社名は先願者と同じく播磨電気鉄道会社と称し、資本金一百万円にて明石飾磨間二十二哩の延長なりと。因に近日此他に松方幸次郎氏等よりも同様の出願を見るべしといふ」（M39.10.17R）と報じられた<sup>11)</sup>。「明石姫路間に於ける電気鉄道布設請願者

の中太田保太郎氏等を太田派と称し、鹿島秀麿氏等を鹿島派と称し、太田派は資本金二百万円、鹿島派は資本金一百万円にて両々相對峙し居りしが、今回其間に調停を計るものあり、去る二十八日神戸北長狭通伊藤長次郎氏の宅に会合して、協議会を開けりと」(M39.11.10R)

一方、これら神戸派とは別に明治40年前後に「東播の資本家蓬萊林太郎氏、現明姫電鉄顧問伊藤長次郎氏等一派に於て企画されし山陽電鉄」なる、沿道の有力地主等による計画は「院線は加古・印南・飾磨の三郡に於ては海岸を距る近きも一里、遠きは二里余の北を過れる為め…これを遺憾としてこれら沿海地方に交通機関を設くべく計画されしもの」であつたが、「機運未だ熟せず、軌道実測迄完了せしも不幸解散の悲運に陥りたり」(T10.7.4A)とされる。蓬萊林太郎は「大門村ノ素封家」で「明治三十七八念戦役記念トシテ果樹園ヲ…設立<sup>12)</sup>」した篤農家として知られる。この計画は内務省資料では40年5月頃の「明治三十九年一月以降軌道処分未済一覧表<sup>13)</sup>」の明石町～国衙村間25哩60鎖を出願した資本金40万円の山陽電気鉄道株式会社(40.2.8内務省受付)に該当しよう。しかし同社は「他ノ競願ト同時ニ処分<sup>14)</sup>」する方針が採られた。

また『明治運輸史』のいう山陽電鉄(姫路～明石間、24哩、資本金250万円)の主唱者は「山陽鉄道株主<sup>15)</sup>」とされ、山陽鉄道大株主でもあった長次郎の上記計画と同床と考えられる。その根拠として『鉄道時報』が「山陽鉄道会社の株主にし同鉄道国有後に於ける放資事業を起さんとし、今春来同鉄道重役とも交渉する所ありたるが、此程に至り三十八銀行取締役駒井巷氏京阪神に於ける有力者及び播州方面に於ける山陽株主等との連鎖となり、二百五十万円の資本を以て山陽電気鉄道会社を設立する事に決し、目下出願の準備中にあり。而して其布設線路は当面神戸姫路間とし資本金五百万円と為したるも、神戸明石間に対しては、神明電鉄会社なるものありて其筋に於ても之に対して許可せんとするの意向なる由なれば、此区間に対しては出願を見合はす事とし、明石姫路間二十三哩十八鎖に前記の資本を以て複線式線路を布設せんとするにありと云ふ」(M39.11.3R)と報じるからである。三十八の駒井(神戸市中山手)は「永年当行支配人たりし<sup>16)</sup>」人物で、「三十八銀行の社員となって已に三十年…生涯を通じて一銀行社員<sup>17)</sup>」で、「非社交的の情実に連綿しない<sup>18)</sup>」人物のため、頭取・長次郎の意を受け「京阪神に於



ける有力者及び播州方面に於ける山陽株主等との連鎖」の役割を遂行したと見るのが自然であろう。長次郎があえて名を出さないのは、「沿道派」の盟主であるため、各派の調停役にはなじまないからであろう。したがって長次郎は自ら中心となる「沿道派」をはじめ、山陽鉄道大株主として当然に「山鉄株主派」も牛耳り、かつ「両々相對峙し居りし」「鹿島派」と「太田派」の「間に調停を計る」ことにより、以下の記事のように「播磨電気鉄道の名称の下に大合同を結ぶ」主導権を握って、特許時点での発起人総代の座についたと思われる。「沿道派」以外にも以下の記事にあるように四派の出願があったとされるが、前掲「明治三十九年一月以降軌道処分未済一覧表」<sup>19)</sup>で確認できた限りでも播磨電気鉄道<sup>20)</sup>、播磨電気鉄道<sup>21)</sup>などが前述の山陽電気鉄道と同様、「他ノ競願ト同時ニ処分」<sup>22)</sup>「技師回シ」<sup>23)</sup>とされている。

「山陽鉄道の大株主間には同鉄買収後放資の方法として神戸姫路間に電気鉄道を発起せんと企てたるも、神戸明石間は安田善次郎氏の先願者ありて到底認可の見込なき模様なるより、今回其の設計を改めたるに、明石姫路間電鉄出願は長次郎氏を中心とする沿道派を始め、神戸派と称する伊藤俊介、太田保太郎氏等の一派並に堀豊彦氏等揖保郡派並に姫路派と称する四派あり。就中沿道派は十月下旬兵庫県庁に願書を提出し、更に神戸派並に山鉄株主派に向って合同を勧誘し、結局播磨電気鉄道の名称の下に大合同を結ぶに決し、資本金二百万円（四万株）の中姫路派は三千株、揖保派は二千五百株、神戸派は一万株、沿道派は一万五千株、山陽派は五千株を引受け、残余の一千五百株は一般募集を為すに協議纏まりたるも、技術家の言に拠れば資本金三百万円を要すべきが故に一百万円の増資を為すに至るべし。発起人中イー・エッチ・ハンター氏の如きは踏査の結果同電鉄沿道は曾根、大塩、的形、木場、目賀等の諸村孰れも千戸以上の大邑を控へ、明神電鉄に比し一層有望なるを唱へ、播州各要地には播磨電鉄期成同盟会起りて官辺並に町村会に向って運動を開始せん形勢となれり」(M39.11.17R)

この播磨電気軌道の前身各派等に名前が出た資本家の多くは、次の通り、39年9月時点の神戸電気鉄道の発起人・役員・株主としても名を連ねて居り、当地の電気鉄道事業に多大の関心を有していた人物であった。池田貫兵衛(2500)、長次郎(1500)、秋山忠直<sup>24)</sup>(専務1500)、渡辺尚(1500)、範多龍太郎<sup>25)</sup>(1200)、鹿島秀

磨（1000）、安田善次郎（1500）（M39.9.23R<sup>26)</sup>）

こうした経緯の後、改めて40年6月20日長次郎ほか4名を発起人とする播磨電気軌道（神戸市、資本金400万円）の明石町ノ内樽屋町～飾磨郡国衙村ノ内豊沢村間軌道27.2哩（その後25哩58鎖に短縮、軌間4呎8吋1/2<sup>27)</sup>）が特許された。同社はその後、おそらくは事務所設置費用の削減、事実上の休眠化等の理由で本社を長次郎の本拠地である兵庫県印南郡伊保村に移転<sup>28)</sup>し、資本金も500万円に増資した。44年度の『鉄道院年報』軌道之部の「未開業軌道現況」には播磨電気軌道の名は見当たらず、この頃「事業の見込なしとて解散」<sup>29)</sup>（44.2.25R<sup>30)</sup>）した。この播磨電気軌道と、本書主題の「播州鉄道は其の名称が…紛はしく…予定線を承継せし次第に非ざれば…其名を変更し山陽鉄道と改むる」<sup>30)</sup>（44.2.25R）ことまで検討している。

#### 4. 伊藤家の関与

伊藤家としての鉄道計画への関与としては山陽鉄道（常議員）、播但鉄道（取締役）、神戸電気鉄道、前述の未成線の播磨鉄道、播磨電気軌道計画等がある。神戸電気鉄道では長次郎が発起人で1500株引受けたほか、おそらく長次郎の意を体して伊藤家番頭であった坪田十郎が「日夜東西に奔走し、之れが居中調停に任じ、終に合同して一大会社たる神戸電気鉄道株式会社の設立を見るに至り、君又推されて相談役の重職に選ばる<sup>31)</sup>」と、播磨電気軌道の駒井と同様に各派の調停役を演じ、一元化を成功させている。播磨鉄道では長次郎は発起人として三宅忠蔵、米沢吉次郎と並んで最大の1000株を引受け、明治31年7月9日の創業総会には本人も出席し取締役に選任された。発起人総代の三宅忠蔵は三十八取締役・神戸支店主任（M28諸P175）、神栄取締役という、長次郎直系の人物と思われ、長次郎は委任状を三宅忠蔵宛に提出するとともに、目論見書等の捺印はやはり関係の深い神栄取締役、多可銀行取締役の丸岡寛三郎に代印させている。また播但鉄道では長次郎が大塚磨らとともに重役陣に加わるとともに、三十八がかなりの社債を引受けるなど、一定の財務的関与を行っている。すなわち明治36年1月、播但鉄道では140万円、6%利付社債での山陽鉄道への売却談に関して「債権者中姫路銀行外三行が会社の懇談に応ぜざるを以て」（M36.1.17R<sup>32)</sup>）難航したが、それは「姫

路の三十八銀行の如き百円の播但社債を七十円に引受け居れるより直切り談判に  
 応ぜず、交渉困難を極め」(M36. 1. 31 R)、「姫路銀行の十万円、大和田銀行の二  
 万五千円其他数名は不承諾を唱へ頑として聞入れざりし」(M36. 2. 28 R)のため、  
 姫銀、三十八などの「地方にある二三銀行の債権者は存外強硬の態度に出て昨今  
 の事情よりせば調談は出来し難きもののごとし」(M36. 2. 7 R)とまで報じられ  
 た。このことから36年当時、三十八が播但社債(券面額百円)を70円で大口引受  
 けしていたことが判明する。さらに播磨電気軌道では既に詳しく述べたように長  
 次郎自身が各派の調停、一元化に、三十八支店長をも駆使して積極的な取組を見  
 せた。

以上の播州地方の鉄道への伊藤家のスタンスから見て、長次郎は自己の広大な  
 地所の発展と密接に関わりを持つ地元の鉄道整備には相当に関心が高く、前向き  
 な姿勢だったことを示している。このことは次に見るように姉婿の英一が播鉄に  
 関与して行くことを容認するというより、むしろ積極的に支援する気持ちが伊藤  
 本家に強く働いていた可能性を示唆するものであろう。そして英一による播鉄の  
 株式買占めにも当然のことながら、当初は三十八の資金が活用されたものと考え  
 られる。後に播鉄と三十八との緊密であるべき関係が次第に大きく変貌していく  
 ことは注目されてよからう。

## II. 播州鉄道の設立

播州鉄道(播鉄)は明治43年11月1日斯波与七郎、石井徳次、来住泰二郎、三  
 宅利平、長谷川惣太郎、木村静幽、河野天瑞、川島捨太郎、川端浅吉、吉田喜代  
 松、伊藤英一、伊藤万治郎の計12名の発起人により出願された。44年1月25日「播  
 州沿海の良港たる」高砂町と、「加古川の上流に位し、物資の集散には至便の位置  
 を占め」(M44. 3. 4 R)る西脇とを結ぶ24哩10鎖の本線を中心に、三木支線、北  
 条支線の計37哩45鎖の3呎6吋の蒸気軽便鉄道が認可された。(M44. 3. 4 R)

建設費179万円に対して益金の予定額は14.8万円で、その割合8.35%は、許可を  
 与えた22線の最低5.83%、最高13%(加太軽便鉄道)のほぼ中程に位置(M44. 2.  
 25 R)するが、播鉄の起業目論見書を転載した『鉄道時報』は播州米、播州機業、  
 薪炭、三木金物、高砂の三菱製紙、鐘紡工場等「沿線物資の豊富なる、前述の如

くなればこの鉄道の有望なるは何人も首肯する処」(M44. 3. 4 R)と評している。斯波与七郎は加東郡河合村西村の大地主で明治30年貴族院議員、28年には神戸柳原～柏原間の南北鉄道発起人となるなど鉄道発起に奔走したため、地元ではゆかりの播鉄河合西駅前に大正5年「播州鉄道設立の功労者として…銅像を建設」<sup>35)</sup>した。

44年2月5日神戸の富貴楼で発起人総会を開き、資本金180万円、3.6万株のうち「一万三千株は沿道有志にて引受け、一万八千株は発起人其他阪神の有志にて引受くる議に決定、残り五千株を公募すること」(M44. 2. 18 R)を決定した。本社は国鉄駅構内の加古川町335番地、資本金180万円、3.6万株であった。<sup>36)</sup>『鉄道時報』は播鉄を次のように紹介する。「播州鉄道の設立 同鉄道は兵庫県加古郡高砂町に起り、国有鉄道山陽線加古川駅を跨て多可郡津藤村の内西脇村に至るを幹線とし、他に枝線として美囊郡三木町に至るもの、加西郡北条に至るもの及び加古川駅に至るものの三枝線を敷設し、延長数三十七哩四十五鎖、資本総額百八十万円にして去月十八日創立総会を開き、同二十七日会社設立登記を終へ目下工事施行申請の準備中なり。而して之れが幹部を挙げれば左の如し。取締役社長秋山恕卿、専務川端浅吉、同大西甚一平、同斯波与七郎、同的場淑彦、同来住泰二郎、同柴山鷲雄、監査役戸田猶七、同尼崎伊三郎、同三宅利平、同大橋義一、事務長川島捨太郎、庶務課長田中清行、会計課長中村直治郎」(M44. 6. 3 R) 創立時の主要メンバー<sup>37)</sup>としては「播州鉄道を発起するや神電を辞し、専ら開設に従ひ、専務取締役として」<sup>38)</sup>活躍した川端浅吉は「各種の事業を興し、殊に鉄道事業は君の生命とも云ふべく、行くとして成らざるなく…斯の如く君の生涯は鉄道事業にてありき、君の精力主義は尚進んで各種の鉄道に参画して徐ろに画策」<sup>39)</sup>したと評されている。川端とともに播鉄の発起人になった大阪河野工業事務所代表者の河野天瑞<sup>40)</sup>は鉄道草創期からの鉄道技師で、河野の父、河野絢夫は網干出身の著名な詩人・儒学者で、揖西郡伊津村で医業を開いているから、播州各地の有力資本家ともなんらかの交渉があったと思われる。このため河野は兵庫県・特に播州地方の鉄道とも関係が深く、網干～龍野～山崎間を明治29年出願した西播鉄道の発起人総代となっている。(Z15号、P35)こうした背景を有する河野が郷里の播鉄に関係するのは自然の成行と考えられる。播鉄の創立当初の事務長・川島捨太郎<sup>42)</sup>や、

〔表一5〕 播州鉄道主要発起人一覧

○ス波与七郎	300株 加東郡河合村、地主、県議、30年貴族院議員、南北鉄道発起人、T 5 播鉄功労者として播鉄河合西駅前に銅像建設
○石井徳次	加東郡福田村、東播銀行監
○来住泰二郎	248株 多可郡津万村の内西脇村、元弁護士、県議、津万村長、西脇製糸社長、西脇酒造代表社員、西脇商業銀行、東播銀行各取
来住広次郎	来住泰二郎の実兄、西脇区随一の富豪
○三宅利平	142株 加古郡加古川町家町、地主、酒造業、県会議員、播州鉄道、加古川銀行、尼崎商店、中日化工、本田商事、別府軽便鉄道各取、伊藤商事監
○長谷川惣太郎	加東郡滝野村、大阪海運取
○吉田喜代松	加古郡氷丘村、氷丘村長
○伊藤英一	100株 加古郡高砂町ノ内細工町1番屋敷、伊藤長次郎家の番頭 伊保村長、高砂町長、県会議員、代議士歴任
○伊藤万治郎	加古川町72番地、T 4 時点で加古川町長
大西甚一平	700株 印南郡上荘村、追加発起人筆頭、地主、金貨業、大西銀行々主、第三十八銀行、播州紡績各取、播磨鉄道発起人・監800株、国包銀行頭取、熟皮、加古川銀行各監
近藤源吉	300株 加東郡市場村、大地主、多額納税者、柳城銀行頭取、近藤常三郎(播磨鉄道、東播鉄道出願、播鉄、日本綿業各監、播州煉瓦取)の分家
○木村静幽	大阪市東区、大阪土木社長、帝国信託取、摂津製油、毛斯綸紡績各監
○河野天瑞	300株 御影町東明78番地、29年西播鉄道発起人総代、湖南鉄道50株
○川島捨太郎	明石郡垂水村、滋賀県南五個荘村石馬寺出身、播鉄事務長、湖南鉄道取250株、東播馬車監
○川端浅吉	380株 御影町、播鉄専務、湖南鉄道監100株、旧福岡藩士、30年鉄道工務所入社、神戸電気鉄道庶務課長、信貴山鋼索鉄道発起人、摩耶山ケーブル鉄道発起人、石三軽便鉄道監、信楽鉄道取
桑原政	大阪市北区、明治炭坑社長、市之川鉱山取、明治製煉社長、京阪電気鉄道取、営口水道電気監、水戸電鉄、宮島電鉄発起人
秋山恕卿	200株 魚崎、播鉄社長、湖南取100株主
松永安左衛門	大阪市西区、石炭商、日本瓦斯取、泉尾土地監、(後の東邦電力社長)
上田寧	大分県宇佐郡生れ、山陽、豊州、阪神、阪鶴各鉄道を経て阪急、兵電、灘循環電気軌道、阪急各取(後の阪急専務)

〔凡例〕 ○印原始発起人

〔出典〕 鉄道省文書「播丹鉄道(元播州鉄道)」巻一、明治44年3月4日『鉄道時報』、持株は明治44年9月末現在『第一回営業報告書』「播磨鉄道株式会社起業目論見書」明治28年12月27日「仮免状関係書」(『鉄道院文書』「播磨鉄道巻全」)役員選任は明治31年7月9日創業総会、兵庫電気鉄道発起人名簿は『原敬関係文書』第8巻、日本放送出版協会、87年、P 476)、役職等は『銀行会社要録』明治44年、『鉄道電気事業要覧』大正3年、鉄道通信社、鉄道時報局『帝国鉄道要鑑』、明治39年、第3版、『明治運輸史』等により作成

会計課長中村直治郎についても河野、川端らとの関係が推定される。

当初の播鉄には「彼の創立難を以て世の批難する処多かりし<sup>43)</sup>」との評がつきまわっていた。河野、川端らの仲間はまず、見込みありそうな区間の鉄道免許権を先取りして、工事請負を条件に地元の資本家に売込むような商売をしていた鉄道起業のプロと考えられる。彼らが関与した湖南鉄道でも「株主総会の決議を経ずして社債十万円を売出」したため、地元では「重役の場淑彦、川島捨太郎、秋山恕卿氏等の如きは…払込を為さずして一般株主の払込を強ふる」<sup>44)</sup>「会社及び株主を食ひ物にして私腹を肥さんとする」「会社モグリ」と批判され、「創立には殆ど企業心の皆無な会社ゴロが関係してゐたので事業の成功は到底駄目と観測せられ」(T 2.12.23A)、創立早々立ち往生して前経営者の河野、川端らの投げ出した湖南鉄道を継承した藤井善助<sup>45)</sup>は大正3年に社長の立場で従業員に向け「創業ノ当初…粗漫ニ流レントシタリシノ弊ハ之ヲ打破修正スベキモノ<sup>46)</sup>」と訓示している。

明治44年2月13日に播州鉄道創立事務所の名で刊行された『播州鉄道とはどんなものか』という32頁の小冊子は「播州鉄道とは如斯有望のものなり」ということを宣伝し、株主募集に資する目的で作成されたものであるが、この時代の私鉄の目論見書等に比して、①表紙が多色刷りの絵で、沿線の名勝写真多数を挿入し、②諸統計を随所に折込み、説得力がある反面、③発起人、主唱者の名や、鉄道発起に至る苦労等の人的要素の記述が皆無で、④鉄道敷設による地域の受益を強調した部分が見られず、地域性の反映が稀薄、⑤要するに、土着的な要素が欠落して土地の臭いが稀薄で、⑥よく言えばあか抜けした、悪く言えばタイトルと写真、統計を入れ替えれば大筋はどここの私鉄でも通用しそうな汎用品という、他に類例のないものとなっている。つまり、地域に密着した地元の人間の手によらず、職業的な鉄道プロの造った既製品の臭いがする。おそらく創立事務所の住所の大阪市東区北浜4丁目25番地は播鉄の設計等を担当した大阪河野工業事務所内ではなかろうか。この冊子に挿入された2月15日の日付の「軽便鉄道補助法案!!」なるチラシでは「本法施行の暁は…播州鉄道の如きは五朱の保証によりて頗る確実なるものたるべく…株主は頗る安心して投資し得べければ、本鉄道の如きは世の資本家の一顧に値するものたるべき」ことをしきりに強調している。この小冊子が配布された先も沿線の資産家に限定されず、当然に「世の資本家」を対象とし

たことであろう。

その結果、[表一6]の通り、当初株主には沿線外の大阪、愛知、石川等から、野村徳七、尼崎伊三郎等の著名な投資家も上位に並んだ。しかしこうした不在株主の多くは2～3年以内(5回営まで)に持株の大半を売却して姿を消している。有力発起人である鹿島秀麿は播但鉄道社長のほか、神戸電気、兵軌、阪神等の重役も兼ね、神戸の財界で秋山恕卿らとともに活躍した人物として著名である。当時鹿島は39年頃「姫路市より郊外に至る七」哩の姫路電鉄(資本金100万円)の主なる発起人となるなど、播州方面の電鉄計画を盛んに推進していた。しかし播鉄の支配グループは湖南鉄道の辞任と時期を同じくして大正2年3月19日から2年5月26日の間にほぼ全員が相次いで播鉄の重役の座を辞任し、播鉄の支配権を英一らに譲渡している。(1～5回営)まず秋山恕卿は播鉄社長を2年5月9日に辞任したが、川端浅吉も播鉄専務を2年4月25日に辞任した。

### III. 開業後の播州鉄道

播鉄は2年3月29日「加古川、国包間沿線加古印南両郡々長、郡吏、警察署長、税務署長、各課長、登記所長、新聞通信記者、沿線町村長其他有志百余名を招待し、列車運転試乗を求め、会社側よりは秋山社長、川端専務以下重役及各課員等出張接待を為し、来賓一同と共に加古川国包間の試乗を為し加古川駅帰着後同二時半より同駅構内に於て盛んなる祝賀会を催した」(T2.4.E)後、4月1日加古川～国包間を新規開業した。この時点での工事計画は「国包西脇間及加古川高砂間は目下工事中にて、本年六月末を以て工事成功し開通するに至るべし。又北条支線は土地買収を終へ、本年秋期より工事に着手し、明年三月頃開通の予定にて三木支線は土地買収中なり」(T2.4.E)とされた。播鉄の終点の西脇と福知山線谷川駅を連絡する丹播鉄道は2年3月14日神戸で発起人会を開き、全株の半数を発起人で引受け残余を公募し、創立事務所を中山手通の鈴木弁護士方に設置すること等を決議している。(T2.4.E)

なお播鉄開通前に播鉄とも人的に関係ある東播馬車株式会社(明治43年6月設立、資本金12,500円、社長平川義正、取締役稲岡猪之助ら、監査役川島捨太郎<播鉄事務長>ら)が加古川駅～新町(滝野)間等数路線に乗合馬車を運行、大正4

〔表一 6〕 播州鉄道主要株主推移（数字は持株数）

株主名	主な役職	44/9	45/3	T1/9	2/3	2/9	3/3	4/9	8/3	9/9	10/9
☆伊藤英一	播鉄専務→社長	100	100	100	100	970	●1820	●4433	●42037	●13873	③8159
伊藤英雄	兵庫						0		15383	7116	⑥2752
伊藤英三郎	英一三男						0		4721	1500	200
伊藤孝次	英一長男						0		2204	39	
細田藤弥	英一女婿						0			303	△
伊藤商事㈱	(取伊藤孝次)									0	⑨1953
浪速信託㈱										2953	⑩1582
末正盛治	湊西B専務						0		550	950	950
末正繁太郎	湊西B頭取						0	△	460	△460	△460
岸本恒太郎	神取常務理事						0			△500	300
稲岡猪之助	播鉄支配人						50	50	195	95	1375
梅鉢安太郎	梅鉢鉄工場主						0	50	○740	130	130
田那作三	堺 龍電監						0		△300	200	200
☆斯波与七郎	河合村地主	○300	300	300	200	200	200	200	312	312	312
☆三宅利平	加古川地主	△200	236	153	143	156	○206	○346	2133		
☆◎大西甚一平	上荘村地主	○700	700	700	700	700	700	700	1411	1411	911
◎大西甚佐久	三十八300株						△254	△354	190	90	○
☆来住泰二郎	西脇商業B取	○248	212	202	202	202	○402	○352	708	8	
☆来住兼三郎	西脇商業B取	100	100	100	100	100	△100				
☆◎畑昌愷	醬油醸造業						80	80	108	108	108
☆畑吉平	社B、国包B監						60	180	383	139	○339
☆近藤源吉	地主、柳城B頭取	300					△300	600	504	504	504
☆長谷川惣太郎	滝野村、大阪海運取						220	220	313	40	
卜部兵吉	西伊藤B、農工T						0	0	○1253	○400	400
岸本長司	小野商事T東播合同B取						0	0	500	○400	○400
藤井忠兵衛	神取取引員						220	20	540	○360	○370
加島安次郎	大取取引員									○1000	
岡田関太郎	播磨B専務	100	100	100	100	100	○350	205	320	343	
範多龍太郎	貿易商	300					300	300	180	180	180
有馬唯一	東洋フェルト取	500					300	0		0	
石亮合資	(代表石井亮三郎)									2264	884
高原重太郎	加西銀行頭取	100	100	100	100	100	○210	○450	120	100	
西川豊四郎	中外海上常務	200	200	200	204	209	○209	0			
阿江煎	東播銀行取	200	200	200	200	200	○200	200	120	120	
高橋健三	赤穂鉄道取、北丹鉄道監						○200	○300			
有坂忠平	播磨化学工業取						0		1426	0	
尾上清兵衛	二見B頭取						0		△326	0	
中村安次郎	英一・三女の夫										△
☆秋山恕卿	湖南取	●200	200	200	200	200	200	200		0	
☆河野天瑞	鉄道技師						200	200			
☆川島捨太郎	播鉄事務長						100	0		0	
☆川端浅吉	播鉄専務	●380	380	380	380	20	20				
的場淑彦	大阪市東区	○300	300	330	330	230					
尼崎伊三郎	尼崎汽船代表	△600	700	1700	1700	2000	2000	0			
戸田猶七	大阪洋反物商	△500	500	640	640	140					
大橋義一*1	神戸下沢1	△100	100	100	100	150					
柴山鷺雄*2	野村商店取	○500	500	430	860	642	△412	0			

(凡例) 播州鉄道役員…●印社長・専務、○印取締役、△印監査役、☆印発起人、◎印…三十八銀行株主

(資料) 播州鉄道『第一回報告書』～『第二十一回報告書』

(注記) \*1 大橋義一は日毛250、日綿150、合同紡100株主 (T15『全国株主年鑑』P266)

\*2 柴山鷺雄は野村商店取でT8/11鬼怒電1640株主



年9月廃業後、「一時播州鉄道の付属事業として加古川駅・新町間に営業したが、成績が振るわず廃業した<sup>52)</sup>」といわれる。また「滝野の五峰山光明寺へはケーブルカーをつけて参詣人の便宜をはかう<sup>53)</sup>」との案も出たといわれる。開業当時の名所遊覧地案内には、「伊保村伊藤家果樹園（面積一万五千余坪）…日向山遊園地…日向台温泉（同山麓にあり播鉄の経営せるもの）」（T2.4.E）等が紹介されている。

#### IV. 伊藤英一の播州鉄道買占め

##### 1. 伊藤英一の買占めの動機

開通当時の播鉄の沿道名所地の案内に「伊保村伊藤家果樹園（面積一万五線余坪）」（T2.4.Ep340）との記載がある。英一は明治43年11月恐らく、当時高砂町長の立場から、伊藤万治郎（加古川町長）、三宅利平（県会議員）らとともに播鉄発起人として名を連ね、創立以来100株の株主であったが、大正2年6月24日の臨時総会で専務となり、2年9月末では持株を970株に激増させた。（5回営）専務就任時の同社取締役は阿江勲200、高原重太郎100、岡田関太郎300、西川豊四郎209、監査役は柴山鷺雄642、来住兼三郎（西協商業銀行取締役）100各株であった。

『神戸の異彩』は播鉄への参画を「播鉄の内部が非常に紊乱し、所謂持余してゐるのを見て彼はフト考へ『よし！播鉄を一つ経営して遣らう。さうして鉄道に依って受けた曩の恨みを鉄道で晴らして呉れやう』と茲に勇猛心を奮起し、それに向って突進を始めた。彼の背後には伊藤家がある、播鉄はは何の苦もなく彼の手に収まった」（異P93）と述べる。先代の長次郎も山陽、播但鉄道等、地元鉄道経営には積極的に参画、播磨電気鉄道では三十八銀行支配人を指揮して、出願から競願者との調整、株式募集、はては会社清算に至るまで伊藤家として全面に関与するなど、播磨地方の鉄道会社の経営に関与することは、伊藤家としては前例もあり、先代の遺業を守る長次郎の理解も得やすかったと思われる。現に6年3月末では長次郎の弟弟長蔵は播鉄新株300株を取得、14位の大株主に加わるなど、本家側の資本参加も見られた。（12回営）

これと相前後して、創立当初の社長秋山恕卿、専務川端浅吉らの重役陣は相次いで退任、持株を減少させている。次の新設鉄道受注を志向する川端浅吉らの行

〔表－7〕 播州鉄道の役員一覧（大正10年現在）

取締役	伊 藤 英 一	伊保村、前出
〃	ト 部 兵 吉	江井ヶ嶋酒造社長、西伊藤銀行、農工信託、播州倉庫各取
〃	大西甚左久	大西銀行社員・700円出資、五成社取、大西銀行主の大西甚一平（表5）の一族
〃	加島安治郎	大株仲買人、大株取引員組合長、加島商店社長、大阪土地運河、日本家禽土地各社長他多数の土地会社役員を兼務
〃	藤井忠兵衛	神戸市加納、M23神取仲買人開業、神取商議員、副会長、総代、加古川製紙取締役、取信相談役、舞子土地、日本綿布、播磨電気鉄道各監
〃	畑 吉 平	社銀行、播磨メリヤス、日本綿業各取、国包銀行、加古川製紙各監、T8で播鉄121、鬼怒電1810、大正汽船100株所有
監査役	末正久左衛門	（T10繁太郎が襲名）、先代久左衛門の長男、盛治の兄、地主、神戸市農会長、淡西銀行頭取、関西土地信託社長、兵電、明石電灯、西伊藤銀行、加古川製紙、伊藤製鉄、日本製薬各取、伊藤商事、真野信託（真野土地）、明石産業各監、播鉄460株、浪速信託ほか大株主
〃	細 田 藤 弥	英一女婿、明石電灯代取、播水、舞子土地各取、伊藤商事、福島織物各監
支配人	稲岡猪之助	加東郡来住村長、社銀行小野支店支配人を経て播鉄支配人、東播馬車、伊藤鉄工所、伊藤商事、農工信託、播州倉庫、中国石材、日本綿布、西伊藤銀行各取、播水、高砂土地倉庫、尾野商店、尼崎商会、長谷川商会、播州石材各監

（資料）『播州鉄道第二十回報告書』、『銀行会社要録』、『帝国銀行会社要録』ほか

動パターンから考えると、2年3月29日に播鉄の試運転を行い、盛んな祝賀会を挙げて、4月1日から営業開始した後に地元資本家にバトンタッチしたことは予定された投資回収とも考えられる。英一が専務となった直後の2年7月には当面の予定地たる西脇までが完成し、8月10日には全株主、知事以下の高官、代議士、町村議員等、総数2450名もの来賓を招待した大掛かりな開通式が西脇で挙行された。盛大な行事を好む英一が専務としての初の晴れ舞台となった。播鉄開通記事では「運転車両も客車三十一両（内十両神管より借受）自動車三両、貨車四十両（外に六十両は梅鉢鉄工場より購入の契約を為せり）汽罐車五両にて、左の如く一日十一往復の運転を為し」（T2.8.10A）とあり、「客車も南海鉄道の不要品を購入」したといわれるが梅鉢鉄工場との関係の深さが注目される。

## 2. 日本勧業銀行からの財団抵当借入

英一は本家からの桎梏を抜け出すため、資金面では主に2つの方策を模索したと考えられる。一つは播鉄資金として三十八以外の資金パイプを太くして、三十八への依存を回避することである。このためまず「日本生命保険に二十万円の借入方を交渉したるも遂に纏まらざりし」(T 3.10.5 T)ため、日本勧業銀行に自らお百度を踏んで、3年「伊藤専務が東京に於て運動したる結果、勧業銀行より三十万円を借入る事に談略纏り、勧銀より技師其他関係者出張し来り、去月二十三日来同社の状態に就き詳細調査中なるが、借入れ条件等は調査結果結了を待って取り極むべし」(T 3.10.5 T)と報じられた。英一が「資金に就いては勧銀へお百度を踏んだ」(異P93)3年10月という時期はまさに勧銀による軽便鉄道貸付開始の時期に当たっていた。英一は私設鉄道同志会の有力メンバーの一人として、私鉄への助成とりわけ資金調達面での法的整備には率先して熱心に取り組んだ。例えば日本勧業銀行法、農工銀行法等を改正して軽便鉄道財団、軌道財団抵当の拡大を決議した6年6月23日の私設鉄道同志会臨時総会では「伊藤英一氏馬越会長に代りて開会を宣し…特別実行委員として会長指名の下に左の諸氏選定さる。馬越恭平氏、伊藤英一氏…久須美東馬氏、渡辺藤吉氏、堀内良平氏」(T 6.6.30 R)とかなりの活躍を見せている。

勧銀の行史によれば軽便鉄道貸付は「大正三年三月日本勧業銀行法の改正により本貸付を為すこととなり、同十一月より之を開始せり。本事業の如く放資の回収遅緩なるものにありては長期資金の借入を便とするを以て、本行の貸出を開始するや融通を求むるもの多く、大正五年末迄に総貸出二十二口、金三百九十四万円に達し、現在貸付高十五口、金額二百四十五万八千円に上れり、而して、前記貸出高三百九十余万円の内、線路延長計画に対する建設資金に属するものは約百十七万円にして、他は既成線建設費の旧償還資金なり。本行が貸付を為したる軽便鉄道会社を挙げれば、兵庫県播州鉄道<sup>56)</sup>…」と、貸付実績の筆頭に挙げている。播鉄は3年3月17日内閣総理大臣に鉄道財団予告申請を行い(6回営P4)、6月30日内閣総理大臣に「二十万円借入ノ件」の申請を行い(7回営P3)、4年4月21日内閣総理大臣に「軽便鉄道財団ヲ担保トシテ金三十五万円借入ノ為メ軽便鉄道抵当権設定ノ件」申請を行い(9回営P1)、8月14日内閣総理大臣に「社債金

三十万円募集ノ件」申請を行った。(9回営P2)12年11月2日勸銀総裁名の承諾書に依れば「播州鉄道株式会社ト当行トノ間ニ締結シタル大正七年四月九日付輕便鉄道財団抵当年賦償還金員貸借契約証書ニ基ク債権額金一百五十万円ノ担保トシテ抵当権ヲ取得セル同会社所有ノ鉄道財団ヲ抵当権付着ノ儘今回設立ノ播丹鉄道株式会社ニ対シ現物出資トシテ供与ノ儀承諾候也」(文、播丹)<sup>57)</sup>とある。6年3月24日臨時総会で尾上～明石、高砂～龍電網干駅、北条～山崎、河合～東条等の新線建設を定款に追加すること、「龍野電気鉄道株式会社又は株式を買収の件並びに其買収代金の支払は財団設定に因る借入金又は社債を募集する件」を決議した。(12回営)

### 3. 播州鉄道の金融取引状況

初期の播鉄の預金取引では大正3年3月末で「三八銀行支店外九行一二、六七六円」(6回営P12)、4年9月末で「三十八銀行神戸支店外四四、八二七円」(9回営P1)とあり、当然に三十八神戸支店が最大預金先であることが推測される。また播鉄が7年8月に発行した第2回7%社債30万円の利子支払場所も浪速銀行(T10年には十五銀行大阪支店)と三十八(神戸支店)の2行が指定されていた。(T8野付P4)しかし8年の播鉄株式配当金支払場所は浪速、五十六、高砂、大西、柳城、北条、加西(原文作西は誤)、東播、大志の各行で、なぜか三十八は含まれず(T8野付P9)また同じ頃に兵電でも社債利子の支払場所は安田、京都、百三十、日本商業の4行で、三十八は含まれない。(T8野巻末P5)また8年3月末では財産目録の銀行勘定に備考がなく(16回営P6)、三十八との関係は推測できなくなっている。12年3月31日現在の各行別の播鉄への与信額は[表一8]の通りであるが、その特徴は次の通り。

①メインの日本勧業銀行が1,271,533と圧倒的な比重を占めている。②多可銀行、東播銀行、社銀行の3行が20万円前後と準メイン格だが、力不足。③加西銀行以下、地元中小零細銀行が多数、ドングリの背比べ状態でこれに続く。④英一の機関銀行と思われる西伊藤銀行は11位(債務証券を除けば10位)と、意外に低い位置にとどまる。⑤12位に個人名義(谷向喜一郎)が登場するのは播鉄の信用力の失墜、資金逼迫の反映。⑥英一との関係が深いはずの三十八、湊西銀行の播

[表一] 伊藤英一・播鉄等の取引金融機関 (大正12年度末)

(属性) 銀行名 与信額 (伊藤英一個人等借入分)		鬼怒電 持 株	播 鉄 持 株	主要役員名 伊藤関係の兼務先 (担保その他) [ ] 内は特記事項
●□◎増田BB 約4,300,000 一 神戸岡崎 約3,600,000 一 浪速信託 約3,410,000 ●◎神戸取引信託約160万円 一 神戸信託 1,215,841 ◎ 兵庫農工 3,000 ◎☆大同生命 (法人名義借入分) 播鉄 播水	*	77,538	1,500	増田信一* (伊藤商事、浪速信託分を含む。鬼怒電63,399株担保 228万円回収済) ◎岡崎藤吉 (兵電48,000株担保, @75円 大正9年回収済) 山本辰五郎* (大正8年12月期浪速信託の全借入金で、増田 BB 以外の調達先未詳) □伊藤英一 [株主が重役を追及] [取引の別組織・合同証券は播水1250株主] * 3社内訳未詳 (英一土地担保簿価932,554円, 自己評価2,471,440円) 大谷吟右衛門/伊藤長次郎/伊藤英一 松井萬緑
①△ 勲業 1,271,533 ②●△ 多可 256,319 ③ 東播干 214,412 一△芸備 (広島) ④△ 社 193,747 ⑤□ 加西干 122,415 ⑥ 細川 102,024 ⑦□◎☆高砂干 97,936 ⑧ 国包 76,931 ⑨ (債務証券) 75,910 ⑩ 北条干 55,475 ⑪ 西伊藤 50,000	300,000 3,420 209,120 26,197			(鉄道財団第一順位) □◎藤井忠兵衛 播鉄、舞子土地、日本綿布 □蓬萊林太郎 播鉄発/□阿江勘 播鉄/□石井健次/□石井亮三郎 谷口節 播水競落人、播電鉄道発 (鉄道財団第二順位・広島信託保証) □西村隆次 播磨電気鉄道/□◎畑吉平 加古川製紙、日本綿業/稲岡猪之助 (元支) □安積重治郎/□高原重太郎 播鉄 八木鶴松 □松本龜太郎/□大崎源一郎/□神田勝次 加古川製紙、尾野商店、高砂土地倉庫 □大西甚一平 播鉄発/□▲高見栄治 龍電、篠鉄/□◎畑吉平 播鉄、加古川製紙  □志方耕藏 中江忠兵衛 西代土地、神戸造船所/南陽二郎 神戸造船所/□藤井慎二、神戸造船所
⑫ 谷向喜一郎 39,863 ⑬□◎☆●淡路 36,862 ⑭ 小田 34,500 ⑮帝国信託 (神戸) 28,000 ⑯ 柳城干 13,454 ⑰●□ 大志干 12,046 ⑱ 小野 12,000 ⑲◎ 五十六干 9,988 ⑳ 大西甚一平 9,069 ㉑◎ 二見 6,000 ㉒ 中東条 3,000 ㉓△● 播磨 1,500 ㉔ 淡路実業・岩屋800 △ 三十八 0 濃西 0 第一・兵庫 0 十五干・大阪 0 三重商工 (加西郡) 0 淡河 0	1,680 500 2,000 150 2,035 7,000	1,680	12,500	(阪神商事専務、元淡路貯蓄銀行頭取) 増田俊太郎/加藤淳一 藤井澤/土肥信太郎/□西村隆次 播磨電気鉄道 大森喜作/中江忠兵衛 □近藤源吉 播鉄、[柳城銀行は淡西銀行に出資] □上月安重郎/□上月孝之介 新鉄/☆大城戸宗七 播丹 [大志は播水550株主] 児島政次郎/□岸本長司 播鉄 米沢次次郎 神栄、明姫電気鉄道/土肥信太郎 [五十六は播水150株主] □大西甚一平 三十八、加古川銀行、神栄 □尾上清兵衛 播鉄 宮脇健次郎 □岡田開太郎 播鉄 平野英吉 伊藤長次郎/□大西甚一平/□◎三宅利平 播鉄発、伊藤商事 □◎▲米正盛治/□◎古川巖  [播鉄社債利子支払場所]  □三枝平治郎 小西勇雄
□◎ 加古川 □◎ 六栗 ◎ 小野商事信託 □ 百三十七 □ 篠山 □ 豊国信託 (大阪) □◎ 浪速信託		8,738 436 348	2,233 625 2,000 1,400 900 1,582	伊藤長次郎/□大西甚一平/□◎三宅利平 橋本橋治/尾崎泉之助/◎小林善太郎 播磨電気鉄道 [六栗は播水100株主] □岸本長司 播鉄 (本店小野、資本金5万円) ▲西坂熊太郎 ▲斎藤幸之助 [篠山は播水900株主] 近江源兵衛/伊藤長兵衛 広都正三/小松土岐四郎
△ 龍野 △ 福本 △ 三十八 △● 富田林 △ 藤田・神戸 △ 小国 (熊本県) ☆ 八東 ☆ 姫路 ☆ 松江 播江 ◎ 農工信託	25,061 14,286 8,600 2,600 1,000 500			末田茂吉 難波重幹  越井醇三 [富田林は播水3500株主、大阪の越井美智は播水50株主]  北里義一 □三島盛之助 (3,000株) □瀬川盛次 三島佐次右衛門/絲原武太郎 藤田文太郎 [播西は播水500株主] □卜部兵吉 西伊藤銀行、播州倉庫

日本勧業信託（東京） ◎ 尾野商店 □ 海外貿易（大阪） （名）営善社（東京）		3,600	[勸信は播水500株主] □◎尾崎寅治 播水、農工信託、播州倉庫、加古川化学 八木千之助（後述土地信託取）[海外貿易は播水2000株主] 斉藤宗誠 [営善社は播水1000株主]
--	--	-------	---

（凡例） 銀行名の後の（ ）内は県外の本店所在地、「・」後の地名は支店名、○内の数字は大正12年3月31日現在の播鉄への与信額順位、〒印は播鉄株式配当金支払場所、●印は破綻、□印は播鉄株主（T10/9）、◎印は鬼怒電株主（T11/5）、☆印は播丹株主、▲印は篠鉄株主、△印は播水債権者、播水への債権額・持株はT13/3  
 （資料） 播鉄播丹間の大正12年4月21日付「覚書」

鉄への与信額がゼロなのは注目に値する。

#### 4. 播州鉄道の業績建直し

播鉄の株価（高値）は設立時の明治44年には払込額の12.5円と同額であったが、大正2年には50円払込が僅かに13.0円と大幅に切込み、当局をして「其成跡初期ノ予想ニ反シタルハ甚タ遺憾」（6回営）と言わしめ、その後も3年高値23.0円、4年高値30.3円と依然として額面割れが続いていた。（T8野P378）

3年9月25日には高砂口と高砂港に接続する高砂浦間の開通式を挙行し、高砂港において播鉄と瀬戸内海の水運との海陸連絡が完成、これによって播鉄の縦貫線が首尾一貫を見た。この線区は短距離ながら「同港より加古川上流沿岸一帯の地には大小数百の工場櫛比し、此等各工場の消費する約二億斤の石炭及一億斤の各種工芸材料は同鉄道の開通に依り、今後高砂港より輸入せらるべく、同地方の産業を裨益する事蓋し一方ならざるものあるべし」（T3.10.5T）と「播鉄の咽喉線として重要視せられた」戦略的意義が評価された。

英一は播鉄経営には「刻苦奮励、殆ど寝食を忘れて経営方法の改善に腐心」（異P93）したといわれ、折しも良く5～6年頃には播鉄の沿線に肥料、製紙、紡績、毛織などの工場が進出し、製品・原材料の輸送で播鉄は開業以来の増収記録を達成、4年上期の利益は「前期ニ比シ八倍弱ノ成績ヲ挙ゲタリ、此破天荒ノ良成績ハ一ニ重役諸氏及使用人諸君一同ノ努力奮励ノ賜…当期ニ於ケル絶大ノ努力ニ酬ヒ将来ニ於ケル格段ノ奮励ヲ期待スル」（9回営）趣旨から、株主総会で株主畑昌愷外9名から賛辞を呈され、特別賞与金支出の建議を提出されるなど、英一は大いに面目を施し、その自信がその後の強気一本槍の経営につながったと見られ

る。硬派の株主から「破天荒ノ良成績」と激賞され、伊藤専務がこの建議に大いに気を良くした様子は印刷完了後の『第九回営に別刷の建議全文をわざわざ糊付けしてまで添付させたことから窺える。

4年下期から配当率を5.6%から10%に引き上げ、5年上期から13%を3期継続したため、播鉄の株価も5年には高値70.0まで急騰して初めて払込額を超過し、6年には高値70.0、安値67.0、7年には高値73.0、安値64.0、8年には高値68.5、安値53.0、9年初めの高値は70.0円の水準であった。(T10野P428)「日ニ好況ヲ呈シ…目録マシク発展シテ未曾有ノ収入ヲ挙グルニ至」(12回営)り、播鉄株主の期待、株価の急騰を背景に伊藤専務は持ち前の強気の経営に転じたものと思われる。『帝国鉄道発達史』は伊藤の全盛時代の播鉄を「堂々たる屈指の大会社」として次のように紹介している。

「播州鉄道株式会社 兵庫県加古郡加古川町同社明治四十四年五月の創立に係るところにして、当社は規模左程大ならざる一地方鉄道に過ぎりしが、商工業の中心地力る関西地方の殷盛に伴はれ同社亦著しき隆盛の域に進み今や実に五百万円の巨資を擁し地方私設鉄道中堂々たる屈指の大会社たるに至れり。今聊か同社の近況を概叙せんに(一)哩数 開業の分参十九哩九分に及び、目下建設中に属する分約参十哩あり、(二)車両は孰れも最新式のものを使用し、機関車六両、客車二十七両、貨車二百二両、自動車六両を有し、日々本支線間七十数回運転し、貨客運転の便に任しつつあり。(三)営業収入は、一日平均二千二百七十六円余、此一哩当り平均は五十七円余なり。(四)営業費は、一日平均七百八十四円余、此一哩当り平均十九円強に当る。而して予て新設中なりし中、西脇、市原間は既に大正十年四月竣功し同年五月より営業を開始し其他建設中のもの着々工事進行中にあれば之等全部竣功の暁は同社の一大活躍は期して俟つべく一日一哩収入金一百円突破を現実すべきは信して疑はざるところなり。現同社重役を列举すれば取締役社長は関西実業界の重鎮たる伊藤英一氏にして、取締役藤井忠兵衛、同岸本長司、同加島安治郎、同畑吉平、監査役末正久左衛門、同細田藤弥の諸氏にして孰れも現時関西経済界の代表的士なり。<sup>59)</sup>」

注1) 8) 『加古川市史』6巻上、史料編・、P282

- 注2) M28.11、神戸市～国包～小野～社～阪鶴鉄道谷川駅31哩、発起人総代瓜島福松、資本金100万円
- 注3) M28.11、神戸～三木～小野～社～新町～谷川～柏原45哩、発起人総代蓬萊宗兵衛
- 注4) M29.8、高砂～谷川～福知山50哩、発起人総代建野郷三、松本亀太郎、資本金200万円)
- 注5) 鉄道省編『日本鉄道史』中巻、T10、P703
- 注6) 西村真太郎は加東郡下東条村、M27第3回選挙で代議士当選、神栄監、社銀行頭取、西丹貯蓄銀行取、播磨鉄道発起人・取締役500株、T9社自動車運輸を設立。(前掲『新修加東郡誌』P651)西村隆次の実兄
- 注7) M40.5頃「明治三十九年一月以降軌道許可処分未済表」内務省、前掲『原敬関係文書』8巻P500
- 注9) 才賀藤吉は40.11明石電灯取締役就任、43.12からT3.10まで明石電灯社長
- 注10) 太田保太郎はM25開業の神戸の弁護士で市議、市会議長、神戸電気、兵電等の顧問(前掲『兵庫県人物列伝』P109)、神戸商品取引所監査役、M43兵電監査役、T7.6.4兵電監査役辞任
- 注11) 代議士の名は『兵庫県管内紳士録』P104、当選年次は『近畿大観』T4、P107で補充
- 注12) 『姫路市七郡実業家案内 完』T2、P125
- 注13) 14) 19) 22) 『原敬関係文書』日本放送出版協会、1987、8巻、P499
- 注15) 宮本源之助編『明治運輸史』、T2、運輸日報社、軌道P182
- 注16) 三十八銀行『五十年誌』S3、P25、P42。駒井巷はM34は三十八神戸支店長、37.1.18三十八取締役就任、T5神戸信託取締役就任
- 注17) 18) 31) 41) 前掲『兵庫県人物史』P339、232、99
- 注20) 兵庫～姫路間37哩60鎖、資本金155万円、40.2.8内務省受付
- 注21) 明石町～国衙村間27哩16鎖、資本金350万円、40.2.8内務省受付
- 注23) 伊藤俊介はM25の第2回選挙で代議士当選、堀豊彦はM23の第1回選挙で代議士当選(『近畿大観』T4、P107)



- 注24) 秋山忠直は日本商業銀行常務、第三銀行、日本毛織役員、神戸電気専務1500株、兵電発起人・取締役（T 7.6.4 兵電取締役辞任）（丹羽錠三郎『銀行会社と其幹部』T 6、P 176）
- 注25) 範多龍太郎はイー・エッチ・ハンターの子、大阪鉄工所主で、本務の繁忙を理由に「他の事業会社に関係しない」（前掲『兵庫県人物史』P 296）としていた人物だけに、よほど播磨電鉄を有望視したものと見られる。
- 注26) 『鉄道電気事業要覧』T 3、鉄道通信社、軌鉄P 168
- 注27) 28) 29) 『鉄道院年報』軌道之部、M41 P 9、M42 P 83、M43 P 167
- 注30) 『明石市史下巻』S 45、P 281
- 注32) 前掲『兵庫県管内紳士録』P 162
- 注33) 「播磨鉄道株式会社起業目論見書」M28.12.27「仮免状関係書」文、播磨鉄道。丸岡は多可郡中村の製糸場持主
- 注34) 前掲『滝野町史 本文編』、P 759
- 注35) 51) 53) 54) 前掲『新修加東郡誌』P 644、649
- 注36) 『帝国鉄道要鑑』4版、T 6、軽鉄P 161
- 注37) 主要メンバーの的場淑彦（大阪市南本町、播鉄取締役300株主、湖南取締役130株主、T 2.8 辞任）は関係した湖南鉄道では「大阪に於てモスリン問屋を業とし、表面、如何にも立派なる紳商を装ひ居れるも昨年の暮、一大蹉跌を来したる結果、金融の途絶へ爾来殆んど首も廻らぬ羽目に陥り、其の窮状見るに忍びざるものあり」（T 2.7.20近江新報）と批評された。同じく秋山恕卿（愛知県出身、兵庫県魚崎、兵庫県事務官、山口県知事、退官後、兵庫倉庫、湊川改修、神戸魚鳥青物定市場、神戸電気鉄道取締役、明石鉄道発起人総代・社長、兵電発起人相談役200株、播鉄各社長200株主、湖南取締役100株主、T 2.3 辞任）も「多くの会社に関係を結びて純然たる会社屋」（前掲『神戸権勢史』P 287）で、的場淑彦と「同様の経歴を有する人物なり」（T 2.7.20近江新報）と見られた。川端浅吉（兵庫県御影、播鉄専務380株主、湖南監査役100株主、T 2.5 辞任）は福岡県出身で南清の下で鉄道工務所員の後、各地の新設鉄道に次々と関与し、信楽鉄道社長、石三軽便鉄道監査役、東肥鉄道取締役等に就任、その他信貴山鋼索鉄道、摩耶山ケー

ブル鉄道等各地の免許を出願するなど、非定住型の鉄道資本家として終始した。

湖南鉄道でも「一人にて五百株を有する大阪の富豪」(T 2. 7. 23滋賀日報) 戸田猶七(大阪市東区安土町、洋反物商・舶来織物商・戸田猶七商店主、摂津紡績、大阪電灯、硫酸肥料、天満織物各取締役863株、紡績用品、播鉄各監査役500株)は「今日の重役にして依然、経営の任に当り居れる間は断じて残余の株金を払込まざるべしと揚言し、只管同社の改革を翹望」(T 2. 7. 23滋賀日報)するものと、反重役の立場に立っていた。なお播鉄庶務課長田中清行(または湖南鉄道の「創立当時より同会社に勤務」(T 3. 1. 20滋賀日報)してきた田中営業課長も同一人物の可能性もあろう。

注38) 39) 43) 山内清溪『兵庫県人物列伝』T 3、P 158

注40) 河野天瑞(たかのふ、工学士、大阪市東区北浜4丁目)は安政5年兵庫県林田村に生まれ、兵庫県士族、藩校敬業館、神奈川県立修文館を経て、M16工部大学校土木工学科卒、工部省鉄道局技手をふりだしに、20年日本土木の技師・呉出張所長、奈良鉄道技師長、北陸鉄道技師長、四国鉄道技部師長、伊賀鉄道技術部監督など、各鉄道会社の顧問技師等を歴任したが、34年住友家に招聘され、39年現在では住友別子鉱業所設計部員(国3版職P 67)として、別子鉱業所の設備の土木を担当していたが、「四十年に至り、辞して大阪に來り、再び工業事務所の事務に執掌」(前掲『兵庫県人物史』P 99)した。播鉄の発起人になった時期には大阪河野工業事務所(大阪市東区北浜四丁目)の代表者として湖南鉄道、能勢電気軌道(加藤木重教『日本電気事業発達史』T 5、電友社、P 584)等各地の私鉄や企業団体から線路実測、土木工事の設計監督を囑託されていた。その後も住友鉱業所技術顧問(日本交通協会『鉄道先人録』、S 47、P 158)のほか、肥前電気鉄道の顧問技師など各地の鉄道、電灯・電鉄等の土木・建設・設計に関与した。(『日本電業者一覽』M 45、P 350) T 5は石田治、石田美喜藏ら石田一族とともに4. 10創立間もない安全索道商会の取締役(帝T 5職員録P 90)に名を連ね、(株T 5には該当なし)、11年時点では小松島水力電気(T 8. 10設立)の取締役(T 11銀、徳島P 5)であったが、T 14. 3. 11病没した。播鉄300株主の河野ち

せも河野天瑞の関係者であらう。

注42) 川島捨太郎(兵庫、播鉄事務長100株主、湖南取締役、T2.5辞任)は南五個荘村出身、湖南鉄道発起人総代取締役250株。湖南鉄道では「五個荘の出身なるも播州鉄道を喰ひつめたる落武者にて一会社の経営を托するに足るべき信用乏し」(T2.7.20近江新報)と批評された。

注44) T2.7.20「近江新報」

注45) 播州鉄道と同様に河野、川端らの関与した事例として湖南鉄道のケースは拙稿「近江商人系金融機関の地元還元投融资—藤井善助による琵琶湖鉄道汽船の統合と解体—」『史料館研究紀要』28号、H7.3参照

注46) 近江商人博物館図録『藤井善助と有鄰館』H11.9、P42所収の「訓示案」

注47) 鹿島秀麿は洲本(徳島藩)の医師・大村純道の次男として、嘉永5年、父の赴任地である甲賀郡水口で生まれ、同じ徳島藩医・鹿島家の養子となり、徳島藩に出仕、M12淡路汽船を社主として創設、13年淡路共立舎を創設、同年神戸新報を発刊、主幹として活躍、17年神戸新報は神戸又新日報に吸収合併されたため政界に転じ17年県議、21年県会副議長を経て23年第1回選挙で衆議院議員当選。(前掲『兵庫県人物史』P261、前掲『神戸財界開拓者伝』P554) M29の第7回全国鉄道懇話会では「日本銀行の担保品中に各既設鉄道会社の株券を加ふるべし」(『鉄道雑誌』26号、M29、P34)との建議を本会より出すべきだと主張した。

注48) 前掲『明治運輸史』軌道P183

注49) 50) 前掲『日本鉄道史』下巻、P44

注52) 玉岡松一郎編著『写真集明治大正昭和加古川』S55、P28(原典は『加古川町誌』)

注55) 梅鉢鉄工場は堺の車両製造業者梅鉢安太郎の経営で、後の梅鉢車両。梅鉢安太郎及び田那作三は播鉄グループの役員に就任した。播鉄ではたとえば4年「第二号機関車ハ…禿タル為九月十六日車輪ヲ堺市梅鉢鉄工場ニ回送修理中」(播鉄9回営P6)など、日常的に利用していた。

注56) 勸銀『創業二十年誌』T6.P100

注57) 五島慶太の回想に基づく伝記によればメイン格の勸銀は「三社の株式」(前

掲『五島慶太伝』P222) すなわち飾磨造船、安来製鉄、鬼怒川水力電気の株式を担保に入れていたことになっているが、飾磨造船、安来製鉄は五島の記憶違いではなからうか? 「飾磨造船」がもし播磨造船所のこととすれば、伊藤家の番頭・坪田十郎がM45以降監査役を兼務したものの、T5.4 鈴木商店が買収しており、「安来製鉄」正しくは安来製鋼所(島根県能義郡安来町)にも英一関係と目される人物はT9.3の株価暴落の寸前においても登場しない。(T8野P630、T9銀P5)両社の業種に近いグループ企業としては神戸造船所、伊藤製鉄ということになるが、規模的には比較にならず、勧銀の担保とも思われない。ただし伊藤製鉄は「遠くは備中新見町に於て近く作業を開始せんとする」(異P94)点で安来製鋼所と混同されやすい方向性を有している。

注58) 畑昌愷は印南郡上荘村ノ内国包村、播鉄80株主、醬油醸造業、所得税406円(『大日本商工録』S5、P176)、農工信託、播磨メリヤス各取締役、播州倉庫監査役。M45.5には播鉄架橋位置変更就きに就き、国包村176名を代表して播鉄「会社ハ頑乎トシテ建設費ノ減差而已ヲ主張」するとして「一営利会社ノ強圧」(『加古川市史』6巻、P414所収)を厳しく非難する内容の陳情書を内務大臣宛提出した人物。畑も当該『第九回』営をわざわざ保存していた。(著者所蔵の国包村畑旧蔵資料)

注59) 杉謙三編『帝国鉄道発達史』T11、巻末P35

## 第3章 播州鉄道系列の育成

### I. 系列会社集団の育成

播鉄の有価証券勘定の推移は大正4年9月期には僅かに「請負保証金代用証券」50円のみ（9回営P8）であったが、以下に述べる多角化路線によって、逐年激増し、7年9月期295.4万円、8年3月期333.1万円にも達して鉄道省は「播鉄カ從來多大ノ株式ヲ所有シ居ルハ既ニ穩当ヲ欠ク」と認識するようになった。4年4月30日の第8回播鉄総会で従来の娯楽機関業、土地家屋業に加えて、「前項<sup>1)</sup>＝輕便鉄道ヲ敷設シ一般運輸ノ業」ノ付帶事業トシテ娯楽機関ノ経営及土地家屋ノ売買又ハ賃貸営業、倉庫業ノ経営、運送業ノ経営、電気事業ノ経営、貨物担保ノ立替金、肥料製造販売、化学工業及ヒ其製品販売、紡績並ニ織布業、製紙業、鉱物、石材、土砂、バラスノ採取販売営業ヲナスコトヲ得」を内容とする「定款変更並ニ追加ノ件」（9回営）を決議し、同年5月12日内閣総理大臣に届け出て、関係企業の設立・買収に積極的に乗り出した。例えば播鉄は4年営業目的に「倉庫業の経営、貨物担保の立替金及石材肥料バラス土砂の採取販売営業」を追加し、5年5月14日内閣総理大臣宛兼業認可を申請、8月26日兵庫県知事宛、肥料製造営業免許と肥料製造工場新設を申請している。（11回営）県知事への申請と同時に「加里沃度明礬製造販売」（T13帝P41）を目的とする加古川化学工業が資本金10万円で本社加古川町ノ内篠原町14-2に設立され、社長荒木卓三郎、専務武田常三<sup>2)</sup>郎、取締役曾根正命、伊藤孝次、監査役谷啓二、尾崎寅治（T8帝P45）であった。このように播州鉄道が「沿線ノ出貨奨励」を名目にして、兼業認可を申請する一方で、実際に現業を担当する会社が播鉄本社内に播鉄等の出資で設立され、播鉄等の関係者が役員を兼ねるとというのが、この時期の播州鉄道による多角経営のパターンであったと考えられる。播鉄の経営好転を支えた播鉄系列の事業会社育成の一例として大門ヴェルベット、播州石材、浪速信託、関西土地信託をあげておこう。

## 1. 大門ヴェルベット

同社は綿織ヴェルベットの製造を目的として7年10月、播州織の本場でもある加東郡河合村河合中に資本金100万円（8年時点で払込25万円）で設立された。8年5月創業、河合村所在工場の職工数男17、女64、原動力瓦、数1、実馬力3.5馬力であった。役員は取締役上田幸次郎、伊藤孝次、石井徳次（東播銀行監査役）、土肥信太郎（西脇商業、小田、第五十六各銀行取締役）、蓬萊宗兵衛<sup>5)</sup>、稲岡幸八郎、監査役志方清一郎、佐伯音次郎、藤井潔（小田銀行頭取）であった。（T8帝P56）英一の長男伊藤孝次が取締役に参加しているものの、英一自身は前面には出ず、同社役員の多くは播鉄沿線地主であり、播鉄とも取引ある地元銀行の重役であり、おそらく大門ヴェルベットの払込資金を融資する銀行の重役でもあったと考えられる。全国有数の大地主たる伊藤本家の信用と、沿線一の大企業・播鉄が親会社として控えていることから、地域の産業振興につながり、播鉄の貨物出荷にも貢献するので、こうした播鉄沿線への工場進出は大いに歓迎されたものと思われる。8年9月時点の大株主は①播鉄が総株数2万株の50%10500株、②伊藤孝次5000、③尾崎寅次1500、④英一1000、④日本綿布1000株と、英一系5株主で92.5%を占めた。（T9銀、P41）残りは同社役員となった地元銀行家等で分担したものと思われる。創業して間もない8年9月期の決算で当期利益14,386円をあげ、8%配当と好景気に支えられ滑出しは順調であった。このような形で播鉄を隠れ養とした英一の事業展開は好業績である以上、伊藤本家としても取り立てて反対し難い性格のものといえよう。10年時点で払込25万円、社長蓬萊宗兵衛、取締役伊藤孝次、石井徳次、土肥信太郎、監査役佐伯音次郎、藤井潔、志方清一郎であった。（T10銀P34）

## 2. 播州石材（山陽砂利）

播州石材は7年11月資本金30万円（内払込7.5万円）で加古川町の内篠原町31に設立された。（T9銀P21）本社の位置が播鉄本社に近接している上に、役員に播鉄・英一系の人物多数が加わっているところから、播鉄沿線の貨物誘致目的で、「播鉄の副業として石材、煉瓦の両会社」（異P93）を起こしたとされる「播鉄の副業として」の石材会社のことであろう。役員は取締役河野岩吉、伊藤孝次、黒

田辛五（龍電取締役）、松本増吉（長谷川商會社長）、松井希介、監査役稲岡猪之助（播鉄支配人）、船津吉太郎（後述）、前田達次（後述）であった。（T8帝P23）注目されるのは船津、前田の住所がともに長次郎の伊保村（T10諸P614）となっている点で、特に船津は伊藤家農會幹事長、郡市農會印南郡代表者、保証責任伊藤小作人信用組合の所員から9年5月「理事一名欠員に付印南郡伊保村中筋九十番屋敷 船津吉太郎新任」（T9.5.14登）となっており、先代の長次郎が「播州米の頗る釀酒の原料と為すに適するを見<sup>7)</sup>」て、伊保村に設立し自ら社長（M28諸P202）となった直系企業たる伊保酒造の専務を務めるなど、先代の側近ないし、伊藤本家のいわば執事的存在であった人物と考えられる。船津と同格の播州石材監査役で伊保村今市52番屋敷に住む前田も家業等不明ながら船津と同様に伊藤家の執事的存在と考えると、破綻寸前ないし整理中の英一系企業に関してあえて役員となった不可解な経歴も<sup>9)</sup>理解し得る。伊藤本家が船津、前田らを播州石材監査役として派遣（あるいは黙認）していた事実は、こうした「沿線ノ出貨奨励」を大義名分とする播鉄子会社設立に伊藤本家が実弟の長蔵系への場合ほど積極的ではないにもせよ、汲々ながらも一応了解（少なくとも黙認）していたことをうかがわせる。あるいは少なくとも播州石材が設立された7年11月頃までは、こうした伊藤本家と播鉄・英一系の企業との人的接点が、長次郎と英一とが（端目には）仲良く取締役を勤める農銀以外にも少数ながらも存在していたことの証明ともなろう。しかし船津も播州石材監査役以外には播鉄・英一系の企業の兼務は見当たらず、広く伊藤本家の利害を代表するお目付役として睨みを利かしていたという印象は薄い。

後に鉄道省から不審に思われるほど、播鉄本体が無理に兼業する形態を併用してまで、わざわざ「全然鉄道ト関係ナキ株式ヲ所有」した、播鉄特有の、一見不自然な多角化形態にこだわった理由は、その方が三十八銀行からの資金調達も可能であり、多角化・英一の兼務について、播鉄の「出貨奨励」のためとして長次郎の理解も得やすかったためと考えられる。朝日新聞に「成績良好、賽先頗る良し」（異P93）と褒められた「播鉄の副業として石材、煉瓦の両会社」であったが、8年頃には11%配当を行った播州煉瓦も「大正十一年六月十五日定時株主總會ニ於テ当社解散ノ決議」（T11.7.13K）し、清算人稲岡猪之助、野喜治良の2名を

選任した。

一方の播州石材も12年3月31日現在で播鉄に対して39,863円もの貸付金があり、新会社の播丹に継承された<sup>10)</sup>。播鉄が「成績良好」な播州石材から、同社規模からして極めて多額の資金を資金繰りに窮した親会社の権限で、いわば搾取していたものと考えられる。こうした資金負担のためかは不明だが、10年前後には何らかの事情で山陽砂利に改称したと見られ(T11銀P55)、11年12月21日総会で本店を高砂町次郎助町1576へ移転、砂利採取、土木建築請負業を廃止を決議した(T12.1.4登、T12.1.21Y) 山陽商事や、前田達次が14年頃から監査役を兼務した山陽興業との系譜的連続性は未詳ながら、播鉄、播電、加古川製紙と同様に酒井傘下での再建・整理を余儀なくされたものと推測される。

### 3. 浪速信託

同社は7年5月「資金運用等一般信託業及鉱業貨物の運送並に倉庫保管業」(T8帝P111)を目的として、資本金300万円で大阪市東区北浜4-26に設立された。役員は社長山本辰五郎、常務広部正三、納富陳平(播鉄監査役、加古川製紙取締役)、鈴木重隆、近藤喜禄、八木千之助<sup>12)</sup>、取締役・支配人松井新次郎、監査役増山忠次、末正盛治<sup>13)</sup>、西村禎一郎であった。(T8帝P111) 8年時点では社長は本郷寅藏に交替していた。(T9銀P77、諸T8)当初は総株数60000株のうち播鉄が30000株(50.0%)を所有する子会社として位置付けられたが、大阪に本店を置き、一般信託業を主目的にする浪速信託はどう見ても「全然鉄道ト関係ナキ株式」<sup>14)</sup>の典型と判断された。このため「本業タル鉄道ノ基礎ヲ危クスル虞ナシトセス。大正八年三月三十一日迄ニ之カ整理ヲ為スコト」<sup>15)</sup>との鉄道省の強い指導により、渋々「当会社所有ニ係ル有価証券…ハ本期中ニ全部整理ヲ了シ」<sup>16)</sup>た結果、播鉄の持株分散後の8年12月末時点の大株主は①英一が17,900株29.8%、②末正繁太郎(2-表8)5000株8.3%、③伊藤孝次3000株5%、④末正盛治3000株5%、⑤武田常三郎2700株、以上の上位5株主で30,700株51.2%と播鉄所有分30000株を英一と、その緊密なパートナーたる末正兄弟の連合でほぼ継承し、完全に支配していた。残り35株主で29,300株(@837株、1.4%)を占めた。(T9銀P77)

8年6月末現在の借入金2,920,673円、支払手形30,000円、信託預金28,197円、



土地家屋什器547,111円、有価証券33,155,194円、貸付金44,049円、預け金及現金9,735円（T 8 帝 P 111）8 年12月期決算では借入金341万円、支払手形26万円、信託預金12万円等で調達した資金を、土地家屋24万円、有価証券325万円、貸付金53万円、丸山土地部30万円等に運用している。（T 9 銀 P 77）この浪速信託1社の借入金341万円だけで播丹鉄道（新社）が播鉄（旧社）から引受けた債務金額（367万2529円75銭8厘）にほぼ相当する金額に達している。浪速信託の持株としては播鉄1582株（播鉄21回営）、T 8.11鬼怒川水電41,490株などであり、英一の播鉄支配や株価吊上げ、さらに英一の乗取り工作の実働部隊として機能したものと見られる。八木千之助や彼の海外貿易が播水の債権者・大株主、鬼怒電株主等として登場する背景は浪速信託での因縁によるものであろう。なお昭和5年では酒井一派の土井高一郎が相談役に就任している<sup>17)</sup>。

#### 4. 関西土地信託（関西土地興業）

同社は7年3月信託業、とりわけ「船舶所有売買貸借紹介並に抵当貸付」（T 8 帝 P 50）を目的として資本金200万円（うち50万円払込）で神戸市元町通7丁目に設立された。8年末では積立金27,000円、利益68,488円、配当8%、株主人員22名、常務役員7、使用人3名の規模であった<sup>18)</sup>。8年時点での役員は社長末正繁太郎、専務青木雷三郎<sup>19)</sup>、常務有竹直次郎<sup>20)</sup>、取締役藤野正年、本岡武助（公債株式現物問屋）、土岐市太郎（神恵炭鉱取締役、帝国鉄工監査役）、監査役草鹿甲子太郎<sup>21)</sup>、安達譲（銀行員）であった。（T 8 帝 P 50、諸 T 8）当初は総株数40000株のうち、播鉄が30000株（75.0%）を所有する完全な播鉄直系会社であったが、播鉄役員で大株主は末正一人で、他は播鉄とはほとんど無関係な人物が役員となっていることから、播鉄との関連は稀薄で浪速信託と同様に「全然鉄道ト関係ナキ株式」あろう。

「関西土地信託株式会社ノ改称」（T 14 帝 兵庫 P 48）したものが関西土地興業であり、その資本金200万円、うち50万円払込、本社神戸市元町通7丁目、積立金27,000円、利益68,488円、配当8%<sup>22)</sup>であった。13年時点で関西土地興業の取締役本郷寅蔵、杉田大一郎、松井新次郎、監査役住山鈴雄、14年時点で監査役森本駿<sup>23)</sup>、昭和2年時点で資本金200万円、払込200万円、なお関西土地興業は土井高一郎が相

談役になっているなど、酒井栄蔵との関係が深くなったと考えられる。こうした信託会社が播鉄系列として、ほぼ同時（7年3月と5月）に複数設立された理由がよく分からないが、浪速信託は大阪で資金運用、関西土地信託は神戸で船舶関係と土地経営という具合にエリアと得意分野を棲み分けていたようだ。また浪速信託は播鉄株を1582株所有（播鉄21回営）、8年から関西土地信託も神戸信託の大株主<sup>24)</sup>となり、9年12月期（関西土地信託）から昭和2年11月期（関西土地興業）にかけて神戸信託の1780株主で、藤尾幸一、小寺又吉、川口木七郎、木村宇一郎に次ぎ第5位の大株主（T9銀P55）となるなど、グループ企業の持株会社機能をも分担していた。また浪速信託の総借入金は8年12月期3,411,317円（T8/6期2,920,673円に比し490,644円増加）と、増田BB<sup>25)</sup>ほかから每期積極的に資金調達し、グループ企業の資金調達窓口となっていた。一方の関西土地信託も「不動産の売買並に金銭の貸借紹介…に処し…確實と認むるものに対する債務保証を為す<sup>26)</sup>」ことを行っており、例えば「関西土地信託株式会社ノ改称」（T14帝兵庫P48）した関西土地興業は9年「六月十九日該手形の付箋に依り同会社く＝長次郎の弟・長蔵系の伊藤企業」の手形債務の保証を為した」（S2.3.〇、P88）こと、同じく播水から13年の競売時に「金庫代」という名目で250円を受け取っていること等が判明している。このように浪速信託、関西土地信託等はグループ企業の各種ファイナンスに様々な形で関わり、中核企業が規制の強い鉄道会社であって、グループ企業に有力な銀行を欠くというグループの欠点をカバーしていたと見られる。なお昭和5年時点では播丹鉄道取締役・播電鉄道社長の土井高一郎が浪速信託、関西土地興業等の相談役も兼ねており、播鉄・播電の再建を引受けた特殊な資本家グループの影響下にあったことをうかがわせる。

## 5. 伊藤鉄工所

播鉄の「一日一哩の費用が実に僅々十三円と云ふ日本第一の安上り」（異P93）なことを自慢していた英一は加古川「駅ニ於テハ追々修繕工場ヲ設備…スルノ見込<sup>28)</sup>」を大正5年から立て、6年10月20日の総会で「造船業ノ経営、鉄工業ノ経営」兼営を決議するなど、播鉄の「経費節約の爲めには随分思ひ切った処置も取った」（異P93）と言われる。7年2月設立の伊藤鉄工所は「機関車及車両等一般ノ鉄

道用品並ニ織布機械及其付属品ノ製造修繕其他一般ノ鉄工業及輸出入金物ノ売買」(T 8 帝 P 10) を目的とする鉄道用品製造業者で、資本金100万円、うち45万円払込、総株数20000のうち播鉄が6000株 (30.0%) を所有した。本社大阪市西区島町、分工場を播鉄のある加古川に置き、主に関係鉄道の保有する「貨車、汽関車<sup>29)</sup>及客車改造」を行ったと考えられる。「彼の事業としては…大阪伊藤鉄工所<sup>30)</sup>…がある」(異 P 94)、職工数男39、女1、原動力他、数2、実馬力10.5馬力 8 年時点では取締役伊藤孝次、稲岡猪之助、西村安太郎、監査役末正盛治、武田常三郎、支配人栄国義策であった。(T 8 帝 P 10) なお英一は 9 年時点で播鉄沿線の加西郡北条町の電灯会社である中播電気 (T 2 年 8 月設立、資本金50万円) の2800株 (28%) をも有する圧倒的な筆頭株主 (T 9 銀 P 32) となっているが、役員 (監査役に藤井忠兵衛ら) には名がなく、播鉄の沿線開発の狙いを込めた出資でもあろうか。

## II. 播州鉄道所有株式に対する整理命令

鉄道省は播鉄の所有株式が券面額5,481,050円にも達するほど膨脹している状況を憂慮し、種々調査をはじめた。播鉄から提出させた「有価証券内訳表」に基づき、7 年10月発行の『帝国銀行会社要録』(帝国興信所)、6 年 5 月発行の『銀行会社要録』(東京興信所) で各社の概要を把握して、「播州鉄道株式会社所有株式調」を作成した。そしてこの一連の調査に伴い 7 年12月20日「諭示シタキ儀アリ当局ニ出頭アリタシ返待ツ」との院電による電報を発信し、急遽出頭した伊藤専務に対して、7 年12月21日付監督局長名で「現在会社ノ所有スル有価証券ハ約三百万円ノ巨額ニ達セリ。右ハ沿線ノ出貨奨励ト見ルヘキモノモナシトセサルモ、全然鉄道ト関係ナキ株式ヲ所有セルハ本業タル鉄道ノ基礎ヲ危クスル虞ナシトセス。大正八年三月三十一日迄ニ之カ整理ヲ為スコト」(文、播鉄) との強硬な通達書を播鉄専務伊藤英一宛交付した。そして「其ノ反省ヲ促シ、若シ之ニ応セサルトキハ已ムナク事件ヲ検事局ニ移條スルコト」まで覚悟し、監督局長から神戸地方裁判所検事正宛<sup>31)</sup>の通條案まで用意した。さらに 8 年 3 月28日付監督局長名で播鉄専務伊藤英一宛「予テ当局へ御出頭願ヒ、御話申上シ播州鉄道株式会社会計整理ノ期限ハ本月末日ニ差迫リ候處、其後如何ニ御取運相成候哉、何レ公式御回

答可有之トハ存候ヘトモ、御内意相伺度…」と私信を送付、返事がないので、「三ツキ二八ヒフミニテシャウカイノケンイソギ ヘンセヨ」と電報で催促した。この時点では確たる整理案は結局提出されなかったようである。そこで8年9月27日付監督局長名で播鉄社長宛「貴社会計整理ニ関シ客年十二月御示致候件ハ如何ニ進捗相成居候哉、其後漸次整理セラレツツアルモノトハ存候得共、所有株式ニ付テハ地方鉄道会計規程付則第三項ニ依り、大正九年二月十四日迄ニ許可申請ヲ為スコトヲ要シ候義ニ有之。勿論積立金利用ノ為ニスル程度ニ於テ有価証券ヲ所有スルコトハ許可可相成見込ニ候得共、特種ノ事由ナキ限り此ノ制限ヲ超過シテ有価証券ヲ所有スルコトハ許容難相成コトト存候ニ付、至急整理方法攻究相成度。尚今日迄已ニ実行セラレタル整理ノ状況承知致度候条、九月三十日現在ニ於ケル有価証券ノ内訳及未整理ノ分ニ対シ将来ノ計画相立チ居候ハハ詳細申出相成度」(文、播鉄)と親展で督促した。(整理の実行結果は第5章参照)

注1) 従来から娯楽機関業には日向台遊園、滝野遊園地、高砂海水浴場等があった。日向台遊園は2.4.1日開通当初からの付帯事業で、開通当時の播鉄の沿道名所地の案内にも「日向台温泉 同山麓にあり、播鉄の経営せるもの」(T2.4.Ep340)と記載がある。私鉄経営の遊園地は拙稿「我国における観光・遊園施設の発達と私鉄多角経営の端緒—私鉄資本による遊園地創設を中心に—」『鉄道史学』13号、H6.12参照

注2) 武田常三郎は加古川の米穀商(『日韓商工人名録上』p79)、播州物産社長、加古川化学工業専務、加古川製紙、加古川興業各取締役、浪速信託2700株主、T8では兵庫、播鉄80株、兵電357株、鬼怒電890株、大正汽船750株、川崎造船所60株、計2137株(『株主要覧』T8中p171)

注3) 農商務省編『会社通覧』T8年末調査、p281

注4) 上田幸次郎は加古郡平岡村、大地主、西伊藤銀行取締役。10.10.30播鉄株主総会で英賀福蔵とともに土地家屋業に関し質問した(T10.10.30播鉄21回決)

注5) 蓬萊宗兵衛は大門村の大地主、東播銀行設立、蓬萊三郎、林太郎も播鉄100株主

- 注6) 前掲『兵庫県管内紳士録』付P10～11
- 注7) 前掲『伊藤長次郎伝』P15
- 注8) T9『全国株主要覧』、T14『帝国信用録』帝国興信所、T15『全国株主年鑑』なし
- 注9) 前田達次は11.10.30播水取締役就任(T11.11.14登、T11.11.21Y)、14年時点では酒井傘下の加古川製紙取締役、山陽興業監査役(T14帝P187)、S2は加古川製紙取締役(S2銀P49)
- 注10) 播鉄、播丹間のT12.4.21付「覚書」
- 注11) 山陽興業は加古川製紙と同様に酒井傘下にあると見られ、本社所在地は金融業者の阪神商事の本社内
- 注12) 八木千之助は奈良の酒造業、マニラ麻取引の海外貿易社長、浪速信託、日本海上各取締役、不二興業監(『大衆人事録』3版、S5、P2)播水債権者、播水旧2000株主として総会に出席、無配当とする修正動議を提出し可決させた。(T10.10.31決)
- 注13) 末正盛治は「神戸市西部に於ける累代の名望家…宗伝の豪農」(前掲『兵庫県人物列伝』P547)末正久左衛門(湊西銀行代表取締役、大地主)の次男、「末正一門の柱石たるべき人物」(前掲『兵庫県人名鑑』P225)で「伊藤氏と姻戚関係に在る」(T11.12.1K)と言われた。湊西銀行専務、神戸発動機製作所社長、末正合資無限責任社員、神取監査役等のほか英一の友人として篠山軽便鉄道、篠山電灯各社長、兵電、神戸造船所、播州倉庫、農工信託各取締役、日本綿布、伊藤鉄工所、浪速信託各監査役など多数の伊藤系役員に就任、破綻後の英一を支援する会にも加わった。
- 注14) 15) T7.12.21付播鉄専務伊藤英一宛監督局長名通達書、文、播鉄
- 注16) T8.9.30付監督局長宛播鉄伊藤専務回答書、文、播鉄
- 注17) 27) 『大衆人事録』第三版、S5、P10
- 注18) 22) 30) 前掲『会社通覧』P391、678
- 注19) 青木雷三郎は弁護士、関西土地信託専務、北大阪電気鉄道、伊藤製鉄、加古川製紙各取締役、播鉄10株主、播丹創立総会でも詮衡委員・検査役
- 注20) 藤野正年は明治4年愛媛県生れ、会社役員、高倉藤平の下で大阪堂島米穀

取引所理事、有隣生命、浪速火災各取締役を経て、日本製麻常務、日本化学製麻、関西土地信託、日本染色、杉浦鉄工所各取締役、日本冷蔵舎密、原安商会監査役で、増田信一（増田ビルブローカー銀行頭取）が大正4年6月26日鬼怒電監査役を辞任した際に同社取締役に就任

注21) 草鹿甲子太郎はM25開業の弁護士で、M36の第8回選挙で「政友会から推され代議士となって」（異P145）、M39.10太田派として播磨電気鉄道発起人（M39.10.17R）、神戸銀行、兵電、明石電灯、関西土地信託、協信洋行各監査役（T8帝職員録P394）、伊藤製鉄取締役（T8帝P16）、T8で兵電350株、明石電灯200株、日本毛織138株、計688株（T9株中P424）を所有、英一系企業の重役就任はもとより、超多忙の中兵電から「募集したる写真並に都々逸を選するに方って…審査員まで担がる」（異P145）ほど英一と親しい関係であったと考えられる。

注23) 前掲『人事興信録』七版、もP44

注24) 麻島昭一「神戸所在の諸信託会社」『信託』復刊54号、P65、70

注25) 日本銀行大阪支店「増田ビルブローカー銀行整理顛末」T10.2（『日本金融史資料 昭和続編』付録第3巻、P265所収（以下単に「顛末」と略）

注26) 前掲『京阪神に於ける事業及人物』あP7

注28) T5.3.30付総理大臣宛播鉄駅建物変更工事「理由書」、文、播鉄

注29) 『日本工業年鑑』T10、機械P1（沢井実氏のご教示による）。『工場通覧』T9現在、P678。なお商工省編『全国工場通覧』S6では「伊藤鉄工所 大阪市港区北境川町、開業年月日大、七、三、生産品目運搬車、代表者伊藤繁太郎」（P527）との同名企業が存在する。

注31) 神戸地方裁判所検事正宛の通條案（T7.12.21付、文、播鉄）では「播鉄重役一派」が龍電株を「一株二百円ノ割合ヲ以テ漸次…買取ニ要シタル資金約百二十万円ニ対シ七分ノ利息ヲ支払ヒ居ルカ故ニ播州鉄道株式会社八年額約五万四千円ノ損失ヲ蒙リツツアル筋合ナリ…普通株ノ如キハ總會ニ於テ僅カニ五円ノ時価シカナシト説明シ、減資ヲ決定シナカラ、増資実行後ニ於テ払込額ノ四倍ヲ以テ播州鉄道株式会社ハ之カ買取ニ着手シタル」行為が「刑法上背任罪ヲ構成スルモノト認ム」ものと解されたのであろう。

## 第4章 龍野電気鉄道、兵庫電気軌道等の乗取り

### I. 龍野電気鉄道、新宮軽便鉄道の乗取り

播鉄の再建に成功した英一は「彼は大に得意、『ヨシ！之ならば』と茲に初めて真剣のヘヴィーを掛け実業界に向って驀に猪突し始めた。則ち新宮電車の買収、笹く篠の誤り」山軽鉄の乗取り、遠く征しては高野電車を陥れ、鬼怒川水電を攻略」（異P93）したといわれる。「兵庫県の鉄道王」（異P89）、「山陽道の交通王」（明P9～11）と称されたように、播鉄「谷川線ノ延長ヲ企テ陰陽ノ連絡ヲ図リツツ」（13回営）も周辺私鉄の兵庫電気軌道、龍電、新宮軽便鉄道、篠山軽便鉄道等に関与した。そのほかにも、関与の程度は別として開業を控えていた兵庫県下の別府軽便鉄道（T10年9月3日開業）、赤穂鉄道（T10年4月14日開業）、出石鉄道（S4年7月21日開業）等にも一定の関係を有していたと考えられる<sup>1)</sup>。まず野口駅で接続する別府軽便鉄道とは5年頃から協議を開始し、開業する10年には「別府軽便鉄道株式会社ノ営業若クハ運転管理ノ受託ヲ為スノ件、但シ受託ニ関スル一切ノ権限ヲ取締役会ニ一任ス」（20回営）を決議した。10年上期には「本期未開業ノ別府軽鉄ハ当社ノ營養線トシテ逐日発展スルアリ」（21回営P3）と期待していた。なお播鉄取締役の三宅利平（加古川銀行取締役）が別府軽便鉄道取締役を兼務していた。また5～6年播鉄取締役の高橋健三（8年辞任後に北丹鉄道監査役）や、7～10年腹心の黒田辛五（表9）が赤穂鉄道取締役を相次いで兼務（T8帝P91）したので、英一が勢力圏内の赤穂鉄道にも関与した可能性がある。さらに腹心の森本駿（播水専務、伊藤商事取締役）が15年時点では出石鉄道相談役（T15銀P12）となっており、英一は出石鉄道にも多少とも関与した可能性があろう。

英一に乗取られた側の事情としては中央紙に突然「伊藤英一氏外一名に対し売却」（T6.2.1S）と速報され、事情に疎い地元関係者を困惑させた篠山軽便鉄道乗取りの場合を例にとると、同社現重役は「此の趨勢を以て終始せむか会社の破産消滅は蓋唯時期の問題なり、されば此の悲境を座するに忍びず」（T6.11.21

S)、「寧ろ此際大資本を有する適當の後繼者に全權を譲り渡し、線路延長等後事を充分託する」(T. 11.16S) しかないと考えて、「爾來陰に陽に播鉄社長伊藤英一氏一派と協議」(同) したとされる。一方同社の小株主側も「多額の負債あるため利益金の配当は猶遼遠ならん」(T 6. 5. 21S) と悲観して「割安にても持株を売却する方忽ち幾分の利を見る」(同) ため、「小株主中売却するもの多々あり」

(同) とほとんどは売逃げた。地元新聞の『篠山通報』も「乞ふ伊藤氏よ吾人は信賴す、将来本郡交通機関發達の為め大奮発あらん事を」(T 6. 11.16S) と「事業界の快傑にして財力家」(T 6. 11.21S) 英一に多大の期待を寄せている。しかし大幅な減資を余儀なくされる残留株主の中には「新株主たる他郡人の横暴」(T 6. 11.21S) により「新株主の餌食とせらるる」(同) と猛反発、株主総会は「大激論を醸し物情騒然たるものあり為めに會議は午後七時に至る迄長時間に亘りて討論戦を継続…近時稀に見るの活況を呈した」(同) のであった。しかし中小の残留株主や、現在のターミナル付近の商人達が「幾ら反対を叫んで見ても、重役やら其その他には疾の昔から画策が出来てあって、言はば爾後承諾の状態」(同) で、「三十株以上も持ったお陰で、幾末永く物笑ひの種を貽した」(同) ある株主は出資という形式ではなく「最初より寄付しておけば結局孫子の末まで名譽は残」(同) ったのにと悔む始末であった。

このように地元の根強い抵抗や反発をも撥ね除けてまで買収・乗取りに猛進したのは、「鉄道事業に対する関心が非常に強く、播州における民営鉄道網の完成をめざし<sup>2)</sup>」、「兵庫県<sup>2)</sup>の鉄道王」と呼ばれることを好んだ英一は機会があれば周辺私鉄を併吞しようと狙っていたと考えられる。播鉄の支線的な存在の別府輕便鉄道はともかく、他の兵庫県の中小私鉄はどのように考えても魅力的な投資対象とは思われず、せいぜい伊藤鉄工所の鉄道用車両の需要先になる程度で、結果としては英一にとってこうした中小私鉄まで抱え込むことで「兵庫県の鉄道王」と呼ばれて自己満足するしか効用がなかったのではないかと思われる。

## 1. 龍野電気鉄道

(1) 龍野電気鉄道 龍野電気鉄道(以下単に龍電と略)は明治42年開通の網干港を起点として、龍野を経て胄崎(神岡村)までの電気軌道で、明治39年12月設



[表一9] 龍野電気鉄道役員一覧（大正6年9月末）

専務	本岡武助	神戸米穀取引所仲買人、公債株式現物問屋・ビルブローカー業、新宮輕便鉄道社長、明石実業倉庫、関西土地信託、兵電、兵庫倉庫、篠鉄各取、T8で兵電300、六十五銀行405、明石電灯300、兵庫倉庫250、大阪電灯100、篠山鉄道515各株
取締役	伊藤英一	播鉄専務、播鉄4433、新鉄6680各株
"	梅鉢安太郎	諸器械製造業者・梅鉢鉄工場主、大阪高野鉄道、播鉄各取
"	黒田辛五	印南郡阿弥陀村、尾野商店、新宮輕便鉄道、赤穂鉄道取、播州物産、播州煉瓦、播州石材、神戸肥料各取、長谷川商会監、T8で兵電300、播州物産500各株
監査役	田那作三	堺市錦之町上、梅鉢と同時に役員就任した梅鉢関係者か、播鉄監
"	高見栄治	上荘村、国包銀行専、五成社監、播磨メリヤス、日本綿業各取、篠鉄319株

（資料）『帝国鉄道要鑑』大正7年、P43

立、資本金200万円、本社揖保郡斑鳩村であった。龍電創業者で社長の堀豊彦と英一は播州の資産家同士として、また私鉄の経営者同士として当然に面識・親交があったと考えられ、たとえば大正5年には私鉄経営者団体である私設鉄道同志会の有力メンバーとして、久須美東馬（越後鉄道）、藤井善助（大津電車軌道）ら私鉄各社のトップと連名で政府に対して私鉄への助成措置等を訴える請願書を提出している。こうした席で堀の方から、播鉄の業績を好転させて鼻息の荒い英一に対してなんらかの支援の働きかけがあったとしても不思議ではあるまい。また堀豊彦の兄の堀謙治郎は創立以来の兵庫県農工銀行取締役であり、農銀取締役の英一・長次郎との接点もあろう。

社長の堀からの要請なのか、大株主の矢野一派からの株式の引取依頼なのか、買収の経緯は未詳であるが、英一の主宰する播鉄は6年3月24日の臨時総会で正式に播鉄の高砂と龍電の網干駅とを直結する新線建設を定款に追加すること、「龍野電気鉄道株式会社又は株式を買収の件並びに其買収代金の支払は財団設定に因る借入金又は社債を募集する件」を決議した。（播鉄12回営）すなわち正式に龍電を播鉄の一支線と見做して、鉄道網に取込もうとする播鉄側の意思を明確にした。龍電でもほぼ同時に6年3月30日の臨時総会で「会社ノ財産全部並ニ水力電気ノ権利ヲ播州鉄道株式会社へ売却スル件」を決議した。

播鉄は龍電株式をT5下3200、T6上2558、T6下213と、順次買収し、その結

果T 6 上には累計5758、T 6 下5971と、何らかの事情による「買収不能の株」29を除き、総株数6000株の99.5%を買い占めた。龍電側の株主名簿上の播鉄持株5710株との差異48株は「他人ノ名義ト為シアルモノ」であった。かくして龍電ならびに隣接の新鉄はともに播鉄に完全に系列化され、播鉄系の役員多数が就任し、兵庫県でも「両会社ハ其名目ヲ異ニセルモ同一営業ノ系統ノ下ニ経営セラレツツアルノ現況<sup>3)</sup>」と認識していた。

英一が関与する直前のT 5 / 3 の龍電の大株主は①矢野莊三郎1149、②堀謙治郎420（創業者である堀豊彦の兄）、③平山正澄395、④富岡勝治300（監査役、網干銀行取締役）、⑤松田弟彦200で、社長の堀豊彦は200株未満となっている<sup>4)</sup>。しかも1、3、5位の大株主とも非役員で、龍電創業との関わりも薄く、3者合計だけで1744株（21.8%）に達する。おそらく龍電のために「放棄株を自ら引受け、或は謙次郎氏に金融を請ひ<sup>5)</sup>」大株主となった堀豊彦らの持株が大量に矢野一派に移転した可能性が高いと思われる。この後に大株主を代表して龍電取締役にも就任する矢野は、遠く愛媛県西宇和郡川之石町の鉱業家で、矢野鉱業<sup>6)</sup>社長、同町に本店を置く第二十九銀行の筆頭取締役のほか、明治製錬、伊予索道、愛媛鉄道各取締役（T 5 帝P 171）等を兼ねていた。かつ金融面では9年4月破綻した増田ビルブローカー銀行（増田 BB）社長の「増田信一関係者<sup>7)</sup>」であり、増田 BB より、少なくとも23万円以上の大口融資を受けていたが、銅価暴落の影響を受けて破綻した。大戦景気の際に増田信一「氏は近年矢野某等と提携して株式の思惑を試みて失敗<sup>8)</sup>」したとされた「矢野某」こそ矢野鉱業経営者・矢野莊三郎である。矢野鉱業は増田 BB の投融資先であり、増田 BB は取引仲買店の速水商店へ売買証拠金代用として矢野鉱業株式8000株を差入れているなど、事実上増田 BB の支配下にあったと見られるが、銅価暴落の影響を受けて破綻した。増田 BB 取締役中の三上豊夷、菊池清平とともに矢野鉱業取締役を兼ね、矢野の一角と目される矢野寅一が増田 BB 取締役、矢野國光も増田 BB 監査役（T 9 銀P 7）であるなど当時増田 BB は矢野と緊密に結び付き、増田 BB、矢野鉱業、第二十九銀行の三者は金融的一体関係にあったものと見られる。

## (2) 英一と矢野莊三郎・増田信一との関係

英一ら「播州鉄道株式会社重役ハ大正五年度下半期以来龍野電気鉄道株式会社

ノ株式（株金額五十円全額払込済）ヲ一株二百円ノ割合デ漸次買取シ、今日ニ於テハ龍野電気鉄道株式会社ノ総株式六千株中五千九百七十余株<sup>10)</sup>を買占めた。その過程で、5年3月末現在、特に1149株も所有する筆頭株主の矢野莊三郎とは一般株主とは別に、特に個別の買取交渉が持たれた可能性が高い。そして矢野側からの何らかの要求や、矢野と金融的に一体関係にある増田信一サイドとの接触も大いにありえたと考えられる。その連絡役は当時龍電の借入先であった日本生命の本店にもしばしば現れた本岡武助あたりと推測される。

増田信一が明治45年6月鬼怒川水力電気（鬼怒電）監査役に就任しながらも、何らかの事情で大正4年6月26日に辞任した鬼怒電株式の購入を英一に勧めたこともあり得よう。こうして矢野莊三郎の龍電株式譲受を契機として、英一が矢野を介して増田信一と結び付き、やがてこうした投機的人脈<sup>11)</sup>が英一失脚の原因の一つともなった例の鬼怒電買占劇にも発展した可能性を示唆しているように思われる。

### (3) 龍野電気鉄道の買取

播鉄は6年3月24日の臨時総会で高砂～龍電網干駅等の新線建設を定款に追加すること、「龍野電気鉄道株式会社又は株式を買収の件並びに其買取代金の支払は財団設定に因る借入金又は社債を募集する件」を決議した。（12回営）龍野電気鉄道（龍電、明治39年12月設立、本社揖保郡斑鳩村、資本金30万円）でもほぼ同時に6年3月30日の臨時総会で「会社ノ財産全部並ニ水力電気ノ権利ヲ播州鉄道株式会社へ売却スル件」を決議した。播鉄は龍電株式をT5下3200株、T6上2558株、T6下213株と、順次買取し、その結果T6上には累計5758株、T6下5971株と、「買取不能の株」29株を除き、総株数6000株の殆ど（99.5%）すべてを買占めた。（文、播鉄）龍電側の株主名簿上の播鉄持株5710株との差異48株は「他人ノ名義ト為シアルモノ」（文、播鉄）であった。

## 2. 新宮軽便鉄道

新鉄における播鉄系株主の買占過程は未詳であるが、総株数7000株の99.0%を占める6931株は英一（6680株）および5名の役員（4名は同一の端数62株づつ、蓬萊のみ53株、計251株）で独占し、役員外の株主計は僅か69株という状況は、龍

〔表―10〕 新宮輕便鐵道役員一覧（大正6年9月末）

社 長	本岡武助	62	株式問屋、龍電専〔表―9〕参照
取締役	末正盛治	62	末正久左衛門（湊西銀行代取、大地主）の次男、湊西銀行専務、篠山輕便鐵道、篠山電灯、神戸発動機製作所社長、末正合資無限責任社員、兵電、明石電灯、神戸造船所、農工信託、播州倉庫各取、神戸取引所、浪速信託、伊藤鐵工所、日本綿布、ユニオン硝子製造所各監
〃	伊藤英一	6680	播鉄専務、播鉄42037株
〃	藤岡音吉	62	明石、明石合同印刷監、T 8 で兵電250、明石電灯224株
〃	上月孝之介	62	多可郡黒田庄村、大志銀行取・支配人・西紀支店長
監査役	蓬萊市松	53	加東郡河合村、大阪海運監、播州煉瓦取 T 6 で兵電150株

（資料）『帝国鐵道要鑑』大正7年、P41、数字は新宮輕便鐵道持株数

電と全く同様で、さして資産力のないと思われる藤岡、蓬萊ら役員持株も「他人ノ名義ト為シアルモノ」で、役員外の69株は「買収不能の株」であったと推定される。例えば蓬萊は播鉄系列の播州煉瓦取締役を兼務しており、明らかに播鉄のダミーであろう。新鉄の取締役である本岡武助は奇妙なことに「龍野電氣鐵道株式会社代表者資格ノ取締役」（T 6 . 3 . 30決）であるとなっていたが、T 6 . 3 . 30の株主総会で「従前ノ龍野電氣鐵道株式会社代表者資格ノ取締役ノ辞任届出」（同上）で通常の実任取締役に就任した。商業登記簿でも「大正五年十二月二十五日臨時株主総会に於て取締役任期満了改選の結果左の者当選就任す…同郡斑鳩村ノ内鵜村百三番地龍野電氣鐵道株式会社<sup>12)</sup>」と法人の実任取締役に就任が明記されている。このような法人を実任取締役に選任することが、果して当時でも適法だったのかどうかは検討を要すると思われる。

龍電は新鉄の株式を買収しようと計画し、8年3月2日龍電の株主総会で「新宮輕便鐵道株式会社株式<sup>13)</sup>を買収する事」を原案とおり決議した。これに対して鐵道省は「後者（他会社ノ株式取得）トセハ会社ノ目的外ノコトノ為メ新ニ資本増加ヲ為スカ如キハ現ニ播鉄ノ龍電株式取得ニ付テ攻究中ニ係ルモノアルニ於テ之亦穩当ヲ欠ク<sup>14)</sup>」と反対したため「龍野電氣鐵道ノ譲渡ハ願人ヨリ取下ケ<sup>15)</sup>」となった。

新鉄は9年4月16日の第13回定時株主総会で、第四号議案「当会社商号ヲ播州水力電氣鐵道株式会社ニ改称ノ件」第五号議案「龍野電氣鐵道株式会社ヨリ同社

ノ鉄道事業ニ属スル設備並ニ其ノ營業權ヲ買収ノ件」第六号議案「資本金増加ノ件」を満場一致で可決した。(T 9 . 4 .16決) 総会決議に基づき、9 年 7 月28日新鉄は播州水力電気鉄道と改称し、龍電から鉄道の譲渡を受けた。

### 3. 鉄道省監督局の判断

播鉄側の提出した「有価証券内訳表」には龍電の株券は券面で298,550円で、備考として「額面以上ノ買増金895,650」円があるため、合計で1,194,200円となり、5971株で割ると1株200円もの高値になる計算である。鉄道省監督局作成した「以下参考」と題した添付メモによれば「此増資株ハ龍電及播鉄重役一派ニテ引受(会社ノ窮状ヲ広告シテ)此株式ノ払込完了後一株200円ニ播鉄ヲシテ買収セシム。(株主ノ利得712,500円)龍電ハ現状一割配当、從ッテ会社ハ七分ノ社債ヲ払テ二分五厘ノ利益配当ヲ得ル結果年々52,000の損失ヲ被ルコトナル。刑法上背任罪ヲ構成スルモノト認ム」とあり、このメモに基づいて鉄道省監督局作成した検事正宛通條案によれば「播州鉄道株式会社ノ重役ハ大正五年度下半期以来、龍野電気鉄道株式会社ノ株式(株金額五十円全額払込済)ヲ一株二百円ノ割合ヲ以テ漸次買収し、今日ニ於テハ龍野電気鉄道株式会社ノ総株式六千株中五千九百七十余株ハ播州鉄道株式会社ノ所有ニ属ス。而シテ…龍野電気鉄道…買収ニ要シタル資金約百二十万円ニ対シ七分ノ利息ヲ支払ヒ居ルカ故ニ播州鉄道株式会社ハ年額約五万四千円ノ損失ヲ蒙リツツアル筋合ナリ。龍野電気鉄道株式会社ハ大正五年八月資本金四十万円ヲ六万二千五百円ニ減少(普通株五十円払込ヲ十分ノ一、優先株五十円払込ヲ四分ノ一ニ減少)シ、同時ニ二十三万七千五百円ノ増資ヲ決議シ、翌月之ヲ実行セリ。而シテ減資ハ財政整理ノ為ニ行ヒタルモノニシテ、普通株ノ如キハ総会ニ於テ僅カニ五円ノ時価シカナシト説明シ、減資ヲ決定シナカラ、増資実行後ニ於テ払込額ノ四倍ヲ以テ播州鉄道株式会社ハ之カ買収ニ着手シタルモノナリ。尚播州鉄道株式会社ハ別表ノ通多数ノ株式ヲ所有シ居レリ<sup>16)</sup>」となっている。添付メモの「会社ノ窮状ヲ広告シテ」が通條案では「普通株ノ如キハ総会ニ於テ僅カニ五円ノ時価シカナシト説明シ」とより詳しく説明されている。通條案にはないが、「五円ノ時価シカナシ」と広告された増資株がおそらく額面相当で「龍電及播鉄重役一派ニテ引受」られた後に、「株式ノ払込完了後一株200円ニ播鉄ヲシ

テ買収セシ」めた行為が、「龍電及播鉄重役一派」である「株主ノ利得712,500円」をもたらし、「刑法上背任罪ヲ構成スルモノト認ム」ものと解されたのであろう。総務課佐藤事務官のメモによれば「龍野電気鉄道株式会社ノ株式ハ殆ド全部播州鉄道株式会社ノ所有ニ属ス。而シテ播鉄ハ龍電ノ一株（五十円払込）ヲ二万円ニテ買収計上シ居ルヲ以テ、之ヲ相当価格ニ引直ササルヘカラサルモノナリ。之カ救済手段トシテ龍電ノ増資ヲ為スモノト假定センニ…播鉄カ從來多大ノ株式ヲ所有シ居ルハ既ニ穩当ヲ欠クモノナルニ…播鉄ノ整理ヲ曖昧模糊ニ葬ルガ如キナキヲ期セサルヘカラサルモノト認ム<sup>17)</sup>」と播鉄による龍電等の株式所有を危険視していた。

#### 4. 播州水力電気鉄道の経営多角化

9年10月5日資本金を215万円増加して250万円とした。（「商業登記簿」）10年2月13日の株主総会で定款を改正し、目的に「前項ノ付帯事業トシテ、一、炭山ヲ所有シ採掘又ハ販売スルコト。一、水力并ニ火力ヲ以テ電気事業ヲ経営シ電灯電力ノ供給ヲ為スコト。一、陸海運送業並ニ倉庫ヲ経営スルコト。一、娛樂機関ノ事業ヲ経営スルコト。一、同種事業ノ有価証券ヲ所有スルコト」を追加した。10年3月30日8%第一回社債50万円募集許可を申請した。期間は10年（3年据置後、7年間毎回7.5万円以上を償還）、資金使途は新宮、山崎間建設費3050万円及び芸備銀行への旧債償還20万円であり、その理由は「負債ハ旧龍野電気鉄道株式会社ヨリ承継シタル日本勸業銀行ニ対スル借入金三十万円（鉄道抵当法ニ依ル）及本月十九日付御認可ヲ得テ短期借入ヲ為シタル芸備銀行ニ対スル借入金二十万円（鉄道抵当法ニ依ル）其他小額ノ一時借入金等ヲ有シ候。然ルニ新宮、山崎間ノ建設費（延長七哩、建設費予算額一百十五万円）及三方川水力電気工事費等至急多額ノ支出ヲ要スルモノ有之候得共、現今經濟界不振ノ折柄未払込株金ヲ急速ニ払込ムコトハ多数株主ノ耐ヘサル所ニシテ甚タ困難ノ状態ニ有之候ニ付、有力ナル資産家ノ援助ニ依リテ社債ヲ起スノ外他ニ資金調達ノ途無之候<sup>18)</sup>」というものであった。

## II. 播州鉄道と明姫電気鉄道の対立

大正4年3月には英一は次のような播陽鉄道計画を推進した。「播州鉄道専務伊藤英一氏其他地方実業家発起人となり、題掲会社設立計画中なるが、其内容は播州明石より飾磨迄輕便鐵道を敷設せんとするにありて、資本金を百万円、二万株中一万二千株は之を発起人に於て引受け、残部は一般公募の方針なり」(T4.3.15T)と報じられている。英一は飾磨の出身でもあり、播鉄の経営がある程度軌道に乗りつつあった4年に播鉄延長線ともいべき播陽鉄道の設立を目論んだと見られる。この後龍電の系列化に伴い、播鉄は定款を改正して、正式に「高砂駅ヨリ飾磨郡飾磨町ヲ経テ揖保郡網干町ニ至リ龍野電気鉄道網干港駅ニ接続スル」(T8年時点の定款第37条)線路延長敷設免許申請を雑則に掲げた。一方、6年5月22日には川西清兵衛ほか数名の阪神間の資本家に、「東播の実業界重鎮、多木・伊藤二氏を顧問として」(T10.7.4A)資本金500万円で、明石・加古・印南・飾磨の二市四郡にまたがる、明石と姫路を海岸沿いのルートで結ぶ明姫電気鉄道が出願された。同社は、事実上、川西清兵衛が主宰する兵電の延長線であったが、一部株主の反対などで、別会社・明姫での申請となった。しかし上記の播陽鉄道を具体化させたものとして、明姫線という名称の同一ルートで先に免許を申請していた「播州鉄道の出願と衝突を見るに至り」(T6.6.8Y)、先願権を主張する英一側を痛く刺激した。この明姫電気鉄道の顧問に就任した伊藤は伊藤でも、本家の伊藤長次郎の方であり、筆頭株主・専務として播鉄を主宰する英一ではなかった。

明姫電気鉄道の役員(株数はT8.11末現在、明姫1回営、T9銀P65)は社長川西清兵衛<sup>19)</sup>10,000株、副社長内村直俊<sup>20)</sup>2,000株(神戸)、取締役滝川弁三<sup>20)</sup>3,000株、室谷藤七<sup>21)</sup>2,000株(T3.7兵電相談役)、米沢吉次郎<sup>21)</sup>2,000株、入江光蔵<sup>21)</sup>2,000株(伊保村、加古川銀行取締役)、中村弥之祐<sup>22)</sup>2,000株(姫路)、早川吉次郎<sup>22)</sup>2,000株(飾磨郡)、山田知秀<sup>22)</sup>500株(加古郡)、監査役太田保太郎(2-10)500株、有馬市太郎<sup>22)</sup>1,900株、相談役多木衆次郎<sup>22)</sup>1,000株(加古郡)、伊藤長次郎<sup>22)</sup>1,000株、秋山忠直(2-24)800株、支配人原川慶作<sup>22)</sup>200株(武庫郡、M44.2.27選任)であった。

森川英正氏は本家の長次郎と分家の英一との関係に関して「義兄伊藤英一の—

四万五七〇五株は一族の資産でないから、合算するわけにはい<sup>23)</sup>かない」と峻別する態度をとりつつも、「間接的には伊藤長次郎家の資力を補強する効果を有して<sup>24)</sup>いた」とされる。常識的には分家は本家の「資力を補強」すべき存在なのは当然であるが、世間一般から見れば分家の経営する播鉄と敵対関係に立つはずの、明姫電気鉄道に伊藤長次郎が8年7月12日発起人に加わり相談役に就任するなど、本家が強く肩入れするのは奇妙に映ったに違いない。その他長次郎が頭取の加古川銀行取締役の入江光蔵（伊保村）も取締役2,000株、米沢吉次郎（三十八取締役）も取締役2,000株、伊藤長蔵150株、伊藤長平200株、船津吉太郎（伊藤家農会幹事長）130株、福原芳次（大正汽船取締役）1,000株、初井奈良吉（三十八取締役）50株、辻村芳太郎（大正汽船取締役）300株、丸岡寛三郎（神栄専務、多可銀行取締役）300株、前川清二（大正汽船専務）100株、松下勘一郎（伊藤家農会幹事）20株、中谷与吉郎（印南、伊保酒造取締役）10株、十倉延次郎（伊藤家果樹園長）5株等が本家と因縁深い明姫株主である。これに対し伊藤孝次名義での僅か7株引受が英一側の明姫へのスタンスを象徴する。<sup>25)</sup>こうした対立の反映かどうか、T 6 / 3 では長蔵は300株を保有する14位の播鉄大株主であったが、明姫出願後の6 / 9 には全株売却した。

### III. 兵庫電気軌道の乗取り

神戸商業会議所会頭の座を松方幸次郎に禅譲した川西清兵衛は「淡泊、高潔な<sup>26)</sup>る」人格者とも評されたにもかかわらず、明姫を後押しする兵電の川西「清兵衛と英一とは猿と犬か」（明P 23）といわれるほど、両者は激しい対立関係に立ち、『山陽電気鉄道65年史』は「このようなことから、5年末には兵庫電軌の株主でなかった伊藤英一氏が翌6年5月31日には1400株を所有する筆頭株主となり、6年6月30日の第20回定時株主総会において取締役に選任された。これは川西清兵衛氏らの明姫電鉄出願への対抗と考えられる<sup>27)</sup>」と記述している。大正初期の兵電は「未だ、樂觀を許さざる<sup>28)</sup>」状態にあり、株価も額面を大きく割り込んでいて、安定的な資産株と見做されていたわけではなかった兵電株式を英一が8,933株（22.3%）をも一氣に買占め、年間高値で5年の24.8円が6年は50.0円と倍になり、7年には76.0円（T 8 野P 374）と「株価の如きも騰貴」（T 7 . 6 . 5 Y）し



た。「伊藤英一派乗取る」こととなった「裏面には、同社の営業方針に就き、消極的意見と積極的意見を有するものとの二派に岐れた」と報じられた、英一の真意は播鉄の姫路延長線と競願する明姫電鉄の親会社筋に当る兵電を乗取り、川西清兵衛らの出願を牽制したものと考えられる。

「取締役川西清兵衛、原川慶作、秋山忠直、滝川弁三、有馬市太郎、監査役太田保太郎、小曾根喜一郎の七氏辞任したるにより、之が選挙の結果、左記の諸氏当選したり。伊藤英一（残留取締役）、本岡武助、（新取）、本多一太郎（同）、芦田作太郎（同）、石丸英一（同）、末正繁太郎（同）、末正盛治（残留取締役）、草鹿甲子太郎（新監査役）、古谷虎雄（同）、藤田松太郎（残留）。右終りて取締役会の互選により社長に伊藤英一氏当選したるが、専務取締役は多分これを設けず、伊藤社長専務を兼務することとなれり」（T7.7.15K）新役員の芦田作太郎は岡崎汽船支配人、石丸英一は神戸岡崎銀行支配人、岡崎汽船取締役で、ともに岡崎藤吉（神戸岡崎銀行頭取、岡崎汽船取締役）の配下であった。のちに詳述するように英一辞任後に兵電を引取ったのが岡崎であり、英一に兵電株を担保に買占め資金を融資したのも神戸岡崎銀行であったから、両名はリスクな買占め資金のファイナンスのお目付役として岡崎が派遣したものと考えられる。退任した7役員のうち川西清兵衛、滝川弁三、有馬市太郎、太田保太郎は明姫電気鉄道の役員、原川慶作は明姫支配人、秋山忠直は明姫相談役であり、6名までが明姫関係者であったことから、7年7月14日兵電第2代社長に就任した狙いは、明姫相談役に就任して支援していた伊藤長次郎への対抗心に根差したものと考えられる。英一の対抗心は単に播鉄の利益擁護、明姫電鉄出願妨害といった次元にとどまらず、『65年史』の通り、「伊藤氏の鉄道事業に対する関心が非常に強く、播州における民営鉄道網の完成をめざして<sup>29)</sup>いた」など、川西清兵衛ら阪神間の資本家への並々ならぬ対抗心から生じたものであることを窺わせる。

しかし明姫は7年10月23日認可されたのに対して、播鉄の明姫線は不認可となった。しかし「川西に許可された明姫電車の如きも亦早晚必ずや彼〈英一〉の手に移るものであらうと云はれてゐる」（異P94）とか、「尤も、明姫電車の権利は伊藤氏と競争して川西氏之を贏ち得、いささか前日の怨みを報ひたるかに見ゆるも、実はこれ亦た近く…どうやら伊藤氏の手中の物たらんとする傾きがあり」

(明P23)と、英一に直接取材した記者はともに近々に伊藤の手に落ちると書いている。恐らくそのことは英一自身の口から強く示唆があったものと見られ、英一が明姫にも執拗に乗取りをかけようとしていた可能性をうかがわせる内容となっている。

兵電のクーデターの結果、兵電から追い出された「前社長川西清兵衛氏の斃れた光景は可也悲壮であった…川西氏や踏まれたり蹴られたりと云はざる可からず」(明P23)と評された川西は残された明姫に立て篋って、「対立し合う面も多かった」英一<sup>30)</sup>に乗取られた「兵庫電軌にだけは負けられない」とばかり、明姫を「神戸姫路間ヲ直通スル立派ナ電鉄トシテ完成スル」<sup>31)</sup>ため、より高規格の1500ボルト(兵電は600ボルト)、カテナリー式架線、鉄筋コンクリート橋台等に象徴される高電圧・高速鉄道化することに異常なまでの執念を燃やした。そして世間一般から明姫は「明石・神戸間が尻切れとんぼ」のため、「結局兵電を買収或は合併し此不便を除去するより他に良策もあるまい」(T12.4.18Y)と見られたが、川西は「そんな考えはない」<sup>32)</sup>と断固拒否したといわれる。その理由は前述の英一との経緯から見て「社長の川西君として見れば…行掛り上余り面白くもあるまい」(T12.4.18Y)と考え、「感情に支配され大局を誤」(同上)ったからであろう。

#### IV. 兵電社長としての伊藤英一

社長に就任した直後の8月7日の臨時株主総会において「付帯事業兼営に関する定款変更の付議可決した」(T7.8.8K)が、『65年史』は兵電社長就任後の英一の積極的行動を「伊藤社長は就任時すでに兵庫電軌自体の電気事業を目ざして、明石電灯株式会社への経営参加」<sup>33)</sup>を推進、8年1月英一が明石電灯社長に就任した。8年時点では兵電が旧株9730株、新株5248株、計14,978株を所有し、完全<sup>34)</sup>に支配した明石電灯の場合、「往時日本の電気王と呼ばれし才賀藤吉氏が曾て社長たりし時すら兎角内紛絶えざりし明電(=明石電灯)も、伊藤氏の主宰するところとなりてよりは内容殆ん一新し」(明P12)、「伊藤氏が明電の生命を掴んでより日尚浅いが、同社の色彩は既に既に悉く伊藤化し、経営方針亦全然彼の積極的な伊藤色となつてゐる」(明P11)といわれた。そして360万円で「兵電に於て明石電灯を買収して電灯電力の兼営をなすべく」(T9.7.6Y)申請し、7月5

日兼営許可書が交付された。もちろん兵電本体でも「伊藤くんの経営に移ってから兵電は何がな人目を惹くやうな広告をしようとして色々知恵を絞って居る中に沿線の名所読込みと都々逸や、沿線名所写真の懸賞募集を発表した」(T. 9. 1 K)と経営的な経営ぶりが報じられた。「兵電は其の募集したる写真並に都々逸を選するに方って」(異P145)多忙な弁護士草鹿甲子太郎を審査員に委嘱した。

このほか「兵電が安田銀行から百八十万円の金を借り、之が為め一日三百円と云ふ高い利子を支払って居るのを見て、彼は之が借換を企てた。所が安田は期限内とあって何うしても返金を承諾せぬ。彼は何うしても金を返さうと力む。而して彼の徹なる此の談判の為め実に前後二十五回上京し遂に安田をして根負け」(異P96)させている。これは安田銀行引受の社債のことで、期限内の繰上弁済のため安田は社債権者集会の招集までやらねばならず、頑強に抵抗したものとみられ、英一の一徹ぶりを示す挿話である。

英一の立案した数多くの鉄道計画の一つとして兵電の新開地乗入計画がある。英一は社長就任後まもなく大開通から新開地への支線敷設を申請したが、これは不便なターミナル・兵庫駅に飽きたらず、神戸の都心に近い新開地への地下乗入れを計画したものであった。市電第二期線を計画中の神戸市は「この矢先に兵庫電軌に延長されると市電の意味が失はれる<sup>35)</sup>」として猛反対した。英一は市会側の「一夜づけ」「増資遂行の一種の方便」等の乗入批判に反論して、「市外の乗客を容易に神戸市の繁華街に送り込むことができるから、市の発展を増進<sup>36)</sup>」すると市の利益を強調し、「市電の経営が面白くないのであれば、市電の買収もあえて辞するものではない<sup>37)</sup>」と好戦的で超強気の態度を示した。また有名な英一の五郎池土地買占めにも、この「兵電市内線の終点たらしめむ」(明P25)との選択肢もあったとされ、これら選択肢の「三策とも敗れて、氏は最後の策を執った」(明P25)結果が自己が理事長を務める神取に移転敷地として買上げさせたことといわれる。しかし市電第二期線を擁護する立場の神戸市会の調査委員会は全委員一致で乗入れを否決し、神戸市の絶対反対の県への副申のため、この兵電の新開地乗入計画は実現しなかった。また9年1月6日出願の明姫資本による神明急行電鉄<sup>38)</sup>が認可された直後の9年3月11日兵電は、明姫の神戸延長と市電の第三期線への対抗策として既存路線の神戸～明石間の複々線化(予算550万円)を出願した。この

他にも英一の立案したプランには「神戸市の北裏迂回して有馬に達する鉄路」(明P25)などがあったが、このルートは後年、山脇延吉を中心に川西清兵衛、伊藤長次郎らが発起人となって創立された神戸有馬電気鉄道(T15.3.27設立)の手で実現を見た。

## V. 沿線の土地会社等への関与

英一は「垂水住宅土地や西代土地信託、関西土地信託等の会社役員をも兼ねていた」<sup>39)</sup>関係から、兵電としても塩屋、垂水、明石方面で相当規模の土地買収を進め、伊藤の指揮下での兵電「買収地のなかには旧明石遊廓内または高砂港に近い鐘紡工場の入口付近などの鉄道と直接関係のないものもあって、土地経営に対する意欲」<sup>40)</sup>が極めて旺盛だったことを示していた。兵電沿線および播鉄関連の土地会社は次の通り。

### 1. 垂水住宅土地

8年10月30日設立、資本金500万円、払込125万円、本社東区北浜1丁目35(T9.8.本店を神戸に移転)、神戸営業所神戸市戸場町43、経営地兵庫県明石郡垂水村の「兵庫電鉄垂水停留所の北四丁の所にあり、坦々たる県道を前に控へ瀬戸内海の明媚なる風光を集め、淡路島を俯瞰するの絶好なる住宅地」17万6千余坪(坪当たり7円85銭)で「既に六万八千余坪は売却の契約成立し、手付金の領収を完了」していた。(T9.5.24K広告)総株数10万株の中「九万株は発起人及賛成人に於て引受け、残り一万株を大阪と神戸にて各五千株を同年十月十日限定公募に付」(T9.5.24K広告)社長柳広蔵<sup>41)</sup>、納富陳平<sup>42)</sup>、加島安治郎(2-表8)、長谷川金圭五郎、円山兼吉、渋谷史春、英一、竹馬隼三郎<sup>43)</sup>、黒田左武郎(T13.3播水100株主)、福永良造、監査役藤本清兵衛、藤田卯兵衛<sup>44)</sup>、梅谷久四郎、支配人三羽則文(T9銀P73)

英一は「彼は今や京都、神戸、舞子、今市の四箇所に邸宅を有す」(異P97)と言われたように、近接地の舞子に別荘を構えており、兵電社長として舞子土地等とともに兵電垂水駅の周辺開発計画に関心をもったのは当然であろうが、播鉄取締役に迎えた加島安治郎とは9年現在では垂水住宅土地の取締役としても共同行

動をとっていた。大株仲間人で大阪株式取引員組合長でもあった加島商店社長加島安治郎は大阪土地運河、日本家禽土地社長その他多数の土地会社の役員を兼務、「加島安次郎は欧州大戦当時北浜市場で飛ぶ鳥も落す羽振りを利かしていた加島商店主で、紡績株で成功して数千万の富をなし、好況時代には大日本商事、城東土地、能勢電鉄の各社長をはじめ、競ふて簇立した二十数ヶ所の新設会社の社長、重役として時めいてゐたが、大戦後紡績株から船舶株に移ったところから漸次没落し昔日の倅を失った<sup>45)</sup>」とされる。加島商店の「電話も三個に縮小したうへ、二個までが通話停止を食つてゐる有様」で、昭和5年10月2日偽造有価証券行使罪で取調べを受けて収容され、7年9月8日有罪判決を受けた<sup>46)</sup>。また羅紗商・竹馬商店社長の竹馬隼三郎も「勝ち運の強い、まれにみる勝負事を好んだ性格の持主であった。投機などに対しても異常な関心を示し…株屋や不動産屋が店を訪れ、勧誘するものがあとを絶たなかつた<sup>47)</sup>」と伝えられる。「個人として投機に熱中はしたが…反省し…個人としての不動産や株式売買は一切取止め」、竹馬商店の事業との混同を避けるため、「竹馬商店と無関係の別会社<sup>48)</sup>」として合同土地は9年10月2日仲忠太郎、田宮卯一ら、竹馬隼三郎と「志を同じくする人と共同出資<sup>50)</sup>」により資本金100万円で設立された。(S 4 銀 P 39) こうして他のメンバーの脱落等により、昭和3年時点の垂水土地は黒田左武郎らの残留組を主体に、神戸貯金を筆頭株主として存続していた。(S 4 銀 P 26)

## 2. 舞子土地

舞子土地は3年3月「土地の売買、土地建物の賃貸借、右に関する付帯事項」(定款)を目的として、資本金200万円(うち払込50万円)で総株数「四万株中三万五千株ハ発起人ニテ応募、残り五千株ヲ公募」(T 8 P 694)により兵庫県明石郡垂水村ノ内山田村字舞子1797番地に設立された。生まれつき投機に積極的な地元加西郡北条町出身の香野蔵治も破綻後に取締役として関係したが、再度「株式市場に於て失脚せる結果…横領して逐電し」(T 7. 6. 15T)た。経営地は省線・兵電舞子駅下車、舞子浦公園、神明国道に接し、「舞子海岸ニ連接セル平坦高丘ノ一円、払下地総坪数十六万八千四百五坪、一坪に付三円五十銭換、此実測坪数二十万坪」(T 8 野 P 694)「総坪数十六万五千二百七十三坪(一坪当り四円八十銭弱)」

(T10野P716)であった。7年11月時点で社長秋山恕郷(2-37)、専務西村徳三<sup>51)</sup>郎、取締役今西林三郎(隣接の同業者・舞子住宅土地監査役も兼務)、森本常太郎、宮崎敬介、益田種三郎、塩田吉右衛門、監査役武岡豊太<sup>52)</sup>、村上関蔵<sup>53)</sup>、平塚嘉右衛門<sup>54)</sup>(T8野P694)

舞子に別荘を持っていた英一は8年頃舞子土地取締役就任し、同じ頃に英一の二女テルの夫・細田藤弥、西村安太郎<sup>55)</sup>、石井亮三郎(農工信託取締役)、岸本恒太郎(神取常務理事、取信取締役)が舞子土地取締役、正田房治郎(神取仲買人、取信取締役)が同社の監査役に就任しており(T10銀)この間、舞子土地の株主数がT7下428名からT9上208名に半減したことから見て英一派の買占めの可能性もあろう。9年7月時点では英一らの親族は留任したが、西村、石井、岸本、正田は短期間で辞任した。(登T9.7.31Y)英一の一連の言動にあきたらないものを感じつつあった岸本らの脱退という可能性もあろうか。

舞子土地には「多年の係争たる」(17回営P3)所有地を巡る「所有権移転請求ニ係ル訴訟事件」があり、12年「本年三月十五日判決言渡アリテ全然勝訴ニ帰シタルモ相手方ハ此判決ニ対シ不服ヲ申立テ控訴ヲ為シ」(19回営P4)のため、この後も長く未解決状態が続いた。

正田房次郎(取締役)、藤井忠兵衛(2-表8)(監査役)ら、多くの神取仲買人・取引員が関係していた舞子土地は9年5月神取の市場内に「来る六月一日より定時株主総会終了の翌日迄株式名義書替へを停止す…尚本期は多少の利益配当ある予定に付此際他人名義の株券所有の方は名義書替への必要有之事と存ぜられ候」

(T9.5.11K)と掲示した。『神戸新聞』の『株界片々』子は「何と云ふ哀れな広告また正直な宣伝であらう。「多少の利益配当ある予定に付」の一句に至っては正直の度が過ぎて噴き出したくなる」(T9.5.11K)と舞子土地の困窮ぶりを皮肉っている。ちなみに舞子土地の9年6月期の株主配当は年5%であった。(T9.6.28K)9年11月時点で社長井上善吉<sup>56)</sup>、取締役英一(T10までに退任、雑賀繁松と交替)、榎寿逸、正田房治郎、監査役玉井辰三郎、藤井忠兵衛(T10野P716)。10年12月末から11年5月までの半年間には98件、15,933株(39.8%)もの急激な株式異動(17回営P3)があり、この直前に取締役の英一をはじめ、取締役の細田藤弥(T10銀役員録P上127)、監査役の西村安太郎(T10のみ)ら英一系役員

も相次いで姿を消したことで併せると、資金繰りに窮した英一らが大量の持株を手放したものと見られる。

11年6月時点の同社役員は専務中野慶治(T11.3.30新任)、取締役榎寿逸、雑賀繁松、正田房治郎、監査役玉井辰三郎、藤井忠兵衛(17回営)であったが、株主からの「会社保有金ノ割戻」(17回営P3)要求もあってか8月2日総辞職に迫られた。辞任した中野慶治(取信支配人)、正田房治郎らは英一取信社長の下で役員・幹部を務めたメンバーであり、舞子土地で「重役ト会見ノ上、協議調査シタ」(18回営P3)株主委員の一人で総辞職後の総会で議長に推された武田由助も取信では「現重役の放漫なる貸出に対して不満の念を抱」(T9.8.28K)き、9年9月英一ら全「重役連袂辞任」<sup>57)</sup>を実現させた人物である。おそらく取信の「現重役の放漫なる貸出」と、多くの神取仲間が多く参画していた舞子土地はなんらかの關係にあり、武田由助らの反英一派が舞子土地と取信でほぼ同時に英一派を追及した可能性があらう。その後も昭和3年11月時点で資本金80万円(払込済)、繰越欠損4.2万円、大株主は大きく変化し、①天野三郎(専務)2900、②松浦儂之助2400、③柳田久治郎(取締役)1580であった。(S4銀P32)、昭和16年5月末時点で会社はなお存続しており、大株主は①天野利三郎4900、②松浦儂之助2400、③卯田浅治郎1500、④柳田久治郎1201、⑤片岡誠一500、⑤天野利兵衛500株であった。(S16/5営)

### 3. 西代土地

8年10月兵庫郡須磨町西代に資本金50万円(払込済)で設立され、取締役芝田嘉右衛門、土居賢之介、沢田為次、中江忠兵衛<sup>58)</sup>、西村安太郎、監査役石丸貞太郎(表13)、沢田甚兵衛、辻山留吉であった。(T9銀P27)。西代に本社を置いた「兵庫電気軌道株式会社が…業務の都合上近く西代の現在本社を明石市に移転の計画あり、同市に於ても歓迎し居れり」と「兵電移転計画」が報じられるなど、英一らの役員関与の背景には兵電跡地利用との關係等、なんらかの狙いがあったと見られる。しかし昭和3年では中江、西村、石丸ら英一系役員は姿を消し、同社は昭和10年時点でも存続(S10諸上P862)していたが、『山陽電気鉄道65年史』も英一が「会社役員をも兼ねていた」西代土地、垂水住宅土地、関西土地信託と

の関係を示す特段の記述は見当たらない。

#### 4. 高砂土地倉庫、播州倉庫

播鉄が総株数の30.0%を所有する高砂土地倉庫（7年8月31日設立、資本金50万円、配当0%）、同じく播鉄が総株数の66.7%を所有する播州倉庫（6年9月28日設立、資本金150万円、配当10%、本社加古川町篠原町）など、播鉄系列の土地・倉庫会社も存在した。5年5月の倉庫業兼業認可申請の際、播鉄は加西郡北条町の開成社にならって在庫品担保貸付の兼営を重視しており、後に播州倉庫が農工信託へ変身することにつながったと見られる。

注1）赤坂義浩氏によれば北丹鉄道の監査役高橋健三、主任技師近藤俊吉とも播鉄出身者である。（同氏「大正期民営軽便鉄道の資金調達——京都府福知山北丹鉄道の事例——」『経営史学』30巻3号、平成7年10月、P74）なお英一とは無関係だが、昭和初期兵庫県下の中小私鉄に神戸財界人が関与した例としてはT11.11.26開業の淡路鉄道（T3.4設立、社長賀集新九郎）には12.4福良延長決定時に岡崎藤吉、川西清兵衛ら多くの神戸財界人が増資面で支援（T12.4.30Y）し、S3の大株主には①淡路銀行2395株、②川崎武之助、③岡崎忠雄各1000株（S4帝P40）などが並んだ。

注2）27）29）33）前掲『山陽電気鉄道65年史』P56-8

注3）T9.5.26付鉄道大臣宛兵庫県知事副申書、文、播鉄

注4）『電気大観』T5、P586

注5）前掲『兵庫県人物史』P412

注6）矢野鉦業はT7.2.設立、本社大阪北浜4丁目、資本金1000万円、払込625万円（T9銀P85）で愛媛県の出石銅山等を経営。役員は取締役岩原謙三、三上豊夷（海運業、矢野鉦業、増田BB、成興炭礦鉄道、日米信託、内国通運、中華企業各取締役、松昌洋行、内国自動車各監査役）、荻野芳蔵、菊池清平（矢野鉦業、増田BB各取締役、第二十九銀行頭取、愛媛農工銀行監査役）、監査役矢野小十郎（矢野永襲代表社員）、福永良造、北川与平（滋賀県高宮、金巾製織、北川京都紡績所、江商創立・業務執行社員、江商、日本



メリヤス、日本絹織、山陽紡績各取締役、日本ビロード、博愛生命、中之島製紙、京都信託各監査役、北川(株) (T9 銀大阪 P83)

注7) 9) 前掲「顛末」P266、272

注8) 阿部直躬『三十年之回顧』T11、商業興信所、P345

注10) 16) T9.7.19神戸地検検事正宛鉄道省監督局通條案、文、播鉄

注11) 13.3 末の播水大株主にも矢野武一(兵庫)旧株1000(減資換算株数600)、矢野春蔵(京都)旧株200(減資換算株数120)(T12営P22)なる矢野姓の株主が存在するが、矢野莊三郎との関係の有無は未詳。

注12) T7.5.8「登記簿謄本」文、播電

注13) T8.3.2 決、文、播電

注14) 15) T8.4.23付業務課文書、文、播電

注17) T8.5.9 総務課文書(取扱者佐藤事務官作成)

注18) T10.3.30付「鉄道大臣宛申請書」文、播電

注19) 川西清兵衛は大阪の蠟商・筑紫三郎助の五男に生れ、兵庫港の石炭問屋兼倉庫業の先代川西清兵衛の養子となり、M29日本毛織社長、その後川西機械製作所(現新明和工業)を創業、兵電発起人初代社長、T7.6.4 兵電社長辞任(前掲『山陽電気鉄道65年史』P22)

注20) 滝川弁三は兵電発起人・初代取締役、T7.6.4 兵電取締役辞任

注21) 米沢吉次郎は明石の米商、M29日本毛織発起人、第五十六銀行、三十八、神栄、阪鶴鉄道、明姫電気鉄道各取締役、湊川改修、舞子酒造、明治工業各監査役、播磨鉄道発起人・取締役1000株、神戸電気鉄道300株、兵庫電気鉄道各発起人300株。米沢長次郎の実弟

注22) 有馬家は兵庫の旧家で代々米穀肥料問屋・貿易商・柴屋、区会、県会、神戸市会の議員を歴任(前掲『兵庫県人物列伝』P425)、M29日本毛織発起人、兵電発起人・初代取締役、T7.6.4 兵電取締役辞任、神戸商業会議所常議員・運輸部長、神戸米穀株式外四品取引所監査役(『日本全国商工人名録全』M31ほかP118)

注23) 24) 森川前掲『地方財閥』、P44

注25) 例外は英一の長女みねの夫・松代安太郎の500株引受であるが、松代は伊

藤長蔵が主導権を持っている伊藤企業に5万円(松代安太郎の関係者松代鍋種も5万円)を出資するなど、もともと伊藤本家とのかかわりが強い人物と見られる。

注26) 28) 前掲『現代関西人物史』P229

注30) 32) 『播磨の100年』1989、神戸新聞社、P115

注31) 川西の総会答弁、前掲『山陽電気鉄道65年史』P84

注34) 前掲『全国株主要覧』T9、上P285

注35) 36) 37) 39) 40) 60) 前掲『山陽電気鉄道65年史』P59-60

注38) 神明急行電鉄は実質明姫の神戸延長線で「明石神戸間の線路を山の中に敷設するの計画」(T12.4.18Y)であった。

注41) 柳広蔵は藤本清兵衛の弟で大株仲間人、浪速土地、浪速紡績各取締役、藤本ビルブローカー、紀阪銀行、淀川土地、灘土地建物、日本証券土地、城東土地、奈良土地各監査役

注42) 納富陳平(大阪)は北浜銀行取締役支配人を経て、稗島土地社長、浪速信託土地取締役、木津川土地運河監査役、摂陽銀行400株、東洋毛糸紡績390株、播鉄1000株、計1780株所有(『全国株主要覧』T8、中P390)

注43) 竹馬隼三郎は羅紗商、竹馬商店、合同土地、神戸商事信託各社長、垂水住宅土地、農工信託各取締役

注44) 藤田卯兵衛は金銀細工の(資)みかげや藤田商店・無限責任社員、日本綿業、農工信託各取締役、播州倉庫、神戸造船所、垂水住宅土地各監査役

注45) 46) 伊藤由三郎編『銀行犯罪史』S11、銀行問題研究会、P59、60

注47) 48) 50) 『竹馬のあゆみ』S52、竹馬産業、P77。神戸市元町通3の合同土地はT15では東洋拓殖新200株を保有(『全国株主年鑑』T15P273)

注49) 仲忠太郎は仲忠商店主、神取取引員・商議員、取信、神戸信託団、合同土地、神戸共同商事、神戸共栄各取締役

注51) 西村徳三郎は家具商、兵庫県会議員、農工信託取締役、神戸中央土地、湊川活動写真、神戸布引土地、農工信託各取締役

注52) 武岡豊太は湊川改修支配人から湊川土地建物、神戸中央土地、南洋興業各取締役、舞子土地監査役

注53) 村上関蔵は湊川土地建物専務、神戸市議、神戸肥料、神戸貿易梱包、神戸中央土地各取締役、兵神館監査役

注54) 平塚嘉右衛門は宝塚の大地主、平塚土地経営所社長、農工信託取締役

注55) 西村安太郎は神戸造船所取締役・支配人、伊藤鉄工所、神戸肥料、明石瓦斯、西代土地、追原商店、神戸大同土地、神戸商工各取締役、浪速信託土地、舞子土地、大阪製紙原料、実業信託各監査役、T13神戸海事工業所代表社員就任、T13現在播水旧3株

注56) 井上善吉は葺合二宮町、舞子土地社長、取信400株主、神戸土地建物清算人

注57) 59) 藤井忠商店調査部『経済時報』12号、T9.9.21、3号、T9.6.1

注58) 中江忠兵衛は西伊藤銀行、西代土地、神戸造船所、農工信託、兵神館各取締役

## 第5章 伊藤英一の不動産・鉱山選好

### I. 神戸周辺の不動産投機熱

播州地方の地価情報は未詳のため、英一も大口投資した神戸市内の不動産投機の加熱ぶりを見ておくと、「土地は一面に其性質が一方向である処へ、大小成金の店舗、工場、邸宅、別荘等の新築用として盛んに需要の喚起を見たことが手伝って特に著しく思惑熱を煽り…之れが売買、転売買、頗る旺盛を極めた。其結果地価は…昂騰を告げ」(T 9. 6. 9 K)、神戸市内の中心部の元町居留地1500~2000、場末の上筒井・兵庫方面100、近郊の田畑では西灘100、御影100~150(以上坪当たり円)、交通の便の悪い農村地帯の田畑でも反当たり300~500が1000~2000円へと高騰した。しかし「斯く都鄙を通じて未曾有の好況を示した地価も財界今回の大変動に逢合するに及び其趨勢を一変して漸く下落に向ひ従って土地熱も昨今金融梗塞の爲め著しく冷却するに至った」(T 9. 6. 9 K)のであった。当時の地元新聞社の情報網をフルに使っても「地価が好況の絶頂時代に比して那边迄下落したかは之れを一般的且精確に知ることは容易な業でない」(同上)ため、兵庫県農会が各地の会員から聞取って「地方の地価を本年一月頃と同五月頃とに比較した」調査を使って、「武庫郡良元村地方の如き半額以下となり、其他も三割安を免れない」(同上)としている。つまり「田畑の売買に際し従来の反当たり標準を廃して坪当たりを以て評価するに至」(同上)った「都市接近地方」の田畑すなわち宅地見込地の暴落が3~5割にも達していたことがうかがえる。

播州地方でも神戸市に隣接・近接する東播の宅地見込地では同様な傾向があったものと推察され、大戦景気に乗って「雨後の筍のやうに続出した」(T 9. 4. 15 K)「土地会社の如きに至っては唯土地の買占を爲し、徒らに地価の暴騰を煽り住宅難を一層甚しからしめたものが多い」(明P158)と評されるなど、当地の土地会社の世評は概して芳しくなかったが、反動恐慌に突入する過程で「土地会社も殆ど途中で行悩みの状態に陥ってゐる」(T 9. 4. 15 K)と言われ、例えば宝塚住宅土地は「二十五日創立総会を開く筈なりしが、財界不況の砌解散を要求する株

主ありしより…十一円十五銭を払戻」(T 9.7.6 K)して解散した。さらに酷いのは悪名高い大日本債券グループによる土地会社詐欺であって、事情に疎い、但馬の山間部の資産家や富裕な農家に「非常な儲けのある様な話」(T 12.3.8 Y)で誘い込み、多数株主に仕立てた「会社屋と称するものの手に依って創立された」神港土地建物(直ぐに神戸倉庫に改称、代表者内橋佐七郎＝大日本債券、但馬輕便鉄道各取締役)という「看板が掛けてはあるが、内容は更に判らない」(同上)架空土地会社による株金取込詐欺まで発生した。

英一の関与した舞子、垂水地区の諸土地会社も同様に手痛い打撃を被ったものと考えられる。たとえば「斯の如き有望なる土地会社は洵に近來稀に見る所のものなり、而して之れが…重役は何れも経財界<sup>マツ</sup>一流の紳士を網羅せり」(T 9.5.24 K 広告)と自画自賛した垂水住宅土地の英一のパートナーの多くも、前述の通り、その後は没落ないし不動産や株式投機に失敗する者が続出したからである。

## II. 不動産投機の具体例

こうした不動産投機の風潮の中で英一の不動産投機の具体例を見ておきたい。

第4章で述べた播鉄に対する有価証券整理の行政指導に対応して、大正8年9月30日付の伊藤専務名の監督局長宛文書「陳者予テ御内達有之候当会社所有ニ係ル有価証券ノ義、右ハ本期中ニ全部整理ヲ了シ候間、何卒左様御了承相成度此段上申仕候也」を播鉄専務に就任したばかりの猪木土彦<sup>トノ</sup>が持参した。8年3月期では103.8万円だった土地家屋業の資産勘定が、翌8年9月期には540.9万円と、一気に437.1万円も激増し、代りに所有有価証券勘定333.5万円が姿を消した。その後、資産交換の具体案として8年11月21日代替の土地建物の内訳書を持参した。しかしこの時点では新米の猪木専務の不慣れもあってか事務方には詳細な説明がなく、事務当局はその真意を計り兼ねたようで、9年3月「從來所有ノ有価証券ヲ土地及家屋ニ変更シタルハ交換シタルモノナリヤ、或ハ他ノ方法ニ依リシカ詳細説明ノコト」との実に間の抜けた質問をしている。播鉄側は9年3月8日付で、「有価証券ヲ売却シ、土地家屋ヲ買入レタルモノナリ」とすまして回答した。「処分当時ノ有価証券3,335,450円ノ内保証金代用トシ運送店ヨリ預レル50円ヲ除キ、3,335,400円ヲ3,386,400円ニ売却シ、土地家屋買入価額5,064,933円520此ノ内償

務1,215,841円310ヲ控除シ、残額3,849,092円210ヲ支払タリ」と説明し、不動産取引に暗い鉄道官僚に「承継シタル債務ヲ含」む買取方法を「俗ニ附廻リト称ス」と教えている。<sup>2)</sup>

結局、播鉄はその後なお時価が上がっている可能性のある株式をほとんど簿価で英一側に譲渡し、かわりに英一が932,554円で取得した広大な不動産を2,471,440円（差益1,538,886円）という英一側の言い値で、1,215,841円の借金（農銀、神戸信託、大同生命という、いずれも英一とは深い取引のあった金融機関）ともども引取らされている。結果的には鉄道省の横槍をうまく利用して、英一はやっかいな土地を、定款上も土地建物業を兼業できる播鉄に高値で引取らせ、堂々と不等価交換を行った可能性があり、土地価格に不案内な鉄道省は播鉄資産の一層の劣化をみすみす見過ごすほかはなかったようだ。

9年3月8日付で監督局が「客年九月三十日付ヲ以テ貴社所有ノ有価証券ニ関シ申出有之、其後猪木専務ヨリ内訳書提出有之候処、尚左ノ事項ニ付回答相成度」と照会したのに対して、播鉄は9年3月20日付で監督局長宛に回答書を提出した。猪木専務より提出された追加の「内訳書」は中身の差換えにより、少なくとも①第一次提出分（T8.10.8）、②第二次提出分（11.3）、③第三次提出分（T9.2.5）の3回に分けて部分的に提出されたようである。まず①第一次提出分（8年10月7～8日に猪木専務が鉄道省に持参した英一からの買取土地リスト）には「〇六十万円九州新延炭坑ニテ消却（組替ノ旨猪木氏ヨリ申出アリ。一〇・七）」と「600,000ヤハ九州ノ炭坑ト交換セリ、兼業ノ手続ハ追テ為ス由（10.8.猪木氏申出）」と読める担当官の走り書きがある。「兼業ノ手続…」とは播鉄は8年3月時点で既に多くの兼業が可能のように定款に幅広く規定していたが、石炭採掘・販売等までは含まれておらず、定款改正を含め鉄道省への申請等の「兼業ノ手続」が「追テ」必要となるとの意味であり、播鉄が英一から九州新延炭坑を原案に含まれていた優良市街地物件に代えて押付けられたものと推測される。（新延炭坑の項目参照）

次に②第二次提出分は「猪木専務ヨリ内訳書提出」に該当する「十一月三日猪木専務持参」と書かれた英一からの買取土地リストには担当官の付箋が貼られ、「整理簿精シク書出シテ提出スベキ旨強指示」「目下評価取調中、猶予セラレタキ

旨、猪木氏ノ答弁」と書かれている。この「債務付ノモノ」とは9年3月20日付監督局長宛回答書の中で「俗ニ附廻リト称ス」とする「承継シタル債務ヲ含」む買収方法を指すのであろう。

さらに③第三次提出分は監督局で一件書類を整理した際に、関係書類の一番上に持ってこられた『担保物件別に債務金額、債務者が記入された総括表らしき図表』には、「十一月三日」から3ヶ月も経った「二月五日猪木氏持参」と担当官が記入しているので、これが佐藤が「精シク書出シテ提出スベキ」と指示した整理簿に該当するものと思われる。

9年2月19日付の播鉄の安田寅次から佐藤雄能殿宛の伊藤商事便箋に書かれた私信には「諸 猪木氏ヲ経テ御申越被成下候借入金ノ件…山田村、阿弥陀村ハ償還額通り弁済致居間、現今皆無ニ御座候間左様御了承相成度、先ハ得貴意申度如件…」とあるのは、「十一月三日猪木専務持参」リストにある阿弥陀村、山田村が「二月五日猪木氏持参」リストには該当なしとなっていることについての鉄道省監督局佐藤雄能の間合わせへの回答であろう。鉄道省監督局に提出された不動産明細表（第三次提出分）によれば英一が932,554円で取得した不動産の所在地別の内訳は〔表―11〕の通り。

神戸市およびその隣接・近接の武庫郡、印南郡、加古郡の1市3郡に跨がる広範囲な取得で、金額比では本拠地の印南郡が28.6%と一番高く、神戸市は20.2%と最も低かったが、英一の取得原価と播鉄買収価格との対比では神戸市の3.33倍に対して、郡部の加古郡は2.22倍と相対的には低くなっている。前述の「交通の便の悪い農村地帯の田畑でも反当り300～500が1000～2000円へと高騰した」（T

〔表―11〕 播州鉄道の不動産明細表

所 在 地	取得原価A 構成比	播鉄買収価格B	差引増加額C	B/A
武 庫 郡	268,149円 28.7	670,732円	402,223円	2.50倍
印 南 郡	266,637円 28.6	707,360円	440,723円	2.65倍
加 古 郡	209,194円 22.4	465,127円	255,933円	2.22倍
神 戸 市	188,574円 20.2	628,580円	440,006円	3.33倍
計	932,554円 100%	2,471,440円	1,538,886円	2.65倍

（資料）「二月五日猪木氏持参」不動産明細表（鉄道省監督局第三次提出資料）

9.6.9 K)すなわち約3.3倍～4倍になったとの記事と対比すると、加古郡の2.22倍、印南郡の2.65倍はその範囲内であり、播鉄買収価格そのものは一般的な地価の値上りを素直に反映したものと考えられる。

### III. 不動産投機と関与金融機関

英一はこの不動産取得を農銀（約72.5万円）を中心に神戸信託（11万円）、大同（38万円）等の各種の金融機関からの不動産担保貸付1,215,841円によって賄った。（英一土地担保簿価932,554、自己評価＝播鉄買収価格2,471,440円）

#### 1. 兵庫県農工銀行

長次郎は明治30年11月兵庫県農工銀行（農銀）設立委員に任命され、31年3月1日取締役<sup>3)</sup>に就任、「創立以来取締役として本行に重きをなし、前大谷頭取の画策に参与<sup>3)</sup>」してきたが、昭和3年2月27日第4代頭取に就任した。また英一も大正6年7月21日取締役に就任し、6年では長次郎が7500株、英一が6875株所有<sup>4)</sup>したが、英一は10年8月31日取締役に辞任<sup>5)</sup>した。

大戦景気における農銀の営業は「一般企業の殷賑と都市繁栄に伴ふ住宅の払底につれ土地の需要旺盛を極め從而資金の需要頻繁を告げ<sup>6)</sup>」たとされるから、ちょうどこの時期（T 6.7.21～10.8.31）取締役<sup>3)</sup>に在任していた英一に土地資金を不動産に第一順位の抵当権を設定して貸し付けていたのであろう。当初農工業資金に限定されていた特殊銀行の農銀も明治44年4月の法律改正により「不動産の提供者には汎く貸付し得ることになった<sup>7)</sup>」からである。もっとも市街地に存在する宅地建物に対する貸付高は払込資本金と農工債券発行額の四分の二に制限されていたが、都市圏の農銀では都市の発達に伴い、この制限の緩和措置を政府に強く要望せざるを得ないほど、当該資金の需要が著増したのであった。農銀頭取の大谷吟右衛門は長次郎が会長の阪神住宅土地に監査役（T10野P737）として就任している。まず農銀は英一に対して6年4月24日に武庫郡岡本村の物件を担保に12年賦の長期資金を貸出したのをはじめ、6年12月24日に加古川町・伊保村の物件で20年賦の、おそらく農業用資金の名目で長期資金を貸出し、引続き梅井村、加茂村等の農村地帯の融資を続け、8年9月13日には神戸市大字東尻池字金平山



で5年賦の資金も出し、その他とも計約72.5万円を融資した。神戸信託、大同に比して農銀の金額が大きいのは融資条件が有利で、20年賦、30年賦の極めて有利な長期借入が不動産投資に最適であったからであろう。(もちろん農銀取締役としての最優遇もあろうが)物件別の融資額は神戸市平野200,000円を筆頭に、神戸市金平山140,000円、河合村75,000円、梅井村70,000円等となっている。最大の神戸市平野は7年7月21日、2年据置30年賦の極めて有利な条件で貸出しを受けている。

この神戸市平野物件は一旦は播鉄へ譲渡を約束されながら、前述のように「九州ノ炭坑ト交換」され、英一側に温存されたと見られる。同物件との直接の関連性は不明ながら、当時英一は前理事長時代からの懸案であった神取移転先たる「五郎池の土地を予め買占めて置いた」(明P24)といわれる。この「五郎池の土地」に関して英一は3つの利用計画<sup>8)</sup>を有していたとされ、これらの計画が行き詰まった結果の窮余の一策がこの「五郎池の地面を神取へ高価で売付け」(T11.12.24 K)、「数十万円を利し得た」(明P25)と「凄腕前」を発揮したのであった。もし当初計画で農産物を卸売する「青物市場候補地」なる名目であれば農銀から有利な条件で貸出しを受けることも可能であったと考えられる。いずれにせよ、この時期英一は農銀取締役、神取理事長理事長等の兼職をフルに活用して、不動産投機に走っていたことは間違いない。また農銀はなぜか播鉄本体にも3,000円の与信があり、播鉄は解散にあたり「仮受金中預り金内訳」に「農工銀行関係三千円、右ハ前社長英一氏関係ノモノニシテ、計算上仮受ニ記載ナシタルモノニ有之。後日整理仕候」と鉄道省に報告している。なんらかの事情で正規の取引以外に貸借関係が生じたものとみられる。なお農銀との直接の関係は示し得ないが、英一らは農工信託にも深くかかわった。人脈上は同じ6年9月設立の播鉄系列で「倉庫業荷為替取組土地家屋売買貸借金銭貸付物品売買機械製造売買修繕工事請負其他」(T8帝P22)を目的とする播州倉庫の系譜に近く、加古川に支店を置く点も両社の一体関係を暗示する。また舞子、垂水等の英一系土地会社の役員との共通性も高く、同社の不動産業務等へのかかわりを示すようである。役員のうち西村、平塚、藤田、尾崎寅治、松井、石井らは9年7月9日一斉に辞任し、卜部、伊藤孝次、末正、稲岡のみが留任するという大幅な役員更迭が生じた。(登T9.

7.9、T9.7.29Y) T9/5期には農工信託は新たに700株の鬼怒電株主として登場するなど、取信と同様にここでも英一の株式買占めへの資金的関与が疑われる。

## 2. 神戸信託

神戸信託は明治39年に神戸市の鳴滝幸恭<sup>10)</sup>、滝川弁三、小磯吉人<sup>11)</sup>、駒井巻、川口木七郎、藤尾幸一らにより、資本金100万円で設立された。総株数2万株は全部發起人および賛成人で引受けた。(M39.12.15B) 麻島昭一氏によれば神戸信託は「兵庫県農工銀行、三十八銀行、五十六銀行のごとき県下有力銀行と深く結合<sup>12)</sup>」していたとされ、三十八取締役駒井巷(2-16)が取締役、農銀頭取大谷吟右衛門が監查役を兼務していた。

神戸信託は7年7月18日に武庫郡岡本村の物件を担保に英一に11万円を期間3年で融資した。このこととの関係は未詳であるが、麻島氏によれば7年12月期になかったのに、「関西土地信託が神戸信託の大株主として現れるのも大正8年<sup>13)</sup>」であり、9年12月期(関西土地信託)から昭和2年11月期(関西土地興業)にかけて神戸信託の1780株主となり、藤尾幸一、小寺又吉、川口木七郎、木村宇一郎に次ぎ第5位の大株主(T9銀P55)となった。神戸信託による英一への融資、英一系関西土地信託との取引関係などとの直接の因果関係の有無は未詳であるが、麻島氏によれば神戸信託が12年上期に債務保証損失金12.5万円、債務保証引当14.0万円、計26.5万円の臨時損失を出した原因は、「第一次大戦ごろの急膨脹期に無謀な債務保証、貸金の拡大、土地投機をおこなったため<sup>14)</sup>」とされる。時期的な対応関係では英一との関連が疑われるが、英一が初代社長を勤めた北大阪電気鉄道株式多数を神戸信託が買収した事件との因果関係を含めて、神戸信託との関連は別の機会に解明してみたい。

## 3. 大同生命

大同生命(大同)は6年5月30日に梅井村で13万円を期間3年で、神戸市吉田新田(神戸造船所敷地)で25万円を期間3年で、計38万円を融資した。船舶新造修理を目的とする神戸造船所は6年8月25日設立、本社神戸市栄町5丁目、資本

金70万円（払込済）、株主は播鉄11650株（83.2%）、積立金7,590円、利益53,528円、配当15%であった。<sup>15)</sup>役員は取締役末正盛治、南陽二郎（西伊藤銀行、神港南栄各取締役）、藤井慎二（神戸肥料取締役、西伊藤銀行監査役）、取締役・支配人西村安太郎（4-55）、監査役追原頼太<sup>16)</sup>、稲岡猪之助。9年7月期の決算では同社の資産合計227.3万円のうち、なんと有価証券が170.0万円（74.8%）を占めるなど、造船所としては極めて異常な資産構成となっていた。因みに同社はT9/10期親会社の播鉄の286株主であった。9年10月7日頃に播鉄側が鉄道省に持参した英一からの播鉄の買収土地リストには地目は山林ながら「以下全部現在宅地」との注記のある「神戸市吉田新田 債務金額250.000円…債務者大同生命」の物件があり、別紙の「神戸市 坪数3,142.9…原価188.574円 買収価格628.580円」の上には「吉田新田 神戸造船」との担当官の走り書きがある。9年1月現在では神戸造船所の工場所在地は買収土地リストにある神戸市吉田新田<sup>17)</sup>となっており、しかも同社は9年5月15日神戸市島上町39へ移転（T9.5.19K）したから、工場敷地を英一が買上げ、播鉄に転売したことがわかる。同社の持たされた有価証券170.0万円こそは播鉄が英一・伊藤商事側に売った問題のグループ企業の有価証券の一部であろう。こうしたグループぐるみの粉飾の最中、同社取締役の藤田卯兵衛（4-44）と中谷作太郎は9年6月23日辞任した。（登9.7.5Y）結果的には神戸造船所敷地を播鉄に飛ばして含み益を出す、英一グループ相互間の土地キャッチ・ボールに手を貸した形になった。神戸造船所は12年3月31日現在で播鉄に対して5,000円<sup>18)</sup>の受取手形があり、新会社の播丹に継承された。

英一が播鉄と取引実績のない大同をわざわざ抱き込んだのは事情に疎い生保を、粉飾操作に利用したのかもしれない。昭和6年現在では「神戸造船鉄工所 神戸吉田町、開業年月日大、六、八、生産品目船舶修理、代表者西村安太郎<sup>19)</sup>」として存続が確認される。また昭和10年時点でも神戸造船所は大正6年8月設立、資本金14万円、払込済、本社神戸市林田区吉田新田、代表取締役西村和歌、取締役島本利吉、池田勇夫、監査役追原頼太（S10諸上P831）と、いずれも元の吉田新田に戻り、西村らが和船の修繕業を継続していたことがわかる。

なお大同は英一系の企業に意図してか、意図せざるものか未詳ながら鬼怒電の株主、播丹の1,260株主に名を連ねたほか、個人名義で10550株の播鉄2位株主で

ある小林晋一<sup>20)</sup>が12年10月24日の第25回株主総会で清算人の選定に際しての5名の詮衡委員（他は淡路銀行、三十八銀行等の法人代表）に指名された事実からみて、小林晋一はその職責上、役員特命事項として大同の不良債権処理に邁進した人物（他に東京支店長岸本伝吉らか）かと推測される。英一等への不良債権の発生の結果、鬼怒電等の担保を代物弁済で取得したり、播鉄等への与信が「債務の株式化」の結果、小林晋一名義を含めて播丹株への振替を余儀なくされたものと考えられる。この結果大同は播丹11077株2位の大株主（昭和9年現在でも5238株の第2位株主）として登場している。（S10諸P875）さらに播丹に対し日本生命と共同で財団抵当貸付を累増させて、持株で第2位の大株主の座と併せて、後には大同常務の松井万緑（広岡恵三義弟）が播丹取締役役に就任した。

#### IV. 関係会社間の不健全な資産移転

##### 1. 播鉄から神戸大同土地への土地の再転売

7年2月設立の鉄道用品製造の伊藤鉄工所とはその後、本業の不振から転業に追込まれ、社名を神戸大同土地と改称し、本社も神戸市栄町通6-48（伊藤商事本社内）に移転した。上記のごとく、神戸造船所敷地の飛ばしに関与し、その後英一系企業に深くかかわることになる大同生命と紛らわしい名称に変えられた真意は不明である。改称後の役員は取締役英一、西村安太郎、岡田鎮一郎、沼田静治、監査役本郷寅藏<sup>23)</sup>であった。

10年3月期には播鉄は「神戸大同土地会社へ当社土地家屋業ニ属スル土地ヲ売却シ」<sup>24)</sup>た結果、播鉄の土地家屋業資産は前10年3月期の528.2万円から、26.4万円へと501.7万円も一挙に激減（21回償）したが、当然に「右売却代金ニヨル未収入金ニ対スル利子…ハ一方仮受金トナシ、一方未収入金トシテ計上シタルモノニ有之、現金ヲ以テ受入レタルモノニアラズ」（鉄道省佐藤雄能宛書簡）して、その結果、10年9月期以降、神戸大同土地への「売却代金ニヨル未収入金」2,431,314円を每期計上し続け、一方で土地家屋業勘定は表面上は264,946円にまで激減した。しかし現実には「該土地売却代及利子ハ徴収不能」（佐藤宛書簡）であり、10年10月30日の株主総会でもこの点を疑問に感じたのか、事情を知り得る立場にある三十八行員英賀福藏、上田幸次郎「両氏ハ土地家屋業ニ関スル質問」（T10.10.30決）<sup>25)</sup>

を行っている。鉄道省は「大正十二年十二月二十九日清算事務所へ引継ノ際、土地代ハ損失トシテ整理ナシタルモ、利子ハ整理漏」(佐藤宛書簡)となった杜撰な会計処理を播鉄「会社ハ解散前ニ於テ当然処分ヲ要スル幾多ノ損失ヲ有スルニ拘ラス之ヲ整理セズ」<sup>26)</sup>と批判していた。しかしながら、播丹への「鉄道売却益金」4,825,307円という「現物出資ノ差益金…ニ対スル巨額ノ所得税ヲ賦課セラルルコトノ為」<sup>27)</sup>、株主総会の承認を得たはずの正式の貸借対照表を、会社解散当日取締役で作成した分と急遽差し替えるという、前代未聞の離れ業を演じ、佐藤雄能をして「承認ヲ受ケタルモノハ果シテ何レナリヤ判明セサル」<sup>28)</sup>と嘆かしめた。この「曩ニ提出シタルモノト全然別箇」に差替えた「大正十二年十二月二十九日解散当日現在取締役作成分」の真正な貸借対照表では一転して神戸大同土地に対する未収入金ほかの資産性を一転して否定し、同損益計算書において「未収入金回収不能損失金」2,118,481円、「仮出金回収不能損失金」259,544円、「受取手形回収不能損失金」1,855,000円を計上、上記の「鉄道売却益金」を相殺してなお「当期損失金」561,154円を捻出して巨額の所得税賦課を回避した。

播鉄の土地家屋の売却先の神戸大同土地も11年9月13日「株主総会の決議に依り」<sup>29)</sup>解散に追い込まれており、同社からの回収は当然に不可能となった。14年時点では後述の酒井栄蔵一派の支配下に置かれた加古川製紙の取締役である岡田鎮一郎が神戸大同土地取締役を兼務(T14帝P150)しており、神戸大同土地も彼らの影響下にあった可能性があるろう。播鉄の安田寅次は佐藤雄能に対して「右売却代金ニヨル未収入金ニ対スル利子…ハ一方仮受金トナシ、一方未収入金トシテ計上シタルモノニ有之、現金ヲ以テ受入タルモノニアラズ。該土地売却代及利子ハ徴収不能ニヨリ、大正十二年十二月二十九日清算事務所へ引継ノ際、土地代ハ損失トシテ整理ナシタルモ、利子ハ整理漏ノ分ニ有之候」<sup>30)</sup>と回答している。結局、一連の土地は短期間に少なくとも英一→播鉄→神戸大同土地と英一グループ内部で転々と転がされ、その都度適当な利益を計上する、いわゆる土地転がしが行われていたと考えられる。土地転がしの受皿に、わざわざ本業を廃業し改称した神戸大同土地等が使われたのは損失を抱え、土地売買の手品で決算を操作するような不自然な意図が感じられる。同様に「五郎池の地面を神取へ高価で売付け」(T11.12.24K)る巧妙な手口なども併用された。

なお実現はしなかったが、播鉄では10月4日西脇～杉原谷、西脇～谷川間の「線路ヲ適当ノ時機ニ於テ売却スル件」(20回営P12)を総会に付議した。負担が重い新線部分の切り放しと、実質的に評価益の計上をねらったとみられる。このアイディアは後に播丹鉄道への営業譲渡として形をかえて具体化する。(第10章参照)

## 2. 新延炭坑の関係会社間転売

(1) 新延炭坑の概要 ここで取り上げる新延(にのぶ)炭坑は英一が自己(実質は伊藤商事)名義ないし播鉄等の名義で所有し、採掘したと思われる筑豊の貧坑である。炭坑の位置する福岡県鞍手郡西川村新延は現在の鞍手町新延で、当時は室木線(遠賀川～室木間)の途中駅の新延(現鞍手)駅に近く、明治初年の旧新延村はフシ原、馬谷、鬼力坂、野田の石炭礦場が存在し、「土産石炭」<sup>31)</sup>とされた炭坑集落であった。明治末期の室木線沿線には新延のほか、鬼馬、永谷、泉水、旭、三笠、室木、満の浦等の諸炭坑があった。しかし42年時点ではこれらの沿線諸炭坑の年産額は、いずれも重要炭山の目安である5万屯以下の中小炭坑にすぎなかった。<sup>32)</sup>

新鞍拓生氏のご教示によれば新延炭坑(福岡県採掘登録第一〇五号)の採掘権者は大正5年11月原田勝太郎(貝島太助の姻族で貝島鉱業監査役)→井上鉱業(株)、6年6月井上鉱業→原田勝太郎外一名、6年8月西野友太郎外一名→西野友太郎外二名、7年3月西野友太郎外二名→伊藤英一、8年6月伊藤英一→播州鉄道へと移転した。<sup>33)</sup>西野は新鞍氏の調査によれば井上鉱業の租鉱人であったから、英一の居住する京都市上京区に本社を置き、同じ西川村所在の旭炭坑など近接する筑豊3炭坑を経営するなど、多くの接点を有する井上鉱業が英一の炭坑取得に大きく関係した可能性を示唆している。<sup>34)</sup>

### (2) 伊藤英一の炭坑取得の真意

英一が新延炭坑の採掘権を単独で取得したのは7年3月であるが、仮に「西野友太郎外一名」から「西野友太郎外二名」への譲渡を英一側の持分の買増しと理解すると英一の採掘権持分の出資開始は6年7月頃まで遡ることになる。この頃英一は鬼怒電、兵電等の株式を買占めて筆頭株主となり、6年12月27日には鬼怒電取締役に、7年7月14日には兵電社長に就任しており、得意の絶頂期にあった

といえる。英一の炭坑経営の大義名分は鉄道省に報告したごとく、播鉄、播水、篠山軽便鉄道など「拙者関係ノ鉄道等ニモ石炭ノ供給<sup>35)</sup>」を安価で行うことにあったと考えられる。この時期は炭価暴騰が著しく、たとえば彼の支配した篠山軽便鉄道でも6年9月期は「汽車費中ノ大部分ヲ占ムル燃料費ハ極力節約ニ努メシモ炭価暴騰ノ為メ著シク汽車費ヲ増大シタリ」（篠山9回営P7）と炭価暴騰を嘆いていた。

6年11月の日銀門司支店の調査では「近時炭界ノ好調ハ炭坑ニシテ阪神地方ノ資本家ニ買取セラルルモノ多ク…石炭商中資産アルモノハ出来得ヘクンハ自ラ炭山ヲ経営セントシ又之ガ経営ヲ希望シ居ルモノナリ<sup>36)</sup>」と阪神資本家による炭坑買取ブームを報告している。たとえば英一の周辺でも兵電、明石電灯各取締役の芦田作太郎は篠栗炭礦、鈴鹿鉱業の各代表取締役であり、関西土地信託取締役の土岐市太郎も神恵炭鉱、吉井炭礦各取締役を兼ね、伊藤家の元番頭・坪田十郎もこの頃、増田信一も取締役として関与した日米信託<sup>37)</sup>のなんらかの介在の下で益隈炭礦代表取締役となっていた<sup>38)</sup>。

しかし英一の炭坑取得の真意が単なる関与鉄道の営業費引下げにとどまるものでなかったことは、彼の炭坑取得前後の活発な事業展開からもうかがうことができる。すなわち新延炭坑取得直前、播鉄では6年6月30日「付帯事業トシテ…運送業ノ経営」を追加（13回営）し、出張所を神戸市相生町のほか、九州若松港にも置き、神戸造船所建造と思われる数隻の汽船で海運業に乗り出し、7/9期には高砂浦、加古川等に石炭置場を新增設した<sup>39)</sup>。また炭坑取得直後の7年9月には「石炭銅鉄各種鉄工製品其他<sup>40)</sup>」（T8帝P16）の「各種商品売買」を目的とする「彼の…諸事業の参謀部」（異P94）と称された伊藤商事を新たに設立した。伊藤商事設立が新延炭坑の取得と大きく関連していたことは、後に新延炭坑の名義が関係会社の播水に移っても、播水は直接経営にはタッチせず、実質的な炭坑経営主体である「伊藤商事株式会社ニ対スル…兼営ニ係ル炭坑委託経営料」の受取額を「該興業費八十二万九千四百四十三円五十六銭ニ対シ年八歩ノ割合ヲ以テ契約<sup>41)</sup>」していたことからもうかがえる。

さらに進んで7年10月には「遠くは備中新見町に於て近く作業を開始せんとする」（異P94）伊藤製鉄<sup>42)</sup>を末正一族、地元資本家の山田貫一（岡山市、岡山県穀物

代表取締役)、黒瀬勝兵衛(新見町)らとともに設立、石炭を多量に使用する「銑鉄」の生産まで目論んだ。9年1月現在では伊藤製鉄新見工場(岡山県阿哲郡新見町)は職工数男25、原動力瓦1実馬力50馬力、石1実馬力6馬力の設備を有して<sup>43)</sup>現実に製鉄業を8年2月から稼働していた。

したがって英一の炭坑経営そのものは、炭坑の取得、運搬手段の確保(播鉄による海運業兼営)、石炭の流通網の整備(伊藤商事新設)、関係鉄道以外の販路の確保(伊藤製鉄の稼働)などをワンセットとしたかなり計画的な行動であったと推測される。しかし一見合理性を有するがごとき、垂直的統合を絵に描いたような英一の多角化計画も、その前提が大正バブルに基づく、異常な物価高が今後も持続することであり、異常に高い炭価ではじめて採掘可能な貧坑と、異常に高い鉄価で操業可能な遠隔地の新設の銑鉄工場等を、これまた異常に高い運賃で成り立つ、経験の乏しい海運業で結ぶ、極めて無謀にしてリスクな新規計画の同時着工であったと考えられる。例えば播水兼営時点で英一の作成した「石炭採掘及販売業営業収支概算書」の「年出炭額四万八千屯、一屯売価十三円トス」る「重要炭山」並の予測は、その後の昭和2年の西川村所在の現実の炭坑別出炭額<sup>44)</sup>がいずれも2万屯前後の低水準にとどまったことから、かなり甘いものであったと思われる。この頃後述の通り中島徳松が数ある所有炭礦中からを高採算の飯塚炭礦一本に絞り込んだように、売り物に出されるのは低品位等のため、不採算に陥ったお荷物の貧坑である場合が多く、購入には当然ながら徹底的な現地調査と専門的な立場からの慎重な吟味が必要であったはずである。(中島徳松も鎮西炭礦引受に際しては「直ちに部下を率いて鎮西炭礦を視察」<sup>45)</sup>している。)

おそらく折からの石炭ブーム、海運ブームの中で、石炭を輸送する海運各社は<sup>46)</sup>大儲けし、私鉄でも太田清蔵の博多湾鉄道汽船のように石炭を輸送する海運部門を有するところは大変鼻息が荒く、私設鉄道同志会の有力メンバー同士として英一も大いに刺激を受けたことであろう。また増田BBの大口融資先・大阪造船所の保証をした鉱業家・蔵内治郎作も8年3月松島肇等とともに炭礦商船(資本金1000万円)を設立し、蔵内は大阪造船所の名義で10万株を申込んだほどだが、ブームによって貧礦数礦区を<sup>46)</sup>買い集めた炭礦商船も「炭質粗悪ニシテ目下ノ所経営望ミナシトナシ休山シツツアル」という悲惨な状態に陥ったほどであった。



(3) 播水名義での炭坑兼営認可申請 播水は鉄道省当局の「新二百五十万円ノ巨資ヲ投ジテ直接本業ニ何等好影響ヲ与フルコトナキ」との猛反対を押切り、新延炭坑を播水名義で兼営することにした。播水は9年12月25日開催予定の臨時株主総会で、第三号議案定款変更の件として「一、炭山ヲ所有シ採掘又ハ販売スルコト」ほかを目的に追加することを通知書に記載して、9年12月6日株主に通知した。総会では「炭山ヲ所有シ採掘又ハ販売スルコトヲ加フ。右満場一致變更ニ決ス」<sup>47)</sup>に至った。以下に示した英一の自筆の署名入りのT9.12.7付申請書作成をはじめ、一連の申請手続は東京に所在した「伊藤事務所東京支店」(播鉄の猪木専務もここに駐在したと見られる)が担当したと思われる。なぜなら一件書類の末尾に添付された大正10年1月「請書」(文、播電)は「伊藤事務所東京支店」専用便箋に書かれ、かつ受取人の名義も「伊藤事務所東京支店」であったからである。町田昇を支店長とする「伊藤商事東京支店」と「伊藤事務所東京支店」の差異は未詳ながら、おそらく実質的には同一と考えられる。「本公司ニ於テ今回福岡県鞍手郡西川村地内(福岡県採掘登録第一〇五号)新延炭坑ヲ買収シ、別紙興業費及営業収支概算書ニ基キ石炭ノ採掘販売ヲ兼営仕度御認可奉願候也。追テ本炭業ヲ兼営スルニ於テハ本社及拙者関係ノ鉄道等ニモ石炭ノ供給ヲ潤沢ナラシメ各種ノ便宜有之候間、何卒特別ノ御便宜ヲ以テ至急御認可願上候」<sup>48)</sup>

「何卒特別ノ御便宜ヲ以テ至急御認可願上候」と、緊急を有する理由には当然に「炭坑買収代価仕払ノ時機至急ヲ要」<sup>49)</sup>する名目があった。しかし9年12月という時期は『鉱区一覧』から知られる英一の炭坑買収時期(6年7月以降、7年3月以前)とは3年ものズレがある。おそらく英一としては鉄道省当局には既に炭坑を彼が取得していることを秘匿していたのではないか。彼が取得済みの炭坑を彼の支配する播水が購入するのに、なぜ「炭坑買収代価仕払ノ時機至急ヲ要」したのであろうか。それは9年12月という時期は6章で詳述する通り、鬼怒電買占資金の調達先・増田 BB が4月7日破綻し、「救済各銀行より委員を派遣して業務を監督し債務を整理」<sup>50)</sup>したため、英一への同行貸金430万円も鬼怒電63,399株等を同行「所有ニ引直シ」て228万円を回収し、残債回収をも強行しつつある時期に相当する。『鉱区一覧』上での新延炭坑の所有権が8年6月には既に播鉄に変更されているにもかかわらず、播鉄ではなく播水が10年2月13日の株主総会で定款を

改正し、「炭山ヲ所有シ採掘又ハ販売スルコト」だけでなく、同時に「陸海運送業並ニ倉庫ヲ経営スルコト」までを大急ぎで可能にした理由は、密接に関係する播鉄名義の新延炭坑と播鉄の海運部門をワンセットで播鉄から播水に飛ばすことを英一が念頭に於ていたからではなかろうか。なぜなら英一派が完全支配し、非公開の私的企業にすぎない播水に比して、少なくとも株式が流通して、株価が日々明らかにされている播鉄では、炭坑「兼業ノ手續」<sup>51)</sup>に必要な株主総会決議等を進めるべく、8年10月の総会に「石炭採掘ノ件」(17回営P13)を予定したが、さすがに「九州新延炭坑」の抱き抱えには社内や大株主層の抵抗が強かったことはこの間の播鉄幹部の相次ぐ辞任(第8章II参照)からも推測されよう。そこで英一も「九州新延炭坑」の「飛ばし先」として、より操作可能な播水に狙いを付けたものと思われる。

別紙の「興業費及営業収支概算書」<sup>52)</sup>には礦区及採炭設備一切80万円が計上され、摘要欄には「本興業費ハ別冊財産目録ニ記載シアル福岡県鞍手郡西川村所在新延炭礦ノ現在採掘営業中ノ炭礦及付属物件一切ノ買取価額ニシテ、各財産別ニ評価困難ナル為メ一括記載セリ」とあり、「石炭採掘及販売業営業収支概算書」には石炭販売収入62.4万円の摘要欄には「年出炭額四万八千屯、一屯売価十三円トス」、営業費52.8万円の摘要欄には「出炭費其他諸支出一切一屯ニ付十一円トス」とあり、出炭額1屯当り2円の純益が得られる結果、4.8万屯の出炭額では年間の益金を9.6万円と試算している。<sup>53)</sup>

英一は鉄道省監督局に対し「炭坑買取代価仕払ノ時機至急ヲ要」<sup>54)</sup>することをさかんに強調していた節が見られる。監督局は炭坑の監督官庁ではないから所管外として細かい資料を要求しなかった可能性もあるが、申請書にはなんら当該炭坑の現況・実績を示すような資料やデータが一切添付されていない。英一の自筆の署名入りの9年12月7日付申請書に対して、まず12月9日付で総務課の堀江事務官は「本件案スルニ本業タル鉄道ニ於テ山崎延長線七哩余ノ未成線ヲ有スルノミナラス、既成線ノ軌間ヲ変更スル計画サヘアル今日、新二百五十万円ノ巨資(借入金)ヲ投シテ直接本業ニ何等好影響ヲ与フルコトナキ兼業ハ詮議相申出サルヲ妥当ト認ム」<sup>55)</sup>と否定的見解を示した。同日業務課橋口事務官も「本件 総務課付箋ノ通り」<sup>56)</sup>との意見を出した。つまり事務方ではかねて英一の言動には警戒感が

強く、今回も拒否反応を示したと考えられる。9年12月23日付で業務課長は次のような通牒案を立案した。「本月七日付ヲ以テ兼業ノ件申請相成候処、本業タル鉄道ニ直接関係ナキ本件ノ如キハ延長線ノ建設及既成線ノ改良計画ニ影響ヲ与フル嫌アリテ、妥当ナラサルモノト被認候条、再考相成度、別紙申請書一応及返戻候<sup>57)</sup>」

しかし英一は、<sup>58)</sup>直接鉄道大臣元田肇あたりに次のような具申書を出して、政治的圧力をかけてまで事務方の抵抗を牽制し、巻き返しを策したと見られる。「具申書 本月六日付ヲ以テ弊社鉄道ニ於テ炭業兼営ノ件、御認可申請致置候処、該資金ハ一時借入金ヲ以テ充当ス可キ予定ニ有之候処、炭坑買取代価仕払ノ時機至急ヲ要セサル事ニ協定相纏マリ候ニ付、別紙之通り金二百五十万円ヲ増資シ其内金百五十万円ヲ右兼営資金ニ充当致度候間、特別之御詮議ヲ以テ至急御認可被成下度此段具申仕候也」<sup>59)</sup>

これにはT9.12.6付の株主総会招集通知書が添付されており、T9.12.25開催予定の臨時株主総会までの許可を迫ったものであった。このため12月23日付の不許可の通牒案には堀江事務官の「十六日局長ノ命ニ依リ取戻留置」との走書きが添えられ、かつ当該文書には赤字で「廃棄」と大書され、上司から廃棄が命じられた。<sup>60)</sup>具申書が英一から直接元田大臣に渡され、12月16日井出監督局長に大臣の強い意向とともに降りて来たものかと推測すると、次のようなまったく逆の指令が鉄道省当局から正式に発出された背景を理解しやすい。「本件ハ本業タル鉄道ニ直接関係ナキ事業ヲ兼営スルモノナレトモ…本業タル鉄道ニ対シ別ニ著シキ影響ヲ与フルコトナキニ依リ、伺案ノ通処理可然ト認ム」<sup>61)</sup>

#### (4) 新延炭坑の譲渡

炭坑経営は休戦の影響がやや遅れて波及してきたようで、8年中の炭価は鹵30円台と、第一次世界大戦の勃発した3年に比して3倍の高水準を維持していた。筑豊の炭坑数も214坑に達して、空前の黄金時代を謳歌していた。しかし9年下期にはいと経済恐慌の影響を受けて石炭の需要は激減し、「生産の過剰と資金の欠乏とのために各炭礦は事業を整理縮小し、従業員を整理する等、一転して深刻な不況に見舞われ」<sup>62)</sup>たのであった。この時期は深刻な不況に見舞われた各炭礦は事業を整理縮小し、従業員を整理した。たとえば「第一次大戦の反動による不況時代は大正九年の春にはじまって漸次深刻の度を加え…極度に経営困難となった」<sup>63)</sup>

嘉穂郡鎮西村の鎮西炭礦では中島鉱業代表取締役の中島徳松に経営の引受けを懇願したが、当の中島鉱業すら「大正九年、佐賀炭礦を朝鮮銀行へ譲渡して朝鮮銀行の負債を整理したのを手はじめとして、平山炭礦は中村精七郎翁へ引渡し、副田は売却し、大任は蔵内翁に引渡し、これによって一切の負債を皆済まして飯塚炭礦一本で行く<sup>64)</sup>」という抜本的な整理を断行中であった。「九州地方に於ける二流以下の小炭礦は引続ける不況に経営難に陥るもの漸次増加し六月中旬までに閉鎖せしもの百十余坑に達し、今後も尚増加傾向にある」(T9.6.29K)といった情報は英一の地元神戸の一般紙にも掲載されている。

英一が新延炭坑の年間石炭販売収入62.4万円の根拠とした「年出炭額四万八千屯、一屯売価十三円」と予想した炭価は大正8年の30円台から、9年には半減して15円台、10年には10円を割り込んで9円台へと「炭価は釣瓶落しに崩落<sup>65)</sup>」したから、もし新延炭坑の予想した「出炭費其他諸支出一切一屯ニ付十一円」が不変(実際の出炭量13,410噸は出炭予想の48,000噸の3割未満にとどまったから、噸当りの出炭費は割高になるはず)だと仮定しても、新延炭坑も10年には既に赤字に転落していた可能性もあろう。

その後新延炭坑の鉱業権の移転状況は新鞍拓生氏のご教示によれば、大正11年9月播州鉄道(播水ではない)→神沢又市郎(別府)<sup>66)</sup>→昭和4年9月藤井伊蔵(若松)外一名<sup>67)</sup>→8年9月藤井鉱業<sup>68)</sup>となっている。新鞍氏の整理・調査された『麻生家文書』書簡目録によれば譲受人の神沢は大正13年9月別府市長に就任し、昭和3年5月同市長を退職するまで、麻生太吉宛に少なくとも20通の書簡を寄せるなど、別府に別荘「山水園」を始め20万坪の広大な地所を有する著名な鉱業家・麻生と交流があった人物であるが、播鉄からの買鉱経緯は未詳である。神沢からの譲渡先・藤井伊蔵(S16銀下P113)は藤井鉱業、深坂炭礦、九州採炭、太平鉱業等の社長を兼ねる若松の中小鉱業主で、昭和7年の満鉄撫順炭問題でも輸入反対運動の急先鋒を務めた。

上記の新鞍氏のご教示により判明した鉱山側資料上での事実、以下の諸点で英一側(播水)が鉄道省に提出した資料等と食い違っている。

①鉱業権が播水でなく、播鉄(のまま)となっている点。

10/3の播水 BS は三方川水力工事仮出金15.1万円等とともに炭坑部勘定82.5

万円、PL は炭坑部収入57,980円（炭坑部勘定に対し7.0%に相当）を計上する。

（9 回営）

②既に大正11年9月鉱業権が神沢又市郎に移転している点。

移転後に相当するはずの11年12月25日付で播水の後任社長の酒井栄蔵は鉄道省に対し「未収入金中本期ニ於ケル伊藤商事株式会社ニ対スル金三万三千百七十七円七十四銭ハ兼営ニ係ル炭坑委託経営料ニシテ該興業費八十二万九千四百四十三円五十六銭ニ対シ年八歩ノ割合ヲ以テ契約シアルモノナリ。而シテ每期累増スルハ之ヲ納入シ得サルニ因ル。該炭坑ハ現今廃坑同様ノ状態ニシテ、収支相償ハサルヲ以テ他日相当処理ヲナス予定ナリ<sup>69)</sup>」と報告しており、「現今廃坑同様ノ状態」であるが、売鉱を意味する「相当処理ヲナス予定」はあくまで「他日」としている。

③本当に「廃坑同様」で鉱業権対価もゼロに近い無価値の山だったか否かの点

前掲の『鉱区一覽』によれば新延炭坑の鉱産額は大正10年13,410噸、11年6,936噸…昭和3年8,319噸、4年2,845噸という具合に、英一の皮算用の「年出炭額四万八千屯」と比較すると、その6～28%の低水準にとどまったとはいえ、少なくとも鉱産額ゼロの「廃坑」ではなかった以上、神沢は幾許かの対価を支払って取得したものと考えられる。（前掲『筑豊石炭鉱業組合月報』記載の鉱区異動は競落の場合はその旨が明記されるから、播鉄→神沢は任意の売却のはず）

しかし12/9 播水 PL は炭坑部欠損金819,443円（前期末炭坑部興業費から1万円を控除した金額）、受取手形欠損金235,376円、三方川水力電気工事仮出金欠損金142,500円を、BS は炭坑部清算金として備忘価格に近い1万円を計上する。土井副社長も播水総会で「前回ノ定時株主総会ニ於テ回収可能ノ見込ニテ計上シマシタガ、其後之ガ回収ニ努メマシタケレ共、全然不可能デアリマスカラ、之ヲ欠損ニ、又受取手形四万八千九百二十七円四十八銭ハ之モ回収不能ノモノデアリマスカラ欠損ニ計上シテハ如何<sup>70)</sup>」と、回収は「全然不可能」としている。

これらの矛盾を説明できるだけの適切な資料を欠くが、播水側が全くの虚偽報告をしていたわけではないと仮定すると、播鉄の以前の鉱業権者である英一（実質的には伊藤商事か）が例えば播鉄と播水とに対して二重売買でも行った結果、後順位の播水は播鉄からの善意・無過失の取得者たる神沢に対抗できず、「回収不

能」となったとでも考えるほかはないのではないか。同系への二重売買まであえてしたかどうかの真偽はともかく、播水社長の立場で新延炭坑の買収・兼営を申請した英一は同炭坑が自己所有に係るものとの肝心の説明をしておらず、その点だけでも欺瞞に満ちた申請であったと考えられる。

さらに神沢の新延炭坑経営に関して新延炭坑を譲受後になぜ「大成炭坑」という地名でもない名に改称したのかとの疑問が残る。もちろん炭坑名は鉱主の変遷とともに改称されることが多々あり、それ自体は不思議はないものの、「大成炭坑」の「大成」なる言葉が大正4年英一が加古川の劇場・寿座を買収、改称、「乗客誘引ノ用ニ供スルタメ諸興行ヲ経営<sup>71)</sup>」した「大成座」（播鉄所有）という英一好みの劇場名と偶然にも一致するからである。また鉱業権が神沢に移転した大正11年9月の翌10月の播鉄総会で英一は専務を辞任したから、炭坑の神沢への処分は英一時代の最後の仕事であり、処分の時期、相手先、金額等は英一自身で決定できたものと考えられる。また当時、同炭坑の名義を破綻寸前の播鉄の名前のままにしておくと、債権者に差押えられる危険が高かったともいえる。こうした点から、英一と神沢との接点を明示はできないものの、可能性としては英一が何らかの意図を以て緊急避難的に神沢名義に変更したこともありえようか。

(5) 海運事業関係 伊藤の炭坑経営と密接に関係した事業に海運事業がある。まず播鉄ではその他の付帯事業として6年6月30日定款改正の認可を受けて「付帯事業トシテ…運送業ノ経営」を追加（13回営）し、出張所を若松港にも置いた。播鉄は「沿道総テ工場地ニ適ス、空気水質日本有数ノ良地ニ富ム、全国鉄道輸送連絡ト海陸連絡モアリ<sup>72)</sup>」と海運兼営を大いに宣伝した。BS上の「海運及陸送業」資産の推移はT 6/9には3.5万円、7/3 4.3万円、7/9 15.9万円、8/3 34.9万円を計上、現実に第三相生丸（58総トン、8年5月製造）などの船舶も所有した。PLにも上の「海運及陸送業収入」も6/9 6.3万円、7/3 6.5万円、7/9 10.6万円、8/3 14.2万円、8/9 8.4万円、9/3 8.1万円、ピーク時の9/9には18.7万円を計上、営業費を差引いた営業利益は8.5万円にも達した。（各回営）播鉄整理後、この播鉄の海運部門は日進海運会社へ船舶ともども売却され<sup>74)</sup>た。

一方播水は遅れて10年2月13日の株主総会で定款を改正し、目的に「前項ノ付

帶事業トシテ、一、炭山ヲ所有シ採掘又ハ販売スルコト。一、水力并ニ火力ヲ以テ電氣事業ヲ経営シ電燈電力ノ供給ヲ為スコト。一、陸海運送業並ニ倉庫ヲ經營スルコト。一、娛樂機關ノ事業ヲ經營スルコト。一、同種事業ノ有価証券ヲ所有スルコト」を追加した。鉄道省の担当官が作成したメモによれば、「兼業<sup>75)</sup> 海運業資金50,000円 財源借入金、石炭採掘及販売業資金800,000円 財源増資」とあり、借入金5万円を財源として海運業兼業を立案していたことが判明する。先行した播鉄にならって「陸海運送業並ニ倉庫ヲ經營」しようとした播水は終点の網干港駅構内に遅くとも7年11月25日時点では「用地内に海運部事務所及倉庫<sup>76)</sup>」を配置していた。播水とは別に播鉄も海運を兼営していたので、7年当時の網干港駅構内の「海運部事務所」は播鉄に所属していたのかもしれない。その後の播水の海運部門譲受の経過は未詳ではあるが、播水は11年3月31日現在、4936円の「海運会社敗訴支払金」を仮出金として処理<sup>77)</sup> しているので、海運会社との間で裁判沙汰となるほどのなんらかの深刻な対立関係に陥り、しかも敗訴し、4936円もの支払を余儀なくされた事実があったことは間違いない。

注1) 猪木土彦は東京府豊多摩郡淀橋町柏木に居住し、8年10月21日播鉄取締役役に就任、鮮満木材車両取締役等を兼ねた。(T10銀上P21) 播鉄では直前の8/9期に突然400株主として登場しており、外部からの派遣など専務就任の背景は未詳。

注2) 播鉄「土地家屋買入の件」(T9.3.20付監督局長宛播鉄回答書)に添付された一件書類

注3) 5) 6) 7) 兵庫県農工銀行『三十年誌』S4、P25、74、19、36

注4) 前掲『全国株主要覧』T5、P9~10

注8) ①神戸駅の移転候補地、②青物市場候補地、③兵電市内乗入線のターミナル予定地

注9) 播州倉庫が改称したと考えられる農工信託はT6.9設立、資本金150万円、本店神戸市栄町通5丁目、支店加古川。T9の農工信託役員は取締役ト部兵吉(表7)、伊藤孝次(播州倉庫取締役ほか多数)、石井亮三郎(東播銀行支配人、石亮合資、播鉄大株主2264株、播州倉庫取締役)、稲岡猪之助(播

州倉庫取締役ほか、表7)、西村徳三郎(舞子土地専務)、中江忠兵衛(西伊藤銀行取締役ほか)、平塚嘉右衛門(舞子土地監査役)、竹馬隼三郎(垂水住宅土地取締役)、監査役には藤田卯兵衛(垂水住宅土地監査役)、畑昌愷(播州倉庫監査役)、尾崎寅治(櫛尾野商店取締役、播水、播州倉庫、加古川化学工業、播磨紡織各監査役、T13.播水新株100株、神取40株)、松井善太郎、豊田桂太郎(T9銀P47)

注10) 鳴滝幸恭はM22~34神戸市長、市長退任後、貿易倉庫社長、農銀頭取、神戸銀行社長等を兼務(前掲『兵庫県人物史』P258)

注11) 小磯吉人は小寺泰次郎の女婿、小寺謙吉の「父執」(前掲『兵庫県人物史』P280)

注12) 13) 14) 麻島昭一「神戸所在の諸信託会社」『信託』復刊54号、P93、70、85

注15) 17) 40) 前掲『会社通覧』P334、688、360

注16) 追原頼太は日本農芸肥料、湊川拓殖、日本ピート肥料、神戸肥料各取締役(T9銀上P175)

注18) T12.4.21付播鉄播丹間「覚書」、文、播丹

注19) 商工省編『全国工場通覧』S6、P529

注20) 小林晋一(大阪)は大同徴収課長等歴任し、T9は内務部次長兼秘書課長、播丹創立総会で詮衡委員10550株の2位株主

注21) 岡田鎮一郎(大阪市南区)はT14時点で加古川製紙取締役

注22) 沼田静治は印南郡東志方村、志方銀行頭、国包銀行取締役

注23) 本郷寅藏は曾根銀行支配人から関西土地興業、浪速信託各社長、神戸大同土地、山陽興業各監査役、播水50株

注24) T15.2.1付佐藤雄能宛安田寅次書簡、文、播鉄

注25) 英賀福藏はM20年生れ、S10は三十八神戸支店長心得、11年三十八神戸支店長、S16神戸信託監査役就任

注26) 27) 28) 業務、総務両課長回議書、T13.9.27佐藤雄能立案、文、播鉄

注29) T11.11.8官報3082号

注30) T15.2.1付佐藤雄能宛安田寅次書簡、文、播鉄



- 注31) 『福岡県地理全誌 卷之五十九』M5、『福岡県史近代史料編 福岡県地理全誌 (三)』P169
- 注32) 西川鉱業所第一、第二坑23、949屯、神田炭坑27、226屯、藤井鉱業の大成新目尾炭坑17、896屯 (『福岡県案内』M43、P112)
- 注33) 『筑豊石炭鉱業組合月報』150号、T5.12、P93、同157号、T6.7、P86、同159号、T6.9、P89、同166号、T7.4、P94、同183号、T8.9、P83 (九州大学石炭研究資料センター蔵)
- 注34) 井上鉱業の所在地たる京都市上京区東竹屋町70に住み、7500円を出資する社員の井上俊雄 (官吏) は山口県阿武郡川上村・明木村に遠谷鉱山を大正6年以前より所有していた。大正7年に英一は同村所在の明城銅山を中島新一 (大分県速見郡) から取得しており、ここでも英一と井上側との接点が認められる。(『福岡鉱務局管内鉱区一覧』大正6年P62、7年P64、九大石炭研蔵)
- 注35) T9.12.7付申請書、文、播水
- 注36) 「筑豊石炭調査」大正6年11月日本銀行門司支店 (日本銀行『日本金融史資料 昭和統編付録第四巻』昭和63年、P694所収)
- 注37) 大正8年時点で益隈炭礦が所有していた福岡県嘉穂郡の3鉱区は大正9～11年日米信託に移転したが、鉱業代理人は益隈炭礦代表取締役の坪田十郎が務めていた。(『筑豊五郡石炭採掘鉱区一覧』筑豊石炭鉱業組合事務所、大正11年7月1日現在、P18～21)債務保証業の大手である日米信託も反動恐慌で「諸方面ニ過大ニ信用ヲ膨脹シタル結果保証債務巨額ニ上リ、到底同社資力ヲ以テハ完全ニ之レヲ履行シ得ザル状態」(前掲『顛末』P266)に陥っていたから、日米信託への採掘権移転は益隈炭礦も日米信託保証で資金調達していた結果の担保権実行かと推定される。
- 注38) 鉱山懇話会編『日本鉱業名鑑 (内地)』大正13年改訂、P268～273、T9銀P59、61、70
- 注39) 72) 前掲『帝国鉄道要鑑』4版、T7、広告
- 注41) T11.12.25付監督局長宛播水酒井栄蔵社長答申、文、播水。なお酒井社長の説明から実質的な新延炭坑の経営主体は「炭坑委託経営料」を播水に支

払っていた伊藤商事と解釈したが、炭坑経営のノウハウの乏しい、遠隔地の伊藤商事（又は英一）がはたして直接経営できたかどうかという疑問を新鞍氏から提起された。大正10年7月1日現在の新延炭坑の採掘営業者・島本利吉郎の所属・身分等が未詳なため、島本による斤先掘ないし請負掘であった可能性を否定できないと考える。

注42) 伊藤製鉄は資本金200万円、うち50万円払込、本社神戸市元町通、工場岡山県阿哲郡新見町（前掲『会社通覧』P330）

注43) 『工場通覧』T9.1 現在、P857

注44) 西川鉱業所第一、第二坑23、949屯、神田炭坑27、226屯、藤井鉱業の大成・新目尾炭坑17、896屯

注45) 62) 63) 64) 65) 『中島徳松翁伝』（前掲『石炭研究資料叢書』6号、1985. 3、P49～50所収）

注46) 前掲「顛末」P266

注47) T9.12.25決、文、播電

注48) T9.12.7付申請書、文、播電

注49) 54) 59) T9.12.7付伊藤社長名の鉄道大臣宛具申書、文、播電

注50) 前掲『三十年之回顧』P356

注51) 「土地家屋買入の件」文、播鉄

注52) 53) T9.12.7付申請書添付書類、文、播電

注55) 56) T9.12.9付文書、文、播電

注57) T9.12.23文書、文、播電

注58) 12.16付の鉄道省の受付印と同日付の監督局の受付印とが押されたことからの推測

注60) 廃棄が命じられ、存在しないはずの文書が『鉄道省文書』に編綴されて残った理由は、編綴ミスではなく、「局長ノ命」に対する事務方の反発が強く、事務官の自己正当化本能に基づき、事の真相を後世に残そうという意図が強く働いた可能性もあろう。

注61) 「播州水力電気鉄道会社石炭採掘販売業兼営ノ件」文、播電

注66) 『福岡鉱山監督局管内鉱区一覧』（九大石炭研蔵）T11.7.1 現在、P13、

『筑豊石炭鉱業組合月報』220号、T11.10、P940（九大石炭研蔵）。なお採掘権者・神沢又市郎時代の採掘営業者は神沢光雄

注67) 『筑豊石炭鉱業組合月報』304号、S4.10、P1175（九大石炭研蔵）

注68) 『筑豊石炭鉱業組合月報』352号、S8.10、P622（九大石炭研蔵）。藤井鉱業は昭和6年1月設立、資本金30万円、本社若松市修多羅、鉱業所西川村（S10諸下P549）。9年3月同社所属の大成炭坑は北東側に近接する同社の新目尾（しんしゃかのお）炭坑と統合され、藤井炭坑と改称。同社は14年1月日満鉱業（大正8年5月設立、資本金500万円）に合併された。大成を統合した後の新目尾炭坑（西川村永谷30）の地質は第三紀夾煤層、炭質は弱粘結性、熱量6、300～6、800、採炭法は前進式長壁法であった。（久保山雄三編『石炭大観』S16、公論社、P553）、戦後の新目尾炭坑（西川村新延、鉱業権者日満鉱業）の出炭は23、607噸、発熱量5、478カロリー、24年4月平均の発熱量5、434カロリーであった。（久保山雄三『炭鉱めぐり（九州の巻）』S25、公論社、P321）

注69) T11.12.25付監督局長宛播水酒井栄蔵社長答申文、播水

注70) T13.4.30播水21回決、文、播水

注71) T5.3.20付総理大臣宛播鉄「兼業予算変更届」、文、播鉄

注73) 逓信省『船名録』T9、P130。神戸造船所所有の相生丸（21総トン、7年12月製造）、第二相生丸（22総トン、8年6月製造）も同一シリーズと考えられる。

注74) T13/9期においても播鉄の未収入金として、経営不振のため播鉄への借地料を滞らせた日本綿布に対する貸地料567円とともに、日進海運会社への船舶売却代残金2万円が残存している。（播鉄「未収入金明細表」T13.9.30現在）S4の『船名録』では第三相生丸は日本セメント、相生丸は因幡孝介、第二相生丸は九州の小林徳一郎を経て三井物産の所有。

注75) T10.4.5付「社債募集ノ件」、文、播水

注76) T9.9.15付鉄道省宛設計変更届、文、播水

注77) 播水「仮出金明細表」T11.3.31現在、文、播水

## 第6章 鬼怒川水電の乗取りと 増田ビルブローカー銀行破綻

### I. 鬼怒川水電買占め

鬼怒電の配当率は大正6年上期までおおむね5%で推移したが、6年下期から6%、7年上期7%、7年下期から8%と、相次いで増配した。これを受ける形で鬼怒電の株価（50円払込）の高値は4年（35.0円）から6年（40.0円）にかけて、払込額を大きく割り込んでいたものが、増配となった7年には一挙に60円、8年には82円にも暴騰した。ちょうどその6/11期の鬼怒電の兵庫県株主は前期比21名、19,542株も増加したが、英一と三宅利平1200株の2名分だけで増分の83%を占めた。

英一とはほぼ同時期に鬼怒電株を買進んだのは三宅、末正、畑、武田ら親密な播鉄株主と、尾崎寅治、野喜治良らの尾野商店（株式仲買店）パートナーらであり、お互いに緊密な連携をとっての共同作戦を展開した可能性が高いと見られる。英一らがなぜ播州から遠く離れた鬼怒電株に目を付けたのかは未詳であるが、英一と鬼怒電とを結びつけた重要な接点としては藤野正年（英一も参画した関西土地信託取締役を兼務）と増田信一（増田ビルブローカー銀行頭取）の二人あたりが考えられる。明治45年6月鬼怒電監査役に就任した増田が、4年6月26日に辞任した際、藤野が鬼怒電取締役に就任した<sup>1)</sup>ことから、この二人の間には代替関係があったと考えられる。英一が買収した龍電の筆頭株主が矢野莊三郎であり、増田は矢野とは一体関係にあったから、当然に英一と増田も何らかの交渉があったものと見られる。（後述）

鬼怒電社長の利光鶴松の自筆の手記によれば、大正5年夏、鬼怒電の社債の借替に際して「増田信一氏等ノ尽力ニ依リ」「増田信一氏ノ紹介ニテ小山健三氏最尽力セラレ」、大阪の三十四銀行（現三和銀行）頭取の「小山健三氏…社債全部六百万円ノ借替ヲ引受ケ」た結果、「其後会社ハ大阪銀行家ト親密ニナリ<sup>2)</sup>」鬼怒電と大阪の銀行筋との関係が深まっていった。利光の手記によれば、「大正五年六月ハ…大阪株主ハ予ニ請求書ヲ送りテ云フ 鬼怒川株式ノ暴落ハ重役ノ不信任ニ原因ス

ルヲ以テ面会ノ上相談シ度キコトアリ<sup>3)</sup>」として、「重役改造ノ申込ヲナシ、新ニ大阪ヨリ二名、東京ヨリ二名信用高キ人物ヲ重役ニ推薦スルノ希望ヲ陳<sup>4)</sup>」べたといわれる。利光は結局「大阪ニテ良キ候補者ガ見当ラズ大阪ノ重役改造論ハ空論ニ終ハリタリ<sup>5)</sup>」と片付けているが、金策に尽力して、重役を要求した大阪側には、「向ふ鼻の強い、自己信念の人一倍固い」ため「馬車鉄時代の同僚を、或は姻戚者」を並べた「自己中心の専制政治の実行に便ならしむべき重役団」(S 6 . 4 . 18 T) との批判も根強い利光の独裁体制に強い不満が残ったかもしれない。こうした折も折、その独裁者たる当の「利光を追い出して…社長になろうとした」伊藤の買占めが開始され、その主な資金源(残余は英一身が社長の神戸取引信託等)は増田信一の主宰する増田ビルブローカー銀行(以下増田 BB と略)であったから、英一が先に鬼怒電の持つ利権に惚れたか、増田にそそのかされたのが先かは別としても、両者が提携して利光の追出しに取り掛かったことは間違いなからう。利光の手記には過去の岩下清周の言動に向けられた言葉であるが、「予ハ鬼怒川水力事業ノ為メ最善ヲ尽シ居ルモノニシテ、何人ガ予ニ代ルモ予以上ノ成績ヲ挙グル事ハ不可能ナリ…会社ノ事情ニモ通曉セザル人ガ新ニ社長トナリタリトテ到底難局ヲ救フ能ハザルハ明カナリ<sup>7)</sup>」と「自己信念の人一倍固い」利光の絶対の自信を誇示する箇所があり、これはそのまま「会社ノ事情ニモ通曉セザル」伊藤が「利光を追い出して…社長になろうとした」行動を、「世ニ所謂会社荒シ<sup>8)</sup>」と認識して、激しく闘志を燃やしていた言葉にも聞こえる。

英一は「実業界に向って驀に猪突し始め…新宮電車の買収、篠山軽鉄の乗取り、遠く征しては高野電車を陥れ、鬼怒川水電を攻略」(異 P 93) し、6 年 12 月 27 日鬼怒電取締役役に就任した<sup>9)</sup>。英一の買占等により、平和反動安値(T 7 . 12)では 60.0 円であった鬼怒電株(50 円払込)は投機銘柄化して、白熱相場高値(T 9 . 3)では 73.0 円にまで高騰した<sup>10)</sup>。9 年 3 月の定期取引相場では月初寄付 70.5 円、最高は 3 月 4 日で 78.4 円であった<sup>11)</sup>。経済雑誌も「常に其発電力を秘密に附し…不明なるが為」「前途を觀測するは頗る困難」(T 8 . 1 . 1 D) な鬼怒電の計画は「甚だ樂觀に失する嫌があり、若し之を信じて其株式を思惑する者があれば、飛んだ手違いを生ずる」(T 7 . 4 . 15 D) として、投機筋に盛んに警告を発した。

T 9 / 5 の株主名簿には 18 位 3700 株の大株主として「借金王」として悪名高い石

井定七の義弟・石井竹三郎が突如登場するが、彼はこの直後に義兄のダミーとして鐘紡新の大量買占めに失敗し不渡手形を出して、石井定七破綻の直接の原因を起した札付きの大株仲間買人である。大正バブルを象徴する相場師の石井が最後に登場したことは、鬼怒電株の超過熱ぶりを如実に示すものと考えられる。

伊藤の買占めがピークに達した9年3月15日に第一次大戦の好景気が終って株価が大暴落（ガラ）、その直接の影響として4月7日英一の買占を支えていた「其経営方針が兎角の評ある」増田 BB が破綻した。<sup>12)</sup>ガラ以後再開した兜町でも「市場売物が山のように出て混然雑然、もう手のつけられぬ状態となり、とうとう中止」(T9.4.15TA)となった4月14日には英一・増田・石井らが買占めに関係していたため「鬼怒川水電十円の暴落」(T9.4.15TA)となり、払込の50円を大きく切り込み最低の41.5円をつけ、前月の最高78.4円との差は36.9円にもなった。かくして「第一次大戦後のブームはまったく平静に復し、伊藤英一の所有している…株式はまったく反古紙同然になった」<sup>13)</sup>ため、英一に融資している多くの銀行は担保割れに陥り、大打撃を受けた。たとえば播鉄の鉄道資金等を一手に供給していた勸銀の貸付担当理事小林営成も松本中学以来の同窓生である五島慶太に「何とかして君の力によって播丹〈州の誤り〉<sup>14)</sup>鉄道を再建してくれ」と窮状を訴えている。

一方、鬼怒電サイドでもパトロンを失った伊藤らの買占めた巨額の鬼怒電株式が宙に浮き、買占めの再発を恐れた利光らが鬼怒電株の受皿として（第一次）鬼怒川興業（9年10月鬼怒電の姉妹会社として資本金1800万円で設立されたが、早くも10年3月23日本体との合併を可決）、<sup>15)</sup>鬼怒川水力電気掖済会、利光同族、森久保同族（業務執行社員は鬼怒電常務、鬼怒川興業取締役の森久保善太郎）等を次々と設立した。このうち利光同族合名は本社を上大崎の利光鶴松邸内に置き、9年10月資本金50万円で設立され、代表社員利光鶴松（35万円出資）、社員利光豊（利光鶴松夫人）（15万円出資）であった。（T11銀P106）従来から「元来予ハ多数ノ株式ヲ有シ、名誉モ財産モ鬼怒川水力事業ニ賭シ居ルモノナリ」<sup>16)</sup>と自負していた利光、森久保ら鬼怒電トップが大量の投資資金調達上の便宜からも同族会社を急遽設立せざるを得ないほど、当時は鬼怒電株を必死に買集めていたことが判明する。10年3月23日鬼怒電は総会で姉妹会社の鬼怒川興業合併を決議、株主割当の

残余3万株は鬼怒川水力電気株式会社に譲渡（寄付）することとし、6万株は役員一任を決定した。<sup>17)</sup> 利光は小田急でも小田原急行土地を設立した直後に合併という手法を使っているので、この奇妙な鬼怒川興業（第一次）設立も英一の持株比率の低下を狙った第三者割当増資の変形ではなかったかと思われる。英一は兵電等、他の関係事業を手放す一方で、鬼怒電には相当の執着があったとみえ、11年6月7日鬼怒電取締役辞任まで、役員ポストを死守していた。

## II. 増田ビルブローカー銀行の破綻とその波及

### 1. 増田ビルブローカー銀行の株式投機

株式仲買が「これまで株を買えば儲かるものときまって、買った株を銀行に預けては盛んに買って来た」（T9.4.8TA）と証言するごとく、当時の増田BBは「己が機関店たる速水株式店をして盛に売買を為<sup>18)</sup>」すなど、関係の深い株式仲買人等に株式受渡資金、投機資金を融通していたと考えられる。速水株式店は合名会社時代の増田銀行で支配人だった速水本道が「名義人ナレドモ事実ハ増田信一ノ出資ニシテ増田銀行ノ機関店<sup>19)</sup>」であった。しかし「大正九年三月株式暴落ノ打撃ヲ被リ破綻整理中取引所ニ多大ノ損失ヲ与ヘ除名<sup>20)</sup>」された。したがって、増田は8～9年の投機ブームには「速水某の名義を以て株式仲買店を経営<sup>21)</sup>」していたもので、増田BBは株式仲買業務にも実質的に進出していたといえよう。同行の社長増田信一は「銀行業者として最も慎むべき株式投機に興味を有し<sup>22)</sup>」、「同氏は近年矢野某等と提携して株式の思惑を試みて失敗<sup>23)</sup>」したといわれる。この「矢野某」とは矢野鉰業の経営者で、前述の通り英一が買い占めた龍電の大株主としても登場した矢野莊三郎である。英一と鬼怒電を結び付けたキーパーソンの増田と矢野が「提携して株式の思惑を試みて失敗」したわけで、同じく増田・矢野らと「提携して株式の思惑を試み」た英一にも当然に連鎖反応が起ることは不可避であったと思われる。管見の限りで当初の増田破綻報道には提携相手として英一ないし播鉄、鬼怒電等の名は見られないが、「株式投機に興味を有」する増田信一が英一による鬼怒電株買占めに加担し、増田BBの信託部で鬼怒電株を担保に巨額の投機的貸付を敢行したとしても不自然ではあるまい。

増田BBは藤本ビルブローカー銀行とならんで大阪のビルブローカー界の双

壁であり、これは「かねて内々最も怖れていた反動の打撃の金融機関への引火が遂に事実になったもの<sup>24)</sup>」として各方面に衝撃を与えた。まず「今日、大阪の某銀行の破産説が立ったので、大乱調子となった」(T9.4.8TA)株価、ついで「六日夕刻より七日にかけて某銀行〈増田 BB〉の破綻、暴落し、三品相場は折角の出鼻を折られて前場より後場へ続落を告げ」(T9.4.8M)るなど、各種の商品相場に波及し、4月後半には地方の小銀行を中心に取付が頻発し、株式市場、商品市場、金融市場を巻き込む恐慌状態を招来した。東京朝日は「こんな情勢では株は勿論、綿糸も今日の立会いは困難であろうし、米も雲行きが怪しい。すべてにかく買方が精も根も尽きて青息吐息の姿となり、ほとんど買方全滅の惨状を呈して来たのも、ツマリは好景気に浮き浮き乗せられたそのタダレが今やっと来た訳だ」(T9.4.15TA)と反動恐慌を報じている。

また「三十四銀行の新株を引受けて売出しを為せしも不成績に終り多数の同株背負込みとなり<sup>25)</sup>」、本業の銀行業務の貸付金でも「福喜洋行の滞貸、大阪造船所の保証債務等三四件の不良のものある<sup>26)</sup>」ため、「貸金回収不能の為め手許頗る逼迫<sup>27)</sup>」、9年3月15日の東西両株式取引所の相場下落、商品市況悪化等「金融緊縮の影響を受け前月来手許次第に不如意に向かい、先月末神戸支店のごときはすこぶる手許逼迫…翌日払いコールは取り立てのみにて、新規出束手皆無のためますます窮状に陥り」(T9.4.8C)、さらに機関店の「速水株式仲買店失敗破綻の為め世間の悪評を招き三月下旬に入り取引関係ある各銀行より漸々預金を回収せられ、四月に入りては一層急激<sup>28)</sup>」となった。当時高橋蔵相も「銀行業者の中にも、或いは得意先の状態を顧みる暇もなく、自己本位に流れて、やや急速にその資金の回収を図る」(T9.4.15TA)傾向あることを警告している。そしてついに9年4月7日「二百七十万円の交換尻に対して資金調達途絶え」(T9.4.8C)、銀行の手形交換尻決済不能に陥ったとされる。同行の資金状態は「貸借残高は詳細不明なるも三千万円乃至四千万円見当なるべく債務はコール、借入金、預金にて、債券はコールの貸し付けなるが、既に警戒されただけにて借入金の多くは有担保にて、無担保は預金及びコールの一部なるべく、随って無担保は二、三百万円以上多くを出でざる模様」(T9.4.8C)と推測されていた。中外商業は同行破綻の原因として「過般某会社株券一万株近くの旗売りにて五、六十万円の損



害を被りたる上、新株に固定せる資金尠なからず、加うるにこのほどの株式仲買速水商店の大株大新、鐘紡等の大肩替りに於いても増田関係のもの少なからずとの事もあり、さなきだに金融緊縮の折柄とて各銀行とも警戒嚴重にして、コールは取り立てのみにて更にコールを出ださざるより、ついに窮状を曝露せるに至れるもの」(T 9. 4. 8 C)と報じている。野村銀行の平井瑗吉も「例の中華企業の設立せられるや、重役の割込運動に功を奏せず、其腹いせにやった、同株の四十円所よりのハタ売が却って大失敗を招<sup>29)</sup>いたのが致命的打撃と見ている。この中華企業は同行取締役の三上豊夷も取締役を兼ねていた。

東洋経済は「昨日迄は思惑が当って、意気揚々、傍若無人に振舞ふてゐた商工業者が、成金輩が、今日は、打萎れ涙を流して、政府及び日銀に手を合せて救済を哀願せる醜体」(T 9. 4. 17 T)と皮肉るが、「最早如何ともする能はざるに至れり依て増田氏は六日以来日本銀行並にシンジケート銀行たる三十四、浪速、山口、住友、鴻池、加島、近江の七行へ対し救済を懇願<sup>30)</sup>」、「同行窮状を見たる組合銀行委員は昨日会合、協議し、本日正午、日本銀行支店に於いて委員は下相談をなし、午後、更に委員会を開きて善後策を協議」(T 9. 4. 8 C)、鴻池、近江、山口、浪速、加島、三十四、住友の「市内の七大銀行が徹底的援助を声明」(T 9. 4. 9 M)し、「債務者に対しては増田銀行の苦衷を訴えて至急に返済を乞ふ事」(同上)を決定するなど「有力銀行相協力シテ増田救済ノ途ヲ講シ、之カ為メニ同行ハ辛ウシテ破綻ノ危機ヲ脱<sup>31)</sup>した。「私財全部の提供は勿論、実弟増田政治氏の不動産をも提供すべきを述べ誠意を披露<sup>32)</sup>した「増田社長は…今回の不始末の責めを負いて辞任を声明」(T 9. 4. 9 M)、同行の田坂正生取締役も「今度の不始末の責めを負うて社長が退くのは無論のこと、一半の責めを分かすべき重役もまたこの際辞し、新人物によりて経営し行内の空気を一新するとともに、従来の営業方針を根柢より改革する」(T 9. 4. 9 M)と語り、公約通り「増田は自己の財産約五百万円と、実弟政治氏の資産百万円を提供<sup>33)</sup>した。「有志銀行団から委員が選ばれ<sup>34)</sup>」、「救済各銀行より委員を派遣して業務を監督し債務を整理<sup>35)</sup>した結果、同行の債務は当初「詳細不明なるも三千万円乃至四千万円見当」(T 9. 4. 8 C)と推測されていた通り、34~35百万円の範囲に収まり、「可なり回収の見込ありとの事にて爾後整理の経過可なり良好なるが如し<sup>36)</sup>」と楽観視されたものの、結局増

田 BB は14年9月8日「臨時株主総会ヲ開催シ任意解散ノ件ヲ付議可決シ清算人五名ヲ選任<sup>37)</sup>」したが、後継銀行は存在しない<sup>38)</sup>。

## 2. 増田破綻による不良債権の回収強行

増田 BB と英一等との関係は、その取引関係の一端として播水の「保証債務に対する支払並被差押金」6469円の中で増田 BB 分が547円となっていることが判明している。つまり英一らが振出した手形に播水が裏書保証を行ったが、「振出人ニ於テ手形債務ノ履行ヲ怠リタル結果<sup>39)</sup>」、裏書保証した播水も増田 BB 外の債権者側からの強制執行を受けて訴訟沙汰となり、播水が「示談解決ノ為」支払ったのが増田 BB 分547円ということである<sup>40)</sup>。

従来は非公開だった日銀内部資料によれば「増田銀行ノ債務者中最モ多額ニ債務ヲ有スル<sup>41)</sup>」のが「伊藤英一関係（伊藤個人、伊藤商事、浪速信託合計四百三十万円<sup>42)</sup>）」であった。[表-12]の通り、伊藤商事は2,460株、浪速信託は41,490株の鬼怒電大株主であり、両社の鬼怒電買占め資金も増田 BB 等からの調達であったことが判明する。

このことは当時から公表されていた播鉄、鬼怒電等の株主名簿の分析（[表-12]）からもある程度推測可能である。すなわち播鉄のT9/9期（19回）に増田 BB（頭取上杉松太郎）が1500株の大株主として登場する。増田 BB は次節に見るように9年4月7日破綻し、「救済各銀行より委員を派遣して業務を監督し債務を整理<sup>43)</sup>」しつつあったから、場違いな播鉄への投資は当然に新規投資であるではなく、貸金整理の一環として、たとえば英一等への貸金の担保として徴収していた播鉄株式を代物弁済として取得した可能性が高いと考えられる。同じく増田 BB は鬼怒電のT9/11期に突然64,039株もの筆頭株主として登場し、11/5期には77,538株にまで増加している。逆に英一は9/5期には鬼怒電の53,559株の筆頭株主であったものが、9/11期には7,300株となり、46,259株もの減少となっており、この対応関係から英一持株が増田 BB に変えられたことはまず間違いない。9年7月初英一は「依然たる強気を振り回して…時節が到来するまでは甚麼ことがあっても自分の持株は売らぬ…仮令持株の全部が全然零となっても手離さぬことに近頃決心をした」（T9.4.3 K「計量器」）と広言しており、この時期

[表-12] 鬼怒川水電株主の変遷（伊藤英一関係、兵庫県関係等）（参考）

	T 6/11	T 7/5	T 8/5	T 8/11	T 9/5	増	減	T 9/11	増	減	T11/5	T11/11	播鉄	播丹
□伊藤英一	15,040	30,692	50,939	66,737	53,559	▲	13,178	7,300	▲	46,259	600		8,159	
◎伊藤孝次			500	1,000	500	▲	500							
□伊藤商事								2,460	+	2,460	1,953		1,953	
〈関係会社・親密資本家〉														
□浪速T（広部正三）				41,490	34,277	▲	7,213	5,540	▲	28,737	1,582		1,582	
松井新次郎（浪速信託取）											810	810		
◎□海外貿易（八木千之助）				1,000	1,000		0	1,000		0	1,800	1,800	3,600	2,720
農工T（卜部兵吉）					700	+								
商工T					700	+								
□三宅利平	1,200	2,800	1,520	1,600	1,670	+	70	870	▲	800				3
□末正盛治			1,220	4,340	3,032	▲	1,308	862	▲	2,170	1,491	1,391	950	
□畑吉平		220	1,810	620	740	+	120	740		0	966	966	339	
□神田勝次（高砂B取）		700	700	600	200	▲	400	200		0	360	112		
町田昇								300	+	300	300			
安田寅治								350	+	350	1,780	1,680		
〈親密仲買人・取信〉														
□藤井忠兵衛（神取仲買人）				230							562	562	370	
□岸本恒太郎（神取常務）											1,776	1,776	300	
正田所治郎（神取仲買人）				360										
◎尾崎寅治（神取仲買人）				2,090	1,590	▲	500							
尾野商店（株式仲買店）				850	470	▲	380	160	▲	310				
□▲ ◎岸本信次（篠鉄大株主）			500	1,000	500	▲	500						22	
□野喜治良（尾野商店取）			460	3,600	3,600		0						3	
□武田常三郎（播州物産）	360	1,000	890		610	▲	280	500				280	80	
石井竹三郎**（大株仲買人）					3,700	+	3,700							
○取信（佐藤教松から？）								11,590	+	11,590	14,360	14,360		
佐藤教松（会社員）**					11,070	+	11,070							
吉植岩吉（兵庫、未詳）					6,170	+	6,170							
井上安松（取信取）					1,010	+	1,010							
福本実**（神取3,050株）								1,480	+	1,480				
〈銀行・生保関係者〉														
○□増田 BB								64,039	+	64,039	77,538	77,538	1,500	
□加古川 B								5,910	+	5,910	8,738	8,738	2,233	
加古川 B 寺家町支店											350	350		
○五十六 B（米沢吉次郎）								2,500	+	2,500	2,000	2,000		
○□淡路 B（増田俊太郎）								1,400	+	1,400	1,680	1,680	12,500	11,970
○大同生命											1,260	1,260	×(10,550)	11,077
○□高砂 B（松本亀太郎）								600	+	600	720	720	1,463	
#大崎卯平	160	500	(高砂B監)											
□◎穴栗 B（尾崎泉之助）											436	436	625	
小林善太郎	400	400	(穴栗B取)											
穴栗山崎 B	200	200												
小野商事信託（岸本長司）				460	440	▲	20	290	▲	150	348	348		
○二見 B（尾上清兵衛）											150			
岡崎藤吉（神戸岡崎銀行○）											6,000	6,000		
〈その他〉														
□△井上文也（兵庫）			350								300	300	60	
□三榮長松**（兵庫）											500	500	600	
▲ 川端伊之助（篠山商工B取）											180	180		
伊藤松次郎**	250	500	1,940	1,940	0			1,940		0	2,910			
伊藤合名**												T14(900)		
伊藤秀雄（大阪）				1,000										

（凡例） #印は英一買占以前からの大株主、□印は播鉄株主、○印は播鉄の債権者、△印は播水債権者、◎印は播水株主、▲印は篠鉄株主、\*印は金融機関等による担保の代物弁済取得（又はダミー）と見られる変動、B…銀行、T…信託の略

（資料） 鬼怒川水力電気15回（T 6/11）～25回（T11/11）、播鉄21回、播丹3回各営業報告書

（株主の注記） \* 1 石井竹三郎は石井定七の義弟、\* 2 佐藤教松（神戸）は会社員、T12所得税142円、\* 3 福本実（神戸市）は日本商業銀行貸付課長、\* 4 三榮長松と類似の三榮松之助（兵庫）は加東郡杜町の乾物商（『帝国信用録』昭和11年版、P104）でT10/11神取20株、\* 5 伊藤松次郎（住所の神戸市会下山2-18）は伊藤合名に一致）は鬼電旧970新1940、久原鉱業旧360、三菱鉱業旧150、日本棉花200（T15『全国株主年鑑』P259）、住所と銘柄の一致する\* 6 伊藤合名（神戸市会下山2、鬼電旧100新800株）にも関係か（T15『全国株主年鑑』P259）、×印は大同生命職員の小林晋一名義

増田 BB 側からの持株処分の勧奨にも強く抵抗し、なお鬼怒電の役員ポストにも依然として固執していたことをうかがわせる。増田 BB「整理顛末」によれば伊藤英一関係228万、矢野莊三郎23万、越知義一郎12.8万その他とも268万円が「担保提供者タル債務者ニハ払込ノ能力ナク…又担保切ノ債権中担保株券ガ将来市価回復ノ見込アルモノハ…担保ヲ処分シ更ニ之レヲ買戻シテ所有株ニ引直シ右売却代金ヲ以テ貸付ノ内入ニ充当<sup>45)</sup>」するという「方法ニヨリ回収シタル主ナルモノ<sup>46)</sup>」とされ、「所有ニ引直シタル株券ノ主ナルモノ<sup>47)</sup>」は鬼怒電旧株8,320、新株55,079(計63,399)、東京電灯旧1,593、新7,200(計8,793)、神戸取引所旧6,186、新3,093(計9,279)、川崎造船所旧290、新3,730(計4,029株)等であった。なお11年頃の神戸取引所の大株主は①増田 BB6186、②淡路銀行4500、③福本実(日本商業銀行)3050、④取信2703、⑤高野徳寿2461、⑥末正盛治2020株(T11銀P44)であり、増田は「所有ニ引直」す以前には神戸取引所の株主でなかったと見られる。これらは8年時点の英一の鬼怒電・神戸取引所持株ともほぼ一致し、東京電灯等を除き、増田 BBの「所有ニ引直シたる株券の主ナルモノ」として例示された銘柄はそのほとんどが英一関係であったことになる。

「整理顛末」は「担保付手形貸付ハ主トシテ株券担保ノ貸付ニシテ四月蹉跌當時二千七百万円ノ多額ニ達セリ。之レ増田ガ株式市場ノ好況ナルニ任カセ、放漫ナル貸出ヲ行ヒタル結果ナリ<sup>49)</sup>」とするが、英一関係430万円は増田の担保付手形貸付2702万円の15.9%に相当する最大の貸付先であった。しかし鬼怒電63,399株、神戸取引所9,279株等を「所有株ニ引直シ」ても、430万円中228万円(53.0%)しか回収できず、残りの202万円(47.0%)は「其後市価ノ続落ニ連レ担保切益々増加シ債権ノ回収ハ頗ル困難<sup>50)</sup>」となった。また、[表一12]からは鬼怒電株を「所有株ニ引直シ」た増田 BBと同様に、T9/11期を中心に取信、加古川、五十六、淡路、高砂各銀行が突然に大株主として登場したことが読み取れる。これは次章以下で検討するように、取信等、英一の取引金融機関が債権確保のため、担保に徴求していた鬼怒電株等を相次いで「所有株ニ引直シ」たものと推定される。すなわち英一の財務破綻の第一幕がここに始まったことを示している。

このように英一が増田への残債202万円の捻出に苦しんでいた9年12月という時期に、ちょうど播水が突然に突拍子もないと思われる炭業兼営を申請し、「二百

五十万円ヲ増資シ其内金百五十万円ヲ右兼営資金ニ充当致度」とし、英一も鉄道省当局に対して「炭坑買取代価仕払ノ時機至急ヲ要<sup>51)</sup>」すると認可を督促するなど、伊藤はちょうど増田への残債にほぼ匹敵する150万円から200万円という「炭坑買取代価仕払」という名目の巨額資金の支払にかなりあせっていた事情にあった。9年当時でもおそらく利益の出ない新延炭坑鉱業権を150万円で播水に売付け、播水増資による200万円の現金を鉱業権代価として播水から受け取り増田への残債支払等に充当しようと画策した可能性があろう。

増田 BB が筆頭株主として登場した鬼怒電の株主名簿の時期の9年11月の鬼怒電月初寄付値48円80銭を仮に「所有株ニ引直シ」た時点の時価と見做すと、ガラ寸前の3月4日の鬼怒電の高値78.4円との比較でも下落率は約△37.8%にとどまる。したがって仮に①増田 BB がピーク時の3月4日に、②他の株式を無視し鬼怒電株式のみを担保に、③当日の高値78.4円で評価し、④掛目100%で全額を一度に貸出し、⑤9年11月初めに全額を「所有株ニ引直シ」たと仮定しても、その回収率は48円80銭÷78.4円=62.2%となり、現実の回収率（228万円÷430万円=53.0%）より10%近く高くなる計算である。

現実の回収率53.0%から逆算すると増田 BB の「担保付手形貸付」の掛目は最高値ベースで約117%程度と、実際には20~30%もの無担保部分を含んで貸出しされていた可能性もあろう。その意味では①伊藤商事、浪速信託名義を含め、実質英一一人に、②払込資本金207.4万円の2倍強の430万円もの巨額の、③鬼怒電という仕手性の高い、④株式の買占め資金を、⑤ほとんど当該買占め株式のみで、⑥時価一杯に評価した上で、⑦100%を超えた掛目で、⑧相当の無担保部分を含んで貸出した行為は、いかに当時の英一に絶大な信用があったと錯覚していたとしても、「整理顛末」のいう通り、「株式市場ノ好況ナルニ任カセ」た「放漫ナル貸出<sup>52)</sup>」であったと断定せざるを得ない。増田 BB 社長の増田信一は鬼怒電の監査役でもあったから、鬼怒電株を担保とする英一への「放漫ナル貸出」は単なる商売としての融資にとどまらず、貸付先の英一ともども鬼怒電の支配権を奪取しようとの増田の野心すら感じられる。

注1) 9) 『小田急五十年史』S55、P369、年表P6、年表P7

- 注2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 16) 『利光鶴松翁手記』S32、小田急、P620、634、625、630、633、632
- 注7) 13) 14) 前掲『五島慶太伝』P222
- 注10) 小沢福三郎『株界五十年史』S8、P420
- 注11) 前掲『日本銀行調査月報』T9.3、P28
- 注12) 前掲『京都金融小史』P200
- 注15) 10.11「有価証券及び動産、不動産の取得・利用」を目的として設立、本社は上大崎の利光学一邸内、会長は利光鶴松
- 注17) 藤井忠商店調査部『経済時報』26号、T10.4.1
- 注18) 22) 27) 29) 33) 34) 平井瑗吉『京都金融小史』S13、P200-2
- 注19) 20) 前掲「顛末」P272
- 注21) 23) 25) 26) 28) 30) 32) 35) 36) 43) 前掲『三十年之回顧』P354～P356
- 注24) 高橋亀吉『大正昭和財界變動史』S29、上P257
- 注31) 日本銀行編「世界戦争終了後ニ於ケル本邦財界動揺史」(『日本金融史資料 明治大正編第22巻』P536所収)
- 注37) 『日本銀行調査月報』(『日本金融史資料・明治大正編』第21巻、P972)
- 注38) 『本邦銀行變遷史』H11、P746
- 注39) T14.3.10付監督局長宛堀播水清算人答申、文、播水
- 注40) 播水「仮出金内訳表」T13.3.31現在、文、播水
- 注41) 42) 前掲「顛末」P265所収
- 注44) 矢野莊三郎は矢野鉦業経営者で「増田信一関係者」(前掲「顛末」P266)
- 注45) 46) 47) 49) 50) 52) 前掲「顛末」P265
- 注48) 高野徳寿(京都)はT10/5神戸市からT10/11京都へ移転、神取2461株主。播水旧1500株、新4000株。正体未詳(T6『全国株主要覧』、T9『全国株主要覧』、『帝国信用録』帝国興信所T14、京都・兵庫、T14『日本紳士録』京都、『全国株主年鑑』T15、京都・兵庫に該当なし)ながら、福本実と同様に英一の債権者のダミーと推定される。(銀行員とすれば京都支店への転勤か)。

注51) T 9 .12伊藤社長名の鉄道大臣宛具申書、文、播電

## 第7章 伊藤英一と本家との微妙な関係

### I. 伊藤英一と本家の関係

まず英一が最初の事業として「山陽沿線を我が手に統一すると云ふので各駅全部へ（運送）店を出した」（異P91）のを、本家の長次郎は熊蔵を改めて襲名したと「同時に各種の事業を廃する」（異P91）決断を固め、「山陽鉄道線十数箇所の支店が業務紊乱せるを見ては断乎として之を撤廃した<sup>1)</sup>」が、長次郎は英一が単に「守成的の器ではない<sup>2)</sup>」だけでなく、ともすれば「紊乱」に繋がる体質を逸早く察知し、少なくとも自ら頭取を務める三十八には英一の事業への関与を厳に排斥した可能性が高い。

明姫電気鉄道の顧問に就任した伊藤は伊藤でも、本家の長次郎の方であり、筆頭株主・専務として播鉄を主宰する英一ではなかった。本家の長次郎と分家の英一との関係が真実どうであったにせよ、世間一般から見れば分家の経営する播鉄と敵対関係に立つ明姫電気鉄道に本家が肩入れする事実は奇妙なもの映ったことは想像するに難くない。『山陽電気鉄道65年史』は「このようなことから、大正5年末には兵庫電軌の株主でなかった伊藤英一氏が翌6年5月31日には1400株を所有する筆頭株主となり、6年6月30日の第20回定時株主総会において取締役に選任された。これは川西清兵衛氏らの明姫電鉄出願への対抗と考えられる<sup>3)</sup>」と記述している。5年頃からの突然の英一のアクセル全開には明姫電気鉄道を巡る本家・長次郎との確執も一因をなしているように想像される。東播銀行、多可銀行等の準メインが集団指導する地方銀行団も「東播地方の銀行団で伊藤英一君の借金が六七十万円に達し」（T12.2.20Yコラム）、与信限度を超えて、末期には英一を見限り、応援しなくなっていたようだ。当初「播鉄は何の苦もなく彼の手に入まった」（異P93）理由は「彼の背後には伊藤家がある」（異P93）からであり、英一に安心して貸出した背景には、いざとなればたとえ不仲であっても絶大な信用を誇る伊藤本家が乗り出してくるに違いないという、安心感があったと思われる。



## II. 西伊藤銀行の育成

今ひとつは伊藤本家の三十八に代って、湊西銀行等の親密銀行との提携であり、さらに英一の新しい機関銀行を創設することであり、それが「西伊藤銀行」という奇妙な名前の銀行である。行名の伊藤という地名は見たらず、当然に家名に由来する。単に兵庫、播州等のローカルな地域名でなく、西を冠したのは、著名な東の伊藤銀行（名古屋・伊藤治郎左衛門家経営、現東海銀行）と相並ぶべきとの英一の強い対抗意識が感じられる。<sup>4)</sup>しかし西伊藤銀行という奇妙なネーミングは今一つだったようで、西伊藤銀行は「今亦之を株式会社第五銀行と改称すべく認許申請中なり」（T 9. 9 ○）とされ、この程度の地方中小銀行としては大袈裟とも見える空番号の「第五銀行」を狙うなど、英一の自己の本格的機関銀行への思入れの強さをうかがうこともできよう。英一は前述の通り、浪速信託、関西土地信託、農工信託等の多くのノンバンクにも関与したが、これらの関与動機も西伊藤銀行の買収と同様と思われる。なお英一は生保に関与した形跡は見られないが、これは信心深い長次郎が信徒を代表して明治29年10月真宗信徒生命の監査役に就任したものの、同社に乘取り攻勢をかけた岡部広の重役攻撃等に嫌気をさして36年11月辞任に追い込まれた苦い経験<sup>5)</sup>が英一にも影響したのかも知れない。

## III. 伊藤本家側の変化

### 1. 絶大な信用を誇る三十八銀行の変化

明治末期の三十八には34年の「恐慌ニ遭遇セシモ平穩無事ニ経過シ好成績ヲ挙ゲタルハ当行役員及使用人ノ其宜シキヲ得タル結果」と株主総会で賞賛され、<sup>6)</sup>「神戸の銀行界を攪乱した、フルード事件でも、又米沢長次郎氏の破綻、近くは藤本ビルブローカーの事件でも、大抵阪神間の大銀行で、多少損害を蒙って居ないものはないが、独り三十八銀行に限り、一厘の損害も受けなかった」との絶大な信用があり、現にこれまで銀行取付が頻発する中でも「播州長者たる伊藤家の後援あり」<sup>9)</sup>、「播州の富豪伊藤長次郎氏を頭取とする三十八が小康を得たのはもともと当然」（T 11. 12. 20 C）とされてきた。

しかしお堅いはずの三十八内部でも10年頃には銀行内部の雰囲気も変化を見

せ、「支店貸付係が相場に失敗した揚句…四十万円を横領した」(T11.12.27K) というような、世間を憚る不祥事が起こった。この栄町支店貸出係は「昨年始め頃より株式に手を染め数次失敗を重ね損失を招いて金に困る処から一攫千金を企て損失を補はんとし、昨年暮より本年七月までの間に自分が取扱った銀行の貸出担保物件中より…都合二十二万円内外の株券公債等を窃取し何れも是れを抵当又は売却して其の金で株式相場を行ったが是亦失敗に終り悉く費消した」(T11.9.5K) とされる。神戸新聞「株界片々」欄は「三八銀行員が二十余万円と云ふ行金を株式市場で喰はれた…其金が当地の株式店へ流れ込んで居る訳で…店員連の中にもずいぶん恩沢を蒙ったものがあるとやら、無いとやら」(T11.9.8K「株界片々」)と地元株界との悪縁を示唆する。三十八栄町支店は伊藤商事本店にも近接していたが、この栄町支店貸出係の窃取した株券には鬼怒川水電1000株、阪急300株など、英一の投資先も多数含まれていた。9年5月末の鬼怒川水電1000株以上の兵庫県大株主は英一以下12名いるが、その多くは野喜治良、三宅利平、末正盛治、尾崎寅治、井上安松ら、英一のシンパないし提灯筋の神取仲買人であり、三十八栄町支店貸出係がこれらの英一派株主等に鬼怒川水電株式等を担保に貸出していた可能性が高い。英一派株主の買占め等の派手な行動を三十八栄町支店貸出係として最も身近に見聞きしていた当該行員が大いに影響されて「株式に手を染め」たとしても不思議ではなからう。

「岸本銀行問題を動機に、これまで比較的平穏であった同地金融界に一大動揺を惹起した。六十五と三十八の両銀行もその飛沫を浴び」(T11.12.20C)、11年12月16日三十八も「岸本銀行の側杖を喰って」多聞通支店で緩慢ながら取付を受けた。また12年12月にも『「三十八銀行が怪しいと云ふ噂がありまっせ、気を付けなはらんとアキませんぜ」案と好い加減な事を吹き込むと…神経過敏な福原花柳界へバツと拡がり…夫を知って十余名…大狼狽を極め銀行へ押菟ける等、瞬く中に此界限一体に喧伝され」(T12.12.25Y)た結果、前年と同じ三十八多聞通支店(多聞通6丁目)では「十二月七日突如預金の取付に遭ひたるも遅滞なく払戻をなしたる為め間もなく鎮静」(T11.12.○)との取付が起った。

## 2. 伊藤長蔵系企業の異変

大正末期には伊藤家の本業たる農地経営面でも顕著な動きが見られる。すなわち長次郎は全国的な小作騒動による土地経営の困難を見越して早目に所有地を次々と手放しつつあったといわれる。すなわち「夫の播州の大地主伊藤長次郎君の如きも夙に大勢を看取し、一昨年来徐々に田地を売り、既に其五分の一位は人手に渡したであらう」(T12.3.21Y)と報じられており、長次郎が反動恐慌後に手元資金を潤沢にすべく、土地の現金化傾向にあったことがうかがえる。もちろん「一時は千円以上もしたものが四百円以下に下落」(同上)した農地価格の「夙に大勢を看取し」たこともあろうが、14年1月になって三十八への重役出捐として現実化した、伊藤家の血縁者等による一連の不始末の尻拭いを、いずれ不可避免と考えての止むに止まれぬ投資回収行動であったとも想像される。

その一つが伊藤本家の分家である実弟の長蔵系企業の不振であった。<sup>10)</sup>大正4年以降に伊藤長商店として輸出入業を手広く営んでいた長蔵は「綿糸で先頃手を焼いて以来、兎角不振の状態にあった伊藤長商店は今度の不況に復活し難い痛手を負うた…乃で商売は益々嫌になったらしいで今度同商店を隠退すると同時に大洋海運初め一切の関係会社の重役を止めることにした」(T9.7.13K)といわれる。わずか5年前の4年1月18日に三十八監査役に就任したばかりの長蔵が9年7月25日の定時株主総会を目前にして、突然任期中にもかかわらず「九年六月監査役を辞し」<sup>11)</sup>た。この当時長蔵にかかわる訴訟事件(後述)が発生したため、三十八監査役辞任も伊藤家としてのなんらかの責任を明確にした結果とも考えられる。長蔵は趣味として白馬を数頭飼っていたが(T7.7.29K)、京都の南禅寺に熱心に参禅するようになって「在来大に楽しみにして居た乗馬などは何時の間にやら放棄されるやうになった」(T9.7.13K)とも報じられた。長蔵関係の企業でも以下のように深刻な役員更迭が見られ、14年時点では長蔵は阪神石材取締役<sup>12)</sup>で、帝国興信所は14年時点では長蔵の「対物信用(正味身代)」を「負債」、対人信用程度を「薄」、年商を「未詳」、盛衰を「衰」<sup>13)</sup>とシビアに判断している。

(1) 伊藤企業 同社は6年2月設立、資本金100万円、本社神戸市北長狭通4、一般信託業の会社(T11銀P14)で、合資会社時代の10年時点では長蔵が無限責任社員として77万円、伊藤新一(長蔵の長男)10万円出資、松代安太郎(貸金業、

英一の長女みねの夫) 5万円出資、松代鍋種(松代安太郎の関係者) 5万円出資、伊藤孝次(英一の長男) 2万円を各々出資(松代安太郎以下はT10銀P14のみに記載)するなど、長蔵が主導権を持っているものの、英一系の出資もあった。9年7月にはこの伊藤企業で大幅な役員更迭が生じた。すなわち「取締役伊藤長蔵、小川淑一、松代安太郎ハ各辞任、取締役前川清二ハ会社ヲ代表スベキ取締役ニ就任」(登T9.7.22Y)しただけでなく、伊藤企業は「支配人小川淑一を解任」(登T9.7.22Y)までしたのであった。前川(御影町)は阪神住宅土地代表取締役(T9.4.7K登)、大正汽船専務であり、もともと伊藤企業に1万円出資(T8帝P16)し、監査役を務めていた。阪神住宅土地代表取締役、大正汽船社長とも長次郎自身で、共に長次郎をトップに戴く両社の専門経営者たる前川の就任は当然に長次郎の意向に沿ったものと解される。つまり伊藤企業には支配人を解任するほどの問題が発生し、長次郎の指揮の下に最大出資者で無限責任社員の長蔵らも退陣させられ、長次郎のダミーとして前川清二が代表取締役に就任したものと推定される。ただし長蔵はT12.2.1伊藤企業取締役に復帰(登T12.3.4Y)しており、伊藤家としては同社の抜本的整理が済むまでの3年間ほど、訴訟等の関係から実弟を安全な場所に避難させていたのかも知れない。

(2) 大洋海運 9年4月「大洋海運会社では…経費節減の名を以て社員二十八名、車夫二名、給仕一名、交換手一名を解雇した」(T9.4.17K)が、会社側は「戦時中主として太平洋を中心に手を広げてゐたが、今後は倫敦を中心として営業方針を改め」(同上)たためと説明した。なお伊藤企業の場合と同様の配慮からか、遅くとも13年時点では長蔵は大洋海運取締役に復帰(T13帝P52)、昭和3年時点では伊藤関係と目される伊藤博祐名義で5位2820株を保有(S4銀P26)、5年時点では静得社名義でも大洋海運<sup>14)</sup>2132株保有し、長蔵が昭和10年でも大洋海運取締役の座にあるなど(S10諸上P849)、伊藤家との緊密な関係はその後も継続している。

(3) 伊藤企業にかかわる訴訟 『大阪銀行通信録』に記載された判例は以下のように伊藤本家の傘下にある一企業(具体的には伊藤企業)が結果として英一系・関西土地興業との財務関係を維持していた事実を示している。「訴外伊藤長蔵は大正九年六月十五日訴外伊藤企業株式会社を支払人として額面金九万五千元、支払

期日大正九年八月十五日一支払地神戸市、支払場所株式会社三十八銀行神戸支店、受取人勝田銀次郎（上告人）なる為替手形一通を振出し伊藤企業株式会社は同日之か引受を為し、被上告人（控訴人、被告）は同年六月十九日該手形の付箋に依り同会社の手形債務の保証を為したり、而して上告人は右手形を株式会社淡路銀行に白地裏書を以て譲渡し同銀行は株式会社三十四銀行神戸支店に取立委任の裏書を為したるを以て、株式会社三十四銀行神戸支店は支払期日に至り引受人に対し手形を呈示して支払を求めたる処支払を為さざるに依り、同年八月十六日支払拒絶証書を作成せしめたり、仍て株式会社淡路銀行は上告人に対し右手形金額償還請求の訴訟を提起したるを以て上告人は淡路銀行に対し大正十一年六月八日迄に金五万参千円と満期日以後の利息を支払ひ、残金四一尚式千円に付ては上告人と同銀行との間に於て之を貸金債務に更改して該手形の元利金全部の償還を為したり、故に上告人は本件手形引受人の保証人たる被上告人に対し右手形金額九一角五千元並満期日以後の年六分の法定利息の支払を求むる為本訴に及びたりと云ふに在り<sup>15)</sup>」

この「訴外伊藤企業」は前述の通り、長蔵一族出資の企業で、長蔵・伊藤企業が支払場所を三十八神戸支店としていたことも当然であった。後に神戸市長にもなる勝田銀次郎（神戸市生田町）は大手海運業者・勝田商会主で資産額700万円<sup>16)</sup>の大資産家であり、大洋海運では相談役(T 9 . 6 . 3 K決算広告)を務め、「大洋汽船〈海運の誤りか?〉なども全くは〈勝田〉氏が牛耳ってゐたもの<sup>17)</sup>」とされるなど、大洋海運取締役の長蔵とも緊密な関係にあったと思われる。「然し同汽船会社との関係から資産状態を厳格に清算すれば…赤字超過となる<sup>18)</sup>」とされ、勝田が相談役として関係した大洋海運とは「尚相当負債勘定が残ってゐる<sup>19)</sup>」といわれる。伊藤企業と勝田銀次郎との間の手形債権債務関係もこうした大洋海運関係の負債勘定の一環と考えられる。また当該手形を白地裏書を以て譲渡した株式会社淡路銀行は播鉄債権者（播丹筆頭株主）であり、勝田の取引銀行の一つと目される。一方の被上告人（控訴人、被告）である関西土地興業は信託業の傍ら「確実と認むるものに対する債務保証<sup>20)</sup>を為」しており、判例の通り「他人の債務保証を業務とし、本件手形に付ても訴外伊藤企業株式会社より多額の保証料を取得せるもの」であったことが判明する。つまり少なくとも9年6月までは英一系の関西土地興業

(旧関西土地信託)が、三十八神戸支店と取引があり、本家の傘下にある「伊藤企業株式会社より多額の保証料を取得」という緊密な取引関係にあったことを判決は示している。

(4) 神戸土地建物 同社は明治27年伊藤家の地所部番頭に就任し、明治34年神戸市議、40年代議士となった坪田十郎(T9.4.19K)が役員になっていることから、「<坪田>君が差配せる山手一帯」20万坪の伊藤家所有地の管理会社であろう。同社は「株主総会ノ決議ニヨリ解散○清算人神戸市北長狭通四丁目一番地ノ一坪田十郎、同市葺合二宮町一丁目一番地井上善吉(4-56)、印南郡伊保村今市八十一番屋敷伊藤長次郎、東京市麴町下六番町十七番地木村弥太郎、神戸市兵庫湊町二丁目十四番地岸本信太郎…右大正九年五月二十七日登記 神戸区裁判所」(T9.6.3K登)と株主総会の決議により解散した。その直後の9年6月に類似社名の神戸土地(本社神戸市多聞通)が資本金1000万円で設立され、長次郎が取締役に就任した。同社解散の背景は未詳ながら、反動恐慌による地価暴落の中で、おそらく何らかの財務的事情に基づく新旧会社方式による会社整理が行われたものと考えられる。昭和5年時点で静得社は神戸土地株式を所有し、昭和10年時点でも長次郎、伊藤孝次が神戸土地取締役(S10諸上P832)であるなど、伊藤家と深い関係にあった。なお土地投機に積極的な地元加西郡北条町出身の香野蔵治も神戸土地の重役・株主として関係した。

### 3. 三十八銀行による播鉄株取得の可能性

播鉄と三十八両社の株主名簿突合せを行うと、同じく播州地方を営業エリアとする鉄道と銀行であるから、ある程度共通株主が存在するのはむしろ当然と予想されるが、現実に8年頃までの主要株主の重複は僅かに大西甚一平(三十八5396)、大西甚佐久(300)、畑昌愷(8)、志水市郎平(120)、伊藤長平(1008)、宍粟銀行(取締役尾崎泉之助)(780)程度にとどまっている。これは伊藤本家の機関銀行たる三十八と、分家の英一の主宰する播鉄とが、もはや同一の資本集団視できないほど、両者の距離が隔たりつつあることを示しているためと思われる。しかるにT9/9期に播鉄の新規大株主として登場する人物には次のように多数の三十八株主との重複者が存在する。<sup>22)</sup>

柴田岐一郎（三十八営業部長70株）630、本庄徳蔵<sup>23)</sup>500、土山喜之助<sup>24)</sup>500、英賀福蔵（5-25）500、上村広一（S23神戸銀行公金部長）500など、三十八（ないし後身の神戸銀行）員であることが判明した数例に加え、内海直次（20株）500、大森晃一（20株）320など、三十八の零細株主が存在するが、著者は三十八の零細株主を行員による持株の可能性が高いと想像している。彼らは次ぎの理由により、本人たちの計算に基づく、自発的な鉄道株投資ではなく、三十八の担保流れ等による播鉄株式の大量取得を隠蔽するため、単なる株主名簿上だけの名義人として、明治20～22年生れで9年当時は30才そこそこで、まだ無名に近い少壮行員の名をダミーとして流用した可能性が高い<sup>25)</sup>。

①勤務先の三十八の持株数（＝本人資産額）に比して取得した播鉄株式数が異常に大きい。②8年3月期までは全く播鉄株式を保有していない。（地元の資産家の一般的な投資行動とは異質）③業績悪化の徴候が出てきた9年頃に播鉄大株主として突然に登場する。④一部を除き、持ち株は500株ちょうどなどのラウンド数字。⑤10年9月期までの間に持株数が全く不変。⑥11年当時の三十八での役職はいずれも非重役で、本店営業部長の柴田岐一郎以外は巨額の株式投資には似つかわしくない。⑦昭和10年時点には何人かが支店長に昇進しているなど、幹部候補生として（銀行の秘密を守る人物として）信頼されていた行員と見られる。⑧播鉄等が伊藤本家とは事実上の義絶状態にあることは三十八の内部情報で知り得るはず。⑨かつ播鉄の業績見通し、配当期待等から見て、この時期の大口投資の動機が不可解。⑩しかも本人の資産が大口投資に見合わないのに、この恐慌期に地元各行が播鉄株式を担保にした融資を積極化すると考えにくい。⑪もし三十八として播鉄支援目的の積極的な株式取得であれば、堂々と法人名義で筆頭株主等の座を占めるはず。⑫法人名義でなくとも、それと察知させうる、少数の重役等の個人名義にまとめるはず。⑬それが多数の若手の無名行員の名義に分散したのは、銀行の信用保持のため、播鉄株での担保金融の存在自体をカムフラージュしたかったためと解される。⑭ただ一人、本店営業部長の柴田岐一郎の名義を加えたのは、多数のダミー株主群による議決権行使の際の便宜から、代理者（場合によっては重役候補者）として1名は、世間体を考え、若手の無名行員ではなく、責任ある幹部行員の名義を表に出したためであろう。ただし播鉄等の関係者には

当然に三十八の名義借用であることは知られており、その証拠に12年10月24日の第25回株主総会で清算人の選定に際し5名の詮衡委員の中に個人名義では播鉄500株主に過ぎない土山喜之助が播鉄12500株の筆頭株主である淡路銀行取締役の加藤淳一の次に選定されている。当然に三十八のトータルな持株（良く似た名前の三十八員・株主なども加え、最大限4300株程度と推定）が淡路銀行に次ぐ地位にあることから、三十八の代表として土山喜之助が選定されたと考えられる。なお三十八は15年には富士製紙2000株、東電旧460株、九水旧2150株、満鉄旧500株を保有して<sup>26)</sup>おり、播鉄株とはかなりの格差があった。

またこうした三十八行員株主の一人である英賀福蔵が播鉄当局に厳しい質問をした事例として、10年10月30日株主総会で「株主英賀福蔵、上田幸次郎ノ両氏ハ土地家屋業ニ関スル質問アリ」（T10.10.30決）、原案の年5%配当案に対し、「株主英賀福蔵氏は同六朱案の各修正動議を提出し、議長及支配人稲岡猪之助氏は会社の状況を説明し、原案維持を努め、株主野喜治良氏は之に賛成し一同異議なく原案通り可決せり」（同上）と議事録に残されている。上田幸次郎は加古郡平岡村の大地主で、西伊藤銀行取締役、播鉄系列の大門ヴェルベツト取締役など、英一のパートナーとして活動した人物であり、野党的な英賀福蔵と行動を共にするのは英一のパートナーとして活動した人物の離反かと大変に意外な感じを与える。一方野喜治良は尾崎寅治とともに公債株式売買業の(株)尾野商店のパートナーで、当然に的に大の得意先である英一のご機嫌をとるために、当然の「与党総会屋的」活動をしたと見られる。

こうした現象は三十八だけでなく、この時期に登場する播鉄の株主には〔表一12〕右端のように銀行そのものの法人持株や、銀行の名義人と目される人物が数多く登場する。この時期に「銀行其他」の法人株主が多数登場した背景は、播鉄の「株式ノ大部分ハ銀行其他ニ担保トナリ、債権者ハ一株三十五円乃至四十五円ヲ以テ受ケ居ル…債権者ノ苦痛甚しく、破産ノ状態ニ陥ルモノ尠カラサルヘク、同鉄道ノ発展ヲ望ミ得サルノミナラス、地方経済界ニ大動揺ヲ生スルニ至ルヘシ」<sup>27)</sup>との地方銀行団の憂慮が深刻であったためと考えられる。すなわち利払いの延滞等により、播鉄社長の英一の信用が急激に下落し、英一への与信を不安視した地方銀行団は融資等の担保として受入れていた播鉄株式を銀行取引約定書の条文中



則って、融資等の代物弁済として播鉄株式を取得したものと推定される。その場合、英一の信用状態をいち早く知り得る立場にあるのが、三十八をはじめ、お膝元の加古川・高砂地区に本店を有する加古川銀行(頭取長次郎)、高砂銀行等であったと考えられる。例えば高砂銀行は15年では鬼怒電新<sup>28)</sup>720株しか主要株式を保有しておらず、鬼怒電株や播鉄株式の取得がいかに異例であったかを推測し得るであろう。特に三十八が先行して、播鉄株式を取得したと仮定すると、もし三十八への大量の名義書替を表面化させると、英一の信用低下を一段と加速させる恐れがあり、三十八の債権保全には都合が良いとしても、「三十八が播鉄破綻の引き金を引いた」などと批判されては伊藤本家にとっては好ましくない結果をもたらすので、世間にも、同業者にも密かに隠密行動をとったのではなかろうか。もし上記の4300株のすべてが三十八への流れ込物件と見做すとすれば、15.0万円～19.5万円見当の不良債権が発生した可能性がある。三十八以外のその他の諸行は①英一等への与信額が僅少、②したがって播鉄株の取得株数も小さい、③英一、伊藤本家等との人的関係が稀薄、④したがって万事ビジネス・ライクに処置可能、⑤あるいは察知するのが遅れて、名義書替を急ぐあまり、複雑なグミー利用の時間的余裕がなかった等の理由から、単刀直入に銀行名義に切り換えたものと考えられる。

#### 4. 三十八銀行の整理と播州鉄道との関係

三十八は14年1月9日開催の大株主会で「滞貸金四百六十三万円銷却ノ件並ニ右整理ニ関シ役員一同ヨリ金百万円出捐ノ旨<sup>29)</sup>」を発表したが、「遺憾乍ラ多額ノ滞貸金ヲ生ジ」た原因は「大正九年ニ於ケル財界ノ變動<sup>30)</sup>」にあり、「銷却ニ際シ頭取以下役員一同ハ克ク其徳義ヲ重ンジ<sup>31)</sup>」[合計百万円ヲ出捐シ四十四万三千円ヲ償却金トシ八万円ヲ使用人積立金ニ振替ヘ残額四十七万七千円ヲ以テ今期配当代用金ニ充テ年九朱ノ配当ヲ為ス<sup>32)</sup>]ことを余儀なくされた理由は三十八でさえも「大正九年以来財界變動の影響により取引先の失敗、担保品の値下り等より貸出金の約一割が殆ど貸倒れとなりたるを以て頭取伊藤長次郎氏以下重役一同は整理の断行を決意」(T14.1.○)せざるをえなかったという厳然たる事実があった。「取引先の失敗、担保品の値下り」の中に、頭取も道義的な責任を痛感せざるを得ない

播鉄への株式担保貸付等、英一・長蔵関係の貸金も含まれていたからと考えられる。麻島昭一氏も「三十八銀行も大正13年12月期には463万円におよぶ滞貸金償却を余儀なくされ、日銀より麻生政一郎を専務として迎えている<sup>33)</sup>」と指摘する。「大正九年以来財界変動の影響により取引先の失敗、担保品の値下り等」の償却貸付金額463.5万円の中には英一系不良債権の混入はないとは断定できまい。大地主、多額納税者であるとはいえ、頭取長次郎氏以下の重役が責任を痛感して合計百万円もの私財を出捐してまで年9%配当を継続し、株主には迷惑をかけなかった理由も、責任を痛感すべき重役関係（特に身内筋）の貸倒れをも含んでいたと解すると理解しやすい。たとえ播鉄への直接融資はなくとも、播鉄株式等を担保に一般の播鉄株主に融資していたとしても、英一の不始末から播鉄の実質的破綻を招いた結果の「担保品の値下り」に関係重役等が責任を痛感したことはありえよう。

注1) 2) 8) 前掲『兵庫県人物史』P386、339

注3) 前掲『山陽電気鉄道65年史』P56

注4) 例えば東京の渡辺治右衛門が分家筋の横浜の渡辺福三郎家経営の、先行する「渡辺銀行」と区別するため、二十七銀行を「『東京』渡辺銀行」と改称したようなものか。ただし純粹の個人組織の銀行としては千葉と山梨にも同名の「伊藤銀行」が存在する。

注5) 『東京生命七十年史』、S45、P580-1、岡部は長次郎も取締役を兼ねた起業銀行との癒着をも攻撃した。岡部広とその仲間に関しては拙稿「大阪生命の生保乗取りと日本生命の対応—鴻池財閥から山口財閥への移動説の吟味—」『保険学雑誌』516号、昭和62年3月、同「大津商人による鉄道発起と挫折—京都・大津間鉄道敷設計画を中心として—」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』第30号、平成9年3月等を参照。

注6) 11) 29) 30) 31) 前掲三十八銀行『五十年誌』P51、7、40、27

注7) 米沢長次郎（第五十六国立銀行取締役ほか）は「先代伊藤長次郎翁と共に播州成功者の双璧」（前掲『兵庫県人物列伝』P181）たる米沢長衛（第五十六国立銀行頭取）の長男で弟が吉次郎。「君は兵庫に於て米穀の輸出業を始めて其資を投機事業に運用し…明治十一年凶作に乘じ一挙に買占めたる数

十万吨の南京米が…一敗地に塗れ、為めに其資産の全部を提供して尚数十万円の負債を醸すに至れる」(同上)敗軍の将とされた。

注9) 前掲『大日本銀行会社沿革史』P110

注10) 中西利八編『大日本現勢史』S4、通俗経済社、Pい5。伊藤長蔵は神戸市北野町1-71、M20.10生、神戸高商を経て43年東京高商専攻科卒、神栄入社、T4伊藤長商店設立、輸出入業、同店の取扱商品は「各種油類、雑穀、金物、薬品、雑貨棉製品等」(前掲『京阪神に於ける事業及人物』みP2)、支店出張所及び出張員所在地はシアトル、ハルビン、長春、大連、青島であった。長蔵の関係先は三十八監査役(T9.6.30辞任、登T9.7.27Y)、半島護謄企業社長、阪神石材、東神戸土地、大正汽船、大洋海運、日本石綿盤製造、大阪産業各取締役、益隈炭硯監査役。S6には京都に懶ぐろりあそきて設立。

注12) 前掲『日本紳士録』T14、P4

注13) 前掲『帝国信用録』T14、P3

注14) 21) 前掲『地方財閥』P44

注15) 大正十五年(オ)第七九六号同年十二月十六日大審院第一民事部言渡(『大阪銀行通信録』S2.3、P88)

注16) 渋谷隆一、石山昭次郎『大正初期の大資産家名簿』『地方金融史研究』14号、1983.4、P87

注17) 18) 19) 川畑伊太郎『神港人物太平記』S9、新人物評論社、P194

注20) 前掲『京阪神に於ける事業及人物』あP7

注22) S10はS10諸上P801、S11は『ポケット会社職員録』S11、P68、前掲『神戸銀行史』巻末P75～

注23) 本庄徳蔵は三十八1株主、M22生れ、S10は三十八営業部長代理、S14神戸銀行龍野支店長、S16福本銀行常務

注24) 土山喜之助はM22生れ、S10は三十八三木支店長24株。播鉄500株、三十八銀行代表として播鉄詮衡委員となったが、播鉄清算人にはならなかった。

注25) 各種の資産家資料(①『全国株主要覧』T8、②『銀行会社要録』T11、③『日本紳士録』T14、④『全国株主年鑑』T15、⑤『帝国信用録』T14、

⑥『帝国信用録』S11)で検証すると、一部の判明した人物を除いて多くは著名な資産家ではない、無名株主であると見られる。なぜなら①は全国の重要会社511社の合計300株以上の株主、②は全国の株式会社等の役員、③は全国十大都市在住の所得税41円（もしくは営業税61円）以上納税した資産家、④は全国の上場300社の100株以上の個人株主、⑤⑥は興信所が審査対象とした全国の商工業者（多くは個人営業）を取録しているから、①～⑥のいずれにも一度も記載されない株主は、T8からS11の間において、①全国重要会社の300株未満の株主、②全国の株式会社等で役員に就任せず、③所得税41円（もしくは営業税61円）未満、④全国上場300社の100株未満の株主、⑤⑥興信所が審査対象とする商工業者でもないことになる。そのような会社役員の実験も、商工業経営の実績もない、さほどの資産もない、株式投資の実験も乏しい人物が、突然に反動恐慌の最中に播鉄のみに集中的に大口投資を敢行したとすれば、その投資意図は甚だ不可解というほかはない。なんらかの機関等のダミーと考えられ、三十八の零細株主であることは三十八行員としての集団的な名義貸と考えるのが自然であるように思われる。

注26) 28) 前掲『全国株主年鑑』T15、P287、273

注27) 佐藤雄能「播州鉄道譲渡の件」T15.1.27、文、播鉄

注32) T14.1.13大毎（T14.1前掲『日本銀行調査月報』P901所収）

注33) 前掲麻島論文「神戸所在の諸信託会社」『信託』復刊54号、P85

## 第8章 伊藤英一の関係企業の没落と混乱

### I. 兵庫電気軌道からの撤収

大正9年3月15日の株価大暴落、4月7日の増田 BB 破綻を契機として、英一の関係企業の没落・破綻が次々に始まるが、その第一弾が兵電からの撤退であった。9年7月6日『神戸新聞』「計量器」には「伊藤英一クンの経営する兵電には沿道の人家稠密と同時に漸々乗客が増えて来た…沿道の住民から次の如く提起をされた…須磨も…神戸市に編入されたに拘らず須磨との連絡を司って居る兵電の郊外電車であることは怪しからぬ、速かに市に買上げて貰ふべきものである△といふのであるソコデ伊藤クンも大にコノ議論には道理のあることを認めて居る△その結果市に買収の念があれば相当の価格で之を市に引継いでも可いといふ考へを起すに到ったといふことだ」(T9.7.6K「計量器」)という兵電の買収に応じる英一自身の積極的な発言が掲載されている。こうした神戸市に編入された須磨住民からの兵電の買収・市営化の要望はその後も強くなり、13年10月頃にも盛上がりを見せ、当時の大きな市政問題となった。<sup>1)</sup>同日の又新にも「市電延長の意味を以て、須磨が市に編入せられたれば兵電の須磨以東の部分を市電に買収せんとの説、一部有力者の間に起りつつあり」(T9.7.6Y)と兵電の一部市有説が報じられた。英一サイドから意図的に流されたと解されるこの兵電の買収説に関して神戸市当局は「金融逼迫の昨今重要な事業さへ延期して居る状態にある折柄故、直に之れを買収すると云ふ事は市の財政上許さない」(T9.7.9K)と直ちに全面否定した。しかし7月20日の又新も「鉄道では一番融通の利き易ひ現内閣のことであるから、伊藤英一君あたり播鉄や兵電を此際買上げて貰ってはどうか。肩が軽くなることは請合だがネー」(T9.7.20Y)と英一の陥っているはずの資金難を暗に皮肉っている。

山陽の社史では英一の兵電撤退は「大正9年になると欧州大戦後の経済恐慌で資金操作も苦しくなり、また(兵電)社内ではストライキ以後くすぶっていた従業員の不満が物価高によっていよいよつのり、さらに経営施策面では神明急行電

鉄出願に対する防衛策としての複複線計画の実現も望み薄であることから、ついに9年8月10日の臨時株主総会で全重役が辞任<sup>2)</sup>したものと解釈している。この時、株主総会は新たに取締役として岡崎藤吉<sup>3)</sup>、芦田作太郎、岡崎忠雄、津田資郎、監査役として草鹿甲子太郎(3-21)、佐藤勇太郎を選任、船主から神戸岡崎銀行を創立した岡崎藤吉を英一の後任社長に選んだ。

英一は辞任に際して次のように声明した。「過般来財界不況の影響を受けて事業界は沈淪し、各種事業に関係を有する予としてはコノ際多少の整理をなすの必要を認めたり、依って予は自分の事業を物色したる結果兵電を処分するの決心を定め有本県知事に之を計れり…依って予は慎重熟慮の結果在来の関係もあり岡崎藤吉氏に之を委ぬるを以て至当と認め之が譲渡をなすべく先月二十一日岡崎氏を神戸海上樓上に訪ね芦田作太郎氏立会にて兵電譲渡の交渉をなしたるに岡崎氏は直に快諾され本問題も瞬時にして解決することを得たるなり」(T 9. 8. 11K) また同時に岡崎藤吉も「伊藤英一氏より兵電譲渡の交渉を受けたる時には斯の如き交通機関は経験ある人の経営を待つて然る後発達するものなるを信じ極力伊藤氏を後援するを以て依然として之れが経営を継続すべきやう勧告したり。然しながら伊藤氏は事業整理の必要に迫られ居れるの故を以て再三再四固辞されたるを以て止むなく予は伊藤氏の援助の下に之れが経営をなすことに決心したるなり」(T 9. 8. 11K) と語った。

この背景に関して7月27日の神戸新聞は「財界不況を呈し事業界整理期に入りたる今日、尚ほ之等広汎なる事業に連絡を有することは時代に副はざるの嫌ひあるを以て伊藤氏は今回之が整理の第一着手として予て兵電の持株四万八千株を担保とし当地岡崎銀行より三百六十万円(一株七十五円)の融通資金を仰ぎ居れるを肩代りすべく、交渉を岡崎氏に向って開始したり。然れども岡崎氏側に於ては多年伊藤氏が経営し来れる関係もあり、且世間に於て兵電を乗取りたりと解釈さるるも本懐にあらざるの理由を以て極力伊藤氏に対して再考を促したるも伊藤氏の決心堅く遂に過般の重役会議に伊藤氏よりこの顛末を報告し辞職をなす旨声明したるを以て兵電重役は茲に総辞職をなすこととなり、各重役は伊藤氏の手許に提出したり」(T 9. 7. 27K)と、英一の辞任劇の背景を詳細に報じている。岡崎の「止むなく…之れが経営をなす」に至った背景は自己の岡崎銀行が「兵電の持

株四万八千株を担保とし…三百六十万円」も融通していた英一が「事業整理の必要に迫られ」たためで、いわば債務者から金に代えて株で返すという代物弁済を要望され、応じざるをえなかったということであろう。したがって後年の15年に岡崎が宇治川電気から兵電との対等合併を打診された際、「株式ノ相場ハ今合併ノ上ハ価格52.3円ノモノハ一躍62.3円トナリ、然リ尤モ売買シ易ク、殊ニ今後益々発展シツツアル宇治川電気ノ株主タル位置ニ立ツハ御互ノ利益ト云ハザルヲ得<sup>4)</sup>」との株主総会での発言は英一のような兵電経営者というよりも、事業そのもののへの執着が全くなく、株価の高低、流動性のみに配慮した、いわば兵電株を担保に融資をする銀行家としての発言のように感じられる。したがって兵電を経営する気などなかった岡崎にとって「世間に於て兵電を乗取りたりと解釈さる」ことは余程心外であったと考えられる。英一の撤退を受けて、9年8月兵電の「神戸栄町出張所は去る七日限り廃止の上、而後明石電灯株式会社清算事務所と共に、西代の兵庫電気軌道株式会社及明石電灯株式会社清算事務所に於て執務中なり」と(T9.8.11Y)と報じられ、英一の得意の各社のスタッフを神戸栄町の伊藤商事に集中させてきたグループ統括方式の一角が崩れたことを意味する。また兵電支配人も英一の女婿の細田から犬塚兵次に変更、会計課長大路譲、用度主任入江幸造も「近々退社し、岡崎系の人物夫々就職」(T9.8.24Y)した。また英一の社長時代の9年、兵電は7両の電車(29号～35号)を英一とも因縁深い梅鉢鉄工所に発注していたが、岡崎藤吉に交替した10年には早速日本車両(36～40号)に変更された<sup>5)</sup>。

## II. 伊藤英一の破綻

### 1. 播州鉄道におけるパートナー等の離反

英一が兵電を金主の岡崎藤吉に明け渡した頃、英一の本拠地の播鉄の足元でも、内部の事情に通じ、かつ周囲の情勢の変化に敏感な幹部社員の辞任・退社が相次いだ。9年8月15日播鉄支配人の岸本喜一郎が辞任、9月19日播鉄監査役の納富陳平(4-42)辞任、9月30日播鉄専務(鮮満木材車両取締役等を兼務)の猪木土彦も在任1年足らずで辞任した。(19回営P2)猪木は8年10月8日、11月3日、9年2月5日の3回にわたり監督局に英一からの買収土地リストを持参し、「九州

新延炭坑ニテ償却」「組替ノ旨」を申出た人物で、播鉄はもとよりグループ全体の枢機に関わった重要人物であったと思われる。猪木は播鉄が英一から押付けられた九州新延炭坑を神戸市内の優良物件と交換する際に、監督局から詳細な資料を何度も提出させられた不手際（英一の立場での）もあって、急な辞任につながったかとも推測される。さらに11年9月30日にはグループ各社の役員を兼ねていた支配人の稲岡猪之助<sup>6)</sup>も辞任した。

10年頃からは幹部社員だけでなく、播鉄役員にも辞任する者が激増する。10年3月英一の腹心・岸本恒太郎が播鉄監査役を辞任し、続いて4月播鉄取締役を辞任したト部兵吉（表7）は江井ヶ嶋酒造社長で、播鉄をはじめ、西伊藤銀行などで英一のパートナーとして行動を共にしたシンパの一人と見られる。おそらく親しい英一の依頼で播水の「債務証券」担保等の方法で播水に1万円の資金援助をしていた<sup>7)</sup>。この時点の英一の資金繰りは小野銀行の訴状「大正十年五月二十九日訴外伊藤英一…は多額の負債ある為め之が債務を弁済し得なかった」(T12.11.21 Y) から判断されるように、弁済を受けられなかった可能性がある。

ト部に続いて監査役の英一女婿・中村安次郎<sup>8)</sup>(10.8.12)、取締役の岸本長司(10.12.20)、監査役の末正久左衛門(11.7.25)らが相次いで辞任し、11年9月30日には藤井忠兵衛、畑吉平<sup>9)</sup>がそろって辞任した。満期退任ではなく、任期中の異例の辞任は表面上の理由がどうあれ、播鉄社長である英一への不信任状の提出も同然であったと解される。彼らの多くは湊西銀行、多可銀行、社銀行ら播鉄の応援団ともいべき地方銀行団のボス的存在であり、10年12月21日播鉄沿道の多可、加東、加西、美囊、加古、印南の6郡町村会が「播鉄国有請願の協議をした結果、請願書作成と正副委員各六名宛（一郡から一名）を選出…不日各委員は上京、主務省に出願」(T10.12.24A)した状況とも併せ、親密な関係にあった地方銀行団が播鉄から離反しつつある証拠とも考えられる。英一辞任後の後任の播鉄「酒井社長の熱心を諒とし、地方銀行団は之を応援する事となり…東播銀行頭取代石井亮三郎氏、西村隆次氏、土肥又次氏、多可銀行頭取藤井忠兵衛氏…茲に円満に解決」(T12.1.20Y)したという報道は、それ以前には地方銀行団と播鉄との関係が冷えきっていたことを如実に示している。

このうち辞任の経緯が判明した藤井忠兵衛のケースでは「藤井忠兵衛サンは何



を感じてか播鉄の取締役を辞めることになった。二週間程前に封書で辞表を伊藤社長の手元まで郵送して置いたさうだが、同社からの返事に依ると御辞表は暫らく伊藤社長が御預りするとある」(T11.7.1K「株界片々」と、「株界片々」欄の記者が藤井忠兵衛に取材した結果を書いている。藤井が辞表を郵送した時点と、播鉄の営業報告書記載の正式辞任日付(9月30日付)との間には3ヶ月以上もの開きがあるが、この間藤井の辞表を伊藤社長が長期間握り潰したのは、盟友関係にあった藤井忠兵衛辞任が播鉄ならびに英一関係事業の信用面へ波及するのを恐れたためだろう。当時の新聞は「私設鉄道として恥からぬ地位に生れながら、経営方法を誤った為に殆んど手の下し様なきまでに沈み切った播鉄」(T12.12.8Y)と、英一に批判的な有力幹部が次々と去り、盟友関係にあった重役までが辞表を叩き付けるなど、沈滞し切った播鉄末期の社内の重苦しい雰囲気を表現している。

## 2. 伊藤英一の債務不履行の発生

英一は兵電等、資金繰りのために買占めた持株を処分する一方、鬼怒電株、播鉄株などが、法人・銀行名義(ダミーを含む)に書替えられているのは前述の通り、増田BBの整理進行による「所有株引直し」や、三十八銀行等による同様な代物弁済による取得が広範囲に発生したためである。このことは小野銀行の訴状で「大正十年五月二十九日訴外伊藤英一…は多額の負債ある為め之が債務を弁済し得なかった」(T12.11.21Y)と認定されたように、英一が債務の償還不能に陥りつつあることを示している。

英一の破綻が世間的に広く知れ渡った時期は、悪名高い高倉為三が実権を握っていた日本積善銀行が破綻した際に、「堂島取引所の親玉が金に詰って尻尾を出し、神戸取引所の親玉も金に詰まって検事局からの御呼び出し」(T11.12.1K)などと11年11月23日以降の神戸新聞が英一召喚かの観測記事を「逸早く報道」(T11.11.30Kで自賛)した頃から、神戸税務署が以下の公売公告を出した12年3月26日頃までの間と考えられる。伊藤家との深い関係もあってか英一関係の報道を相当に抑制してきた又新までが11年11月29日のコラムで「知れるもの、知らぬもの共に、一時空飛ぶ鳥をも睨み落とす程の勢力を揮った此の財界快傑末路を慄れ

まぬものはなかった」として、「極度の神経衰弱とやらで入院して居る」(T11.11.29Y) 英一の悲況を伝えることに踏み切っている。

「兵庫県印南郡伊保村今市三百四十六番地 滞納者伊藤英一 右国税滞納ニ付差押タル財産左記ノ通来ル三月三十一日当署ニ於テ入札ヲ以テ公売執行…右公告ス 大正十二年三月二十一日神戸税務署」(T12.3.26Y) 滞納額は不明ながら、差押タル財産は「株式会社神戸取引所旧株二百株(一株五十円)」すなわち額面では僅か1万円に過ぎない。おそらく世間は、地元新聞には関連の記事が載らなくても、公告を見れば額面1万円相当の国税すら支払う能力がなく滞納の揚げ句に差押えられたという厳しい現実を容易に察知し得るであろう。例えば播水の延長運動に奔走中の宍粟郡長の鈴木脩蔵はかかる事態を「財界不況ニ因リ伊藤氏失脚シ(播水)延長線ノ起工頓挫<sup>10)</sup>」に至ったと理解している。

11年11月末現在では英一は神取株を前期に197株売却して300株(44位に後退)保有(53回営P40)するだけであったが、翌期の12年5月現在では上記の差押・公売執行により、200株減少して100株保有(77位に後退)(54回営P41)となっている。神戸税務署が11月末現在の保有300株中の200株しか差押えなかったのは、滞納額が200株の時価内で収まるからであろう。しかしおそらく最後に残った神取300株は理事長であった英一が神取に供託していた保証株式であって、一般の債権者も差押等を避けていたのであるが、英一としては崩落しつつある自己の信用保持のために是非とも必要な理事長の地位保全上も、どうしても手放したくない最後の拠り所であったものと推察される。神戸税務署による差押・公売執行という公権力による退陣の強制により、「友人として伊藤氏に善意の辞任勧告」(T11.12.24K)を行った末正盛治ら周辺からの退陣要求にも屈することなくあくまで抵抗を続けていた英一も追込まれ、ついに11年12月7日付で神取理事長辞任を申し出たのであった。

### 3. 末正盛治ら、支援者の動き

英一自身が相談役になっている湊西銀行が播鉄への与信額がないのは、「心の俣に振舞い度い」「彼の辛辣なる伊藤<sup>11)</sup> 英一のために「哀れむべき災禍に見舞われ」かねない前に湊西銀行の末正盛治が従来<sup>11)</sup>の英一との緊密な提携関係を解消した可

能性がある。しかし9年に播鉄大株主として登場する古川巖(632株、篠山鉄道100株)は末正の湊西銀行支配人(昭和5年取締役役に昇格)であり、湊西銀行も三十八の場合と全く同様に、播鉄株等の担保での伊藤への貸付が不良化した結果、代物弁済として担保株式を取得したものと推定される。かくして強気の英一も同盟者・支援者を次々と失い、グループ各社とも「財政極度ニ窮迫シ自然訴訟差押等頻発」(S3.6.1播水総)して、親密な関係にあった又新からも「極度の神経衰弱とやらで入院」(T11.11.29Y)したとまで報じられる始末であった。

こうした四面楚歌に追い込まれた英一を激励する趣旨からか、11年12月5日彼の後援会が発足し、金佐楼で初会合、メンバーは「坪田、草鹿、藤尾、末正などと云ふ友人知己」(T11.12.6K)であった。英一とも親しい草鹿甲子太郎が代議士の座を「次ぎには快く坪田に譲って」(異P145)いるが、草鹿、坪田両代議士(もちろん英一も)とも伊藤本家をバックに当選したという共通点を有していた。その坪田十郎が社長の阪神石材は伊藤長蔵が14年でも取締役に残留できた数少ない、親・長蔵企業であった。したがって長次郎、長蔵とも接点の多い草鹿、坪田らは英一の「友人知己」というより、むしろ表立って英一や長蔵を支援できるような立場にない、伊藤本家の意思を体しての身代わりメンバーであったのではないかと想像される。また藤尾は三十八とも関係深い神戸信託取締役支配人の藤尾幸一<sup>12)</sup>と考えられ、この英一の後援会なるものの背後には表立っては支援等に動きにくい本家の影を感じ取ることができるようである。

#### 4. 関係会社の手形乱発、訴訟の頻発、地元銀行等への打撃

神戸造船所の9年7月期の決算では同社の資産合計227.3万円のうち、なんと有価証券(内訳は播鉄286株以外は未詳)が170.0万円(74.8%)を占めるなど、メーカーである造船所としては極めて異常な資産構成となっていた。また播鉄市場駅付近に工場を有する織物製造の日本綿布<sup>13)</sup>も11年9月末の第11回決算報告では、払込資本金125万円に対して借入金58.6万円、支手・未払等10.5万円、繰欠30.1万円にも達した。(T11.12.24K)。13年9月期においても播鉄では日本綿布に対する貸地料567円が未収入金としてなお残存していたことから、日本綿布は支払不能に陥ったものとみられる。11年11月には類似の日本綿業(本社加東郡来住村、資本

金10万円、払込済) が設立され、社名と役員、本社の位置から見て日本綿布の第二会社かと推定される。

関西土地信託も11年12月末の第10回決算報告では、払込資本金50万円に対して借入金115.3万円、繰欠20.6万円にも達した。(T12. 1. 7 Y) また「播鉄の副業として石材、煉瓦の両会社を越してみた。処が何れも成績良好、賽先頗る良し」(異P93)と褒められたはずの赤煉瓦メーカーの播州煉瓦も清算人稲岡猪之助(同社前取締役)、野喜治良両名で「大正十一年六月十五日定時株主総会ニ於テ当社解散ノ決議ニ依り自分等清算人選任就職致候ニ付…」(T11. 7. 13K)と債権者宛に<sup>14)</sup>広告している。11年9月13日神戸大同土地解散、11年12月30日長谷川商会解散、清算人松本増吉就任、<sup>15)</sup>12年には中国石材解散決議、住山鈴雄、原正爾を清算人に<sup>16)</sup>選任するなど、英一関係事業の解散等が相次いだ。

12年2月20日又新のコラムは伊藤系企業の惨状を次のように紹介している。「東播地方の銀行団で伊藤英一君の借金が六七十万円に達し、今後同君の模様如何により多少の動揺を免るまいと居るものもあるやうだが、此借金は総て相当の担保品が這入って居るから格別の懸念は不必要と樂觀して居るものも多い。然し同地方の小会社や小工場の中には随分惨なものがあって、今日まで辛ふじて持ちこたへたが、此上猶不景気が持続すると到底遣り切れないものが多からうとのことで、此方が伊藤君の借金よりも心配だと語って居たものがある」(T12. 2. 20 Y) 末正盛治も「伊藤氏関係の多くの会社…は…回復すべからざる哀れむべき災禍に見舞われて…善後策に腐心せねばならない羽目に陥った」<sup>17)</sup>と演説している。鉄道省の佐藤雄能も播鉄などの「株式ノ大部分ハ銀行其他ニ担保トナリ、債権者ハ一株三十五円乃至四十五円ヲ以テ受ケ居ル…債権者ノ苦痛甚シク、破産ノ状態ニ陥ルモノ尠カラサルヘク、同鉄道ノ発展ヲ望ミ得サルノミナラス、地方経済界ニ大動揺ヲ生スルニ至ルヘシ」<sup>18)</sup>と地元銀行等をはじめとする地域経済への悪影響を懸念し始めている。

英一の破綻した時、地元紙は「僥倖なことには先生が銀行に関係して居なかったこと」(T11.12. 9 K)と言われたが、実は三十八以外にも播鉄・播水等と取引のあった、沿線の中小銀行のいくつかは英一の破綻した後に破綻ないし整理・減資等に追い込まれた。たとえば11年7月19日社銀行は英一の西伊藤銀行を救済合

併したが、13年9月20日150万円を減資し資本金200円とする決議を行った。13年には播水取引先の播磨銀行（明治40年12月和歌山から加古川に本店移転）が休業、昭和6年10月免許取消となった。<sup>19)</sup>14年1月25日には三十八も整理を断行、頭取以下役員一同が私財百万円を提供、また「多可銀行は昭和初期の恐慌によって破産して東播合同銀行に買収された」し、淡路銀行は金融恐慌の余波を受けて昭和4年9月閉店、12年5月解散した。<sup>21)</sup>また大志銀行は「昭和の初期経営悪化により倒産」し、昭和7年10月31日業務廃止が認可され、7年11月廃業したものと考えられる。<sup>23)</sup>中小銀行の統合推進でも15年7月には社銀行、東播銀行、柳城銀行、小野銀行の4行が合併して、東播合同銀行が創立された。<sup>24)</sup>4行合同の背景は「殊に欧州大戦後我国財界の混乱は等しく地方銀行にも甚大の打撃を与え、之が整理は一刻後るれば即ち千金の損失なり…郡は此の見地より大正十四年三月上旬より郡内、重なる銀行の重役に就き非公式に合同の意思の有無をただしたるに、強いて反対するものもなく、寧ろ之を歓迎するの意向なり。依て三月二〇日を期し郡内九銀行関係者を郡衙に招集し、合同の必要を力説勧奨をなし」<sup>25)</sup>たもので、地方銀行への甚大な打撃を憂慮した郡役所主導で進められた。もちろん時期的なズレから、英一関係のみによる影響だけではなく、それ以降の織物をはじめとする地場産業の不振など、幾つかの要因が重なっての破綻ないし整理統合と考えられる。

## 5. その後の伊藤英一

『五十町歩以上ノ大地主』に登場する大正13年時点の英一（会社員）の所有耕地は「田なし、畑111.6町、計111.6町、うち自作反別なし、北海道空知郡1村、小作人20戸」の規模になっていた。14年時点で英一は東洋農事社長、播州鉄道、明石瓦斯、山東起業各取締役との記述があるが、このうち播鉄は辞任し相談役、明石瓦斯も13年6月26日の総会で取締役を退任済（24回営P2）で、実質は「開墾肥料農産物販売其他」（T13帝P31）を目的とする東洋農事（旧伊藤商事）社長のみと考えられる。東洋農事は上記の英一の所有耕地として残された北海道空知郡の畑111.6町の開墾や、旧伊藤商事の穀肥部の商権を引き継いだものと考えられる。14年時点で英一は「兵庫県人野田りんの家籍に入り」<sup>27)</sup>、昭和16年時点の英一の肩書は東洋農事社長、甲陽土地取締役（S16銀上P17）の2社のみと寂しく、昭

和18年1月80歳<sup>28)</sup>で逝去した。

### III. 主要各社の破綻経緯

#### 1. 伊藤商事

伊藤商事は大正7年9月設立され、資本金200万円（うち50万円払込）、積立金25,000円、利益30,716円、配当…<sup>29)</sup>%、役員は〔表―13〕の通り、伊藤関係企業で兼務役員数の多い主だった人物が顔を揃えていた。本店は9年4月時点では神戸市栄町通6丁目48番屋敷に置かれ、たとえば9年10月30日播水の総会は「神戸市栄町通六丁目四十八番屋敷伊藤商事株式会社楼上ニ於テ」（播水T9下営P1）開催されるなど、関係会社の重要行事も伊藤商事本店で行われた。また東京などに支店を置き、T9.2.19付の播鉄支配人の安田寅次から佐藤雄能殿宛の伊藤商事便箋には「神戸市栄町通五丁目四五 伊藤商事株式会社 電話元町一一〇三～一一〇九番、一二六三番、八四〇番、二七番」と電話が10本（うち一一〇六番は「長」）もあり、相当活発に取引していた様子が窺える。このことから、9年3月頃に伊藤商事の本店は神戸市栄町通5丁目45から神戸市栄町通6丁目48番屋敷に移転したと考えられる<sup>31)</sup>。各関係会社は伊藤商事本店内に本店（伊藤鉄工所等）ないし神戸出張所を置いた。例えば播鉄副支配人の安田寅次も鉄道省の佐藤雄能への返書（例えばT9.2.19付）に伊藤商事の便箋を使用しており、安田自身も伊藤商事

〔表―13〕 伊藤商事の役員一覧

取締役	伊藤孝次	英一長男、伊藤鉄工所、播州石材、大門ヴェルベツト、長谷川商会、神戸造船所、福島織物、加古川製紙、龍電、農信託、明石電灯、日本綿布、加古川興業、鮮満木材車両各取、浪速信託土地監
〃	伊藤英一	播鉄専務ほか多数（表3）
〃	石丸貞太郎	石丸甚兵衛長男、末正系資本家。伊藤製鉄、鮮満木材車両、真野土地各取、湊西銀行（S5.7.30～9.7.30）、西代土地各監
〃	稲岡猪之助	播鉄支配人ほか多数（表7）
監査役	末正繁太郎	湊西銀行頭取、播鉄監ほか多数（表7）
〃	三宅利平	酒造業、新鉄社長、龍電専務、加古川銀行、尾野商店、日本綿業、加古川製紙、尼崎商店、中日化工、本田商事、別府軽便鉄道各取
〃	細田藤弥	英一二女の夫、播鉄監ほか多数（表7）

（資料） 大正9年版『銀行会社要録』、兵庫P18、役員録等

でなんらかの役職に就いていた可能性があろう。もっとも設置の遅い播水の場合11年4月30日の株主総会で議長（英一）が「業務執行上、出張所設置を便宜とする旨を述べたるに対し、賛成と呼ぶ声多く異議なく設置のことと決す」（T11.4.30議）となった。

「彼〈英一〉の…諸事業の参謀部」（異P94）と称された伊藤商事の目的は「石炭銅鉄各種鉄工製品其他」（T8帝P16）の「各種商品売買」<sup>32)</sup>であり、その取引分野は、①石炭、②銅、③鉄、④各種鉄工製品、⑤其他（穀肥部ほか。後の東洋農事時代の「開墾肥料農産物販売其他」T13帝P31）に区分され、それぞれ関係深い仕入先・得意先として①石炭（炭坑兼営の播鉄、播水、石炭ユーザーの各私鉄）、②銅、③鉄（伊藤製鉄、ユーザーの各私鉄）、④各種鉄工製品（伊藤鉄工所、ユーザーの各私鉄）、⑤其他（英一所有地の小作人）等を有していたと思われる。①の石炭では9年播水名義で新延炭坑の兼営を申請した際に、英一は鉄道省に対して「本炭業ヲ兼営スルニ於テハ本社〈播水〉及拙者〈英一〉関係ノ鉄道等ニモ石炭ノ供給ヲ潤沢ナラシメ各種ノ便宜有之候」<sup>33)</sup>と、「鉄道等ニモ石炭ノ供給」を行うことを明記するなど、自山の新延炭を含む筑豊炭を月数千トン程度買付けて、阪神方面に移送していたとみられる。この後、播水との取引で伊藤商事は播水名義で所有する新延炭坑の興業費の「年八歩ノ割合ヲ以テ」「炭坑委託経営料」<sup>34)</sup>を播水に支払う委託契約を締結し、新延炭坑の経営を播水から受託、每期約3.3万円を手形で支払っていた。しかし「該炭坑ハ現今廃坑同様ノ状態ニシテ、収支相償ハサル」上に、英一自身の失敗も重なり、伊藤商事は播水に「之〈炭坑委託経営料〉ヲ納入シ得サル」<sup>35)</sup>支払停止状態が続き、ついに13年播水は伊藤商事からの「受取手形…モ回収不能ノモノデアリマスカラ欠損ニ計上」<sup>36)</sup>し、ここに伊藤商事は関係企業からも破綻と認定されるに至った。

②の銅取引では大正7年7月以前に英一名義で取得・採掘した山口県の明城銅山<sup>37)</sup>の製品取扱のほか、増田関係の増田伸銅所、矢野鉱業（愛媛県出石銅山等を経営）等との取引の可能性もあろう。③鉄の分野でも大阪市の山田工業を相手取り1.3万円の損害賠償金、1.2万円の保証金の返還訴訟を神戸地裁に提起した。理由は伊藤商事が「本年二月中米国カーネギー二十封度軌条十哩を一哩六千八百五十円にて買受け」（T9.7.23Y）、保証金を差入れたのに山田工業が引渡ししない

というものであった。おそらく播鉄、兵電等の関係鉄道の軌条納入を伊藤商事が一手に取扱っていたと考えられるが、その手慣れたはずの商売でもトラブルを表面化させている。さらに伊藤商事は⑤其他の分野でも背景は未詳ながら伊藤商事穀肥部に勤務していた堀尾徳次郎に関し9年6月15日「今回合意の上退社致候間此段広告候也」(T9.6.15K)と広告した。

また伊藤商事は9年時点で鐘淵紡績300株、大阪高野鉄道150株、阪急320株、日本郵船160株、川崎造船所<sup>38)</sup>200株、日本絹布200株、正金銀行50株、日本海上50株、興銀300株、計1730株を保有し、英一の株式投資の一旦を担っていたが、特に鬼怒川水電の2460株(T9/11)、播鉄1,953株(21回営)の株主としても登場する。英一の関係する企業群の持株会社的機能を果していた播鉄が持株を放出した結果、伊藤商事が播鉄に代ってその中核機能を継承した可能性がある。11年6月には伊藤商事取締役の岡藤信一(加古川製紙取締役)が英一、加古川製紙を提訴(T11.6.6K)したり、11年11月「伊藤氏の召喚と共に同社<伊藤商事>東京支店長町田昇氏…も同様召喚を受けてゐたらしい」(T11.11.23K)と報じらるなど、司法当局も播鉄と並んで中核としての伊藤商事の重要性は十分認識していたようだ。こうした事実から伊藤商事はおそらくあらゆる取引分野で内部管理体制に問題が生じ、信用第一の商社として末期症状を呈していたものと見られる。

12年8月若松港から2,154トンの石炭を積出したのを最後に大正7年12月以来の石炭商としての活動<sup>39)</sup>を停止、13年頃には目的を伊藤商事の穀肥部に相当する「開墾肥料農産物販売其他」(T13帝P31)に縮小し、社名も東洋農事と改称(本社神戸市栄町通6-48、資本金200万円、内払込50万円は不変)したものと見られる。役員は取締役英一、森本駿(伊藤商事取締役)、住山鈴雄<sup>40)</sup>、森本是一郎(広島県豊田郡川添村、T11.7.20)、土井権、監査役末正久左衛門(伊藤商事監査役、湊西銀行頭取)、岸本恒太郎、稲岡猪之助(伊藤商事取締役)、町田昇<sup>41)</sup>、其阿弥直次郎(元鮮満木材車両取締役)、畑七右衛門(氷上郡春日部)であった。(T13帝P30)

## 2. 神戸取引信託(神戸取引土地)

神戸取引信託(取信)は広く「動産、不動産、商品売買取引仲介、証券の引受及其他一般信託」業を行うノン・バンクで、法的に規制の多い神戸取引所(神取)



に代って、これらの関連・周辺業務を行う「分身」「別働隊」として7年3月資本金200万円（うち100万円払込済）で神戸市元町通4丁目に設立され、神取の2703株（T11銀P44）を所有した。社長英一（神取理事長）1,650株、常務\*井上安松<sup>42)</sup>400株、取締役\*岸本恒太郎（神取常務理事）、大村清七<sup>43)</sup>、\*正田房治郎（神取取引員・正田房治郎商店主）、監査役田宮卯一、\*吉田金太郎<sup>44)</sup>、\*杉野伊三郎<sup>45)</sup>、支配人中野慶路<sup>46)</sup>、大株主井上善吉（4-56）400株、伊藤孝次350株、乾繁寿（神取理事）300株（T8帝P81）と役員・株主のほとんどが神取関係者・仲買人（\*印は神取株式仲買人→取引員）で占められた（T8帝P81）。株主人員464名、常務役員8、使用人18、積立金13,315円、利益177,054円、配当11.5%<sup>47)</sup>、実績としては9年4月播陽紡績の株式募集の主幹事証券を神戸信託団とともに務めたことなどがあげられる。（T9.4.6K）

当時、神戸「取引信託株式会社が改正後に於て直キ取引〈短期清算取引〉が神取に依って直接取扱はるに至ると共に自然取信側の利権消滅する」（T9.6.4K）という危機に瀕していた。取信の「現重役の放漫なる貸出に対して不満の念を抱」（T9.8.28K）いた取信株主の武田由助、\*片岡歌次郎（神取取引員、後に神戸取引土地監査役）、柴崎利三郎（新取締役役に就任、後に神戸取引土地取締役）らが「不謹慎なる貸付をなし…財界不況の影響を受けて百万円に近き欠損を招き、担保の値上がりに依りて漸く四十万円の欠損となり、最近増担保の納入を得て二十五万円内外の欠損」（T9.8.28K）となったのは現重役の責任として追及したためであった。これに対して現重役は「財界の好調に連れて二百万円の会社が百六十万円の貸出をなしたることは決して放漫なる貸出にあらざるべし。当会社は曾て資本金百万円の時に百二十万円の貸出をなしたることあり、今回の如く株式大暴落に際せば増担保の納入も困難なるは自然の理なり。殊に欠損も株式の値上がり増担保の納入に依りて僅に二十五万円となれり。二百万円の会社が二十五万円の欠損を招致したること今日の時代に不謹慎なる貸出の結果といふことを得るや否や。反対者は目下殊更に事を好み居れり。即ち現重役は何等会社に未練を有せざるを以て少時職を退きて彼等に内閣を明け渡すべし」（T9.8.28K）と弁解した。

武田由助らのいう「不謹慎なる貸付」の内情を解明するため、まず取信の親会

[表-14] 神戸取引所株主の推移

	T 8 .11	T10.11		T11. 5 計	鬼電株	備考（英一等との関係）
		旧株	新株			
伊藤英一	長17768	1397	0	497		取信社長 鬼電買占の張本人
伊藤孝次	1100					英一長男 取信350株
増田BB		6186	0		64039	英一へ430万円融資
（株）淡路銀行		3000	1500	4500	1680	播鉄へ36,862円融資
福本実		3050	0		1480	日本商業銀行貸付課長
神戸取引信託		1713	990	10353	14360	英一へ「不謹慎なる貸付」
高野徳寿		1641	820	820		京都市 関係未詳、T13/3播水5500株
末正盛治		1660	360	1620	4340	英一のパートナー
小計	18868	18647	3670	22317	85899	
小林秀吉				2819		元町通、T12所得税623円、関係未詳
村上森造	1000	450	325	775		西灘、貿易商、神取理事長、明治信託監
高木庫二	理900	300	225	525		西灘、会社員、伊藤理事長時代の神取理事
岸本恒太郎	常730	520	560	930		神取常務理事、取信、神戸共同商事各取
太田亀太郎		80	1310	900		西宮、会社員、阪神信託常務、互成会代表
本小曾根(株)		870	435	1305		兵庫湊、代表社員小曾根貞松、喜一郎
中村直吉		179	1040	1204		米穀仲買、神戸証券常、神戸信託団取、取信監

(資料) 神戸取引所「株主姓名表」(T10.11)

社的存在で、かつ当所株として仕手筋が手掛けた神取株の株主の推移を見ると、[表-14]の通り、T 8 /11で英一、伊藤孝次 2 名で4万株中の18,868株47.1%をしめていたのに、T10/11で英一は1,397へと17,471株の大幅減少となった。代って①増田 BB、②淡路銀行、③福本実<sup>49)</sup>、④取信、⑤高野徳寿 (6-48)、⑥末正盛治の順で上位6者を占めた。この時期に破綻に迫込まれた英一、伊藤孝次の持株をこれら上位者で肩代りしたものと見られるから、彼らは英一らに対して神取株等を担保に金融していた可能性が高い。高野も紳士録等で検索できず、関係は未詳ながら英一の債権者ないしそのダミーの可能性もあろう。

英一破綻の主因となった鬼怒電T 9 /11株主名簿（前掲 [表-12]）と対比すると、①増田 BB64,039、⑤取信11,590、⑪英一7,300、⑬加古川銀行5,910、⑭福本実1,480、⑯淡路銀行1,400株、⑰末正盛治862株という具合に、神取と鬼怒電という地域も業種も異なる銘柄間としては奇妙な一致を見せる。因みに播鉄の株主名簿（T 9 /9）でも①英一13,873、②淡路銀行12,001、⑦加古川銀行2,753、⑫

増田 BB1,500、⑦末正盛治950株となり（取信、福本実、高野徳寿はなし）、播水の株主名簿（T13/3）では高野徳寿5,500株（旧1,500、新4,000）、英一2,670株、合同証券（取信の別会社）1,250株、伊藤孝次107株となる。（増田、取信、福本、淡路銀行、末正はなし）

これらのうち増田 BB は第6章で述べた通り、英一関係に430万円の「担保付手形貸付」を行い、鬼怒電旧株8,320株、新株55,079株（計63,399株）、神取旧株6,186株、新株3,093株（計9,279株）等の「担保ヲ処分シ…所有ニ引直シタ」結果、<sup>50)</sup>228万円を回収し、なお202万円が残ったことが日銀資料から明らかである。11,970株もの播丹筆頭株主となるなど、英一関係に鬼怒電、神取株等を担保に融資していたのが確実と見られる淡路銀行も増田 BB の創業者の増田信一の地元銀行であるが、悪名高い高利貸の「乾新兵衛氏から淡路銀行が保証するならば田中総裁に百万円出さうといふ照会があった」と報じられ、<sup>51)</sup>田中総裁への導入預金問題にも登場するなど風評の芳しくない銀行として知られ、<sup>52)</sup>案の定、金融恐慌の余波を受けて昭和4年9月閉店、12年5月解散した。<sup>53)</sup>こうした増田、淡路両行と同じ持株変動パターンを示す取信の場合も、所有する鬼怒電株が11,590株（T9/11）、14,360（T11/5）の巨額に達していたことから、取信社長である英一に鬼怒電、神取、播水株等の関係企業株式を担保に「不謹慎なる貸付」をしていたことはほぼ間違いないまい。

かくして取信は9年9月15日「内部整理」<sup>54)</sup>の必要に迫られ、社長英一以下、取締役井上安松（T9/5 鬼怒電1010株主）、岸本恒太郎、大村清七、\*正田房治郎、相談役\*藤井忠兵衛（4-56）、沢田清一郎、監査役\*杉野伊三郎の全「重役連袂辞任」<sup>55)</sup>に迫込まれた。

9年9月取信の新社長に就任した武田由助は同社の危機<sup>56)</sup>を乗切するために合同証券（社長武田由助）を別途設立し、同社の利権を維持するため種々画策した。取信の英一前社長時代の不良債権整理の一環として神取株のほか、いかにも世間体の悪い不良資産たとえば播水株式<sup>57)</sup>は13年3月末時点では別会社の合同証券名義になっている。（播水T12下営P23）武田由助は播水大株主たる合同証券取締役としての立場で英一系企業の整理過程にも関与した。例えば11年10月31日（英一の辞任時点）の播水総会では議長（英一）が先決しようとした鉄道の譲渡問題に対し

て「株主武田由助 本案ハ事重大ナルヲ以テ別ニ臨時株主總會ヲ招集シ慎重凝議シテハ如何」(T11.10.31議)とたしなめる発言した後、役員の詮衡委員に指名され、後任社長以下の役員人事を指名する大役を行い、閉会に際して「株主武田由助新重役ニ対シ希望ヲ述ブル処アリ」(同上)と徹頭徹尾総会を仕切った。かつて英一が神取理事長として一仲買人たる武田由助を冷遇したのに対して、今や石もて追われる立場の英一と、債権回収を責務とする武田由助の強圧的態度が対照的である。

12年11月には「不動産及債券類所有貸借並ニ金融」(T13帝P80)を目的とする神戸取引土地が設立され、本店を神取内に置き、資本金20万円、社長は\*武田由助、取締役\*仲忠太郎(4-49)、柴崎利三郎、\*山手宗平、\*杉野伊三郎、\*中谷作太郎(神取・米穀部仲買人組合代表者)、監査役松田万次郎、\*片野歌次郎<sup>58)</sup>と、旧取信のメンバーが横滑りしたのであった。(本項で人名に\*印を冠したのは神取株式仲買人→取引員、証券業者)

### 3. 神戸取引所

英一は神戸取引所(神取)理事長に就任した際、「業界の先輩藤井・沢田の両氏に相談を持ちかけ<sup>58)</sup>」、岸本恒太郎を常務理事に据えたほかは「有名無実に近い名義上の二、三重役」(T11.6.24K)を宛てたとされる。このうち英一の腹心で明治41年の第10回選挙で兵庫県から代議士当選した経験のある森本駿<sup>59)</sup>(伊藤商事取締役ほか)は、その政治力を買われ、神取相談役として「神戸取引所に於ては主務省に対し最後の折衝を為すべく、森本相談役は六日東上した」(T9.7.6K)と500万円への増資の主務省折衝に活躍した。結局「三百五十万円程度なら認可せられるべき模様もありたれば、爰許一二日中に三百五十万円に増資の申請をする由」(T9.7.6Y)と報じられた。

8年末神取はかねて広瀬千秋(現監査役で、日本綿布取締役)の理事長時代からの懸案であった新築移転を実行したが、英一が移転先の「五郎池の土地を予め買占めて置いた事」(明P24)は彼を礼讃する『関西朝報』ですら本来の利用計画(①神戸駅移転、②青物市場、③兵電乗入線のターミナルの各予定地)が行き詰まった結果の窮余の一策ながら「尚数十万円を利し得た」とは「何にしても凄い

腕前」(明P25)と感嘆している。五郎池とは神戸市下三条町周辺の俗称のようで、転じて神取を指すことになったが、五郎池には「店舗ヲ建設シ商人ニ貸付」ける(株)五郎池廉売市場も11年7月設立されている。(T13帝P2)

この「五郎池の地面を神取へ高価で売付け」(T11.12.24K)るなど、取引所の増資の動機となった移転問題には英一は大きくかかわり、英一を「力山と気世を蓋ふの概ある商界の傑物」(T11.12.24K)と評価した末正盛治も神取の株主総会で彼の業績を取引所の増資と移転に集約した。

9年4月の反動恐慌の直前の神取は「其間株式分市場が一ヶ月以上も休会したるに拘らず斯の如き収益を見たるは同所空前の好成績」(T9.6.4K)を挙げていた。11年6月24日神戸新聞は「現任神戸取引所理事長伊藤英一氏の引退説に関しては…既定の事実として唯其の時機のみが問題になって居るに過ぎない」(T11.6.24K)と半ば確定的に報道し、「伊藤氏の辞表が出て居ない」点も「某有力株主は伊藤氏に対する情誼上」(T11.6.24K)の理由としている。『株界片々』では「伊藤神取理事長が引退すれば其慰労金は少くも三十万円也…とドエライ説が何所からともなく伝はる。半期の利益金を全部棒に振らなきゃ出来ない仕事。ナニ旧取引所の地面と建物を全部頂戴サへすれば三十万円の価値充分だ…とはどこまでも伊藤式」(T11.6.28K「株界片々」)と皮肉っている。直後の「株界片々」欄では「神取引退料三十万円説は真実伊藤ハンの口から飛んで出たものらしい…周囲の人々からはアラヌ噂を立てられる。旦那サン(伊藤氏のこと)からは手切れ金をと逆責めにあふ宛るで外妾同様だと岸本常務はコボスコボス」(T11.7.1K「株界片々」)と、担当記者が岸本常務に取材した結果を書いている。その後も「神戸取引所の重役異動問題は理事長伊藤氏の引退渉らざる為め其後沙汰止みの態であったが…伊藤氏は近く引退すべき立場にあり、殊に周囲との意思甚だしく疎隔せるの事情」(T11.8.6K)にあった。

11年12月7日英一は神取理事長を辞任したが<sup>60)</sup>、14年に末正盛治(神取6位2020株)は神取定時総会で、8年2月の神取常務理事への岸本恒太郎選任を回顧して「岸本君にたてた。…当時人選を誤って平凡の紳士を聘するか、伊藤氏と同性格同気相求むるの士を其の位置に置くか、或は我利の奸物を充当して居ったならば其結果は、今頃は伊藤氏関係の多くの会社の其れの如く当取引所は必ずや回復す

べからざる哀れむべき災禍に見舞われて、株主諸君と共に之れが善後策に腐心せねばならない羽目に陥ったであろう<sup>61)</sup>」と当時の「伊藤氏関係の多くの会社」の惨状を語る。末正の演説では先の『株界片々』で「旦那サン（伊藤氏のこと）からは手切れ金をと逆責めにあふ宛るで外妾同様だ」（T11. 7. 1 K）と愚痴る岸本の立場が鮮明になっている。11年11月23日神戸新聞が英一召喚かの観測記事を「逸早く報道」（T11. 11. 30 K）で自賛）神取仲買人組合等からの退任要求するなど、四囲の状勢皆々同氏の為に不利」（T11. 11. 29 K）となり、「伊藤氏と姻戚関係に在る」（T11. 12. 1 K）と言われた末正盛治も「自分は友人として伊藤氏に善意の辞任勧告」（T11. 12. 24 K）を行うまでに変化した。

#### 4. 加古川製紙

加古川製紙は9年7月2日加古川製紙振出、佐久間原料店受取の額面1,191円89銭の「為替手形紛失ニ付自今発見候トモ無効ニ有之候間此段及広告候也」（T 9. 7. 2 Y）と広告した。これは単なる一過性の事故の可能性もあるが、後の訴訟頻発・役員的大幅更迭等を考えると、資金繰りの逼迫に伴って、手形乱発による経理状態の錯綜、社内秩序の崩壊、手形事故を口実とする反社会的勢力の介入等の一つの前兆現象であった可能性も否定できまい。11年頃なぜか遠方の水戸の財界人・竹内権兵衛が取締役に就任している。（T11銀P中64）竹内は水浜電車社長として業界の会合等で英一とも面識があったはずで、家業が和紙製造で、竹内製紙を創業した竹内が茨城県下の零細・不振私鉄の再建にも辣腕を発揮していた会社再建のプロなのを知った英一あたりが加古川製紙取締役に招いたかとも想像される。しかし竹内の本拠たる「膨大な資本を注ぎこんだ竹内製紙も、悪戦苦斗、大正末期頃までつづいて消滅…権兵衛氏は…東洋製鋼の社長に就任したが、会社は破産、人に利用され、だまされて買った株は崩落、手痛い打撃を受けた<sup>62)</sup>」ほどだから、加古川製紙でもほぼ同様であろう。その後11年6月6日神戸新聞は「県下印南郡伊保村今市三四六伊藤英一及び同人の経営に係る加古川製紙株式会社は大阪府堺市中之町大通七岡藤信一から為替手形金一万二千二百円請求の為替訴訟を同様民事第三部へ提起された」（T11. 6. 6 K）と報じた。同時期に以下のような本店移転と役員更迭が生じており、訴訟頻発ともども、加古川製紙の異常事態を

露呈している。「加古川製紙株式会社役員変更並ニ本店移転○取締役太田九平樋口作蔵ハ各辞任ス○取締役欠員ニ付補欠選挙ノ結果大阪府堺市栄橋通二丁目一番地藤井照千代 神戸市元町五丁目三百番屋敷土井高一郎各当选就任ス○大正十一年六月二十五日本店ヲ大阪市北区曾根崎上三三丁目一七八番地へ移転ス 右大正十一年七月十日登記…姫路区裁判所加古川出張所」(登T11. 7. 17K)翌年の12年12月10日加古川製紙は以下の官報記載の通り、竹内の東洋製鋼(正しくは日東製鋼か)の場合と同様に破産申立を受けたが、末期の伊藤商事、加古川製紙両社の取締役たる岡藤信一と、訴訟の直後に乗込んで来た藤井照千代とは堺市という共通点があった。「強制和議認否決定期日 破産者(和議申立人)加古川製紙株式会社右法律上代理人取締役藤井照千代 右ノ者ニ対スル大正十二年十二月十日(メ)二三九、二五九、二七五号破産事件ニ付当裁判所ハ強制和議認否ノ決定期日ヲ十四年二月二十日午前九時ト指定ス 大正十四年一月三十一日 大阪区裁判所<sup>64)</sup>」

## 5. 播州水力電気鉄道

播水は「伊藤関係手形」に関連して播水の「保証債務ニ対シ強制執行ヲ受ケタル<sup>65)</sup>」結果、その「訴訟費用」とともに支払った金額を「仮出金」として計上した。播水清算人堀権八の答申では「会社ガ保証セル手形ニ対シ、振出人ニ於テ手形債務ノ履行ヲ怠リタル結果、保証セル当社ガ強制執行ヲ受ケタルモノ、及之カ示談解決ノ為メ支出セル金額<sup>66)</sup>」と説明している。つまり、英一や伊藤商事など、伊藤関係の個人や企業が振出した手形に対して播水が裏書等の保証を行ったが、「振出人ニ於テ手形債務ノ履行ヲ怠リタル結果<sup>67)</sup>」、裏書保証した播水も「大関隆外四名」の債権者側からの強制執行を受けて訴訟沙汰となり、播水が「示談解決ノ為」支払ったものと考えられる。この「保証債務に対する支払並被差押金」6469円の支払先内訳は播磨銀行須磨支店(抵当順位四番、元利金6208円、競落による配当額ゼロ、播水への届出債権は為替手形2035円)4147円、多可銀行余部支店(播水への届出債権は為替手形3420円)958円、増田ビルブローカー銀行547円、長谷川忠七(大阪、T13. 3末現在播水700株主)265円、井上文也(届出債権は債務証券<借入金>19720円)200円、太田九平(神戸銀行支配人、加古川製紙、播州物産各取締役、抵当順位四番、元利金3400円、競落による配当額ゼロ)200円、渡辺治右衛

門（届出債権は社債16806円）147円であつた。<sup>68)</sup>報告を受けた鉄道省監督局の担当官（佐藤雄能か）は「財政窮乏ノ会社トシテ債務保証ヲナスカ如キハ穩当ナラス。尚本件中ニハ数期其儘ノモノアルカ如シ。速カニ整理ヲ要ス。本会社ハ既ニ解散シタルコトモアレハ此儘ニスル外之アルマジ…」との付箋<sup>69)</sup>を付して立腹の様子だが、「財政窮乏」のグループだからこそ、資金調達に「伊藤前社長ガ必死ノ狂奔」を行い、当然に一員の播水「会社カ保証」したように、播水を含めて英一グループ各社が当面の資金繰りをつけるため、相互の保証行為など傷を嘗めあつてその場凌ぎに糊塗を続けてきた結果、傷口が一層化膿して致命傷になったと思われる。「苦境に立つて随分思ひ切った無理算段をやったのが…悪い結果を招いた」（T 11.12.9 K）のであり、これこそが土井清算人のいう「伊藤前社長ノ蹉跌ハ陰ニ陽ニ当社ニ影響シ財政極度ニ窮迫シ自然訴訟差押等頻発シ」た負の波及効果であつたと考えられる。

播水は「伊藤英一氏一派の経営時代に同氏の事業上の蹉跌から会社も巨額債務を負ふの止むなきに至り…大阪の酒井栄蔵氏一派が経営を引受け…」(T13. 7. 3 K)、11年10月30日取締役森本駿、英一、町田昇辞任、酒井栄蔵、藤井照千代、土井高一郎、前田達次（3-9）が就任した。（T11.11.14登、T11.11.21 Y）昭和3年6月1日土井高一郎播水清算人は破綻当時の事情を「伊藤前社長ノ蹉跌ハ陰ニ陽ニ当社ニ影響シ財政極度ニ窮迫シ自然訴訟差押等頻発シ、経営ノ衡ニ當レバ勢ヒ個人保證若シクハ立替金デモセネバ納マリガツカヌ位ナラマダシモ、茲ニ公言スルコトノ出来ナイ様ナ難問題モ続出スル爲メ、身ニ累ノ及バンコトヲ虞レ唯一人整理救済ヲ引受ケントスルモノナク、伊藤前社長ガ必死ノ狂奔モ氣ノ毒ナガラ徒勞ニ帰シ、止ムナク任俠ヲ以テ鳴ル畑違ノ大親分酒井氏ニ泣キツカレタ…」(S 3. 6. 1 総)と播水株主に報告している。さらに決定的な出来事として13年4月29日日本勧業銀行は播水鉄道財団を競売を申立て、競売期日の5月29日には競売が行われ、「龍野区裁判所に於いて競売の結果六十万千百円を以て芸備銀行の重役谷口節氏名義に落札したが…其筋から競売の許可あり次第裁判所へ代金を納入すると同時に会社は茲に播電鉄道株式会社の名の下に」(T13. 7. 3 K)「新会社創設して營業を繼續」(T13. 7. 4 Y)した。この鉄道財団競売事件は「前伊藤社長時代の莫大なる負債の爲…施すに策なく」<sup>70)</sup>「当時の社長伊藤英一氏の財産に於ける



失脚から類例の稀な鉄道の競売等種々錯雑なる問題を惹起した<sup>71)</sup>」と、全国的な専門誌でも「伊藤英一氏の財産に於ける失脚」が報じられている。また地元に対しては芸備銀行（本店広島）の自己競落会社に関して「從來全ク了解ナキ広島方面ノ方々ガ全権ヲ握レル…播水ノ新会社ニ対シテハ可ナリ多クノ不安ヲ懷<sup>72)</sup>」くなどの波紋を及ぼした。（芸備銀行による播水財団競落の経過は前掲拙稿参照<sup>73)</sup>）

注1) 2) 4) 5) 28) 前掲『山陽電気鉄道65年史』P68、62、70、238、57

注3) 岡崎藤吉は安政3年佐賀藩士の末子として生まれ、開成学校卒、兵庫県庁勤務、飾磨県参事岡崎真鶴の女婿となり、戸長、神戸日報経営、山陽鉄道、三十八国立銀行各取締役、摂津灘興業、酒家銀行等を創立、M27海運業に転じて大戦景気に所有船を売却した金で神戸岡崎銀行を創立し頭取となり、神戸海上運送保険社長等、神戸財界の有力者の地位を占めた。後に貴族院議員（前掲『山陽電気鉄道65年史』P63）

注6) 15) 16) 64) 官報T11.11.17、T11.11.8、T12.3.30、T14.2.10

注7) 播水「借入金明細表」T13.12.22現在「債務証券に関連せる債務」、文、播水。播水への届出債権にはト部広次名義でも為替手形1000円あり。同じく播水の「債務証券に関連せる債務」13000円を借り入れた井上文也（播水への届出債権は債務証券19720円）は伊藤との関係は未詳だが、鬼怒電の11/5期には300株主（兵庫）として登場しており、伊藤と同時期に仕手株の鬼怒電を手掛けた投資家である点で、ト部同様に伊藤との接点を有している。

注8) 公務員で欧州在勤中の中村を監査役とすること自体に無理があった。

注9) 畑吉平との異同は未詳ながら、播鉄は12.3.31現在で「畑吉比良」なる人物に対して12,000円の支払手形があり、新会社の播丹に継承された。（播鉄、播丹間のT12.4.21付「覚書」）「比良」=平と考えると、畑吉平もト部兵吉と同様な金銭上の問題が背景にあった可能性がある。

注10) T14.6.24宍粟郡長鈴木脩蔵書簡、文、播水

注11) 17) 58) 61) 「演説原稿」『岸本家文書』2600番（布川弘「実業家岸本恒太郎の功績」桑田優編『播州高砂岸本家の研究』H1、P112～4所収）

注12) 藤尾幸一は北大阪電気鉄道、尼崎土地、兵神館各取締役（銀T9下P5）

- 注13) 日本綿布はT 6 . 5 .28設立、本社加東郡来住村、資本金100万円、配当10%、播鉄5.0%、積立金13,000円、利益87,849円、配当12%（前掲『会社通覧』P 332）。播鉄はT 6 / 3「市場駅付近ニ綿布会社ノ設立セラルルアリ」（12回営P 3）と期待している。
- 注14) 播州煉瓦はT 6 . 5 .24設立、本社加東郡来住村添田、資本金20万円、播鉄50.0%保有、配当20%、職工数男26、女 6、原動力他、数 2、実馬力75馬力（前掲『会社通覧』P 800）
- 注18) 「播州鉄道譲渡ノ件」T 15. 1 .27、文、播鉄
- 注19) 前掲『本邦銀行変遷史』P 657、前掲『写真集明治大正昭和加古川』P 83
- 注20) 『西脇市史 本編』S 58、P 824
- 注21) 24) 53) 前掲『神戸銀行史』P 256、215
- 注22) 前掲『滝野町史 本文編』、P 752
- 注23) 『日本金融史昭和編』9 巻、P 460、前掲『本邦銀行変遷史』P 422
- 注25) 「兵庫県郡役所事績録」（『小野市誌』S 44、P 480所収）
- 注26) 27) 前掲『人事興信録』七版いP 48
- 注29) 32) 47) 前掲『会社通覧』P 360、391
- 注30) 以前には新鉄の総会は加古川の播鉄本社で開催され、T 8 . 6 .18の総会は「神戸市栄町通五丁目播州鉄道株式会社神戸出張所内ニ於テ」（新鉄T 8 上営P 1）開催された。
- 注31) 伊藤商事の旧本社跡の5 / 45にはT 9 . 4 .30時点で伊藤孝次、森本駿が居住（播水『商業登記簿』T 9 . 4 .30移記分）しており、伊藤商事の役員用社宅に変更されたか。
- 注33) T 9 .12. 7 付申請書、文、播水
- 注34) 35) T 11.12.25付監督局長宛播水酒井栄蔵社長答申、文、播水
- 注36) T 13. 4 .30播水21回決、土井副社長答弁
- 注37) 『福岡県鉱務署管内鉱区一覧』大正 7 年 7 月 1 日現在、P 64（九大石炭研蔵）
- 注38) 『全国株主要覧』T 9 P 上35
- 注39) 『筑豊石炭鉱業組合月報』232号、大正12年10月、P 111（九大石炭研蔵）

- 注40) 住山鈴雄は伊藤商事、高砂土地倉庫各取締役、播水、関西土地興業各監査役、中国石材清算人
- 注41) 岸本恒太郎はM31.12仲買人免許（前掲『兵庫県管内紳士録』広P18）、神取常務理事から理事長。町田昇は取信支配人の中野慶路とともに元大阪新報神戸支局勤務（神P111）、伊藤商事監査役から東京支店長、加古川製紙、播水各取締役
- 注42) 井上安松は元神取仲買人。S5は神戸の個人金融業者（『大日本商工録』S5、P213）
- 注43) 大村清七はM44開業の公債株式現物商・大村商店代表。同姓同名に加古川町寺家、郵便局長、加古川銀行監査役、郡市農会加古郡代表者
- 注44) 吉田金太郎は大正3年創業の神戸で一流筋の神取取引員（米穀証券の清算現物）
- 注45) 杉野伊三郎は神取・商議員総代・組合委員長、株交会代表者、株式直組合代表者。藤井忠兵衛、井上安松らとともに神戸株友会のメンバー（前掲『神戸紳士録』P111）
- 注46) 中野慶路は元大阪新報神戸支局勤務（前掲『神戸紳士録』P111）
- 注48) 武田由助は神戸証券専務、取信社長に就任後に合同証券社長にも就任
- 注49) 福本実（神戸市）は安田系の日本商業銀行貸付課長で、英一が持株を大幅に減らしたT10/11期の神取の3位3,050株主。（『大衆人事録』S5、P28）
- 注50) 前掲「顛末」P265
- 注51) 乾新兵衛は拙稿「金融恐慌と生保破綻一末期の旭日生命を中心として」『文研論集』120号、H9.9、同「恐慌期の企業・金融複合破綻と投機的経営者一旭日生命を支配・搾取した山十製絲の破綻を中心に」『滋賀大学経済学部研究年報』4巻、H9.12、同「生保破綻と投機的経営者一末期の共同生命を中心として」『寄付講座「保険学講座」十周年記念誌』九州大学経済学部、H10等を参照
- 注52) T15.1.15TA（淡路銀行田中一郎常務談話）
- 注54) 55) 藤井忠商店調査部『経済時報』11号、T9.9.11、12号、T9.9.21
- 注56) 「改正後に於て直キ取引〈短期清算取引〉が神戸取引所に依って直接取扱

はるるに至ると共に自然取信側の利権消滅」(T9.6.4K)

注57) 旧株1250株。おそらく取信の英一等への融資の担保の代物弁済による取得か。

注58) 片野歌次郎は神取商議員、組合常任委員、T10.11末で神取40株主

注59) 『近畿大観』T4、P107

注60) 神取54回営P8。ただし官報3200号では12.23付となっている。

注62) 海老沢尊照『評伝竹内勇之助』S42、P49、55。竹内権兵衛は水浜電車社長、竹内製紙、茨城石材、茨城土木工業、日東製鋼各取締役、茨城農工銀行監査役を兼ねたが、東洋製鋼は見当らず、著者の聞き取り違いか。恐らく加古川製紙を含め同種の失敗が続発したのであろう。

注63) 藤井照千代は質・古物商、阪神商事取締役で、酒井栄蔵の乾分格たる大日本正義団相談役、播鉄取締役、播丹1924株。拙稿「地方零細企業の破綻処理と“救済者”集団—播州水力電気鉄道とその競落を中心に—」『滋賀大学経済学部研究年報』6巻、H11.12参照

注65) T13.7.8付監督局長宛播水土井常務答申、文、播水

注66) 69) T14.3.10付監督局長宛堀播水清算人答申、文、播水

注67) 播水「仮出金内訳表」T13.3.31現在、文、播鉄

注68) カッコ内の競売当時の播水への届出債権は「株主救済及負債始末並ニ清算結了ニ関スル顚末書」、文、播水

注70) 71) 『交通と電気』3巻7号、T13.7、3巻12号、T13.12

注72) T14.6.24宍粟郡長鈴木脩蔵書簡、文、播水

注73) 前掲拙稿「地方零細企業の破綻処理と“救済者”集団—播州水力電気鉄道とその競落を中心に—」

## 第9章 伊藤英一の破綻の背景

### I. 伊藤英一の破綻の背景

英一の破綻は彼の単独行為による投機の失敗では決してなく、彼を取り巻く諸要因が彼をして、投機に駆り立てたことは間違いない。ここでの「投機」は「投資する上でリスク管理に甘く、自己資本の範囲を大きく超過して、巨大なリスクをとる」意味である。当時の政治的、社会的、経済的、金融的な諸要因が投機を誘発したことはもちろんであるが、以下のような投機促進要因が彼の近辺に多く存在したことも見逃せない。

#### 1. 投機的風土

当時、兵庫県下でも「最も株式熱の旺盛なる所」と言われた播州鉄道沿線の経済情勢は大戦景気の際には「頗る好況を呈し」(T9.4.13A)、播鉄の大正5年3月期『報告書』には播鉄沿線でも「時局ニ関係ヲ有スル商業又ハ船舶業ノ如キハ殆ント不景気ヲ知ラズノ好況ヲ呈」(10回営)し始めたと記述する。

加古川地方の大戦景気の様子は兵庫県の小原主事をして「加古川地方に至っては其民情の輕薄なる、風紀の荒廢せる、言語に絶するものがある。…株成金の百姓共が…酒杯を挙げるといふ始末で…之は毛織の景気のいいのも一原因だが、主因は株にあると思ふ、実に困ったものである」(T9.1.24A)と慨嘆させるほどであった。すなわち明治末期でも印南郡の「小学生徒に向つて未来の方針を問へば異口同音、相場師になると云ふ」<sup>1)</sup>と言われ、大戦景気の折にも「加古郡は県下郡部に於て最も株式熱の旺盛なる所にて、加古川町に於ても株式仲買店十余あり、一時は頗る好況を呈し工商業者は勿論、遂に農家に於ても盛んに手を出した」(T9.4.13A)といわれた土地柄であった。農家までこぞって株式投機に走った反動は極端に現れ、僅か3ヶ月後には「今回諸株の崩落と共に大恐慌を來し、青息の有様にて、銀行は新規貸出を一切為さず…一般に金融利かず狂奔せる有様なるが、加古川地方に於て約二百万円内外の損失なり」(T9.4.13A)と激変ぶりが

報じられた。同記事の中で兵庫県の小原主事も「財界変動の打撃は何処も同じだが、就中株の好景気に釣り込まれたお百姓さんの損害は夥しいものだ。県下で此打撃の大きいのは加古川町を中心とした農村で…損害を受けた連中は皆中産階級の人達と言ってよい」と語っている。

こうした風潮の背景として、『兵庫県人物史』も「蓋し播州には亀田、古門氏等を初め随分投機界に人物は少くない<sup>2)</sup>」として印南郡曾根村出身の「電光將軍」こと亀田介次郎(堂島から蛸殻町の米穀仲買人)、印南郡曾根村出身の古門九右衛門(堂島の米穀仲買人)、藤井忠兵衛、八田木久次、加西郡北条町出身の香野蔵治らを列挙し、「地方先輩の感化程世に恐るべきものはない<sup>3)</sup>」としている。播磨の出身の代表的な大物投機家としては加古郡別府村出身の加東徳三がある。加東は安政3年8月17日呉服商の子に生まれたが、「幼にして父を喪ひ専ら家兄の手に鞠育せらる。後ち家政大に傾くに及んで家兄家を挙げて大坂に移り、君又従ふ。九歳の春出て某呉服商に奉公し…資を某に仰ぎ初めて堂島に店舗を開いて米商仲買となる。年甫めて十有七<sup>4)</sup>」、加東の下で秘書役、副支配人等を勤めた島田金次郎も「播州の片田舎に育ち、少年の頃から小僧に出された位の生立ち<sup>5)</sup>」と紹介している。『兵庫県人物史』は「一時声望隆々たりしも種々の障害のために、遂に失敗に終り…〈加東〉氏の破綻當時に於ける自己の資財は挙げて之れを債権者に提供して毫も遺す処なく<sup>6)</sup>」と散り際の良さを褒めるが、破綻の要因を「氏の着眼はアマりに早きに過ぎ、所謂時代の調和を欠いたから<sup>7)</sup>」としている。

## 2. 伊藤本家の絶大な信用力

「〈英一〉君の背景としては、伊藤長次郎氏は言うまでもなく天下の富豪たり。君の実力と此背景と相俟って社会を益する事は易々たるべし<sup>8)</sup>」、「彼〈英一〉の背後には伊藤家がある、播鉄は何の苦もなく彼の手収まった」(異P93)、「大正七八年頃ヨリ一旦播水延長線ヲ起シ之ガ実現ヲ企図<sup>9)</sup>」、「明石市民たる我等は常に思ふ、明石市より、伊藤英一氏の事業を引去るならば、明石の文明は全滅する」(明P10)、「市制の恩人たる伊藤氏の片影を巻頭に飾りて百世に伝へん」(明P9)とするなど、最も英一の立場に近いと考えられる『関西朝報』の表現では「関西実業界の大立者伊藤長次郎氏にとりて、英一氏が姉婿であることは今更ら云ふまで

もないこと」(明P17)との表現となるが、伊藤本家の絶大な信用力を背景とした英一は、伊藤本家のリーダーシップのもとにあった播州地方の資本家を、一時期には伊藤本家と二分するほどの勢いにあったものと推定される。例えば三宅利平、大西甚一平、畑吉平らは先代の長次郎らと共同投資していた間柄であったと見られるが、大正期に入って英一との共同投資の機会が増加して、従来からの播鉄等に加え、兵庫電気軌道、鬼怒川水電等の株式買占めにも名を連ねるほどの親密な関係になったものと考えられる。これら地元の事情に通じた資産家達は伊藤本家と英一との間の微妙な関係の変化も身近に知り得る立場にあったはずだから、したように、遠方の事情に疎い投資家が英一と伊藤本家とを単純に同一視して、絶対的に信用した<sup>10)</sup>のとは事情が異なると考えられる。

### 3. 兵庫県下の金融システム

たとえば手当たり次第に調達しまくった播鉄の場合「百有余の債権者」<sup>11)</sup>が存在したが、播鉄の解散にあたり大正12年12月29日現在仮出金310,263円中、記帳外債務36,650円、強制執行分5,284円、雑口196,288円に関して「仮出金内訳内容明細ヲ欠ク、特ニ…記帳外債務、雑口等ノ内容詳細説明ノコト」との注文が付き、「記帳外債務ニ対シ強制執行ヲサレシモノヲ計上セシモノニ付、損失トシテ整理仕候」、「雑口…主トシテ前社長伊藤英一氏ニ関スルモノニ有之、殆ンド損失トナルベキモノニ有之候」と鉄道省に報告していることから、播鉄にもある種の簿外債務が存在し、そうした債務者は債権回収を急ぐ余り、強制執行をも辞さなかったことが判明する。「会社カ保証セル債務ニ対シ、振出人ニ於テ手形債務ノ履行ヲ怠リタル結果、保証セル当会社カ強制執行ヲ受ケタ」<sup>12)</sup>播水の場合と同様に、「伊藤前社長ノ蹉跌」の結果、伊藤関係の借入金に対して、播鉄の正規の帳簿にはのらない、ウラの債務保証が存在し、関係の債権者から「保証セル当会社カ強制執行ヲ受ケタ」ものと推定される。このような無秩序、無統制な資金調達が可能になった背景には三十八銀行等を除き、弱小・零細銀行が無数に乱立していた兵庫県下の特異な金融状態があったと考えられる。日銀との直接取引もない弱小・零細銀行にとっては相対的に巨大な三十八銀行は日銀とのパイプ役としても重要な役割を果たしており、例えば9年6月頃の播州織物業界の「救済策に就いてシンジケー

トを作り三八銀行を介して日本銀行より三百万円を借出すべく…西協商業銀行藤井滋吉、加西郡銀行代表者として北条銀行岸本熊太郎、加東郡銀行代表者として社銀行西村隆次の三氏は打連れて来神し、先づ三八銀行神戸支店長宇川専務に会見」(T9.6.8K)している。こうした相対的に弱い立場にある中小銀行家は伊藤本家=三十八銀行の絶大な信用力に目が眩み、かつ監督官庁の圧力も跳ね返す、代議士でタフ・ネゴシエーターたる「彼の辛辣なる」(末正盛治の評)英一のゴリ押しに押しまわれ、一行だけの零細な資金力では相対的に巨大な播鉄のような大企業には太刀打ちできず、土地や株式担保に傾斜しつつあったため、銀行による企業行動のモニタリングも不十分であったと推定される。<sup>13)</sup>

さらに英一が浪速信託、関西土地信託等の多数の土地会社・信託会社等の「ノンバンク的企業」を活用し、これらの銀行類似会社を駆使して、多数の銀行より資金を調達したり、債務の保証をさせたり、持株・不動産等の分散、交換、転がし等をおこなったり、末期には粉飾まがいの行為にも利用したものと推定される。(例えば神戸大同土地など) こうしたノンバンクの多用による攪乱、遮蔽は銀行自体にとってもモニタリング機能を著しく低下させたのではないかと考えられる。<sup>14)</sup>

#### 4. 播鉄再建による自信過剰

4年上期の播鉄の利益は「前期ニ比シ八倍弱ノ成績ヲ挙ゲタリ、此破天荒ノ良成績ハ一ニ重役諸氏及使用人諸君一同ノ努力奮励ノ賜…当期ニ於ケル絶大ノ努力ニ酬ヒ将来ニ於ケル格段ノ奮励ヲ期待スル」(9回営)趣旨から、株主総会で畑昌愷外9名の株主から激賞されて、特別賞与金支出の建議を提出され、4年下期から配当率を5.6%から10%に引き上げ、5年上期から13%を継続したため「播鉄を愈ものにしてみると、彼の胸には根強い自信が植付けられ」(異P93)、播鉄株主には英一への依頼心を植付けた。伊藤専務が畑らの建議に気を良くした様子は『第九回営にわざわざ糊付けしてまで建議全文を添付させたことから窺える。『関西朝報』も「播州鉄道を握るや忽ち好箇の実業家となり了せ…トントン拍子は気味の悪い位、伊藤氏に付いて回ってゐて離れぬのである」(明P12)と、時流にのった伊藤の強運ぶりを強調している。



## 5. 各社の企画スタッフの集中化

「播州鉄道株式会社は神戸市に本社は移転することを過日の重役会議にて決定し…其の内運輸、建築の二課は現在の加古川町に於て残留執務」(T 7. 9. 20K)と報じられたように、各社の企画スタッフを集中化し「諸事業の参謀部たり監督局たらしむべく」(異P94)、傘下の各社の事務所・出張所を集約化した。伊藤商事本社(神戸市栄町)には10本の電話が引かれ、商取引、不動産取引等、活発に取引していた。また播水の炭坑兼営申請で活動した「伊藤事務所東京支店<sup>15)</sup>」も伊藤商事東京支店と同一と見られ、「同社<伊藤商事>東京支店長町田昇氏」(T11. 11. 23K)が差配していた。播鉄副支配人安田寅次とともに町田を召喚していることから、司法当局もグループの戦略本部たる伊藤商事の中核機能に着目したと考えられる。

## 6. 敵対的企業買収の多用

播鉄は6年3月24日の臨時総会で高砂～龍電網干駅等の新線建設を定款に追加すること、「龍野電気鉄道株式会社又は株式を買収の件並びに其買収代金の支払は財団設定に因る借入金又は社債を募集する件」(12回営)を決議して以来、企業買収によるグループ拡大に積極化したが、英一自身も「兵庫県の交通王たらん大抱負もあり、西は姫路、東は有馬の間を其の抱負決行区域と定め」(明P25)、「兵電、播鉄を振出に日本の鉄道王になるんだ」(T 9. 4. 14K)との強い鉄道王志願があったと言われる。「新宮電車の買収、篠山軽鉄の乗取り、遠く征しては高野電車を陥れ、鬼怒川水電を攻略」(異P93)した英一の意図を推測すると、前半の「新宮電車の買収、篠山軽鉄の乗取り」は「兵庫県の鉄道王」(異P89)に必要な条件だし、大阪高野鉄道では旧株1310、新株4272、合計5582株、伊藤商事名義で150株<sup>16)</sup>を買占めて、根津嘉一郎持株9704株、鎮目泰甫2460株、福島良2270株、森田豊2212株の根津系4株主計<sup>17)</sup>16,609株に次ぐ一大勢力になり、英一は根津社長下の大阪高野鉄道取締役役に迎えられた。(T 8 帝P65)おそらく真の「鉄道王」根津嘉一郎に一泡吹かせ、一目置かせる存在たらんとしたものかと考えられる。さらにエスカレートしたのが、後年に小田原急行鉄道の親会社となる「鬼怒川水力電気の株式過半数を買収して、利光を追い出して鬼怒川水力電気の社長になろうとした<sup>18)</sup>」の

は、帝都の鉄道、電力等を支配して文字通り「日本の鉄道王になる」という強烈な鉄道王志願の現れでもあろうか。関与鉄道が24社に及び、「私設鉄道界に於て、何人も君と比肩する者なき『鉄道王』の名を占むるに至った」<sup>19)</sup>根津にとってすら、親しい原邦造が「鉄道王といはただけあって、東武へは随分打込んでやった」<sup>20)</sup>と言うように、世間から鉄道王と呼ばれることは根津ほどの大資本家にとっても、相当に重く、価値ある金看板であったと思われる。

## II. 破綻抑制要因の機能不全

### 1. 破綻抑制要因の機能不全

英一の破綻を抑制しえたかもしれないと考えられる諸要因としては①本家、②メイン銀行等、③播鉄大株主・パートナー等、④監督官庁、⑤実務担当役員等、⑥各社のスタッフ、⑦その他（同業者・取引所仲買人・労働者・世評・報道機関等）、⑧英一夫人、などによる様々な統治・制御・意見具申、⑨英一自身による自制等が考えられる。これらの諸組織のコントロールが万全に機能しておれば、英一の暴走を未然に防止できた可能性はありそうに思える。しかし現実に破綻が生じたことから見て、これらの抑制要因が何らかの理由で機能不全に陥っていたということになる。以下各要因ごとにどのような障害が生じていたのかを推測しておきたい。（表-15）

(1) 本家 「守成的の人物の如く言ふ人も少なからざる」<sup>21)</sup>長次郎は襲名直後に「自己の手腕によって経営安排し…即ち先づ山陽鉄道線十数箇所の支店が業務紊乱<sup>22)</sup>せるを見ては断乎として之を撤廃した」ため、「鉄道に依って受けた曩の恨みを鉄道で晴らして呉れやう」（異P92）との伊藤本家を見返したいという英一の反発心が彼の旺盛な事業欲の原点であったように思われる。伊藤本家には明治30年代までは坪田十郎、入江仙次郎、英一の三人が「伊藤長家の三大番頭」（明P24）と呼ばれ、坪田が神戸の地所、英一が運送店というように地域別、部門別到大番頭が取り仕切っていた。坪田や英一が後年に代議士として活躍したことから考えても将来性ある人物を見抜いて抜擢する「先代伊藤長次郎翁の鑑識」<sup>23)</sup>はなかなかのものであった。しかしこうした実力者番頭を多数育成しすぎたため、逆に大番頭が本家から独立・半独立し、本家の差配に属さないという弊害も生じたようだ。

このためか、先代の人事方針とは異なり、五代長次郎はどうやら個性あふれる大物番頭を多数抱えて号令を下すタイプでなかったように解される。「其親分的気風の性格を以て、一擲千金を惜まず能く部下を愛撫」した英一との対比で、「此点に於ては或は長次郎氏撰を異にする<sup>24)</sup>」とも評されるからである。

伊藤本家の組織としては伊藤家農会のほかに、明治38年8月30日認可、設立された保証責任伊藤小作人信用組合があり、「伊藤家小作人ヲ初メ地所管理人及伊藤家ニ出入スル商工人等ヲ以テ組合員ニ加入セシメ勤儉儲蓄ヲ奨励シ農事改良ノ資ヲ貸付ケ農民ヲ以テ独立自営ノ精神ヲ喚起<sup>25)</sup>」することを目的とした。信用組合のスタッフとしては明治39年時点では所員に船津吉太郎、書記に三浦音吉などが配置されていたが、役職から見て番頭格の船津は大正9年5月によりやく信用組合「理事一名欠員ニ付…船津吉太郎新任」(T9.5.14登)された程度の処遇であり、会社役員・株主面でも播州石材監査役(T9銀P21)など、英一系企業に一部役員として関係したに過ぎず、かつての坪田十郎のような伊藤本家の利害を代表するお目付役という印象は薄いように思われる。

次に持株会社・本社設立の遅延と不徹底があげられる。まず伊藤土地(資)は2年2月に設立されたが、目的が「不動産ノ売買貸借地上権取得其権利ヲ賃貸ス」(T8帝P16)と、不動産売買賃貸に限定され、出資者も長次郎(無限責任社員)84万円、伊藤英(無限責任社員)10万円出資(T11銀P14)、伊藤熊三2万円、伊藤健蔵2万円、伊藤勇次郎2万円(T8帝P16)と、長次郎の直系家族に限定されている。もっとも伊藤土地(資)も久原鉦業1000株を所有、昭和10年には三十八銀行旧4100、新10,000株、兵庫大同信託11,505株(S10諸上P800,878)等も所有していた。また6年2月には資本金100万円で伊藤企業(資)が設立され、広く「起業金融証券売買及不動産売買貸借鉦山業及販売」(T8帝P16)を目的とする一般信託業者であった。(T11銀P14)出資者は長蔵(無限責任社員)77万円、伊藤新一10万円出資、松代安太郎5万円出資、松代鍋種5万円出資、伊藤孝次2万円出資、前川清二1万円、殿村恒蔵1万円、服部春一1万円(T8帝P16)で、長蔵系統を中心に一部英一の長男伊藤孝次、娘婿の松代安太郎ら、英一系統が相乗りしている。

さらに7年9月には資本金200万円で「石炭銅鉄各種鉄工製品其他」(T8帝P

16) の各種商品売買を目的とする伊藤商事が英一系統により設立されるが、その持株は鐘淵紡績300、大阪高野鉄道150、阪急320、日本郵船160、川崎造船所200、日本絹布200、興銀300、正金銀行50、日本海上<sup>27)</sup>50、計1730株となっており、部分的ながら持株会社の機能を分担していた。

本格的な「伊藤長次郎家一族のホールディング・カンパニー<sup>28)</sup>」である(資)静得社の設立は英一の破綻寸前の10年1月まで遅延しており、かつ資本金も僅か100万円に過ぎない。かつ構成員は伊藤土地(資)の場合と同様に、無限責任社員長次郎60、無限責任社員伊藤熊三10、社員伊藤英10、社員伊藤勇次郎10、社員伊藤健蔵10各万円(T11銀P14)と長次郎の直系家族に限定されている。15年時点で主要な持株は三十八銀行2万、兵庫県農工銀行2万(T15銀P1)、神戸海上運送火災5460、樺太工業旧2900新3139、久原鉱業新1000、昭和5年時点で静得社の持株は三十八銀行2万、大洋海運<sup>29)</sup>2132、日出紡織7870、神栄生糸6200、神戸海上運送火災5460各株、その他樺太工業、共保生命、神戸土地、上毛電力、日伯拓殖、兵庫県農工銀行等であった<sup>30)</sup>。つまり、伊藤家の持株会社は本家、分家ごとに各家バラバラに、無統制に多数設立され、全体を統括するような本格的な本社は存在しなかったものと考えられる。

また播鉄沿線の貨物誘致目的で、まず「播鉄の副業として石材、煉瓦の両会社」(異P93)を起すなど、播鉄子会社設立という大義名分で多角化を推進したため、こうした播鉄子会社設立に伊藤本家が積極的ではないにせよ、渋々ながら一応の合意を与えていたことは伊藤本家の番頭格の船津吉太郎を播州石材監査役として派遣していた事実からもうかがえる。

(2) メイン銀行等 三十八銀行以外の資金調達手段を模索するため、英一は勧銀との資金パイプを太くし、湊西銀行等の親密銀行と提携し、さらに西伊藤銀行の育成して、三十八銀行の制御から巧みに離脱したと考えられる。このほか信託・土地会社等、ノンバンク的機関をフル活用する一方、車両面では堺の車両製造業者・梅鉢鉄工場(2-55)持主である梅鉢安太郎とも緊密な関係にあったと見られる。

(3) 播鉄大株主・パートナー等 経営の(一応の)成功による三宅利平ら播鉄大株主の信頼を獲得し、湊西銀行の末正一族との緊密化・取込みもはかつて、「有<sup>31)</sup>

力なる実業家とく握掌<sup>32)</sup>した英一は以後の龍電等の買占めに当たっても播鉄重役一派で引受けるなど、播鉄大株主を英一の事業展開にパートナーとして引き込んだものと考えられる。

(4) 監督官庁 播鉄の監督官庁たる鉄道省は「播鉄カ從來多大ノ株式ヲ所有シ居ルハ既ニ穩当ヲ欠ク<sup>33)</sup>」と認識し、英一の暴走危険性を察知していた。しかし英一はどうやら鉄道省監督局の佐藤雄能らのベテラン能吏をも政治力を発揮して上から押え込んで、実質的な行政指導を骨抜きにただけでなく、株式処分命令を逆手にとって、グループ企業間の粉飾まがいの株式・土地等の飛ばしを行うなどのしたたかさを遺憾なく発揮した。

(5) 実務担当役員等 後年に英一の盟友だった末正盛次は英一の役員配置のやり口を、自分の「心の俣に振舞い度い考え」で、実務担当役員に「伊藤氏と同性格同気相求むるの士を其の位置に置く<sup>34)</sup>」ことにより、送り込んだ腹心の部下で関係会社を意のままに利用しようとしたと批判している。英一グループの中の「殆ど奇跡と言うべ」き唯一の例外が、「自己が業務上の経験に乏しかったため<sup>35)</sup>」、珍しく「名前丈けの理事長に過ぎなかった」(T11.12.9 K) 神取であって、岸本常務理事による牽制が効いて「彼の辛辣なる伊藤理事長をして社務の上に一指を染めざりし<sup>36)</sup>」と神取総会で演説した。しかし7年3月設立以来、神取と長年「主従の関係」(T11.12.9 K)にあった取信では鬼怒電株等を担保に英一らに大口融資し、9年9月15日「内部整理<sup>37)</sup>」の必要から、英一ら全「重役連袂辞任<sup>38)</sup>」するなど、大打撃を受けた。

(6) 各社のスタッフ 英一のスタッフが弱体なことは与党的な『関西朝報』でさえも英一グループの「最高幹部」として「本岡〈武助〉氏は俊敏電光の如き人…細田氏は伊藤氏の女婿であり…法学士孝次氏は伊藤氏の長男」(明P17)等を挙げ、「(英一)氏の工夫計画の才能に配するに、細田藤弥氏の温厚あり、孝次氏の新進あり、本岡氏の奇智映発あり、両末正の着実あり、加ふるに石丸、芦田、草鹿、本多の四天王を以てす…伊藤氏の幕下には頗る忠臣が多い」(明P20)と一応は褒める一方で、「氏の部下は官吏で云ふならば事務官級の人々ばかりで…参謀的幕僚に乏しい」(明P25)点を欠点としている。そして「今日の氏は、好幕僚無くして、尚それだけの大事業を為しつつある」(明P25)点に「一層我等の感嘆を誘

はずにはゐない」(明P25)と、間接的表現ながら、その無謀ぶりを揶揄しているとも解される。

部下に参謀の幕僚を欠いたまま、英一が次々に買占めを行うには、本岡武助などを「最高幹部」に招いて、彼ら証券業者の配下の手代連中にも相当部分を依存せざるを得なかったのものと考えられる。英一のパートナーとして行動を共にした末正盛治は後年になって、神取の総会で「伊藤氏関係の多くの会社」は「適当の手足を得たい」と思う英一の誤った「人選」により、「伊藤氏と同性格同気相求むるの士を其の位置に置か、或は我利的奸物を充当して居った」ため「回復すべからざる哀れむべき災禍に見舞われ…善後策に腐心せねばならない羽目に陥った」<sup>39)</sup>との趣旨の、痛恨の念を演説したが、当然に末正の思い浮かべた、英一を唆して会社を喰い物にした「同性格…の士」、「我利的奸物」には、英一を凌ぐ投機家たる上記の手合が含まれているように感じられる。

(7) その他 まず取引所取引員はウルサ型が多く、11年6月24日神戸新聞は「現任神戸取引所理事長伊藤英一氏の引退説に関しては…既定の事実として唯其の時機のみが問題になって居るに過ぎない」(T11.6.24K)と半ば確定的に報道しており、神取仲買人組合も英一に退任を要求(T11.11.29K)するなど、英一排斥の急先鋒となった。神取の姉妹機関たる取信でも「現重役の放漫なる貸出に対して不満の念を抱」(T9.8.28K)いた武田由助、片岡歌次郎、柴崎利三郎らが「不謹慎なる貸付」をなした現重役の責任を追及した。証券業務上の経験に乏しかった英一は取引員の懐柔には失敗したようだ。したがって神取、取信などプロの株主から構成された企業では株主のガバナンスが例外的にうまく機能したものと思われる。

次に一般の従業員に関しては英一は営業報告書末尾に各駅ごとの収入額を逐一掲げて「従業員一同ノ奮闘ニヨリ…(本表)実績ヲ挙ゲルニ至リタルハ実ニ欣賀ニ堪ヘズ」(12回営)と激励するなど、「頗る部下を愛する。嘗て閑院宮殿下が播鉄沿道で行はれた演習後統監の為御成りになった時、後出入駅の駅員全部三十幾人にフロックコートを新調して与へたなどは其の最も有名なる話で、又昨年の米価暴騰の際の如きも彼は鈴木より外米を買受けて部下に配与してゐた」(異P98)といわれたほど、「其親分的気風の性格を以て、一擲千金を惜まざる部下を愛撫

し来れるものは最も其勢力を布殖したる所以<sup>40)</sup>」、と従業員の懐柔には長けていたことがうかがえる。

また英一は明石「市制運動に際しては隠然たる総司令官として…記者団を激励」（明P25）したといわれるほど、マスコミ操作にも長けていた。その背景には播州地方における伊藤本家の絶対的な存在のため、報道機関等の機能不全（間接的影響力を発揮しうる地元新聞はもとより、8年時点では「昨春…神戸へ転じ来」（異P121）ったばかりの、兵庫県や神戸財界に精通しているとは思えない朝日新聞記者寺沢鎮も、主として英一への直接取材に基づき、かなりの礼讃記事を書いている。しかもこの『人物論・神戸の異彩』の著者・寺沢鎮は自ら書いた大阪朝日への連載記事を同書に転載するに当って、必要な場合には「校正しつゝ、」なる欄を特に設けて「之等を記述して僅か二ケ年にも足らないのに、而も其の間に、記事中に幾多の榮枯盛衰の行なれてゐる事が今更の如く驚かれる」（異P120）として補訂を加えているが、英一の項目には特記事項がなく、寺沢記者が同書を校正しつつあった9年1月28日時点ではなお英一に迫りつつあった「榮枯盛衰」を十分には認識していなかったことが知られる。

(8) 夫人 英一は「妻君に野呂い」「サイノロジーなり」（明P22）との謗りを受けるほど、夫人には異常なまでに気を遣って、決して夫人の機嫌を損ねることはなかったようだ。たとえば6年12月27日鬼怒電取締役役に就任し、「鬼怒川水電の総会に上京するも往復夜行、総会終れば直に取って返し夫人の御意を得るを例とし、嘗て一泊だにした事はない」（異P96）と言われ、京都、神戸、舞子、今市等に邸宅を有する彼の居処を探すには「夫人の影の在るところを探しさへすれば、必ず其処に英一氏も居る」（明P24）とまで言われた。もちろん夫運に恵まれなかった夫人への英一個人の価値観に基づく配慮ではあろうが、大正期の男性として「嘗て一泊だにした事はない」との異常なまでの夫人への気遣いの背景には、万一夫人との不仲から「伊藤」姓を返上させられ、ただの野田英一に戻った際のダメージの大きさまで考えた「伊藤」の姓の価値と重みを十分に認識しての計算もあろうかと邪推したくなる。

### III. 投機を促進させた投機家群

こうした環境の中で、当時英一の周辺にいた、彼の投機心に直接的に多大な刺激を与えた先行投機家、彼の投機を誘発し、一段の加速を可能にさせた投機促進者としては次のような人物群が想定される。英一をシテとすると、彼ら投機促進者はワキとして極めて重要な役回りを演じる。第一幕でこそ英一がシテであったが、中入後は第一幕のワキが後シテとして主役を演じるなど、シテ、ワキの利害が複雑に絡み合っており、以下に詳述する一連の破綻劇が構成される。

英一の代表的な投機と考えられる鬼怒川水電株式の買占め時期（T 8/11）の兵庫県等の大株主を持株順にあげると、末正盛治4,340、野喜治良3,600、尾崎寅治2,090、岸本五兵衛2,000、三宅利平1,600、岸本信次1,000、伊藤孝次1,000、海外貿易1,000、武田常三郎890、尾野商店850、畑吉平620、小野商事信託（岸本長司）460、正田房治郎360、藤井忠兵衛230、神田勝次200各株等である。また、英一が鬼怒川水電株をピーク時の66,737株から7,300株（T 9/11）へと、59,437株も激減させる時期に鬼怒川水電株を新規に取得した株主は増田 BB 銀行64,039、取信11,590、加古川銀行5,910、五十六銀行2,500、淡路銀行1,400、福本実（兵庫）1,480、田所五雄（兵庫）1,000、藤本英一（兵庫）1,000、高砂銀行600各株等である。

極めて大胆に割り切った推論を行うと前者は資本家ないし証券業者〔本岡武助本店、藤井忠兵衛（屋号丸ト）、尾崎寅治（<sup>41)</sup>尾野商店）、追原頼太（追原商店<sup>41)</sup>）等の株式仲買人〕が多く、英一の買占め行動に統一歩調をとった者または、英一に買占めを勧奨し、取引利益を享受した仲買人が大半を占めるものと思われる。当時鉄道省も大正6～7年に龍電の買占めを行った主体を「龍電及播鉄重役一派」とグループとして一体的に把握し、彼らは龍電「会社ノ窮状ヲ広告シテ」安値で地元株主から買い叩き、最終的には「此増資株ハ…払込完了後一株200円ニ播鉄ヲシテ買取セシム」と分析しており、安値で買い叩き、高値で大手筋に一括売付ける買占め手法はプロの手口と考えられる。後者は英一ないし彼の共同投資者にファイナンスを行った可能性の高い金融機関であり、その持株数はほぼ各銀行等が英一等から担保として徴求していた株数に近似しているものと推定される。前



者と後者の中間に位置する株主には浪速信託41,490、岸本兼太郎7,000、吉植岩吉（兵庫）6,170、井上安松1010等があり、彼らの性格は規定しにくい面もあるが、浪速信託のように増田 BB 銀行等からの調達窓口となっていたノン・バンク的な準金融機関や、金融機関が担保株式の代物弁済による取得を行う場合のダミー株主等を含むものと考えられる。

### 1. 本岡武助（本岡武助本店）

本岡武助は神戸米穀取引所の仲買人で、公債株式現物問屋である本岡武助本店はビルブローカー業務も行っていた。「大胆なる売買は斯界の人尚ほ之を危ぶみ…過去半生の間一起一倒幾度か辛酸に遭ひ具さに世路の艱難を知了す<sup>42)</sup>」といわれたが、「近來は努めて投機的事業を警戒し、主として堅実な現株を扱ってゐる」（明 P102）とされるものの、「氏が終日電話を手にし、且つは自動車を神戸全市に飛ばして活動した上、聽て明石の本店へと歸路に就く時には、必ず千か万かの金は儲かつてゐる」（明 P103）というような投機的な株売買を繰り返す一方で、龍電専務、新宮輕便鉄道社長、関西土地信託取締役、兵庫電気軌道取締役、明石電灯取締役、兵庫倉庫取締役など英一の関係企業のトップに座った。（明 P102、T 9 銀 P70）英一グループの「最高幹部」として「本岡〈武助〉氏は俊敏電光の如き人」（明 P17）、「〈英一〉氏の工夫計画の才能に配するに…本岡氏の奇智映発あり」（明 P20）と評された。また明石市会議長で、関西土地信託専務、兵庫倉庫取締役、北大阪電気鉄道取締役（T 8 帝 P172）等の重役を兼ねる弁護士・青木雷三郎も「巡查時代に本岡氏の知遇を得て東都に遊学し、今日の地位になった」（明 P101）本岡系の人物であり、おそらく本岡の推挙により、英一系企業の経営にも関わったものと見られる。

本岡は英一が買占めた龍電の旧債の借換えに際しては6年3月10日借入先の日生を訪れて、返済猶予を再三再四認めさせるなどの豪腕を発揮し、英一と並んで借入金の保証人となるなど、実質的にも龍電の経営一切を切り回した。このことから龍電の買占めに端を発する英一の一連の買占め劇の仕掛人・実践部隊の司令官も株式現物問屋の本岡武助であった可能性を示唆するようである。

## 2. 藤井忠兵衛（藤井忠商店）

藤井忠兵衛「氏は加東郡来住村に生れ、幼少の頃兵庫の藤井某方に養子となり、後米国に航し、明治三十年頃帰朝、輸贏場裡の人となり…氏が奮闘の事蹟に就ては…氏は黙して語らず<sup>43)</sup>」というが、明治26年12月神戸米穀取引所仲買人を免許され<sup>44)</sup>、屋号丸ト、兵庫水木通3丁目<sup>45)</sup>、明治23年開業の神取仲買人・取引員<sup>46)</sup>、神戸市加納2（15年時点は神戸市下山手通6-256）、神取大株主「底に智性の鋭くして然も人物的輪郭の大きかった先代〈藤井〉忠兵衛氏は機に際しては思ひ切った活動振を見せたもので、其方式が欧乱の当時の如き殷盛時に着々図に中った事は云ふまでもなく、一時に旭日冲天の勢ひを示し、当時吉田金太郎、沢田善一郎氏らと共に一流筋に数へられ、正味何百万円か或は五百万円を突破するかと云はれた程の当り屋であった<sup>47)</sup>」。神取理事長に就任した英一は岸本恒太郎を常務理事にする際に、藤井を「斯業界の先輩」、投資上の指南役、相談役等として立てていたと考えられる。藤井と英一との良好な関係を暗示するものとして藤井忠商店が調査部を設置し9年5月機関紙『経済時報』を創刊したが、その2号で英一の日本綿布を大々的にとりあげて、「最近経済界の変動により一般工業会社は多少危惧の念に襲はれざるに非ざりしも…同社工場は加古川の良水と空気清爽の好位置を占むるが故に…製品の販路は支那、青島、大連方面にして、南洋方面之に垂ぎ…供給尚不足を感じつつありて幾多新事業を計画せる内、織物整理工場の設置、天鵝絨製造販売事業、紡織兼備の分工場設置等、其重なるものなる。是等拡張計画が完成せらるる時は播陽地方に於ける有数の大会社となり、前途有望なるを疑はず<sup>48)</sup>」と絶賛した。しかし日本綿布は不振続きで結局破綻した。こうした判断の誤りからか、15年頃の藤井の主要な持株は神戸海上運送火災340株<sup>49)</sup>のみと往時の面影も失せて、藤井は「その後財界反動以来は手振も志と違ふ所多く、其の他界せる大正十五年頃は内容も余程往時と異なるとの噂もあった<sup>50)</sup>」といわれ、末期には「債務其他不良材料」が「兎角の風聞の因をなした<sup>51)</sup>」とされる。

## 3. 尾崎寅治、野喜治良等（㈱尾野商店）

加古川地方の株式仲買の一例として㈱尾野商店を取り上げて見よう。同商店は取締役の尾崎寅治（5-9）の「尾」と、野喜治良<sup>52)</sup>の「野」とを組合わせたものと考

えられ、7年8月加古川町ノ内篠原町<sup>53)</sup>20番地に資本金50万円で「公債株式売買及公社債の引受募集其他一般信託業」(T8帝P40)を目的として設立され、支店を神戸市相生町に置き、8年時点の払込額は12.5万円で、9年6月29日には神戸市元町通4丁目101番地に移転(登T9.7.18Y)した。同社の取締役は尾崎、黒田辛五、野喜、三宅利平、山本栄太郎、監査役神田勝次<sup>54)</sup>、稲岡猪之助(播鉄支配人ほか)であった。(T8帝P40)三宅利平は「氏はかつて覇氣満々たる処より輸贏場裡に出入し、亦是逐鹿場裡に狂奔して中央政界の人たらん野心ありし<sup>55)</sup>」と評された人物である。尾野商店のパートナーである尾崎と野喜は二人揃って本岡の子分の青木雷三郎(3-20)ともども、役員にもなっていない新宮輕便鉄道の総会に出席し、尾崎は役員選挙で「議長ノ指名ニ一任スベキ意見ヲ述べ」(新鉄T8.3.2決)、3名が出席株主を代表して決議録に署名するなど、議長の指名による「決議録署名委員」なる与党総会屋の行動を含めて、英一の手足となって、各社ごとに役員や与党総会屋、株主等のそれぞれ必要な役割を演じ分けて、英一グループ経営の一端を担ったと考えられる。播鉄でも野喜は与党総会屋的言動に徹している<sup>56)</sup>。

こうした「決議録署名委員」となった人物の例としては新宮輕便鉄道の総会に出席した、やはり(株)尾野商店取締役の黒田辛五<sup>57)</sup>、西山勇四郎(T6/9篠山鉄道5株主)、西川源次(新鉄T6.3.30総会に出席)等があった。公債株式売買を本業とする尾野商店自体が、株をいじるのが好きで大の得意先である英一のご機嫌をとるために、役職員を使ってこうした各種「総会関連サービス」を実施したほか、自社でもT8.11 850株の鬼怒川水電株主となったほか同社役員の尾崎寅治(T8/11 2,090株)、三宅利平(T7/5 2,800株)も鬼怒川水電株主に名を連ねており、尾野商店は大掛かりな英一の株式買占等の機関店を勤めて、大いに手数料を儲けただけでなく、多量の自己売買等、株買占の実行部隊として組織的、主体的に動いた可能性もあろう。その一例として7年3月30日現在の新宮輕便鉄道の三宅利平らの役員以外の非役員株主13名には8株の株主として登場する富田勘治<sup>58)</sup>のような地元の資産家も含まれるが、残り12名はすべて1株の株主であって、具体的には尾崎寅治と尾崎姓の5名(考、たつゑ、保二、琴、三治)、黒田辛五、野喜治良らは尾野商店役員であり、岸本信次、原親仁、松井廉太郎、田中信次も、<sup>59)</sup>

おそらく彼らと同類の人物と推定される。8年時点では鬼怒電1000株のみの株主<sup>60)</sup>として登場する岸本信次（兵庫）は主要な会社の役員ではなく、また主要な投資家・資産家とも思われないのに、播鉄総会決議録に署名するほか、鬼怒電株1000株、篠山軽便鉄道132株（T 6 / 9）、新宮軽便鉄道2株（T 8 / 9）など、英一関連の買占銘柄には必ずといっていいほど姿を見させている。もし岸本信次を、同じ新宮の1株株主12名の中に3名までも役員が含まれている尾野商店の、店員のような立場の人物だと仮定すると、主要会社の役員でなく主要な投資家でもないのに英一関連だけ頻繁に株主となる特異性がよく説明できそうである。さらに末期の播水の4600株主（播水T12下営、P24）の大株主として登場するに至っては、尋常の投資家とは思えず、何らかの特殊事情ある利害関係者としての取引（株価維持、粉飾等）としか考えられない。同様に播水の新5850、旧503株主の木沢勝次<sup>62)</sup>もそういった人物の一人と推定される。

#### 4. 播州物産その他

7年7月極めて広汎な「米穀薪炭木材売買倉庫運送並信託業」（T10諸P614）を営業の目的として加古川町に資本金20万円で設立された。社長武田常三郎（3-2）、取締役黒田辛五、大崎源一郎<sup>63)</sup>、太田九平（神戸銀行支配人、加古川製紙取締役）ほか、支配人藤原久吉。信託業務の一環として播陽紡績の株式募集の申込取次所（T 9 . 4 . 6 K）となっている。なお同社は「総社員の同意により大正九年七月十六日解散」（登9 . 8 . 10 Y）し、9年7月17日登記完了した。また追原商店（10年11月末時点で神取50株主）社長の追原頼太は神取・証券・米穀取引員で、神戸造船所監査役を兼ねる一方、神戸造船所支配人の西村安太郎も追原商店取締役を兼ねるなど、両社とも英一系企業との人的連携が顕著であった。

#### 5. 谷向喜一郎（阪神商事）

谷向は明治5年兵庫県津名郡尾崎村の農家に生まれ、29年明治大学卒業淡路精米取締役、淡路融通<sup>65)</sup>社長、および後身の淡路貯蓄銀行（津名郡郡家村）頭取（筆頭株主63株）で、出身の尾崎村をも供給区域とする淡路電灯監査役や、耐火煉瓦を製造していた製タ舎窯業土地取締役等を兼ね、大正11年淡路銀行に合併された

後は、「セメントの原料土乃至は土管、煉瓦、坩堝其他の窯業原料<sup>67)</sup>」の採掘地の立地に着目して、「其製造を廃止し、専ら別荘地及住宅の経営<sup>68)</sup>」に転換した舞子住宅土地の専務、さらに同社を換骨奪胎したと見られる阪神商事(旧称阪神商事信託)専務となった。主宰する「金銭貸付不動産有価証券売買」(T14帝P24)のノンバンクたる阪神商事は播鉄など資金繰に窮した英一系企業におそらく相当な高利資金を融資し、播水、加古川製紙等の関係企業整理に明大同窓生の土井高一郎計理士ら辣腕パートナーとともに深く関わった。播鉄の財務整理上新設された播丹鉄道の12年10月24日の創立総会では自らの動議に基づき、伊藤の旧腹心の青木雷三郎、神田勝次、債権者代表の小林晋一、中川幸太郎とともに新役員の詮衡委員5名に選ばれ、さらに現物出資に伴う創立時の播丹検査役をも青木、中川と3名で勤めるなど、青木とともに播丹創立総会の議事進行の一切を取り仕切った。(T12.10.24決)従来の英一グループ各社の総会は青木らと尾野商店が仕切役を独占していた感があったが、青木らの領分に新たに谷向ら阪神商事グループが乗込んだ形になり、両者で分担することに落ち着いたようだ。<sup>69)</sup>

播水の場合、英一自身が11年の株主総会で議長として「当会社ノ経営上、吾々取締役一同総辞職ヲ為スヘキ旨ヲ表明シ、後任経営ノ首脳者ニ株主酒井栄蔵氏推薦ノ意ヲ述ブ」(T11.10.31総)ことにより、公式の場で彼ら仁俠の徒に整理を一任した。15年1月30日の播水総会に田中貞二<sup>70)</sup>とともに「吾々が特ニ出席シタ」播水株主の河野半三郎<sup>71)</sup>は、酒井、藤井照千代、土井らの行動を「迷惑ヲ蒙ルコトヲ慮リ、唯一人救済スルモノナキ素乱窮困ノ極ニ沈淪シテ居タ此ノ電鉄ヲ仁俠的ニ整理救済セラレタ」(T15.1.30決)とその仁俠ぶりを絶賛した。その後の経歴から見て酒井の配下と推測される河野らの発言は次々と破綻整理に深く関与していく“特殊資本家”の論理に立った自画自賛ではあるが、当時は破綻法制の不備もあって「素乱窮困ノ極ニ沈淪シテ居タ」破綻企業には「唯一人救済スルモノナキ」という一面の真理を突いた発言でもあろう。

注1) 2) 3) 6) 7) 前掲『兵庫県人物史』P64、358、66

注4) 広田三郎『実業人傑伝』M28、P9-23

注5) 島田金次郎『兜町秘史』S7、三枝書房、頁付なし

- 注8) 24) 32) 40) 前掲『京阪神に於ける事業及人物』いP 2
- 注9) T14. 6 .24宍粟郡長鈴木脩藏書簡、文、播水
- 注10) 例えば宍粟郡の有力者は「伊藤英一氏ヲ信頼シテ」播水延長線に過度に期待した。
- 注11) 18) 前掲『五島慶太伝』P 223、222
- 注12) T14. 3 .10付監督局長宛播水回答書、文、播水
- 注13) 英一には「談判の為め実に前後二十五回上京し遂に安田をして根負けせしめた」(異P 96) 実績がある。
- 注14) 例えば「東播地方の銀行団で…此借金は総て相当の担保品が這入って居るから格別の懸念は不必要と樂觀して居るものも多い」(T12. 2 .20Y) と言われる。しかし第一次大戦の終結したT 8には「戦後神戸の組合銀行の警戒は全国中最も神経過敏である」(T 8 . 4 .26K) と言われ、「船舶鉄類に対する貸出が著しく減少した」(同上) ほどであった。したがって、少なくともT 8以降、神戸の組合銀行は船舶、鉄関係の融資先へのモニタリングはある程度努力していたと考えられる。
- 注15) 東京市日本橋区本石町一丁目四番地、電話本局特長二四八一番、三七〇一番
- 注16) 27) 前掲『全国株主要覧』T 9 上P 35、40
- 注26) 前掲『全国株主要覧』T 6、P 9、
- 注17) 前掲『帝国鉄道要鑑』第4版、軽P 37
- 注19) 20) 『根津翁伝』P 94、105。高野鉄道は拙稿「明治末期の民営社会資本の挫折と再建—高野鉄道のデフォルトと財政整理を中心に—」『滋賀大学経済学部研究年報』2巻、H 7 .12参照
- 注21) 22) 23) 42) 43) 前掲『兵庫県人物史』P 383、386、531、358
- 注25) 44) 45) 前掲『兵庫県管内紳士録』付P 10、広P 18、広P 21
- 注28) 30) 前掲森川『地方財閥』P 44
- 注29) 49) 前掲『全国株主年鑑』T 15、P 293、283
- 注31) 具体的には湊西銀行の大株主化、相談役就任、末正一族の伊藤商事等の直系企業への参画等

注33) T 8.3.19付文書、文、播電

注34) 35) 36) 39) 前掲「演説原稿」『播州高砂岸本家の研究』P112～3所収

注37) 38) 48) 前掲『経済時報』11号、T 9.9.11、12号、T 9.9.21、2号、  
T 9.5.21

注41) 鉄道省監督局作成「以下参考」と題した添付メモ、文、播鉄

注46) 前掲『帝国信用録』S11、兵庫P79

注47) 木内英雄『神戸紳士録』M44、P472

注50) 51) 前掲『神港人物太平記』P472、477

注52) 野喜治良は(株)尾野商店のほか、播州煉瓦清算人、T 8では兵電262、鬼怒電3600、大正汽船212、久原鉱業60、明治製鍊50、計4184株(『全国株主要覧』T 9中P390)

注53) 加古川駅構内の播鉄本社、篠原町31番地播州石材、同47番地播州倉庫に近接。

注54) 神田勝次は高砂の米穀・荒物商、高砂銀行取締役支配人、加古川製紙監査役、高砂土地倉庫取締役、播鉄清算人、播丹創立総会でも詮衡委員。T 8では兵庫、播鉄112株、鬼怒電200株、塩水港製糖80株、神戸栈橋100株、川崎造船所60株、大阪鉄工所60株、計622株(株T 8上P607、T 8帝P45) 高砂銀行取締役支配人→常務→専務、後に神銀取締役、戦後は日本運送役員

注55) 富谷益蔵『兵庫県官民肖像録』博進社、T 7、P83。三宅利平は加古川町寺家町、酒・醤油醸造(『日韓商工人名録上』M41、実業興信所、P79)、県会議員、M43播鉄発起人、加古川銀行、尼崎商店、中日化工、別府軽便鉄道、本田商事、日本綿業各取締役、伊藤商事監査役

注56) 三十八行員たる「株主英賀福蔵氏は同六朱案の各修正動議を提出し、議長及支配人稲岡猪之助氏は会社の状況を説明し、原案維持を努め、株主野喜治良氏は之に賛成し一同異議なく原案通り可決せり」(T10.10.30決)

注57) 黒田辛五は長谷川商会監査役、龍電、新鉄、赤穂鉄道、神戸肥料、播州煉瓦、播州石材、播州物産各取締役500株

注58) 富田勘治は揖保郡財部村ノ内市野保村26、県会議員、揖北金融(資)無限責任社員(M40諸P530)、6年龍山自動車を発起、新宮軽便鉄道取締役、T

# 5.7.6 堀豊彦社長辞任により後任の新宮軽便鉄道社長就任

注59) 新宮軽便鉄道「株主姓名簿」T 7.3.30

注60) 前掲『全国株主要覧』T 9下P 352

注61) 『銀行会社要録』T 11、T 6『全国株主要覧』、T 14『日本紳士録』、T 15『全国株主年鑑』等に該当なし

注62) 木沢勝次(神戸)はT 10.11末時点で神取60株主、T 11.9篠山鉄道1000株主、播水の新株5850株、旧株503株主(播水T 12下営P 24)

注63) 大崎源一郎は加古郡高砂町の材木商で、播美鉄道監査役(『銀行会社要録』T 11、上P 150)、三十八銀行100株T 15では神戸市明石町32、大日糖100株(『全国株主年鑑』、P 266)、播丹監査役、高砂銀行ほか会社役員(前掲『帝国信用録』S 11、P 25)、S 11.1に高砂銀行監査役に就任(前掲『神戸銀行史』P 104)、播丹の主取引銀行の高砂銀行を代表して播丹監査役に就任(同姓の材木商・大崎卯平、大崎総平も高砂銀行監査役)

注64) 前掲『日本紳士録』T 14、P 38

注65) 淡路精米は津名郡郡家村、M 30設立、資本金10万円(『日韓商工人名録上』P 100)

注66) 淡路融通(株)は津名郡郡家村、M 40.8設立、資本金2万円(『日韓商工人名録上』P 100)

注67) 68) 『土地会社総覧』T 9、P 125

注69) 関西土地興業専務の青木雷三郎も英一破綻後は酒井栄蔵との関係が極めて深い企業と考えられる山陽興業(北区曾根崎上3-178=阪神商事本社所在地、T 7.10設立、資本金20万円、払込5万円)の取締役にも就任するなど、緊密な関係の存在がうかがわれる。

注70) 田中貞二はS 5.1.30播水清算人就任、S 7.2.25九州肥筑鉄道監査役就任

注71) 河野半三郎はS 5.1.30播水清算人就任、S 6.3.31現在播電鉄道800株主



## 第10章 播州鉄道の破綻処理（播丹鉄道新設）

### I. 播州鉄道の行き詰まり

大正10年12月21日播鉄沿道の多可、加東、加西、美囊、加古、印南の6郡町村会では「播鉄国有請願の協議をした結果、請願書作成と正副委員各六名宛（一郡から一名）を選出…不日各委員は上京、主務省に出願する由」（T10.12.24A）と報じられた。また「経済界不振の爲め、其他会社の都合上…尠からぬ故障の生じた」（T12.1.20Y）播鉄は資金難から中村線の建設工事中断に追い込まれている。12年11月13日付兵庫県知事の副申書でも「播州鉄道会社ハ多額ノ債務ノ為ニ営業ヲ継続スルコト能ハサルニ至レル状態<sup>1)</sup>」と窮状を訴え、12年11月本件を担当官として審査した佐藤雄能も、こうした地元からの度重なる窮状の訴えを受けて「現在播州鉄道株式会社ハ負債借替、利子支払等ニ忙殺セラレ、殆ト鉄道業ノ発達整理ニカヲ致スコト能ハサル状態ニ在リ…現在ノ欠損金四百七十三万余円ヲ償却センニハ今後約十年間株主ハ無配当ノ苦痛ヲ忍ハサルヘカラス。聞ク所ニ依レハ株式ノ大部分ハ銀行其他ニ担保トナリ、債権者ハ一株三十五円乃至四十五円ヲ以テ受ケ居ルモノアリト云フ。一ケ年以前迄ハ会社ハ深刻ナル苦痛ヲ忍ヒ利益ノ配当ヲ継続シ居タリシモ、其後当局ノ命ニ依リ、利益ノ配当ヲ為スコトヲ得サルコト為リ、此儘十年間整理ニ従事セサルヘカラサルニ於テハ債権者ノ苦痛甚しく、破産ノ状態ニ陥ルモノ尠カラサルヘク、同鉄道ノ発展ヲ望ミ得サルノミナラス、地方経済界ニ大動揺ヲ生スルニ至ルヘシ<sup>2)</sup>」と看破した。

『新修加東郡誌』は播鉄の行き詰まりの原因を「綿業会社や温泉、遊園地など、あまりに手を広げすぎたため<sup>3)</sup>」と見ているが、大赤字を出した関連会社の日本綿布はともかくとしても、日向山遊園地や日向山山麓にある「播鉄の経営せる」（T2.4E）日向台温泉は秋山社長、川端専務ら英一の前任者から引継いだ、一般の私鉄ならどこでもやっているような旅客誘致施設で、確かに3年9月期の付帯事業「収入ハ日向温泉入浴料等…支出ハ同温泉雇員以下給料…差引百五十三円五十二銭ハ損失ニ帰シタ」（7回営）ような赤字状態が継続していたとしても投下資本

の規模も小さく、播鉄の屋台骨を揺るがすような大規模な多角化とは考えられない。もちろん英一の派手好みの一例として、英一が加古川駅前の寿座（代表者永江方蔵）を買収、改称した「大正四年一二月二八日播州鉄道が持主となり…尾上松之助や淡海一座が常打ち<sup>4)</sup>」とした大成座<sup>5)</sup>があるが、同座はS 5 明石郡の大地主・鞍谷清太郎（鞍谷清慎の関係者か）が継承したといわれる。

播鉄は谷向喜一郎の主宰する訳ありの阪神商事から高利資金導入にすぎた結果、12年3月31日現在の播鉄への与信額の12位に個人名義（谷向喜一郎）が登場するに至り、多額の債務を抱えて営業継続不能に陥った。結局土井高一郎<sup>6)</sup>播水清算人の播水総会で報告では「公言スルコトノ出来ナイ様ナ難問題モ続出スル爲メ、身ニ累ノ及バンコトヲ虞レ唯一人整理救済ヲ引受ケントスルモノナク、伊藤前社長ガ必死ノ狂奔モ氣ノ毒ナガラ徒勞ニ帰シ、止ムナク任俠ヲ以テ鳴ル畑違ノ大親分酒井氏ニ泣キツカレタ」（S 3. 6. 1 播水総）とされ、当時の新聞でも「大阪の俠骨小林佐兵衛氏の第二代目酒井栄蔵氏とやらも親譲りの仁俠で…救はう」（T 11. 12. 6 K）と名乗りを上げたものといわれる。播水株主の鉄尾利吉も「御自分トシテハ何ノ責任モナキニ拘ラズ関係セバ忽チ迷惑ヲ蒙ルヲ虞レ、伊藤前社長ノ必死的運動ニ対シテモ唯一人他ニ整理救済ノ需ニ応ズルモノナカリシヲ、仁俠的ニ引受ケラレ」（S 7. 1. 30決）たと酒井栄蔵の仁俠に謝意を述べている。

一方、メイン銀行の窮状を訴える松本中学以来の同窓生である小林當成勸銀貸付担当理事から「何とかして君の力によって播丹鉄道を再建してくれ<sup>7)</sup>」と頼まれた五島慶太（後の東急社長）によれば「小林の依頼によって、大阪に行ったところ、すでに大阪の俠客小林左平〈佐兵衛の誤り〉こと酒井栄蔵が社長となって播丹鉄道の再建に従事していた<sup>8)</sup>」と述べており、酒井栄蔵の登場が勸銀側の思惑からではなく、政府系金融機関・勸銀を代表して、鉄道省監督局 OB として、いわば官側を背負って勢い良く乗込む五島にとっても、「大阪の俠客」との呉越同舟は「不本意」な事態であったことがわかる。しかし、この官側の建前の世界と、全く別次元の仁俠の世界との隔絶を調整する絶妙なる持ち味を備えた京阪電鉄社長太田光熙<sup>9)</sup>という、このような場には欠かせない稀有の人物がいわばフィクサーとして突如登場し、「酒井を助けて、不本意ではあろうが貴殿が副社長となって整理してくれないか<sup>10)</sup>」と、ゴネる五島を説得した。五島がただの鉄道官僚なら恐らく

尻込みしたのであろうが、後年「強盗慶太」などと称されるほど辣腕怪力を発揮した「電鉄王」となる人物だけに、清濁合せ飲む芸当も心得ていたものと思われる。なお五島は鉄道省監警局在官当時に播鉄に出張し、直接英一らを指導監督した経緯がある<sup>11)</sup>。

かくして五島は「太田と小林営成の二人」という、官側、仁侠側の双方からの「依頼で播丹鉄道の副社長となった」<sup>12)</sup>のであり、かくして播鉄、播丹は大阪の俠客（酒井）、有能な鉄道官僚（五島）、再建専門の計理士（土井）らの異色の人材による混成部隊、「呉越同舟」ならぬ異例づくめの「官俠？同舟」の再建団として出発することになった。こうして11年10月22日播鉄株主総会で「議長ハ取締役辞任ノ旨ヲ述ベ…（役員選挙後）議長伊藤英一氏ハ辞任シタルニ付…」（T11.10.22決）、英一は相談役となり、酒井栄蔵、五島慶太らが就任、「他に会社を設立し鉄道部のみを切離して大整理を行ふの件は提案の形式に面白からざる点あり、一ト先づ撤回し、更に近々臨時総会を開いて付議することに決し」（T11.10.23Y）「二十二日同会社総会閉会后、井上旅館で新重役会を開き、相談役伊藤英一氏も参加し、社長互選の結果、酒井栄蔵氏の就任を見、副支配人安田寅治氏を福岡氏の後任として支配人に昇格せしめ」（T11.10.24Y）「今後の同会社は社長酒井氏、支配人安田氏の手で専ら経営する筈だと」（T11.10.23Y）報じられ、英一としてはグループを挙げて「任俠ヲ以テ鳴ル畑違ノ大親分」の「再建」に委ねるしか、残された道はなかったのであろう。

## II. 旧会社から新会社への鉄軌道譲渡

旧会社から新会社への鉄軌道譲渡の多くは旧会社の債務凍結・棚上げと類似名称による新会社設立による鉄道事業の譲渡（優先的債権相当額での資産売却）、債権者による債権放棄と新会社出資という改組形態による会社再建であると考えられる。結局100%減資、100%第三者（特殊の利害関係者＝優先担保権者）割当に近い効果があったものと考えられる。明治38年以降は鉄道財団抵当で貸付けていた金融機関（勧銀、興銀等）や担保付社債権者は鉄道抵当法に基づく、強制管理や強制競売申立による債権回収の方法が法定されている。しかし財団抵当以外の有価証券抵当、個別不動産抵当の場合や、役員等の個人保証<sup>13)</sup>、無担保貸付の場合

には債権者がばらばらに担保権を実行して企業としての存続が困難となりかねない。また今日のように同一の法人格のままで債務の棚上げを行う会社更生法も施行されていないため、過去の繰越欠損の補填に対しては旧株主が100%減資によって、整理責任を明らかにした上で、優先弁済権を持つ担保権者を中心に新会社を設立して、いわば不良化した債権を新会社の株式と交換することとする。(債務の株式化) これによって新会社は旧会社の資産を減資分に見合って切り下げ、借入金を株金に振り替えるため、借入なしで再出発出来ることとなる。

財団の強制競売によっても、鉄道のような巨大かつ有機的結合体を一括処分する市場は存在せず、いわゆる正常価格によって売却できる可能性は乏しい。このため金融機関がダミー（多くの場合は役職員や別会社名義）により自己競落せざるをえない場合が少なくない。この自己競落のケースでは金融機関は專業主義により、鉄道業を兼営できないから、ダミーの取得した鉄道の権利義務一切を新会社を設立して継承せざるを得なくなる。<sup>14)</sup> 新会社の株式募集に当っては、一応旧会社の株主にも割当て<sup>15)</sup>るが、旧会社の株式が紙切れになった上に、更に新会社の長期無配当株を引き受けるのは、旧会社の経営陣など、責任を感じてやむなく損失の分担として引受ける関係者（貸付していた関係金融機関の経営者・幹部行員等の名義借用株を含む）か、鉄道の存続、株式払込みによほど特殊な利益を受ける株主（株式仲買人等）に限られよう。<sup>16)</sup>

播鉄23回営では「取締役伊藤英一其他辞任に付役員選挙の結果、左の通り当選せり、取締役酒井栄蔵、藤井照千代、大井善蔵、五島慶太、近藤源吉、加島安治郎、草鹿甲子太郎、森原嘉逸、土井高一郎」

新社長酒井栄蔵の下で播鉄は11年10月22日の第23回株主総会に「新会社へ当社鉄道部ヲ譲渡スル事、其ノ時期価格ヲ取締役ニ一任ノ件」を付議したが、伊藤前社長と緊密な提携関係にあったと考えられる湊西銀行代表取締役の「株主末正盛治氏ハ撤回案ヲ發議シ、之レニ賛成者多ク、次回株主総会ニ提議スルコトニ決シ」

(23回決) た。鉄道部譲渡案の根拠として新聞では「鋭意其の成績を挙げることに努めつつあるが、何うも前社長時代の経営が悪かった為め思ふやうに発展ができぬといふので、今回新に播丹鉄道株式会社なるものを組織し、其の新会社に於て播鉄を譲受け、所謂看板を塗替へると共に陣容を新にして進むことにし、之が

認可方を鉄道大臣に出願した。新会社は資本金を六百万円とし、現在の播鉄会社は之を解散して更に小規模の会社に作り替へ、鉄道の経営は新会社で経営し、運送・娯楽場・バラス採取などの付帯事業は右の小会社をして行はしめやう」（T12.11.4 A）と新会社への譲渡計画が報じられている。

12年12月29日の臨時株主総会で会社解散の件を付議したが、清算人の選定に際して次の5名の詮衡委員を指名した。①加藤淳一<sup>17)</sup>、②土山喜之助(7-24)、③小林晋一(5-20)、④吉田梢三、⑤青木雷三郎(3-19)

小林晋一(大阪)は個人名義で10550株の2位株主であるが、彼は明治38年7月大同生命に入社、大正6年時点で大同生命徴収課長、「多年精励し上下に信望あり、君文才に長じ詞藻頗る豊富にして斯界に稀なる篤学者なり」という経歴であり、淡路銀行、三十八銀行と同様に法人持株を代表しての詮衡委員指名であろう。大同生命は兵庫農銀、神戸信託等とともに伊藤英一個人に不動産資金を供給していた金融機関であるが、播鉄が伊藤英一個人から不動産を買上げたことに伴って、播鉄・播丹との関係が深まり、昭和9年現在5238株の播丹第2位株主(S10諸P875)となっている。その後も大同生命は日生等とともに播丹に対して鉄道財団で融資を継続しており、昭和17年末時点では大同生命は全営業路線を以て組成する鉄道財団第1、2順位で95万円、第3順位で17.5万円、日生は鉄道財団第1、2順位で285万円、第3順位で52.5万円をそれぞれ融資した。大同生命常務の松井万緑が播丹取締役役に就任した。零細株主の青木雷三郎が選定されたのは英一派の代表格としてであろう。詮衡「委員五名ハ別室ニ於テ協議ノ結果、青木雷三郎氏ハ委員ヲ代表シテ清算人七名ヲ八名ニ増員ノ動議ヲナシ」（播鉄T12下営）、杜長の酒井栄蔵、取締役の藤井照千代、監査役の土井高一郎の前役員3名に加えて①加藤淳一(詮衡委員)、②小林晋一(詮衡委員)、③神田勝次、④丸山文治郎、⑤青木雷三郎(詮衡委員)の5名を詮衡した。(T12.12.29決)三十八銀行の土山喜之助は詮衡委員となったものの、なぜか自ら清算人となることは選択しなかった。これに対して淡路銀行取締役の加藤淳一は12年12月29日の播丹総会で優先株または社債発行の議案に対して「株主淡路銀行代表者加藤淳一氏ハ第三号議案社債発行スル件ヲ可決サレタキ旨ヲ述ベ」（T12.12.29決）るなど、播丹でも積極的に表に出てきている点で銀行代表の株主行動として対照的である。なおこの12年12月

29日臨時株主総会決議録の株主代表署名者は前田達次（3-9）と加藤金次（兵庫、播鉄126株主）であった。その他臨時株主総会に出席して、決議録に発言等が記載された株主は三国勝蔵（加藤、青木と懇談会開催を要求）、西村隆次、草鹿甲子太郎<sup>21)</sup>（3-21）の3名であった。

### III. 播丹鉄道への譲渡手続と債権者

大正12年10月24日の播丹創立総会では谷向喜一郎の動議により、谷向と青木雷三郎、神田勝次、小林晋一、中川幸太郎（創立時の播丹検査役）の5名が<sup>22)</sup>新役員の詮衡委員に選ばれた。青木らが指名した新役員は社長酒井栄蔵<sup>23)</sup>、副社長五島慶太、専務藤井照千代、取締役藤井忠兵衛<sup>24)</sup>、草鹿甲子太郎（播鉄取締役）、大城戸宗七（大志銀行監査役）、中川幸太郎（新役員詮衡委員、検査役）、監査役太田光熙（京阪社長）、西村隆次、土井高一郎（播鉄監査役）であった。12年12月播鉄（旧社）を改組し、播丹（新社）へ譲渡した。定款付則第34条により、播丹創立に際して発起人たる播鉄は鉄道及び娯楽機関業の財産（価格867万2529円75銭8厘）を現物出資し、代価として新社の50円払込株式10万株（500万円）を引き受け、残額367万2529円75銭8厘<sup>25)</sup>に対しては播鉄の債務を引受けた。現物出資に伴う創立時の播丹検査役には青木雷三郎、中川幸太郎、谷向喜一郎が選任され検査役は「株式総数十二万株ノ内、発起人引受株式十万三千二百株、其他申込株式一万六千八百株ニシテ即チ株式総数ノ引受アリタリト認ム<sup>26)</sup>」と報告した。「発起人引受株式十万三千二百株」の内訳は発起人・播鉄10万株、発起人総代酒井栄蔵以下18名3200株と考えられる。

私鉄審査のプロとして著名な佐藤雄能は本件に総括して「法規上鉄道財産ノ価額ハ…實際財産価額カ昂騰スルモ評価ニ依リ之ヲ増加スルコトヲ得ス。会社カ本件申請ノ方法ヲ採リタルハ全ク此ノ法規ヲ潜脱セントスルニ基クモノナリ<sup>27)</sup>」と新会社の欺瞞性を鋭く指摘した。しかし、前述の地方経済界の動揺を抑制するとの大所高所からの観点から「故ニ法規上ヨリスレハ妥当ニアラスト雖、会計上甚シキ不当モナキコトモアレハ、特ニ之ヲ認メラルルハ已ムヲ得サルモノナルヘキカ<sup>28)</sup>」と五島先輩らの捻出した苦心の脱法的スキームを齒ぎしりしつつも特認した。

旧社が新社の株式10万株500万円を引受けた後の新社の資本金の残額367万2529

円75銭8厘の内訳は①借入金248万7322円41銭、②未払金24万7439円5銭8厘、③社員貯蓄金3万6040円28銭、④未払配当金4万2316円54銭、⑤従業員退職給与基金2000円、⑥受負保証金1万1825円、⑦社債金30万円、⑧当座借越金9万9650円27銭、⑨支払手形44万5936円26銭であり、その内訳は「覚書」第四条を受けた別表に具体的に定められた。播丹の15年9月末の社債は58.6万円、鉄道抵当借入金278.3万円、計336.9万円あり、いずれも長期間に亘って漸減しているので、旧社引継債務367万円2529円75銭8厘の残額と考えられる。後年会社自身も「然シ播州鉄道カラ巨額ノ負債ガ附廻<sup>29)</sup>ツナト自動車ノ進出ニヨル交通情勢ノ変遷等ニ因リマシテ経営上予想外ノ困難ニ遭遇」したと、播鉄負債の附廻しを強調している。五島の回顧談では「百有余の債権者を集めて、債務の半額切捨てを承諾させた<sup>30)</sup>」とあるから、ピーク時の旧社債務は367万円の倍額たる735万円程度存在したことになる。「百有余の債権者」には鬼怒川水力電気の株式を担保に入れていたメイン格の勧銀のほかにも、播丹大株主となった淡路銀行（S4.9.閉店）、大同生命、八束銀行（島根）、百三十七銀行（篠山）、松江銀行、高砂銀行（伊藤長平が取締役）などの各行が当然に含まれていたと推定される。また後年株主に姿を見せる鴻池信託、住友生命、日本興業銀行などの中にも当初の債権者が含まれる可能性もあろう。なぜなら柴田慶蔵、三枝正、河崎寛一、松本龍介、三木敏、笹倉哲治（播丹庶務課長）、石郷岡忠彦など、播丹個人大株主の多くは『日本紳士録』（神戸・大阪）に該当事が見たらない、肩書未詳の人物が少なくない。T12.3.31現在播鉄の支払手形の債務額3500円の三島盛之助（島根）が実は八束銀行支配人であり、また例えば大崎源一郎（9-63）は高砂銀行取締役であった。半額は回収不能となった不名誉な不良債権が表に出ることを嫌う債権者の代理人ないしグミーである可能性も残されているからである。篠山銀行、淡路銀行をはじめ八束銀行、松江銀行などかなり遠方の島根県の銀行まで含まれていることから考え、資金難に苦しんでいた播鉄や英一系企業が手当たり次第に調達しまくった結果、「百有余の債権者」にもなり、遠方の銀行や、非銀行、高利貸しからも借りていた可能性が高かったことを示している。播鉄の解散にあたり12年12月29日現在仮出金310,263円中、記帳外債務36,650円、強制執行分5,284円、雑口196,288円に関して「仮出金内訳内容明細ヲ欠ク、特ニ…記帳外債務、雑口等ノ内容詳細説明ノコト」と

の注文が付き、「記帳外債務ニ対シ強制執行ヲサレシモノヲ計上セシモノニ付、損失トシテ整理仕候」、「雑口…主トシテ前社長伊藤英一氏ニ関スルモノニ有之、殆ンド損失トナルベキモノニ有之候」と鉄道省に報告していることから、播鉄にもある種の簿外債務が存在し、そうした債務者は債権回収を急ぐ余り、強制執行をも辞さなかったことが判明する。播水と全く同様に、共通の「伊藤前社長ノ蹉<sup>32)</sup>跌」の結果、伊藤関係の借入金に対して、播鉄の正規の帳簿にはのらない、ウラの債務保証が存在し、関係の債権者から「保証セル当会社カ強制執行ヲ受ケタ」ものと推定される。

#### IV. 大阪電気軌道による播丹鉄道系列化

減資前の昭和9年3月末では筆頭株主は笹倉哲治16,445株であったから、半額減資により、8223株程度になるはずであったが、減資後の9年9月末では上位株主には見当たらず、代って播丹の持株会社播丹証券合資会社（代表者は播丹役員の安田寅次）が1万株の筆頭株主に躍り出た。（22回営）笹倉哲治は播丹庶務課長（S10諸上P875）であり、彼個人は資産家とは考えにくいので、播丹証券設立以前から、おそらく業績の芳しくない筆頭株主の淡路銀行11,970株の処置に困った播丹が宙に浮いた株の受け皿として庶務課長の個人名を借用していたものと見られる。12年に播丹副社長に就任した五島慶太は、昭和3年には大阪電気軌道（大軌、現近鉄）監査役にも就任したが、播丹の一応の再建のメドがたった時点で「彼の関係していた近畿日本鉄道に買取してもらい、近畿日本鉄道の専務藤井正を社長として、播丹の後始末一切をして東京に引上げた<sup>34)</sup>」といわれる。逆に昭和7年3月5日休業した四日市銀行の担保に差し入れられていた伊勢電気鉄道社長の熊沢一衛の持株を大軌が請け出した時、「遠距離ということで静岡電気鉄道の経営には関心がなく<sup>35)</sup>」、昭和16年に五島の東急が引取ったことがあり、東急エリアに近い静岡電気鉄道と、大軌エリアに近い播丹を、東急、大軌、播丹の3社の役員を兼ね、大軌の金森社長が病気の際には五島が後見役を引き受け、大軌経営にも直接タッチしたという五島の主導でトレードしたということになろう。第三者の西武鉄道の堤康次郎の立場から見れば「関東の鉄道は五島慶太君に、関西は近畿日本鉄道の種田虎雄という人に、統制させよう<sup>37)</sup>」という官僚主導下の近鉄、東急両



社による東西分割と映ったことであろう。兵庫県の鉄道王から一段の飛躍を夢想した伊藤英一にとって、自分の失脚後、かつての旧版図・播鉄線が五島慶太、種田虎雄という東西の鉄道王らによって東西分割の一手段に利用されたことは皮肉な巡り合わせというほかはなからう。

14年3月期まで播丹の筆頭株主は播丹証券（資）1万株であったが、15年3月期では播丹証券<sup>38)</sup>30,798株と、同一商号ながら株式会社となり、持株数も3倍となり、代表者も安田寅次から取締役藤井正に変更された。さらに従前の株主の牛尾合資、海外貿易等の大株主の放出分を大軌が引取った結果、藤井正名義で2778株、大軌系の信貴山急行電鉄950株も新たに播丹株主として登場した。（33回営）この時点で酒井栄蔵社長以下の役員も常任監査役の藤井忠一を除き、全員交替、大橋実次<sup>39)</sup>が回顧するごとく「昭和に入ると播州〈播丹が正当〉鉄道の経営は大阪電気軌道（現近畿日本鉄道）に主権が移<sup>40)</sup>」って、播丹が大軌直系として正式に位置付けられたものと考えられる。新たに播丹の専務となった藤井正（大軌専務・経理局長）は大正10年東大卒、住友信託の調査課長を経て、昭和11年大軌へ入社した経理の専門家で、「三菱重工会長の藤井深造氏のすぐ下の弟」で「大軌から播丹鉄道の直接指図者」として赴任してきた人物で「頭の冴えた鋭い感覚の持主<sup>42)</sup>」であったという。なお藤井は「播丹鉄道を培養発展させる上からいっても…東播一帯のバス、タクシー、トラック、あるいは通運事業まで…一元化をはからねばなら<sup>43)</sup>ない」との理想に基づき、沿線の「トラックやタクシー会社を買収合併しよう<sup>44)</sup>」と計画、ほぼ同時期から播丹の所有有価証券として加古川自動車運送株式303株9157円（31回営）、「播丹証券株式其他464,296円」（33回営）が登場している。このほか当時大軌から播丹には浅見久夫（播州通運代取締役、後に加古川市長）が取締役（S20年常務）として出向していた。五島慶太も播丹の「副業として残っていた乗合自動車と貨物運送業は独立会社として<sup>45)</sup>分離したとするが、地元資本の社自動車運輸（本社加東郡社町、資本金5万円）をルーツとする播州貨物自動車（現日本運送）が昭和16年2月播丹の資本を背景に設立され、藤井正が社長となった。その後藤井正と大橋実次<sup>44)</sup>との話合いで、「播丹鉄道の主力株を持っている大軌の役員の名義株を播州貨物自動車の方へ譲ってもらうことで相談がまとまり<sup>46)</sup>」「一株七十三円の割で、播丹鉄道の株を引取り、播鉄の経営権は私〈大橋〉の

方へ移った<sup>47)</sup>」のであった。譲られた「大軌の役員の名義株」が藤井正名義の2778株と播丹証券分の一部であり、16年9月期から播州貨物自動車第3位6978株の大株主として登場した。(36回営)その後、昭和18年6月1日播丹所属の鉄道は国鉄に買収され、天神や池田等に車庫を持ち、社駅、小野駅等を中心に播丹沿線各地に乗合路線を有していた「バス部門は神姫バス、通運部門は日本通運へそれぞれ吸収され<sup>48)</sup>」、法人としての播丹も最終的には昭和31年3月20日日本運送の関連会社の旭産業(S15年創立、社長大橋実次)に吸収合併されて姿を消した<sup>49)</sup>。

注1) 兵五六九二号二副申、文、播丹

注2) 「播州鉄道譲渡の件」T15.1.27、文、播鉄

注3) 前掲『新修加東郡誌』P649。

注4) 前掲『写真集明治大正昭和加古川』P89

注5) 大成座の経営に関して播鉄の『第十回営業報告書』には総額2.6万円の娯楽機関興業費中T5/3に12,776円を支出し、娯楽機関業全体で収益2,973.23円、費用2,632.92円、差引340.10円の純益を得たとするほかは具体的な記述は見当たらない。

注6) 土井高一郎は明大経済科卒、破産専門の大物計理士で、裁判所から破産管財人に選任(S5.10.25総、文、播電)され、製々舎窯業、舞子住宅土地等に関与した後、破綻した英一系統の播電社長、播磨電気鉄道、九州肥筑鉄道各副社長、播丹、構内自動車、阪神商事各監査役、関西土地興業、日本ユニオン硝子、中国石材、浪速信託、加古川製紙、関西自転車、神国製茶各相談役を兼ねた。(前掲『大衆人事録』S5、P10)

注7) 8) 10) 12) 前掲『五島慶太伝』P222-3

注9) 太田光熙は鉄道省OBながら京阪電鉄の創業時からの生抜き。太田はこの時期、悪名高い証券業者らの利権の巢窟視されていた伏魔殿ともいえる門司築港という、今一つの「難問題」の後始末をも五島に押付けた。

注11) 「本年四月末鉄道院より出張せられたる五島副参事の厳密の調査と指導注意を受け、万難を排し内部組織変更等の大整理を決行し、経費の節減を図り…」(播鉄9回営)

- 注13) 播鉄オーナーの伊藤英一に有価証券抵当でも融資していたと考えられる  
勸銀の場合
- 注14) 勸銀による私鉄への強制競売申立の例としては磐城海岸軌道、豊州鉄道などがある。典型的な事例が芸備銀行による播州水力電気の財団競落による播電鉄道の99.66%出資（その他の株主も発起人・役員に就任させた芸備銀行役職員と思われ、実質的には100%出資か）による設立のケースである。この場合でも有力な資本家、世間的に名の通った役員は発起人および役員には意図的に起用せず、行員や社内重役に限って名義を借りて、なるべく目立たないように事を運んだと考えられる。
- 注15) 播鉄の場合、旧オーナーの伊藤英一および伊藤系の伊藤英雄、伊藤商事㈱以外の大株主がほぼ同数を引受けた。
- 注16) 湘南軽便鉄道の場合では大口荷主である専売局の勸奨で、同じく運送を請け負っていた内国通運役員が引受けた。
- 注17) 加藤淳一は淡路銀行取締役、淡路銀行は播鉄12500株の筆頭株主
- 注18) 丹羽錠三郎『銀行会社と其幹部』T 6、P 90
- 注19) S 17.11.12日本生命取締役会決議録
- 注20) 丸山文治郎（兵庫）は播鉄41株主、T 12. 4 .27播鉄臨時総会で覚書の件を質問
- 注21) 西村隆次は加藤、青木と功労金協議を要求。加東郡下東条村、東播電気、小田銀行各取締役、杜銀行頭取、播丹監査役
- 注22) 播丹創立総会決議録T 12.10.24
- 注23) 酒井栄蔵は小林佐兵衛の女婿で、請負業・酒井組（資）代表社員、T 152年任俠団体『大日本正義団』を組織し主盟、大阪市電、三井物産造船工場、大阪府大正村の小作争議、鐘紡、東洋モスリン等の争議に関与。播鉄社長、播丹4624株主
- 注24) 醸造業、代議士、神取取引員、多可銀行頭取、西協商業銀行、神栄、播鉄、舞子土地、日本綿布各取締役。
- 注25) 「播丹鉄道定款」付則第34条
- 注26) 『調査報告書』T 12.10.24

- 注27) 「播州鉄道譲渡の件」 T15. 1. 27、文、播鉄
- 注28) T12. 4. 21付播鉄、播丹間「覚書」文「播丹鉄道巻1」、播丹1回営
- 注29) 『播丹鉄道株式会社創立十五周年記念帖』(S13) 前掲『滝野町史本文編』  
P765引用
- 注30) 前掲『五島慶太伝』P223
- 注31) 例えば篠山興産はS6. 1に百三十七銀行に営業譲渡(前掲『神戸銀行史』  
P242)された篠山銀行(播水900株主)の受け皿会社かと思われる。
- 注32) 同様に「伊藤前社長ノ蹉跌ハ陰ニ陽ニ当社ニ影響シ財政極度ニ窮迫シ自然  
訴訟差押等頻發シ」(S3. 6. 1土井高一郎播水清算人説明)た播水でも、  
12. 9末の仮出金16、255円の中には「伊藤関係手形ニ対スル支払金」すなわ  
ち播水「会社ノ保証債務ニ対シ、強制執行ヲ受ケタルモノ及訴訟費用」(T  
13. 7. 8付監督局長宛播水回答書)が含まれ、播水副支配人堀権八は「会社  
カ保証セル債務ニ対シ、振出人ニ於テ手形債務ノ履行ヲ怠リタル結果、保証  
セル当会社カ強制執行ヲ受ケタルモノ及之カ示談解決ノ為メ支出セル金額」  
(T14. 3. 10付監督局長宛播水回答書)と回答している。
- 注33) 前掲『日本紳士録』T14、神戸・大阪、『帝国信用録』T14、兵庫、『全国  
株主年鑑』T15、大阪、兵庫等に該当なし
- 注34) 45) 前掲『五島慶太伝』P223
- 注35) 『東急50年史』S48、P197
- 注36) 『東急外史』S57、東急沿線新聞社、P183
- 注37) 堤康次郎『人を生かす事業』S32、有紀書房、P77
- 注38) 鬼怒川水電の大株主(T9)でもある海外貿易はマニラ麻取引、本社大阪  
市北区堂島船大工町、資本金10万円、社長は播水債権者・旧2000株主の八木  
千之助(3-12)
- 注39) 大橋実次は社町長、東播運輸代取締役、播州貨物自動車取締役
- 注40) 42) 43) 44) 46) 47) 48) 49) 大橋実次『私の運送史・日本運送30年』S  
42、P162、27、33、162
- 注41) 江口胤清『交通人物小史』S16、P26

## 終 章 伊藤英一の評価

### I. 伊藤英一の評価

本書をむすぶにあたって、主人公として取り上げた伊藤英一の評価に触れておきたい。まず英一の最盛期における地元の評価を概観すると、彼の御用新聞の一つと目される『関西朝報』社長の福田正俊は「明石電灯と兵庫電車以外、兼ねるに神戸造船〈所〉、神取、日本綿布、関西土地信託、垂水住宅土地、西代土地信託、龍野電鉄、加古川製紙、播州鉄道、伊藤商事等の重役を以てし、而も大正八年末に於て既に氏の遊金は三百万円と称せられ、今や押しも推されもせぬ大実業家となった」(明P 9～11)と最大限の賛辞を呈する。全盛期の英一の評価としては「本県財界の飛將軍」(T 9. 4. 14K)「兵庫県の鉄道王」「関西実業界の巨人たり、且つ山陽道の交通王たる伊藤英一」(明P 9～11)「関西実業界の北斗星」(明P 9～11)「事業界の荒武者、実業界の羽柴筑前として今や隆々旭日天に冲するの概」(異P 89)、「性豪宕進取活発にして、播州に於ける商業家として稀に見るの偉材であるが、守成的の器ではない<sup>1)</sup>」、「其放胆にして小事に拘泥せず、磊落にして繩墨に絆束されざる点に於て慥かに当今の実業家政治家に一頭地を抜くものあり<sup>2)</sup>」「更に其識見を広めて、向上発展に努め、又其抱負を愈々大ならしめ殆んど宇宙を吞吐するの概あり…企業界実業界に力を尽すと同時に政治上の問題に向って其意見を戦はし、播州に於ける君の勢力地盤は牢固として動かすべからざるものあり<sup>3)</sup>」等と概して、その積極果敢な行動を高く評価されていた。

しかし株価暴落後には英一の評価は早くも一変する。大正9年4月某銀行家が英一に向って「君は兵電、播鉄を振出に日本の鉄道王になるんだといってるが、此頃のやうにイロイロの事業に手を出しちゃ却って其の邪魔になりやしないか」(T 9. 4. 14K「計量器」)と直接批判している。この忠告に対して英一は「自分は地位や金の為めに事業をやるんじゃない。事業の為に事業をやるんだよ」(同上)と反論したが、「例の豪傑笑ひで造作もなく鉄道王志願を取消した」(同上)と地元紙のコラムに紹介されている。英一の取引銀行筋では従来から英一は「イ

ロイロの事業に手を出し」過ぎるとの批判が根強かったことを窺わせるが、英一の威光が強く地元紙に載ることがなかっただけであろう。与党的な『関西朝報』も突然現れて、たちまち姿を消すという意味で、「(伊藤)氏を称して関西実業界の彗星と云ふ」(明P18)、異端視する評価が一部で根強かったことを明らかにしている。

続いて英一の最初の撤退作戦の第一号である兵電社長辞任の際、地元新聞は「兵電社長伊藤英一氏は欧州戦乱中財界の好況を呈したるに乘じ、各種の事業に関与し、目下その重役をなし居れるもののみを見るも兵電の外、神取、本県農銀、鬼怒川舞子土地、播州鉄道、明石瓦斯、龍野電鉄、その他二三会社あり。財界不況を呈し事業界整理期に入りたる今日、尚ほ之等広汎なる事業に連絡を有することは時代に副はざるの嫌ひある」(T9.7.27K)とコラムでなく、本文中で明確に批判した。

英一の没落が誰の目にも明らかになりつつあった大正11年時点では英一に同情的な又新日報は「一時空飛ぶ鳥をも睨み落とす程の勢力を揮った…財界の怪傑」(T11.11.29Y)と憐憫の情を表し、対立する神戸新聞は英一を茶化すようなコラムまで登場させている。すなわち「瓦煎餅や牛肉と相駢んで兵庫県の一名物として其の名も天下に高い伊藤英一君」は「昔からドエライ悪徒だとか凄い親分などには見たところ虫も殺さぬやうな優男が多い…トコロガ…アマリに御面相が活躍しすぎて」「一部では財界の惑星の如く、一部では妖怪変化の如く難たてられてる」(T11.9.6K)とした上で、毒舌家某氏の「伊藤君を快傑などいふは蟲屑の引き倒しさ。マツ元亀天正時代に其嚆をもとめたら…級の珍傑サ。だから見給へ、御面相に至る迄正真正銘看板に偽りなしと出来てる。ココが伊藤君がドンナ事をして石井定ハンのやうに人の恨みもうけず、七転び八起き転びなりにならぬ訳」(T11.9.6K)との、希代の投機家・「借金王」石井定七と対比させた、かなり辛口の英一観を紹介している。英一の周辺の特定人の評価はサンプルが乏しいが、最大のパートナーであった末正盛治は神取理事長職に関して「自分は友人として伊藤氏に善意の辞任勧告」(T11.12.24K)を行ったと語っており、大正11年時点では英一に対してなお「友人」として「善意」の気持を有しており、神取総会でも英一を「力山と氣世を蓋ふの概ある商界の傑物」(T11.12.24K)と評

価して理事長としての功績まで称えた。しかし僅か3年後の大正14年の同じ神取総会で末正は「彼の辛辣なる伊藤理事長<sup>4)</sup>」として英一の行状を厳しく糾弾する態度に一変している。この間に英一の関係会社での英一の責めに帰すべき「辛辣なる」経営の内実が次々と露呈したからでもあろう。

当時、英一と利害関係が薄く、客観的に観察できた人物として英一の暴走の後始末を頼まれ、播丹鉄道副社長となった五島慶太による評価を挙げておきたい。五島は「多額納税者伊藤長次郎という大地主の姉婿の伊藤英一であって、第一次世界大戦後のブーム時代に現れて鬼怒川水力電気の株式過半数を買収して、利光を追いつ出して鬼怒川水力電気の社長になろうとした、いわゆるアプレゲール<sup>5)</sup>」と評価している。そして大正9年3月の株式の暴落後の経過も「伊藤英一の所有しているこれら三社の株式はまったく反古紙同然となった。そこで、一番困ったのは勧業銀行で…窮状を訴え、何とかして〈五島〉君の力によって播丹鉄道を再建してくれと頼まれた…そこで、彼は太田〈光熙〉と小林常成〈勧銀貸付担当理事〉の二人の依頼で播丹鉄道の副社長となった…播丹鉄道の後始末一切をして東京に引上げた」と要約している。五島による評価のポイントは①「大地主の姉婿」英一は、②「ブーム時代に現れ」、③多数の「株式過半数を買収」して、④「社長になろうとした」、⑤「アプレゲール<sup>6)</sup>」だが、⑥暴落で「株式はまったく反古紙同然」となり、⑦「一番困ったのは勧業銀行」等の、⑧「依頼で播丹鉄道の副社長となった」五島らが、⑨「後始末」に奔走したという、9点に集約される。結果論ではあるが、文頭に示した破綻前の英一の数々の高評価は①～③のバックや一時的成功という現象形態に惑わされたものと言うことができる。②に着目した「関西実業界の彗星」の世評、「欧州戦乱中財界の好況を呈したるに乘じ」の新聞評、③の「イロイロの事業に手を出」すとの銀行家の懸念、⑤と類似の「辛辣」と酷評した末正を総合する意味で、同時代人、同業者であるにとどまらず鉄道省の監督官として英一にも接した実体験を持つ五島の評価がかなり正鵠を得ているように思われる。

## II. 英一の特異な性格

英一の最盛期には煙に巻かれっぱなしだった新聞記者も、彼の失脚後には「伊

藤ハンは平素から尋常な精神の持主だとは思へまへなんだが…」(T11.11.29K)と正直に告白するように、彼が破綻に至った原因の一つとして英一の有するいくつかの特異な性格について観察しておきたい。

まず第一に「殆んど宇宙を吞吐するの慨あり<sup>7)</sup>」と評されたように、英一がよくいえば氣宇壮大、悪くいえば大言壯語で、超強気な点である。『関西朝報』は英一は常に「自分は神戸を実業的に征服し、既に大阪も征服しつつあり、日本を征服するの日又遠からず」(明P25)と豪語したとするが、地元紙のコラムでは「英一クンの強気は大新が四百円代から百円代に逆落しを喰った今日に於ても変りはない△破産や切腹が続出しても伊藤クン平気なもので苦戦悪闘は之れからちやと済まして居る△大新の如きものは何の百円代で永く居る訳のものではない今に見給へ千円には屹度なるに極ってる△と依然たる強気を振り回して居る、而してその時節が到来するまでは甚麼ことがあっても自分の持株は売らぬ△仮令持株の全部が全然零となっても手離さぬことに近頃決心をしたさうな△その決心は伊藤クンが石に嚙り付いても断じて変更せぬといふのだから決心の程度が略ぼ解るといふものだ△二言目には破産自殺の流行る今日に伊藤クンのやうな強情我慢を発揮するもののあるのは頼もしい」(T9.7.3K「計量器」)と英一の超強気を皮肉っている。ただし3日後の同じ「計量器」には「伊藤英一クンの経営する兵電には沿道の人家稠密と同時に漸々乗客が増えて来た…沿道の住民から次の如く提起をされた…須磨も…神戸市に編入されたに拘らず須磨との連絡を司つて居る兵電の郊外電車であることは怪しからぬ、速かに市に買上げて貰ふべきものである△といふのであるソコデ伊藤クンも大にコノ議論には道理のあることを認めて居る△その結果市に買取の念があれば相当の価格で之を市に引継いでも可いといふ考へを起すに到ったといふことだ」(T9.7.6K「計量器」)という相矛盾する発言が掲載されている。僅か3日で英一が変節したというより、同一の取材の際にしゃべつた内容の分割掲載とすれば、追い詰められつつあった彼の揺れ動く心の内を吐露したものかも知れない。

第二には英一の異常なまでの物事へのこだわりである。英一の執着心の一端は、上記のコラムの「その決心は伊藤クンが石に嚙り付いても断じて変更せぬ」(T9.7.3K「計量器」)との彼自身の言葉にも見られるが、現実行動でも勸銀に財団



抵当借入を認めさせるためにお百度を踏んだり、兵電の「社債総額一百八十万円ノ据置期間内ニ償還ヲナス事ヲ承諾」(T 7.9.23K)させるべく、担保付社債信託会社たる安田銀行との「談判の為め実に前後二十五回上京し遂に安田をして根負けせしめた」(異P96) ことに典型的に現れている。

第三には「事業の為に事業をやるんだよ」(T 9.4.14K「計量器」)との英一の自身の言葉にも見られるようにリスク感覚の欠如である。これは英一の評価にしばしば「放胆」(T 11.12.2 K)、「其放胆にして小事に拘泥せず<sup>8)</sup>」、「守成的の器ではない<sup>9)</sup>」という言葉が使われることから知られる。折からの大戦景気の中で、播州の投機的風土の中で、周辺の投機的資本家・証券業者の甘言にも乗せられ、彼の持って生まれた投機心に火が付いたものと思われる。

こうした超強気、執着心、リスク感覚の欠如など、英一個人の特異なパーソナリティーの結果、英一自身も常々語っていた通り「兵電、播鉄を振出に日本の鉄道王になる」(T 9.4.14K「計量器」)との野望を抱くに至ったものと考えられる。そして彼の出自、職歴等から来る、極度の“本家コンプレックス”のためか、いつの日にか「播州長者」として名高い本家を見返してやりたいという強い衝動が彼の投資行動(むしろ投機的行動というべきか)の全体を貫く唯一の原理であったようにも思える。

すなわち事業欲が並外れて高く、大戦景気の時流に乗って、事業に、投機に連戦連勝して、常に「日本を征服するの日遠からず」などと豪語し、根津嘉一郎並に「鉄道王」の称号を狙って、「思ふ事業をやり遂げ得ぬ位なら殺された方が優し」とまで断言していた。こうした英一の生来の自身過剰と自制心欠如と、現場からの情報断絶等による正確な判断力の低下が災いして、没落過程の末期には「思ひ切った無理算段」すなわち、関係会社間の粉飾、資産の売買、相互に債務保証等を繰り返すなど、「伊藤前社長ガ必死ノ狂奔」を続け、これが単に破綻の秒読み(いわば死刑宣告)を僅かに先送りするだけの秒単位の延命効果しかもたらさないばかりか、その病状をかえて悪化させ、生き残れるはずの健全企業まで巻き込んで、グループ全体としての損失額を拡大させるだけの甚だ不本意な結果を生んだものと考えられる。(たとえば破綻直前の不動産の“飛ばし”(英一→播鉄→神戸大同土地)や炭坑の“飛ばし”(英一→播鉄→播水)などがその典型)

### III. まとめ

英一は第1章で述べたように本家に使用された数多くの有為な丁稚・手代等の中から拔擢されて、順次番頭に昇進し、坪田十郎、入江仙次郎と共に「伊藤長家の三大番頭」(明P24)の地位にまで就き、「三人で現在の英一氏の夫人を争ったものであるが、大伊藤家の主人は英一氏に見るところあり、氏は遂に恋の勝利者となった」(明P24)のである。先代伊藤長次郎から「この人物なら間違いない」と見込まれた選りすぐりのエリートが女婿となってから、見込みに反して、一転して暴走したことになる。とりわけ後継者等の資質の選別には重大な関心が払われるべきであるにもかかわらず、完全な不適格者を採用し、次々と昇進させ、果ては大幹部の座に座らせた錯誤の招来したコストは、本家や三十八銀行の被った直接的損失だけにとどまらず、彼の関係した播州全域に展開した企業や、取引のあった多数の銀行等に巨額のアフター・コストを生じさせた。恐らくや英一の演じた「猛烈社員」の並外れた忠誠心と比類なき滅私奉公ぶりに目が眩んだのか、その裏にうまく隠された不敵な野心や過剰な投機心の存在をついに見抜くことができなかった先代の鑑識眼のなさを責めるしかない。

これに対して「山陽鉄道線十数箇所の支店が業務紊乱せるを見ては断乎として之を撤廃した」<sup>10)</sup>新当主の伊藤長次郎(五代目)は、どうやら義兄・英一のこうした特異な性格を早くから見抜き、「業務紊乱」を口実に「総て悉く自己の方寸によって判断し、自己の手腕によって経営<sup>11)</sup>按排」し、英一を事業分野から排斥しようとしたものと考えられる。新当主が頭取として君臨した三十八銀行が徹頭徹尾リスク回避的な行動に終始して、同時期に数多くの機関銀行の破綻が続発する中にあって、当然にそうした危険も予測されたはずの英一との共倒れを無事に回避できたのも新当主の炯眼に負う所が大であったのではなかろうか。しかしながらリスクを事前に察知していたはずの新当主の炯眼を以てしてもなお英一の暴走・破綻までは防止することはできなかった。そこで、本書をむすぶにあたって多少の重複はあるが、本書の主題として当該事例に関する企業破綻の要因の中での当企業集団の「組織」的な欠陥をまとめておきたい。すなわち分家である英一を主宰者とする企業集団(英一グループ)をも包含して、成立していた筈の伊藤本家・

分家全体の企業集団の一部が分裂し、破綻するに至った原因は、英一個人のありうべき暴走を予期し、分析し、警戒し、抑制し、防止し、是正させる破綻防止システムが十分に機能しなかったことこそが、この企業集団全体としての組織的欠陥であると考えられる。これを逆の面からいうと、本家に追従すべき分家の身であり、本来メイン銀行たるべき三十八銀行からも疎外されていたという経営上の根本的なハンディを英一がいかなる方策を案出して、これらの難点を巧みに克服して、自己の思いのままに事業展開ができたのかという謎解きでもある。

〔表－15〕は各構成要素に内在した「破綻の抑制が機能しなかった理由」を、①本家と分家との関係（本家による分家の指導・監理・監督）、②銀行と融資先との関係（銀行による融資先のモニタリング）、③株主と経営者との関係（コーポレート・ガバナンス）、④官庁と民間企業との関係（官庁による所管企業の行政指導）、⑤役員会と社長との関係、⑥参謀と社長との関係、⑦職員等と社長との関係、⑧報道機関等との関係、⑨世間との関係、⑩夫人との関係、⑪英一自身（自己抑制）という各次元ごとに、①抑制要因の機能を阻害する条件、と②抑制を回避するために英一が採った諸方策等とに区分して、整理したものである。そしてこのことに関連する具体的事例を示した。

このうち通常の「組織」の欠陥として考えられるのは、森川英正氏が指摘された通り、a. 伊藤「財閥」たりえなかった理由でもある「財閥本社」「持株会社」の未発達・機能不全、b. 専門経営者の人材不足と、独立性の欠如、c. リスク回避、破綻防止のための専門スタッフの人材不足、組織的な体制不足、d. 株主によるコーポレート・ガバナンスの不徹底などであろうが、英一ファミリーが関係企業の株式の大半を所有し、かつ社長・役員として直接経営している段階の未成熟な企業集団であるので、ここでは①本家と分家との関係、②銀行と融資先との関係、③株主と経営者との関係等を中心に考察したい。

英一は本家、銀行（三十八）などに自己の行動を規制されることを回避すべく、先代遺業の大義名分にもかなう播鉄を核とした多角化という極めて巧妙な方法から出発して、経済的、政治的、地理的にも本家、三十八等からの自主独立を模索した。弱小銀行が乱立していた兵庫県の金融システムが多数行取引ないし、増田BB（鬼怒電買占資金）、神戸岡崎銀行（兵電買占資金）など、個別のプロジェクト

[表—15] 破綻抑制要因が機能しなかった理由

抑制（英一の要因 立場）	抑制要因の機能を阻害する条件	左の条件を満たすために英一が採った諸方策等	関連する具体的事例
本家（分家）	分家の経済的独立  先代遺業の大義名分 本家領域をも蚕食  播州社会からの離脱	代議士としての政治力発揮 自由になる独自の資産形成 播州等の大地主との提携 播鉄を核とした多角化 本家を牽制する買占め  京都に居住し神戸へ通勤	末正家、三宅利平、大西恭一平、畑吉平ら 当初は播鉄の「沿線ノ出貨奨励」を名目に子会社設立 兵庫電気軌道買占め（長次郎が相談役の明姫を牽制） 北大阪電鉄を譲った先の神戸信託株の買増し
銀行（融資先）	弱小銀行の乱立  メイン銀行不在  担保万能主義	多数行取引による 三十八銀行の比重低下 取引銀行の分散 ノンバンクの活用 土地や株式を担保差入れ	西伊藤銀行の育成 三十八系株主の総会質問 プロジェクト毎に取引行を使分け（増田、岡崎等） 浪速、関西土地、神戸取引、農工各信託等 「東播地方の銀行団で総て相当の担保品が這入って居るから格別の懸念は不必要と樂觀」
株主（経営者）	大株主の信頼獲得 自己の支配力強化	播鉄等の経営再建成就 播鉄株等の買増し	「破天荒ノ良成績ハ重役諸氏…ノ努力奮勵ノ賜」
官庁（民間）	官庁の形式審査	政治力の発揮	「播鉄力從來多大ノ株式ヲ所有シ居ルハ穩當ヲ欠ク」
役員会	親族・腹心で固め、 「心の保に振舞」う	株屋・投機家等を重用多用 （本岡、三宅、尾崎等） 「着実」な末正家との姻戚	「伊藤理事長をして…社務の上一指を染めざりし」 神取の岸本は例外 英一に心酔していた末正も後に英一の遺口を非難
参謀	「幕下に忠臣が多い」 各社の現業機関化	「事務官級」の配置 傘下の各社の事務所・出張所を集約化	「参謀の寡薄に乏しい」 伊藤商事本社に各社支配人等を常駐化
職員等	従業員の不満解消	「外米を買受けて部下に配与」し懐柔	神戸取引所仲買人組合等から退任要求、兵電スト
報道機関等	伊藤家の存在が批判を封じる	地元や大手記者に礼讃 記事をかかせる	「神戸の異彩」『明石の人物と事業』など
世評	播鉄等の新線計画 播州の投機的風土 家父長的地主支配	新線住民等を懐柔  豪傑ぶりを誇示	郡長も「伊藤英一氏ヲ信頼シ…延長線ヲ起シ」た  神取の移転先の用地買占・高値売付も自慢話に
夫人	夫人に過剰気配り	夫人同伴し外泊せず	細君に「野呂い」との評
英一自身 （本人の危機管理意識）	事業欲の高揚 自信過剰 自制心欠如 正確な判断力低下	「鉄道王」の称狙う 時流に乗り連戦連勝 「思ひ切った無理算段」 「伊藤前社長ガ必死ノ狂奔」	「思ふ事業をやり遂げ得ぬ位なら殺された方が優し」 常に「日本を征服するの道遠からず」と豪語 関係会社間の粉飾、資産売買、相互に債務保証等 不動産の「飛ばし」（英一⇒ 播鉄⇒ 神戸大同土地） 新延炭坑の「飛ばし」（英一⇒ 播鉄⇒ 播水）

トごとに取引銀行を使い分けることを可能にしたと考えられる。一方、直系の西伊藤銀行の育成、提携関係にある湊西銀行との緊密化、浪速信託、関西土地信託、神戸取引信託等の信託・ノンバンクや土地会社の活用を進めた。（当時の信託会社、土地会社、ノンバンクの間の境界線が引き難いのは、例えば舞子土地住宅が阪神商事信託、阪神商事へ順次変態を遂げたことからいえよう）

この結果、本来は歴史的にも血縁的にもメイン銀行を務めて当然のはずの三十

八のウェイトが極端に低下し、同時に本家による支配力も低下しただけではなく、各銀行は全体のごく一部分にすぎない自行の取引分野のことしか把握できないため、英一グループ全体を鳥瞰できるメイン銀行もなく、銀行のモニタリング能力も機能不全に陥っていたと思われる。加えて調査能力に乏しい東播地方の銀行団などは英一の背後には当然に本家＝三十八の絶大な信用があると過信・錯覚し、各行の頭取らが英一の事業に役員・大株主として取り込まれて運命共同体化し、また当時の極端な担保万能主義の風潮により、「総て相当の担保品が這入って居るから格別の懸念は不必要と樂觀」していたものと考えられる。

英一にとっては本家との激しい心理的確執の反面、播州を中心に関西一円に鳴り響く「伊藤」のブランド名は彼にとって絶大な信用の源泉であり、夫人（姉）を經由した本家（弟）からの忠告・介入はもとより、万一にも夫人との関係悪化・断絶等を理由に「伊藤」の名を一方的に本家から奪われることを極端に恐れる余りでもあろうか、「細君に野呂い」との酷評を覚悟の上で当時の常識からすれば夫人へ過剰な気配りをもあえて行っていたのではないかと想像される。

また播鉄等の経営再建が一時的にもせよ成就され、総会で株主から「破天荒ノ良成績ハ重役諸氏…ノ努力奮励ノ賜」と激賞されるほど、大株主の信頼を獲得して自信過剰になった反面、株主のチェックが働きにくくなったと見られる。

また、米騒動の際に「外米を買受けて部下に配与」して従業員を懐柔することに努めていた英一の「幕下に…忠臣が多い」反面、「参謀的幕僚に乏しい」のが当時でも組織的な欠陥とされたが、傘下の各社の事務所・出張所を集約化した伊藤商事という独特のグループ監理形態にも問題があったと考えられる。おそらく各社の支配人クラスの実務責任者が事務所長兼務を命じられた結果、事実上伊藤商事本社に常駐となり、物理的に現場との距離が拡大したのではなかろうか。この結果、悪くすると肥大化した伊藤商事本社は英一に甘言・追従のみを繰り返す「茶坊主」「ゴマスリ」集団へと墮落していく一方で、傘下の各社は播鉄本社が運輸課等が残っただけの「運輸事務所」化したごとく、伊藤商事本社から発出される命令を無批判に受け入れるだけの現業機関化した危険性も考えられる。こうして傘下の各社は全体像を把握できず情報不足に陥る一方で、各分野における正確な経営情報（リスク探知）を英一に対しても十分発信できなくなった危険もあろう。

以上をまとめると、本書では有力銀行も支配せず、一家の当主でもなかった、分家の“分際”でありながら、投機的風土の中で50余社から構成される企業集団を牛耳るまでに急拡大し、一時期は本家をも凌ぐ権勢を誇りながらも、反動恐慌・株価の大暴落とともに急速に没落・破綻していった経過とその要因を分析した。それは英一が本家や三十八銀行、監督官庁等の統帥権・指揮権・監督権の行使を回避しつつ、巧みに自己の意のままに戦線を急拡大させたが、グループの戦略本部たる伊藤商事に代表される、その特異な中枢組織そのものの弱点により、トップの暴走を警告・抑制・防止・是正する破綻防止システムが、グループ内部では神取(傘下の株式仲買人の活発なるガバナンス機能が健全に機能)、篠山軽便鉄道(沈着冷静な末正盛治が引取り堅実に経営)等のごく一部の企業を除いてはほとんど作動せず、全般的に企業集団としての悲劇的な破綻の結末を迎えるに至ったものと考えられる。

注1) 9) 10) 11) 前掲『兵庫県人物史』P386

注2) 3) 7) 8) 前掲『京阪神に於ける事業及人物』いP2

注4) 前掲「演説原稿」『播州高砂岸本家の研究』P112～3所収

注5) 前掲『五島慶太伝』P222

注6) 五島の使った「いわゆるアプレゲール」の意味は単に虚無的、退廃的な「戦後派」を指すのか、その真意は計り兼ねるが、五島自身も後に「強盗慶太」と称されるほど、英一も顔負けの乗取行動を重ねた「アプレゲール」だけに、乗取の元祖・英一への五島の評価の真意は意味を持つといえよう。

## あとかき

本書で利用した資料に関して、交通博物館の佐藤豊彦氏、国立公文書館、国立国会図書館、東京大学明治新聞雑誌文庫、兵庫県立図書館、神戸市立中央図書館、篠山市本郷図書館、九州大学石炭研究資料センター、海事産業研究所、天理参考館の上野利夫氏等貴重な資料の閲覧をご許可頂いた関係各機関や、地元の諸事情に関してご教示を賜った工楽禎章氏、その他、以下にのべる著者自身の研究の各段階ごとに実に数多くの方々にご教示・ご厚情を賜っており、ここに厚く御礼申し上げます。

本書執筆の遠い淵源は概ね次のような多くの試行錯誤の累積に基づいている。

①最初の主題への接近は古く昭和39年頃、神戸大学経営分析文献センターで播州鉄道等をはじめとする多数の営業報告書群に“遭遇”して主要部分の筆写を開始するとともに、兵庫県下の古書店等で関連史料を探索する一方、西代にあった山陽電気鉄道本社に社史を編纂中の鍛冶健三、亀井一男(播電鉄道等の先行研究者)両氏をお訪ねして種々ご教示賜ったこと。英一関係の諸会社の中で今日まで継続し、かつ社史を刊行するに至った企業は多くはなく、しかも英一本人に言及したものはほとんどない中で『山陽電気鉄道65年史』はむしろ例外的な存在であり、本書でも大いに参考にさせていただいた。

②昭和52年から鉄道史研究会に参加、播州、播丹両鉄道等の先行研究者である片岡正昭氏等、メンバー各位の個別研究に啓発され、龍野に関してヒガシマル醬油の浅井博会長(当時)、同社調査課の高瀬克麿氏等に種々ご教示賜ったこと。

③昭和62年から作道洋太郎先生をはじめとする諸先生のご指導の下で日本生命の社史編纂を開始し、同社の融資先である龍野電気鉄道、播州鉄道、明石電灯等の本書の主題に関連する企業の社内外史料を探索したこと。

④平成4年9月26日鉄道史学会大会で「昭和初期の私鉄経営難一破綻・債務不履行の事例を中心に」の報告を行うに際して、芸備銀行による播州水力電気鉄道の財団の自己競落と播電鉄道設立を調査研究したこと。

これらの調査研究は著者の怠慢もあって、残念ながら成果のごく一部の部分的な利用にとどまり、論文文化には至らなかった。これらの過程で蓄積した資料やメ

モ類はある程度の量には達したものの、破綻企業の性格上、決定的な内部資料には遭遇できないまま、なかば不良在庫化しつつあった。こうした中で著者自身も平成バブル崩壊をごく身近に実体験させられ、破綻企業を見る視角も自然と変化した。また著者が最初に経営史学会関東部会で報告する機会を得た際に司会をお引き受け頂いた原輝史氏には、平成4年の学会報告の際にも破綻の事例を早くペーパーにするよう激励頂いたことが、大きな刺激ともなり、ようやく前述の研究助成、共同研究会等でのご指導等を受ける機会にも恵まれ、念願の一書の刊行を得られるまでに至った点に関して、数多くの関係各位のご厚情、ご高配に重ねて厚く御礼申上げたい。

最後に著者の所属する滋賀大学の各先生、とりわけ所属学部・学科ならびに史料館の関係教官各位には様々な便宜をはかって頂き、また数多くのご教示・啓発を頂戴したことに對して、厚く御礼申上げたい。個々にお名前を挙げることは割愛させて戴くが、これら諸先生の金融・証券分野等での優れた先行研究や、古代・中世から近世・近代に至る我が国をはじめ、英・米・独等各国の大地主、大商人、資産家、名望家等の、各時期・各国の特徴ある投資・投機行動、結末としての整理破綻処理方法等に関する御著書・御業績の数々に学問的な教導を得たばかりでなく、日頃の交流・厚誼等を通じて数々の知的な刺激・啓発を頂くという、恵まれた学問的環境に身を置くことができたからである。

また著者の長年勤務した民間金融機関での企画調査・審査部門でも、数多くの理解ある上司・同僚・課員等に恵まれた。著者自身の乏しい経験の中でも本書の主題にも酷似した大手・中堅を問わず、ワンマン経営者等の暴走と、その後の整理・再建等の諸事例にも直接・間接に審査担当者等として関わり、この種の嫌悪債権を抱込んだ金融機関側の誰にも打明けられない、根深い屈折感の一端は何度か味わされた実体験がある。投融資の当事者である金融機関の担当者にとっても、いかに努力を重ねても当該企業等に関して得られる情報には限りがあり、まして相手が情報開示を極端に嫌い、メイン銀行も意図的に作らず、プロジェクトごとに多くの金融機関を使い分けた揚げ句に、破綻消滅したような最悪の場合には事の真相は当事者の一人たる金融機関にとってすら永久に真黒な闇の中に消え失せてしまうようなことにもなりかねない。



本書でフィールドとした播州地方は、人生の過半を兵庫県で過した著者にとって親近感のある地域の一つと言えなくはないが、複雑な成立経過を有する兵庫県の多様性の下で播州固有の土着的風土の理解はなお不十分であることを率直に認めざるを得ない。また本書では残念なことに今なお当事者の懷古談、日記、備忘録等を含む内部資料への接近が果せておらず、株主名簿や監督官庁提出資料、新聞記事等、側面資料からの、いわば迂回分析にとどまらざるを得なかった限界は著者自身の夙に痛感するところである。

こうした中央資料、二次資料等に依拠せざるを得なかった著者の視角は当然に中央からの視点、中央の資本市場、あるいは精々投資家からの視点にとどまり、地域社会の中で地域住民の目線での検証は大幅に欠落していることであろう。これら地域研究として至らぬ諸点は、今後地域に深く根差した地元の先行研究者等に一層のご指導を仰ぐ機会を得て、ご叱正を賜る過程で大幅に修・補正せねばならないものと覚悟している。

従って本書の中で一般的な歴史的分析の共通枠を逸脱して、入手し得た史料の範囲内で禁欲的に叙述すべき態度を一部踏み外しているとの批判は甘受せざるを得ない。これらは過去の著者自身の職業的な実体験のなせる“業”としか弁解しようがないが、破綻という、アブノーマルな経営形態を歴史的に解明し、その現代的な意義にも注目していきたいとする我々には、一般の正常状態での経営史分析とは異なる枠組みづくりや創意工夫もまた必要ではないかと考えている。本書でもそうしたいくつかの試みの一端として、株主名簿のダミー株主検索<sup>5)</sup>、経営者の特異な、むしろ病的ともいふべき性格分析<sup>6)</sup>、経営者の暴走等を誘発させた投機促進者集団の捕捉等を呈示したつもりではあるが、これらの有効性を検証するには、今後ともより多くの事例研究を積み重ねて、その中から相互に再検証していくことが必要なことはいうまでもあるまい。

内心大いに恐れを懷きつつも、拙い本書をお二人の播州人の霊前に捧げたい。一人は“不出来な”伝記の主人公たる故伊藤英一氏ご本人に、今一人は著者の審査時代の上司たる公認会計士・故北野勝氏に。随所に厳しく朱がはいることを覚悟しつつ…。

- 注1) 片岡正昭氏は昭和50年6月21日、10月18日の鉄道史研究会例会で「播州・播丹鉄道の概要」を報告（『鉄道史研究会会報』8号、昭和58年4月）されたが、拝聴する機会を逸した著者はその後に片岡氏より同報告の骨子等につき種々ご教示を得た点、謝意を表したい。
- 注2) ②は拙稿「語られざる鉄道史」（『大正期鉄道史資料月報』9号、S59.1、本経済評論社）参照。明石電灯等に関して「明治末期、大正初期における生保の財務活動—電灯、電鉄事業への関与を中心として—」（『生命保険経営』48巻5号、S55.9、生命保険経営学会）で、龍野電気鉄道に関して「保険金融の展開と社会資本整備（序説）—明治・大正期の鉄道・電力投融资を中心に—」（『保険学雑誌』533号、H3.6.本保険学会）のP99で、また播電鉄道に関して「明治末期の民営社会資本の挫折と再建—高野鉄道のデフォルトと財政整理を中心に—」（『滋賀大学経済学部研究年報』2巻、H7.12）のP17以下で、いずれも部分的には言及した。ただし芸備銀行に関しては別の観点から纏めたものに「投機的資本家集団と銀行乗取—芸備銀行株主総会紛糾事件を中心として—」（『彦根論叢』312号、H10.3、滋賀大学）がある。
- 注3) 学会報告の際、地元研究者から好意的に伊藤家への紹介方をお申出いただいたにもかかわらず、当方の怠慢から果たすことができなかった。ただ、過去に金融恐慌で破綻したある銀行を調査した際、幸いにして銀行経営者の直接のご子孫に親しく面談する機会を与えられ、当時の銀行経営者の知られざる人間性を垣間見る貴重な資料まで閲覧を許された経験があったが、結果的に人間としての経営者個人や、破綻という過酷な運命を背負わされたご子孫の苦悩・苦渋への同情心の発露を抑えることができず、あくまで冷徹さを要求される破綻検証作業の貫徹との「二律背反問題」（いわば弁護士と検事の掛持ち）を当方の力不足から十分には解決できなかった。今回は側面資料に限定した範囲での、いわば一方的な推論段階にとどめ、近い将来において内部資料への接近の機会を得て、その結果として当然に必要となるであろう補訂を行うこととしたい。その意味では本書はあくまで資料的な制約下での中間的な生産物として、読者を当分野の研究者に絞るなど限定的な配布に止めることとしたい。

注4) 有力な情報源としての当時の新聞では兵庫県の三大紙と称された『神戸新聞』、『神戸又新日報』、『鷺城新聞』のうち主に前二紙と、ローカル紙の『篠山新聞』等を参照した。『鷺城新聞』は国会図書館でもT3までしか所蔵されず、その他播州地方に群雄割拠した『播磨民報』、『姫路新聞』、『播磨新聞』、『飾磨新聞』、『中国日日新聞』、『関西朝報』(明石)、『但馬新聞』(豊岡)等は『全国複製新聞所蔵一覧』でも大正期の所蔵機関を見出だせなかった。ごく一部は『鉄道省文書』に収録されたものを引用し、また『関西朝報』発行の『明石の人物と事業』など新聞社の刊行物や、『鷺城新聞』社長高橋金治の子で記者として活躍した高橋秀吉氏の著書『姫路の交通五十年』など新聞記者の著作等で補完に努めた。

注5) 今回「名義仮用」(いわゆるダミー株主)に着目して、鬼怒電をはじめ、播鉄、播水、篠鉄、神取等、破綻関連企業の株主名簿の破綻前後の変動分析により、株主担保金融という外部には見えない債権債務関係があたかも隠顕墨のようにあぶり出されることをある程度は実証できたのではないかと思っている。明治期の「名義仮用」に関しては拙稿「明治期の私設鉄道金融と鉄道資本家―参宮鉄道における渋沢・今村・井上・片岡の役割をめぐって―」『追手門経済論集』27巻1号、H4.4、追手門学院大学経済学会、P64～5でも言及。

注6) 「伊藤ハンは平素から尋常な精神の持主だとは思へまへなんだが…」(T11.11.29K)と地元紙で揶揄された英一と同様な問題が指摘された経営者の事例としては大家族主義、保険金支払の二十四時間主義、親切第一主義、代理店主義等を標榜し、結局破綻した八千代生命の「社長小原君は一種の変り者であるが、その功を収むるに急なのと、誇大の宣伝好きとは、彼の持病」(T15.3.21D)と評されている。(前掲拙稿「八千代生命の経営破綻と投資政策―融資先の分析を中心として―」参照)

## [人名索引]

### あ 行

青木雷三郎……45、49、159、163、171  
 英賀福蔵……81、93、116～7  
 秋山恕卿……24、25、27～8、37、65  
 秋山忠直……21、37、59  
 芦田作太郎……61、84、124、155  
 有馬市太郎……59、61、69  
 イー・エッチ・ハンター……21、37  
 伊藤孝次……28、92、115、132、135  
 伊藤俊介……21、36  
 伊藤長次郎……1～3、77、109、118、149、  
     152  
 伊藤長蔵……60、112～5、120、153  
 伊藤長平……19、60  
 伊藤万治郎……25、29  
 石井亮三郎……28、66、92、126  
 石井竹三郎……99  
 石井徳次……25、42  
 石丸英一……61  
 石丸貞太郎……67、132、155  
 稲岡猪之助……27～30、43、47、78、92、  
     117、126、130、134、161  
 乾新兵衛……137、145  
 乾繁寿……135  
 井上善吉……66、71、135

井上俊雄……13、94  
 井上文也……141、143  
 井上安松……135～7、145  
 猪木土彦……74～6、92、125  
 今西林三郎……66  
 入江光蔵……59～60  
 入江仙次郎……152  
 上田幸次郎……42、48、81、117  
 上田寧……25  
 内橋佐七郎……74  
 梅鉢安太郎……28、30、39、154  
 ト部兵吉……28、30、92、126  
 栄国義策……47  
 追原頼太……80、93、162  
 大崎源一郎……162、166、173  
 太田九平……141、162  
 太田清蔵……85  
 大谷吟右衛門……77  
 太田光熙……168、172、176  
 太田保太郎……19、36、59、61  
 大西甚一平……25、28、30  
 大橋実次……175、178  
 大橋義一……28  
 大村清七……135～7、145  
 岡田鎮一郎……81、82、93  
 岡崎藤吉……61、68、124、143

岡藤信一……134、140

小川淑一……113

尾崎寅治……41～2、93、97、117、161

## か 行

鹿島秀麿……27、39

加島安治郎……28、30、64

片野歌次郎……135、138、146、156

勝田銀次郎……114、120

加藤淳一……117、171、177

加東徳三……148

亀田介次郎……148

川島捨太郎……24～5、27、39

川西清兵衛……59～62、69

川端浅吉……25、27～8、37

神沢又市郎……89、95～6

神田勝次……158、161、163、165、171

菊池清平……68

木沢勝次……162、166

岸本信次……158、162

岸本恒太郎……28、66、126、134～9、

145、155、160

岸本伝吉……81

来住兼三郎……28～29

来住広次郎……25

来住泰二郎……25、28

北川与平……68

木村静幽……25

草鹿甲子太郎……19、45、50、63、124、

129、172

蔵内治郎作……85

黒瀬勝兵衛……84

黒田左武郎……64～5

黒田辛五……42、51、53、161～2、165

桑原政……25

上月孝之介……56

香野蔵治……65、148

河野天瑞……24～5、38

河野半三郎……163、166

小磯吉人……79、93

五島慶太……39、99、168～175、181

小林晋一……80、93、163、171

駒井巷……20、36

小山健三……97

近藤源吉……25、28

## さ 行

才賀藤吉……19、36、62

酒井栄蔵……90、142、163、168～171、

177

笹倉哲治……173～4

佐藤雄能……81～2、130、155、167、172

柴田岐一郎……116

斯波与七郎……24～5、28

柴山鷲雄……28

末正久左衛門……30、126、134

末正繁太郎……28、30、44～5、61、132

末正盛治……28、44、47、49、56、61、78、

104～5、128、136、139、

155、170、180

杉野伊三郎……135～8、145

住山鈴雄……45、130、134、145

## た 行

高倉為三……127

高野徳寿……105、107、136

高橋健三……9、28、51

高見栄治……53

滝川弁三……59、61、69

多木衆次郎……59

竹内権兵衛……140、146

竹馬隼三郎……64～5、70、93

武岡豊太……66、70

武田常三郎……41、44、47～8、162

武田由助……67、135～8、145、156

田那作三……28、39、53

田中一郎……145

田中貞二……163、166

谷向喜一郎……32、162～3、168～172

土山喜之助……116～7、120、171

坪田十郎……2、14、22、84、115、129、152

土井高一郎……45～6、141～2、163、

168～171、176

土岐市太郎……45

利光鶴松……99

戸田猶七……28、38

土肥信太郎……42

富田勘治……161、165

## な 行

中江忠兵衛……67、71、93

中島徳松……85、89

仲忠太郎……65、70、138

中野慶路……67、135、145

中村安次郎……13、15、28、126

鳴滝幸恭……79、93

西野友太郎……83

西村真太郎……18、36

西村徳三郎……66、70、92

西村安太郎……47、66～7、71、78～81、

162

西村隆次……18、36、126、150、172、177

沼田静治……81、93

根津嘉一郎……151～2

納富陳平……44、64、70、125

野喜治良……43、97、117、130、161、165

## は 行

長谷川惣太郎……25

畑吉平……28、30、126、143

畑昌愷……28、34、40、93、150

初井奈良吉……60

原川慶作……59、61

原田勝太郎……83

範多龍太郎……21、28、37

平塚嘉右衛門……66、71、93

広部正三……44  
 広瀬千秋……138  
 福本実……104～5、136、145  
 藤井伊蔵……89  
 藤井慎二……80  
 藤井善助……26、53  
 藤井正……174～5  
 藤井忠兵衛……28、30、66、126～7、137、  
     148、160、172、177  
 藤井照千代……141～2、146、163、171  
 藤岡音吉……56  
 藤尾幸一……129、143  
 藤田卯兵衛……64、70、80、93  
 藤野正年……45、49、97  
 藤本清兵衛……64  
 船津吉太郎……3、43、49、60、153～4  
 古川巖……129  
 蓬萊市松……56  
 蓬萊宗兵衛……42、48  
 蓬萊林太郎……20  
 細田藤弥……28～30、66、125、132、155  
 堀謙治郎……53～4  
 堀豊彦……36、53  
 本郷寅蔵……44～5、81、93  
 本庄徳蔵……116、120

### ま 行

前川清二……60、113、153  
 前田達次……43、49、142、172

正田房治郎……66、135～7  
 増田信一……50、54～5、84、97～106  
 町田昇……86、134、145  
 松井希介……43  
 松井新次郎……44～5  
 松井万緑……81  
 松代安太郎……69、112、153  
 松永安左衛門……25  
 松本増吉……43、130  
 の場淑彦……28、37  
 丸山文治郎……171、177  
 丸岡寛三郎……22、60  
 三上豊夷……68、102  
 南陽二郎……80  
 三宅忠蔵……22  
 三宅利平……25、28～9、51、132、154、  
     161、165

宮崎敬介……66  
 村上関蔵……66、71  
 本岡武助……45、53、56、61、155  
 森本駿……45、51、134、138

### や 行

八木千之助……44、49、178  
 安田寅次……82、132、169、174  
 柳広蔵……64、70  
 矢野莊三郎……54～5、97、100、105、107  
 山田貫一……84  
 吉田喜代松……25

吉田金太郎……135、145、160

米沢長次郎……110、119

米沢吉次郎……17、59～60、69、119



## [企業・施設名索引]

- 相生丸……91、96  
 明石電灯……62、84、125  
 明城銅山……94、133  
 赤穂鉄道……51  
 淡路銀行……68、81、105、114、117、131、  
     136、137、158、171、173  
 淡路精米……162、166  
 淡路貯蓄銀行……162  
 淡路融通……162、166  
 出石鉄道……51  
 伊藤企業……112～5、153  
 伊藤小作人信用組合……153  
 伊藤事務所……86  
 伊藤商事……28、84、90、94、103、  
     131～4、151、154  
 伊藤製鉄……84、95、133  
 伊藤長商店……120  
 伊藤鉄工所……46、81、132～3  
 伊藤土地……153  
 井上鉱業……83、94  
 伊保酒造……43  
 梅鉢鉄工場……39、53、125、154  
 大阪高野鉄道……134、151～2  
 大阪造船所……85、101  
 大阪電気軌道……174～6  
 大志銀行……131  
 追原商店……158、162  
 小野銀行……126～7、131  
 尾野商店……97、117、158、160～162  
 小野商事信託……33、158  
 海運部……92  
 海外貿易……175、178  
 加古川化学工業……41  
 加古川銀行……118、137  
 加古川製紙……82、134、140～1  
 加島商店……64～5  
 関西土地興業……45、79、113～114  
 関西土地信託……45、79、130  
 北大阪電気鉄道……79  
 鬼怒川水力電気……79、97～106、151  
 鬼怒川興業……99  
 芸備銀行……143  
 河野工業……26  
 神戸岡崎銀行……61、124、143  
 神戸信託……46、79  
 神戸造船所……79～80、84、129  
 神戸大同土地……81～2、130  
 神戸土地建物……115  
 神戸取引所……66、78、82、105、128、  
     134～140、155、180  
 神戸取引信託……67、105、134～140、  
     155

- 神戸取引土地……138  
 合同証券……137  
 合同土地……65、70  
 甲陽土地……131  
 湖南鉄道……37  
 篠山軽便鉄道……51～2、84  
 篠山興産……178  
 三十四銀行……97、101、114  
 三十八銀行……32、33、81、110～1、  
 115～9、131、149、154  
 山陽興業……44、49、166  
 山陽砂利……44  
 新宮軽便鉄道……55～7  
 真宗信徒生命……110  
 神明急行電鉄……63、70、123  
 製々舎窯業土地……162  
 静得社……113、115、154  
 鮮満木材車両……92、125、132、134  
 湊西銀行……32、126～9、154  
 大成座……91、168、176  
 大成炭坑……91、95  
 大同生命……79～81、171、173  
 第二十九銀行……54  
 大日本債券……74  
 大日本正義団……177  
 大門ヴェルベツト……42  
 大洋海運……113～4  
 大正汽船……113  
 多可銀行……32、33、126、131、141  
 高砂銀行……118、158、166、173  
 高砂土地倉庫……68  
 高福鉄道……17、36  
 宝塚住宅土地……73  
 滝野遊園地……48  
 但馬軽便鉄道……74  
 龍野電気鉄道……52～8  
 垂水住宅土地……64～5  
 中播電気……47  
 東播軽便鉄道……17～19  
 遠谷鉦山……94  
 東播銀行……131  
 東播馬車……27  
 炭砒商船……85  
 竹馬商店……65  
 中国石材……130  
 東洋農事……131、134  
 利光同族……99  
 土鶴鉄道……17、36  
 中島鉦業……89  
 浪速信託……28、44、103  
 南北鉄道……17、24、36  
 西伊藤銀行……32、33、110、130  
 西代土地……67  
 日米信託……68、84、94  
 日進海運……91、96  
 日本運送……175～6  
 日本勸業銀行……31～2、33、58、168、  
 177

- 日本綿業……129
- 日本綿布……42、129、144、160、167
- 新延炭坑……75、83～92、106、126
- 農工信託……68、78、92
- 博多湾鉄道汽船……85
- 長谷川商会……130
- 速水株式会社……100～1
- 播磨銀行……131、141
- 播磨鉄道……17、36～7
- 播磨電気鉄道……19、36
- 播州倉庫……68
- 播州水力電気鉄道……141
- 播州石材……42～4、153～4
- 播州物産……162
- 播州煉瓦……43、130、144
- 播丹証券……174～5
- 播丹鉄道……169～177
- 播但鉄道……22、27
- 阪神商事……162、168
- 阪神石材工業……112、129
- 阪神住宅土地……77、113
- 播電鉄道……142
- 播陽鉄道……59
- 播陽紡績……135、162
- 百三十七銀行……173
- 日向台遊園……48、167
- 兵庫県農工銀行……77～79
- 兵庫電気軌道……60～8、123～5
- 福喜洋行……101
- 藤井鋳業……89、96
- 藤井忠商店……160
- 別府輕便鉄道……51
- 舞子住宅土地……163
- 舞子土地……65～67
- 増田伸銅所……133
- 増田ビルブローカー銀行……46、54、  
85、86、  
98～106、  
136、141
- 明姫電気鉄道……59～62、109
- 本岡武助本店……159
- 杜銀行……126、130、150
- 安田銀行……63
- 矢野鋳業……54、68、133

地方企業集団の財務破綻と投機的経営者  
—大正期「播州長者」分家の暴走と金融構造の病弊—

---

平成12年2月1日発行

非 売 品

著 者      小      川                      功

発行者      滋賀大学経済学部

印    刷      西濃印刷株式会社

岐阜市七軒町15番地

T E L (058) 263-4101

---

# 滋賀大学経済学部研究叢書既刊目録

第1号	中国官僚資本主義研究序説 —帝國主義下の半植民地の後進資本制の構造—	中  蔦  太  一	昭和45年3月
第2号	物權の返還請求權論序説 —実体權の理解への疑問として—	伊  藤  高  義	昭和46年3月
第3号	經濟理論の基礎をなす仮説について	梶  田  公	昭和52年3月
第4号	情報會計の基礎	清  水  哲  雄	昭和54年2月
第5号	國際通貨発行特權と國際通貨制度	有  馬  敏  則	昭和54年3月
第6号	現代西ドイツ直接原価計算論序説 —相對的 direct 原価計算論を中心として—	両  頭  正  明	昭和56年3月
第7号	THE TALE OF THE SOGA BROTHERS	北  川  弘	昭和56年3月
第8号	北欧初期社会の構成	熊  野  聰	昭和59年3月
第9号	欠損下における税効果會計の理論	西  村  幹  仁	昭和59年3月
第10号	THE TALE OF THE SOGA BROTHERS PART II	北  川  弘	昭和60年3月
第11号	ワーズワスの初期の神秘思想	原  田  俊  孝	昭和60年3月
第12号	〈基礎的組織〉と政治統合 —M.P. フォレットの研究—	岡  本  仁  宏	昭和61年3月
第13号	世界市場と國際資本主義の連節構造	中  蔦  太  一	昭和61年3月
第14号	内外金融システムの変化と對外不均衡	有  馬  敏  則	昭和62年3月
第15号	市場と体制 —經濟体制論研究序説—	經濟体制論研究会	昭和63年3月
第16号	プロトコルの形式的記述と検証	森  將  豪	平成元年3月
第17号	生産計画問題の同値変形による解法 —凸目的関数の場合—	吉  田  稔	平成元年3月
第18号	唐代中期の文学と思想 —柳宗元とその周辺—	戸  崎  哲  彦	平成2年3月
第19号	デューイ政治哲学研究序説 —思想形成過程試論—	小  西  中  和	平成3年3月
第20号	經濟時系列の統計的研究 —岡部の理論とその応用—	中  野  裕  治	平成4年2月
第21号	IN-HOUSE R&D VERSUS EXTERNAL TECHNOLOGY ACQUISITIONS Small Technology-Based Firms in the U.S. and Japan	黒  川  晋	平成4年3月

第22号	ネットワークシステムにおける基本方式	葛 山 善 基	平成5年1月
第23号	連結会計論	蛭 木 實	平成5年3月
第24号	ユーゴ労働者自主管理の挑戦と崩壊	藤 村 博 之	平成6年3月
第25号	柳宗元在永州 —永州流謫期における柳宗元の活動に関する一研究—	戸 崎 哲 彦	平成7年3月
第26号	市場経済の展開と発生主義会計の変容	久保田 秀 樹	平成8年1月
第27号	日本企業の人事管理改革	藤 村 博 之	平成9年3月
第28号	移行経済の研究 —理論と戦略—	福 田 敏 浩	平成9年12月
第29号	退職後所得保護の法理 —ERISA 研究—	小 櫻 純	平成10年2月
第30号	現代日本のセントラル・バンキング —金融経済環境の変化と日本銀行—	小 栗 誠 治	平成10年12月
第31号	独占，蓄積と環境	近 藤 学	平成11年1月